



大正三年四月十七日印刷　有朋堂文庫
大正三年四月二十日發行　繪本太閤記中
（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

左衛門、久瀬又助、前野又五郎、三田村勝左衛門等を首とし、隈部の城へおしよせ鬨を作つて攻めたりける。城中かねて期したる事なれば少しも騒がず、鐵炮矢石を飛しきびしく防ぎ戰ふほどに、左右なく攻拔くべきやうもなく、攻口を少し退き陣を取りてひかへたり。

茶會の外に、餘の遊とてもなき折なれば、成政其用に當るべき品々を兩夫人へ進じ參らせ、種々力を盡して執入り、御機嫌に入れければ、いつとなく秀吉公の御前品よく相成り、終に肥後熊本の城主とは成りにける。然りといへども爰に又一事有り。秀吉公元來聰明の英傑、婦人の言葉によつて大事を誤る大將にあらず。生得大度廣量にして、日本の土地狹くして功臣に分ち與ふるに足らずと思し給ひ、朝鮮大明を切取て居城を作らん大志のおはしければ、大膽不敵の佐々成政恩に飽しめて、朝鮮征伐の先鋒たらしめんと、西國の要地肥後熊本を與へ給ふも又故なきにあらず。時に佐々奥州成政は、六月十五日新領肥後熊本に入國し、再び武門の花開け榮花の春に逢ふ事よと、家の子郎等共勇み悦ぶ事限りなし。成政國政を取て隨分人民を撫育しければ、國中の郡主皆來りて入國を賀す。其中に菊池山鹿山本三郡の領主隈部但馬守といふ者、敢て來らず。成政是を安からず思ひけれども、新に領せし國なれば其儘におししづめんとて、肥後拜領の悦びなりとて國中の諸士を殘らず招き、さまぐ\に饗應し、日吉大夫の能を催し終日酒宴をなしけるに、彼隈部但馬守は其時も來らざりける。成政怒つて赤澤右近高木左門を以其罪を問しむ。但馬守、赤澤高木をさんぐ\に罵りて追歸し、忽ち軍勢を駈集め、菊池郡隈府の城へ立籠り敵對の色を顯しける。佐々成政、「さらば軍勢を催して打崩せよ」と、家臣佐々與



淀君之像



北政所之像

を得る時は、死すといへども其心に叶はん事を需む。然れども性實徳なく、生得て嫉み深く、人を殺して猶足れりとせず、肉を喰ひ骨を碎くに至る。尤才智は政所に對容すべし。其中に、政所は篤實の明、淀殿は虚慧の智なり。若政所を廢して淀殿一人を心の儘に威を行はせば、唐の則天皇后、我朝の尼將軍政子の方にも遙に勝るべき佞才なり。此故に政所と淀殿と左右に互角して才を鬪はし、智を爭はしめ、終に閨中の二將軍として其下風に立つ愛妃閨婦雙方に分れ、政所に與し淀殿に黨し、或は謀計を構へて恥辱を與へ、又は白地に舌戰し、閨中の戰人しれずといへども、恰も戰國諸侯の國境のごとし。其一方は政所を魁首として、三條殿、加賀殿是が副たり。忠臣には、おこひの方、朝日の局等御味方なり。一方は淀殿を大將として、松の丸殿副將たり。正榮尼專ら此黨の功有る者にて、淀殿も深く賴み思召す。其外春日局、雪上の方等屬し參らする。かくのごとく內の威勢盛んなるに依て、諸國の大名御家人の武士、此二方の吹擧によつては思はざる幸を得、讒言にかゝりては功有るも是を覆はる。されば上下の近臣外樣の武士等、皆閨中へ媚びへつらひ、身の幸を願はざる者なし。夫猛虎も圈に入れば尾を垂れて食を求むるとや、佐々陸奥守成政此時秀吉公の膝下に繫れ、いかにもして宥免有らん事を願ひぬれば、北の政所又は淀殿へ志をはこび、この頃茶事專ら流行して、圍數寄屋の物好

愛し是と事を問計り、其後に決談せる事おしなべて皆爾なり。此頃千利休が妻も才智勝れてありければ、利休殊に是を愛す。ある時千鳥の香爐を需め得て祕藏しけるに、何とやらん格好あしき所有りとて、妻を呼んで相謀るに、妻のいふ「此香爐今一分計足高し。切らせ給へ」と云ふ。利休手を打て「誠にしかり」とて、妻の詞に隨ひぬ。此等皆此時の流行にして、人々かくの如し。されば秀吉公の才智を以て選みむかへ給へる政所なれば、凡智にあらざる事しるべし。當時秀吉公武家の棟梁にして、權勢面を向ふる者もなき御形勢なれば、閨中に色を爭ふ美妃數を知らず。其中に秀吉公の御本室なりと時の人恐れ奉る女君五人おはします。第一は此北の政所、第二は松の丸殿、是は京極長門守高吉が娘高次が妹なり。先に江州觀音寺山の麓にて琴彈き給ひし姫君なり。第三は三條殿なり。是は江州日野蒲生右兵衛太輔秀賢の娘氏郷の妹なり。第四は加賀殿、是も北國諸侯の妹君なり。第五は淀殿、是は淺井備前守長政が息女信長公の御妹、小谷方於市殿の腹に出生し給ひ、柴田勝家北庄落城の節送り出し參らせし三女の内の姉姫にして、其時年十九、今年天正十五年二十三歲に成り給ひ、容顏美麗、一たび笑めば百の媚なる傾國の姿、秀吉公閨婦の中に第一位の艷色なり。音聲の妙なるは鶯の春霞を出でて囀るがごとく、心佞辨にして氣怜悧なり。其行爽に、爾も情あり。人若淀殿の一言

るべし。

○賜佐々陸奥守肥後國

天正十五年六月、關白秀吉公九國中國を平治し給ひ、（天正十四年月より同十五年七月まで、秀吉公九州征伐の事跡甚だ繁しといへども、しばらく爰に略して太閤記拾遺に記す。編成るを俟ちて見るべし。）肥後の熊本迄凱陣し給ひ、暫く滯留ましましけるが、肥後一國を佐々陸奥守成政に賜ふ。抑此成政は信長公薨御の後屢秀吉公に敵對せし者なるが、一度北國に威を失ひ、秀吉公の軍門に降を乞ひ、辛うじて首を繼ぎたる者なれば、小國又は半國の主と成し給ふとも悦んで忠を盡すべきに、降參の後秀吉公へ一點の忠義もなく、いまだ數年も經ざる内に西國の要地肥後一國六十餘萬石を賜はり、信長より賜うたる舊領越中は五十萬石に過ざるに、戰破れ降參せしにより、已前に増りし大祿を領しぬるこそ深き謂の有りけるなり。其委しきを尋ぬるに、秀吉公の北の政所と申し奉るは、信長公の足輕頭藤井又右衛門が女八重女と申せし御方なり。其才智あくまでかしこく、此頃の諸侯大夫などの及ぶ所にあらず。秀吉公卑賤より發り大業を就し給ひたるも、半は此政所の助け給ふが故なり。されば秀吉公も政所の才智凡人の及ばざる所有りとて、度々稱讃し給ひぬ。すべて此時代の風俗として、高きも賤しきも才ある妻を

彈守が引きし石は正面五間餘、厚さ二間餘の大石四つを車四輛に載せ、金襴緞子綾なんどのうるはしき錦に包み、數千人の人夫はなやかに出立ち、鼓太鼓なんどにて囃しつれ、白川の奥より大佛の前まで引續けたりければ、京中はいふも更なり、近國近在の貴賤老少肩をおし袖をつらね、彌が上におほひ重り見物する事夥し。秀吉公此石を御覽じ「氣味よき哉〳〵。四方の石垣悉く此體の大石にて竝べ立つべし」と仰せければ、さらば大石を奉るべしとて、國々の大名小名我劣らじと人夫をかけ、世に稀なる石どもを京都へ引入れ、石の飾人夫の風流、蒲生が手段に勝りてえもいはれぬ異體の出立し、或は妓女倡婦などあやなくも粧ひ飾り、歌を謳ひ綱を引き、日毎に大佛前へと引き入るゝ。京中京外これを見んとてつどひ寄る事、雲のごとく霞に似たり。山門には銅にて鑄たる金剛神を竝べ、各其丈三丈餘、又洪鐘を鑄て是をかけ、數年の後終に大殿回廊及び山門鐘樓全く調ひ、其功はじめて就れり。號を方廣寺と稱す。久かたの天開け、荒かねの地はじまりてより已來、斯る大殿佛宇の人の力もて造り出したらん例さへ聞えず、洛東蓮華王院の北に鄰りて一つの山の涌出でしごとく、霞の絶間よりきらきらしく光り出でたる棟の瓦金の梁は朝日に照り添ひ、遠近人の目を驚かしめ、秋來り春歸りぬる雁金も、洪宇の爲に翼を勞す。嗚呼秀吉公の權勢夥しき哉、此一事を以てなぞらへ知

べし」と下知し給ふ。依レ之銘々役儀々々を承り、國々を催促し人夫を聚め、經營更にいとまなし。然れども限りなき大宇建立の事なれば、容易に成就すべしとも覺えず、人民退屈して見えにける。爰に高野山の木食聖興山上人といふ僧あり、此人は度々大伽藍を造營し、かやうの事に手なれたる巧者なりとて、此人を召れけるに、興山悅んで洛に來り、佛光寺の境内に草庵をしづらひ、爰に住して下知を加へ、先王退宗貞宗印等に會し、人夫を加へて彼大佛像を漸々に作り出し、扨漆膠を以て塗堅め、金箔にておしふたぎ、青綠丹青の具を以て是に施し、終に大像成就しぬ。さて大殿の棟木とすべき巨材なしとて、九州四國岐岨山飛驒山等をさがし求むれども、然るべき大木なし。秀吉公則ち富士山に人を登し見せしむるに、果して用ふべき大木あり、是によつて東海の諸侯に令して、彼大木を洛に引しむ。是によつて東國の大名小名寄集り、銘々人夫を出し民力を盡して切出し、辛うじて大坂に至る。此一木の費其世の黃金千餘兩なり。扨彼木食興山が下知として佛殿の東方に高き山を築き、巨柱洪石を車に積む、彼築きたる山の上より大繩をかけて轆轤を以て引令むるに、千人がかりの材木も纔に百人計にて運らし、其成功すみやかなれば、秀吉公大きに御意に叶ひ、自ら興山坊が傍に立ちて、「木食坊主を譽よく〳〵」と扇を以てあふぎ給ふ。扨四方の石垣は、始め尋常の小石にて築かけしに、蒲生飛

て京都へ登す。其下知に曰く、「九國四國の國民は材木を大船に積み難波江に漕寄せ、夫より是を小舟に分ち、山城國淀鳥羽に至るべし。又伊勢、屋張、美濃の者は、紀州及び岐岨の山中へ入りて材木を切出し、勢州桑名より是も難波江大坂に寄せ、隨つて京へ送るべし。其外畿内、中國の人民は、大佛殿の地形石がき築山等の修造を勤め、東山佛光寺の境内に集り、奉行及び棟梁の下知を聞くべし」と定め、凡そ此役に預る所二十一ヶ國、五人の奉行夫々に令を下し、京都はいふも更なり、五畿内の賑ひ云ん方なし。爰に唐土の佛工王退といふ者、豐後國に來船して住めるよし石田三成聞出し、彼者を召して造作の儀を尋問ふに、彼者答へて「凡そ巨佛を作るに、銅をもつて鑄立れば成就する事晩し。故に木像と成し漆膠を以て是を塗り、金箔及び五彩を以てこれを飾る。中華佛を作る都て是なり。凡そ漆膠を以て塗る時は、數百年を經ると も朽ちず崩れず」と云ふ。玄以等此言を以て秀吉公に告す。秀吉公是を聞召れ尤なりと同じ給ひて、新に令を下し給ふは、「王退及び宗貞宗印等佛像を作るべし。片桐市正、糟谷内膳正、古田兵部少輔、寺西筑後守、早川主馬頭、間島彥太郎等、奉行に副して大殿經始すべし。堂の高さ二十丈、佛の高さ十六丈、是いにしへよりの舊式なり。今も是に隨ふべし。漆膠は泉州堺の今井宗久是を奉行し、國々の牡蠣殼數萬俵を集むべし。池田備中守上田主水等是が副役たる

レ坊矣。然訴者富者苞苴等之賄物者雖二甚多一、而莫二固受一レ之。此等條諸士體レ之。斯く上を正し下を惠み、國人を治め給へば、戸々に萬歳をうたひ家々に千秋を唱へ、目出度かりける御代なりけり。

○大佛殿經始

天正十四年の冬十二月、關白秀吉公太政大臣に任ぜられ、羽柴の姓を改めて豐臣と稱す。是年秀吉公東山に大佛殿を築せたまふ。五奉行の面々を召寄られ仰せけるは、「いにしへ大佛殿の經營は二十年を歷て成就せしと聞けり。此度は汝等下知を傳へて、五年にして其功を全くすべし」と。是によつて又奉行衆玄以法印が宅に集り、さま〴〵相議しけるに、先當時南都の大佛師宗貞法印、其弟宗印法眼、竝に番匠の棟梁を召寄せ、佛像及び大殿廻廊山門鐘樓等大概の積書を認めさせ、秀吉公へ捧げけるに、「材木の手配をや先にせん歟、佛像の造作を先にするや」と問ひ給ふ。玄以又退いて是を評議し、「所詮は巨材を早く集めずんば速に功を成しがたからんとて、先大木を伐るべき國々を算へ見るに、薩摩、日向、土佐、信濃、岐岨、紀州の熊野良木を得るによしとて、則ち監吏二十人に番匠二十人、人夫三百人づつ其國々へ遣し、巨材を切

敵國に居るの心なく、自若たる御有様に、景勝いよ〳〵慇懃を盡し、左右の人を排ひ暫く談話有りけれども、密事なれば聞く人なし。爰に至つて兩家の和議全く調ひ、秀吉越中富山に歸り給へば、景勝も五里計道を送りて厭川も引きはらひ、春日山の居城へ歸りぬ。其翌日秀吉公大軍を圓め京都へ凱陣し給ひ、いよ〳〵萬民を安きにあらせんとて、天下の政事を執行ふべき器量の者を近臣の中に選み給ふ。其面々には、前田徳善院玄以、淺野彈正少弼長昌、增田右衛門尉長盛、石田治部少輔三成、長束大藏太輔政家を五奉行と定め給ひ、且制書を賜ひて役所の壁に貼す。其書に曰く、

玄以爲ニ所司代一、可レ掌ニ洛中洛外之雜事神祠佛宇之事一。正家可レ掌ニ貢賦租稅計會之事一。長昌長盛三成校ニ論諸事一、勿レ使レ爲ニ不善一、勿レ使下諸人抱ニ勞困之情上。大事則五人相議而定レ之、小事則一人二人相議而決レ之。群國之攻敎等可ニ速議折一之。莫ニ敢遲緩一焉。斷ニ決獄訟一愼而聽レ之、勿レ愛ニ富者一、勿レ輕ニ貧者一。若其聽之不レ明則天下之汚名生矣。諸士各可レ癒ニ病根一。病根有レ三、其一則私欲枉曲、其二則以ニ私怨一故密謀レ復レ仇、其三則多貯ニ金銀一、沉ニ湎于酒一、欲レ貪ニ其名一、親ニ于牀第一、且嗜ニ厚味一。是三者人之病根也。推ニ其所一原因、則貪慾爲ニ之本一。諸士愼而癒レ之、則受ニ人之餽道一、亦或不

め居たりしが、まがふ方なき羽柴公にて有りければ、大きに驚き、飛びしざつて平伏し、「こは思ひよらざる御來臨、上意の旨恐入りて候。併主人景勝不肖の某にて候へ共、此所の守として指置れ候上は、御上意をかへし奉るは恐れながら、春日山へ通じ奉る儀決して相成り不レ申候。強て御通り有るべきに候はゞ、某が首を刎られ、其後に御通りこれ有るべし。是某が職分にて候」と申す。秀吉公打笑ひ給ひ「上杉には故謙信の遺風殘り、よき家人を持れて候へ。さらば急使を以て此旨景勝へ注進有るべし。其返事有らん迄汝が城中にて滯留すべし」と仰せられければ、修理亮謹んでかしこまり、秀吉公を城中へ請じさま〴〵に饗應し奉り、使者を以て猷川の本陣へ斯くと申送りければ、景勝も心驚き、家臣を召寄せ評議せられけるに、或は打殺して後の災を除き給へといふもあり。直江山城守等の智慮ある輩は、「秀吉只一人當國へ來りたるは、内には己が大量を示し、外には禮儀を表として、當家を重じ來たるを計討んは、勇もなく仁義もなきなり。先秀吉に對面あつて兩家益相親むか、又は和睦調はずして矛盾に及ぶとも、一旦秀吉を本國へ送りかへし、其後明かに戰を遂げ、雌雄を決せられ候はんこそ勇將のふるまひにて候べし」と申ければ、景勝尤なりと是に同じ、直江をはじめ近習の士五六人、歩卒五十人計を引具し、墮水の城へ來られ秀吉に對面ある。秀吉公應對笑語平和にして、更に

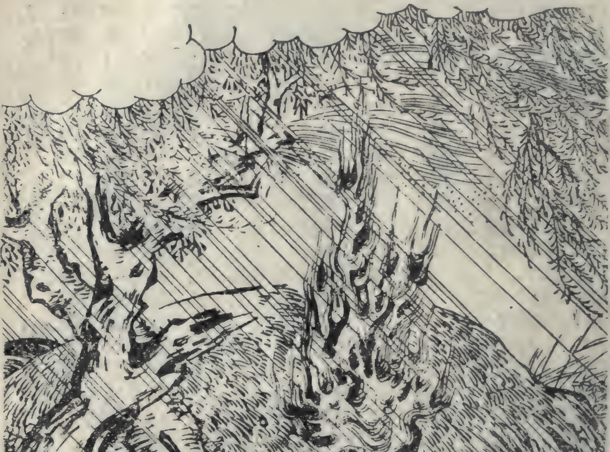
給ひ、「成政々々、向後秀吉が傍に勤仕し茶坊主を勤めよ」とて、成政が髪を剃らせ、「召具して上洛すべし」とそのたまひける。さしも勇武の成政も、腰を折り膝を屈し、朋坊の中につらなれるは、偏に秀吉公の武威盛なるに依てなり。爰に上杉彈正少弼景勝は、秀吉越中を平均し給ふよし聞えければ、其競に當國へ亂入せんも計りがたしとて、隨水の城に家臣須賀修理亮を楯籠らせ、自身一萬餘騎の軍兵を引きて、隨水の此方猒川迄出陣せらる。此時秀吉公は越中國を前田肥前守利長に賜り、其儘上國有るべきと仰せ出されけるが、深き思惟やおはしたりけん、近士石田治部少輔三成、木村彌一右衛門たゞ兩人を召具し、上下の雜兵三十八人にて越中富山を立出で給ひ、市振より親しらずの難所を過ぎ、宇田駒返青味川を經て、八月二十三日隨水の城下に著せ給ふ。爰より雜兵二人を使とし、城主須賀修理亮に申し給ふは、「秀吉よりの使者木村彌一右衛門是まで參りて候。門を開かれ招き入れらるべきや、又は城を出でて對面有るべきや」と云はせければ、修理亮早速町口へ立出で、「秀吉公の宿り給ふとも知らず旅宿へ參り、木村殿に見參仕らん」と申しければ、木村立出で奧の一間に請じ入るゝ。秀吉公修理亮が側近く居寄り給ひ、「吾は秀吉なり、上杉殿へ直に申談ずべき事ありて、近習の者一兩人相具し是迄罷越したり。春日山の城へ申達し對面せさせ候へ」と仰せけるに、修理亮秀吉公の御顏をつれ〴〵詠

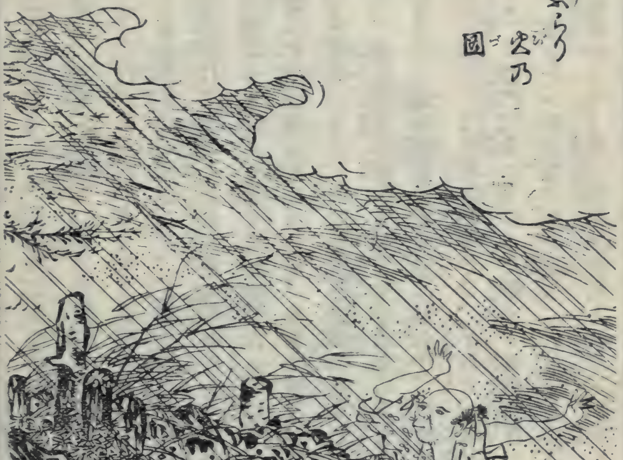
富山の城より早馬來り、「秀吉旗本の勢四萬餘を引率し、能州より廻りて富山の城へ押寄せ、神通川の合戰味方勝利を失ひ、既に落城に及ばんとす。早く來つて後詰すべし」と追々に告ければ、久利加羅の軍卒途方を失ひ仰天し、早落行く者數をしらず。寄手の勢城中の色めくを見て、「すはや大將の御勢佐々が本城を圍みたりと覺ゆるぞ。只一攻に攻崩せ」と大軍一同に鬨を作り、鐵炮火箭を頻に飛し、短兵急に攻たりければ、數多の城兵敵を前後に引き受け、とても防戰かなふまじと、我一に城を打捨て富山の方へ行くもあり、いづくをあてと定めなく、足にまかせて落つるもあり。九ケ所の砦一時に陷り、上方勢ゑい〳〵聲を出し、迯るを追うて切立々々、富山の御勢に加はりければ、僅なる一城を十萬の大軍ひし〳〵と取圍み攻立つる事なれば、曲輪曲輪も攻破られ、纔に本丸にとり籠り暫しは防ぎ居たりけり。佐々成政、今は是迄なり、城に火をかけ切腹すべしと思ひしが、先に神通川にて怨鬼の爲に軍破れ、成政ほどの者が一女子の怨により、身を亡し家を滅ひしと云れんも口惜しき次第なり、不如降を乞て秀吉が旗本に屬し、家名を全く相續せばやと思ひければ、寄手の陣へ使者を遣し、種々に言を盡しさま〴〵に歎き、幕下たらんと願ひければ、秀吉も成政が勇ををしみ給ひ、降參を免し、堀尾帶刀吉晴を以て城を請取せ、越中既に平均しける。成政自縛して秀吉公の御前に平伏す。秀吉公打笑はせ

絶せしむべし」と叫びながらに斬れたり。見る者目をおほひ、聞く者毛髪うごく。是より後成政神通川を渉り軍を出す時は、一度も勝利有る事なし。いく度か前田が家臣村井、奥村の兩人に鋒先を折れ、今日秀吉公と對陣の時、數萬の愁鬼顯れしも、早百合をはじめ一族等が怨念にやと、恐ろしさかぎりなし。今も猶越中富山神通川の邊に、風雨の夜は女の首を斬て釣りさげたる貌の鬼火顯れ出づるを、土人號けてぶらり火と云ふ。又風雨もなき夜にても、「さゆり〳〵」と大聲に呼ば、此ぶらり火顯れ出づるよし、數百年の星霜を經るといへども、一念の怨氣消ぜずして、世の人の語りぐさと成りぬ。後天正十六年、佐々成政百合の花より災生じ、終に尼ヶ崎において自殺し、佐々の家斷絶せしも、正しく早百合が怨恨の成す所なるべし。事は後の條に記す、爰の說とてらし見るべし。

○佐々成政降參

去程に秀吉公の先手の勢五百餘騎は、明かに久利加羅峠へ押寄せ關を作つて攻めかけける。此所は北國無雙の切所なるに、九ヶ所の要害砦を築き、逞卒を籠置きたれば、城々より矢炮を飛しきびしく防ぎ戰ふ程に、いかに大軍といへども攻動かす事能はず、にらみ合て居たりけるに、





ぶらり火乃図

政が妾早百合の外に三人あり。是等の妾早百合が寵愛日々に増行くを妬み、「扈從竹澤熊四郎密に早百合に通じ、其情尤深し。依て今姙娠る所は竹澤が子にして、成政が子にあらず」と一家中を云ひふらしければ、いつともなく成政が耳に入り、いよ〳〵疑ひ、心を附て竹澤を見るに、何となく其氣色有げに見ゆるぞ、是なん斧を失ひし唐人の諺ならん歟。然るに或旦成政早百合が閨の戸口にて、小き錦の燧袋を拾へり。茶坊主を呼びて其主を尋ぬるに、竹澤熊四郎所持する所なりといふ。是も彼妬婦等が謀にて、竹澤が所持する袋を盗み、爰に捨置きしや、又は實に竹澤が落し置きたるや、其事は知るべからず。佐々成政此時大きに怒り、竹澤が密通疑ひなき實事なりと、頓て竹澤を庭前に呼出し、常に帶せる青江村正三尺二寸のわざ物拔打に斬殺し、直に廣式に駈入り早百合が長なる黑髮を左の手に巻き引提げ、此神通川の川添に走出で、持ちたる髮を逆手に取り宙に引上げ、提斬に切つて落し、柳の枝の垂下りたるに黑髮を結びつけ、ぶら〳〵と首を釣りさげ、早百合が親兄弟を始めとし、一族十八人其側に首を刎させ、悉く獄門に梟たりける。斬るゝ者皆無實の成敗を怒り恨む。就中早百合が死する時罵り叫び、歯をかみ碎き血の涙を流し、美しかりき紅顔忽ちに變じ惡相を顯し、「おのれ成政、此身は爰に斬罪せらるゝ共、怨恨は惡鬼と成り、數年ならずして汝が子孫を殺し盡し、家名斷

繪本太閤記　五篇卷之八

○ぶらり火の説

人正しからざる時は必ず妖發る、正路に歸して行に釁なき時は、妖氣自然にして發する事なし。故人曰く、妖は人に由て興ると。宜なる哉、神通川の合戰、佐々成政小勢を以て大軍に對し、戰いまだ半ならざるに、怪風起り數萬の幽鬼顯れ出で、他人の目には見えざれども、成政一人を苦しめ、忽ち敗軍と成りし事、妖怪の業ながら少しく其謂なきにあらず。佐々陸奥守成政越中國を賜り、富山に在城しける始、一人の愛妾あり、名を早百合と呼べり。昨天正十二年の冬、此妾懐孕の心地有りければ、成政大に喜び、兎角にいたはり寵遇日頃に勝れり。時に十一月十三日、同志の大名をかたらひ、秀吉を拒み討んと近習の勇士建部兵庫頭を先として、有合ふ者五十餘人引具し、雪中にさら〳〵越を凌ぎ、甲斐駿河に行きて事を計る。此時竹澤熊四郎といへる小扈從一人、病氣なりとて其供に從はず。富山の城に殘り止れり。成政何とやら疑しき體に見なしけれども、急なる折にて其儘に打立ち、二十日餘を經て歸城しける。然るに成

繪本太閤記 五篇第八之卷 目錄

ぶらり火の說
佐々成政降參
大佛殿經始
賜佐々陸奥守肥後國

時計ぞ揉合ひける。時に不思議や一陣の怪風俄に吹起り、川水を巻上げ石を飛せ、北國勢の旗指物をばた〳〵と吹折り、大風面を對し難く、鎗先寬み崩れんとす。成政こは口惜しと鐙踏張り、四方を屹と見渡せば、神通川の水上吳服村の傍より、一面怪げに恐しき鬼の手に刀を持ち身に鎧を著し、幾百萬といふ限もなく、天に蔓り地に充ちて、おう〳〵と鬨を作り、成政を目がけ湫き來る。さしも強氣の佐々成政冷汗さつと流出で、全身水をそゝぐが如く、心神亂れ魂散じ、馬よりどうど落ちたりけり。佐々が郞等走り寄て肩に引きかけ、本城さして迯行けば、北國の陣々備々粉のごとく亂れ騷ぎ、立つ足もなく引行くを、遁すまじと上方勢鬨を作てなぎ立つれば、死人手負の山をなし、頻に殺して追討つにぞ、佐々が軍兵殘少く討なされ、辛じて城中へ引入り、四門を堅め防戰すれば、秀吉公の御勢は城の四方を十重二十重に取圍み、鐵炮を打懸け火箭を放ち、息をも繼せず攻けるにぞ、今は此城悰へつべうも見えざりけり。

や。爰に來りしこそ我幸、踏崩し小猿めを生捕にせん」と、城中の勢四千餘騎勝り出し、城を出でて神通川を前にあて、矢ぐすね引きて待ちかけたり。秀吉公の御勢は一揉に佐々が本陣を乗落さんと、前田父子先を打てば、旗本には加藤主計頭、福島左衛門太輔、片桐市正、糟谷内膳正、脇坂中務太夫、加藤左馬介、平野遠江守をはじめとし、前後四萬餘騎大濤の寄するがごとく、はやり雄の兵士五六百川中へさつと打入り無二無三に渡しけるを、北國勢時分を見合せ、弓鐵炮を雨より繁くひし／＼と打懸くれば、先に進みし上方勢百餘人川中へ打倒され、水底に沈みけり。北國勢是に氣を得て一時に鬨を作り、鎗を揃へて突立つれば、上方勢あしらひかねて見えけるを、前田父子大きに怒り、「きたなき者の有樣や。敵は小勢なるぞ、何恐しとて後を見るや。此川を押渡り芝居を取つて戰へや」と、大軍一度にどつと喚いて川を渉せば、旗本の勢我一と得物々々を追取て曳々聲して押かゝれば、佐々が先勢大軍に氣後し、此方の岸へ追まくられ、四途路に成りて見えけるにぞ、佐々成政韋駄天の荒れたる形勢にて馬を陣頭へ乗出し、「軍の勝敗は勢の多少に寄る物かは。上方の弱兵どもを川中へ突落せや。進め／＼」と下知をなし、鐵炮の組備を少し高き堤へ上し、川中の敵をさん／＼に打倒せば、北國勢色を直し又もりかへし戰ふにぞ、互に引かじ後れじと、切るをも突くをも顧みず、追上し追下し、半

切倒して逆茂木に引き、岩石を穿て細橋を渡し、柵を振り虎落を結せ、諸方の守は悉く切捨て、國中の剛兵數を盡し、爰を專一と堅めけり。去程に關白秀吉公は、八月上旬諸國の軍勢を催促し給ひ、越中へ發向有る。先陣蜂須賀小六郎四十餘人、次は惟住加賀守長重（惟住五郎左衛門長秀が息なり、父長秀平生積聚の病ありて甚だこれを苦しむ。其痛苦を怒つて自ら刀を引きて腹を裂いて死す。すなはち今年四月中旬なり。火葬の後かの積聚曾て焦ずして、灰中に殘れり。其大きさ拳のごとく、形石龜に似たり、刀痕其脊にあり。秀吉公これを見給ひ、是實に奇物なり、醫家に藏すべきものなりとて、竹田法印に賜ふと也。）一萬餘人、筒井伊賀守定次三千餘人、堀左衛門督秀政八千餘人、浮田宰相秀家一萬五千餘人、次は秀吉公の本陣、五畿内の軍兵二萬五千餘騎、加賀國まで發向ある。元來秀吉公謀を帷幄の中に廻らし、勝つ事を千里の外に決す名將なれば、久利加羅峠より押破らんとの軍立は僞の計策にて、佐々が間者のあらん事を察し、態と京大坂にて其風聞を高く唱へ、敵の手配りを相違せしめん秀吉公の明智なり。加賀國にて先手の勢五萬餘騎を一手に成し、千生瓢簞の馬印を其中へ押立て、久利加羅峠へ押出し、秀吉公は旗本の勢二萬餘騎に前田父子が勢一萬五千餘人、彼是四萬計の軍勢を引率し給ひ、能登國へ向ひ石動の出崎より兵船に取乘り、越中の滑川へ著船あり。神通川を右になし、民屋悉く放火して、直に富山の城へ取詰めんとぞ勇み給ふ。佐々成政是を見て大に驚き、「秀吉僞謀を構へ我勢を久利加羅峠へ引出し、自ら此所へ押來り、我と雌雄を決せんと計るこそ安からね。されども我何ぞ秀吉の猿冠者を恐るべき

なし、京大坂を徘徊せしめ、上方の手術を伺はしむ。此時前田家の功臣奥村村井なども佐々方より合戰を挑ざれば、各要害を堅固に守り、暫く爭戰も止たりける。是によつて越後の上杉も軍勢を引きまとめ、自國の境に堅く要害を構へ、是も軍はなかりける。成政元來信長公肱股の臣、强勇大膽爾も軍事に習練したる兵なれば、上杉、前田が形勢心得がたく、上方の便を聞て計策を廻らすべしと、其音信を待居たり。然るに兼て京大坂へ登し置きたる忍びの者富山の城に追々馳歸り、成政に注進しけるは、「此度秀吉が軍立を窺ひ聞候に、佐々は信長公の寵臣數度の武功を顯し、謀才備へし者なれば、加賀堺は勿論飛彈、能登、越後の國々へ押の軍兵を置き、十方へ手くばりせんは必定なり。只加越の堺久利加羅峠は北國第一の切所なれば、嶮岨を賴みにはかぐ\しき守兵は置まじければ、大軍一手に久利加羅峠よりおしよせ、方々へ向ひ居たる軍勢の助け來ざる以前に、無二無三に攻破り、勢に乘て富山まで押詰んとの軍議に候へば、其御手配しかるべし」と追々かへる忍びの者、同じ口上に申しければ、成政大きに悅び、「秀吉の軍配をくじき一戰に討取らん」と、久利加羅峠の切所に九ケ所の砦を築き、成政が長子勝右衛門信治、二男孫十郎成治、佐々權左衛門、同與左衛門、同九郎左衛門、同平左衛門、同右馬助、赤澤右近、高木左門等に、究竟の逞兵二千餘人宛を相添へ、此城々に楯籠らせ、大木を

是を與へければ、里人悦び謹んで平伏し、藁屋の内を掃清め、さま〴〵ともてなしけれど、かかる深山の住居なれば、供へ進むべき食物もなく、怪しの器に色黒き飯の氷りたるを盛りてさし出すを、人々飢ゑつかれたればとり〴〵に食し終り、「扨酒やある」と尋しに、老翁這出でて、「此所にはなく候へども、是より十餘町去て人里の候。それに濁酒の候」と申す。「さらば人を馳て調めさせよ」とて、其價を取らせ、若き者を走らせ、彼濁酒三升ばかり買來り、成政をはじめ上下の士卒焚火にて是を溫め、互に酌て寒き夜をぞ凌ぎける。明れば成政主從其所を立ちて道を急ぎ、日を經て信州上諏訪に著し、此所より諸方の大名小名へ使を立て、甲斐、駿河の間にて一味の武士を語らひ、「秀吉攻來らば寄合せて討つべし」と、こま〴〵と軍事を約し、夫より尾州清洲に至り、北畠信雄卿に謁し、秀吉を亡し天下を平定して、將軍となし參すべき計略を談じ合せ、又深雪を踏で越中富山に歸りける。

○秀吉公越中發向神通川合戰

佐々陸奥守成政は、更々越を經て一味の武士等を鄰國に語らひ置き、尙秀吉の動靜を窺はんと天正十三年六月しのびの上手數十人を選びて、或は商人或は山伏、又は藝者、浪人などに作り

の大名、我に親しき諸侯を語らひ置き、秀吉を引包んで誅すべしと心を極め、同十一月十三日富山の城を堅固に守らせ「敵若寄せば嚴しく防ぎ、猥に切つて出づる事なかれ」と申含め、腹心の近士建部兵庫頭をはじめ五十餘人を引きつれ、時冬の中頃なれば、白妙に降積みし數丈の雪を踏分け、道もなき嶮岨を凌ぎ、立山の傍更々越にぞかゝりける。此所は越中より信濃へ越ゆる第一の嶮難にて、雪消し時だにも通ひ難き切所なるに、纔に踏みあけたる樵夫の通ひ路さへ雪降埋んで、其跡だにもわかちかね、殊更寒氣甚しく北風面を裂がごとく、從士みな勞れ苦しみ一足も進みかねたり。成政此體を見て、人家やあると峰に攀登りて見渡せば、南の方の麓に人の住むぞとおぼしくて、竈の煙たえぐ\に立ちのぼれば、いざ行きてしばらくつかれを休むべしと、巖石に積りし深雪屏風を立てたるごとくなるを、主從聲を合せ橇に乘てどつと一同に落しけるに、さしも嶮しき高根より雪もろ共になだれ落ち、麓なる人家の前へ出でたりける。爰に五七軒の崩庵ありて、狩人樵夫の住家なるが、人々を見て甚だ驚き、「何處の人にて、かかる人氣なき深山に寒苦を經て詣で給ふ」と怪しむにぞ、建部兵庫頭取敢ず答へて申すは、「是なるは近き國守に仕へ給ふ御方なるが、信州諏訪へ急の御使蒙り給ひ、雪に道を踏迷ひ、不圖も爰に來れり。今宵の御宿を仕り、明日の道の案内をいたすべし」とて、金銀を取出し多く

前田交戰の次第を聞召され、景勝をして佐々盛政を討しめんと、九月中旬木村與一右衛門を使とし、越後の柏崎妙樂寺を語らひ、景勝に利害を說いて佐々を討しむ。景勝元來故謙信逝去の頃迄は十餘ヶ國を切隨へ、北國に威を震ひたりしが、其後或は織田家にかすめられ、本願寺に押領せられ、且は叛逆の輩あまた有りて國多く失ひぬれば、兼て鄰國を切取ん志ありし時なれば、早速領承し、同十月廿三日八千餘騎を引率し越中へ發向し、同廿六日佐々が幕下の將益木中務丞が籠りたる宮崎の城へ押寄せ、終に城を攻め落し、大に進んで越中黑部川四十八ヶ瀨を押渡り、猶門川品著川を打越え、佐々が居城富山より四里此方滑川迄押詰め、民屋を放火し燒跡に陣を取る。是によつて佐々陸奥守は加賀と越後の勢を引き受け、戰頗る難儀なるに、當月廿日信雄秀吉和睦ありて、直に秀吉大軍を引率し、佐々誅伐の爲越中へ發向あるよしとりどりに噂しければ、成政大きに驚き、「柔弱愚昧の信雄殿秀吉に欺れ、終に猿面郞が幕下に膝をかゞめ、先君信長公の興業有りし織田の英名爰に滅亡せんこそ口惜けれ。秀吉我と勝負を試みん爲め、當國へ寄來るこそ幸なれ。微塵に成して捨べきぞ」と躍り上りて怒りけるが、またよく〳〵思惟するに、今前田、上杉を敵に引き受け合戰最中なる所へ、秀吉大軍を以て押寄來らば、外に助けの勢なくては我軍打負くべし、しかじ秀吉が寄せざる内に信雄に志有る鄰國

し」とて、いさみに勇み打立ちける。川尻より一里こなた高松といふ所にて隊を立て、先陣は不破彦三、村井又右衞門、二陣は原讃岐守、前田又治郎、片山内膳、其次は田野村三郎四郎、青山與三兵衞、近藤善右衞門、前田慶治郎等、旗本を守り、其勢一千三百餘人末森さして急がれけるに。去ほどに末森の城中既に危く、今はかうよと見えけるを、軍將奥村助右衞門馳めぐつて支へ戰ふ時に、砂山の方にあたつて、朝霧の晴れ間より利家卿の馬印風にひるがへりて見えければ、城中大きに勇氣を得て、喚き叫んで防ぐほどに、利家の先陣は佐々勢の後より切つてかかれば、二陣は旗本に突いてかゝり、勝負を一時に決せんと死を爭うて戰ふにぞ、城中より奥村助右衞門城戸を開いて討て出で、さし挾んで揉んだりける。佐々成政が軍兵きのふより戰に勞れたれば、利家が新手の勢に當り難く、さん〴〵に敗走し、坪井山の尾崎を越え成政爰にて敗軍を集め、前田勢勝に乘て追來らば、大返にして利家を討取るべしと、備を立てて控へける。され共利家又軍になれたる智將なれば、其計を察して敢て追はず。末森の城に入りて奥村が軍忠を稱美し、其日持たせられし馬印、金の切裂の采配と著たる甲冑を脫て是を與へ、其餘の軍士を悉く褒美し、猶も隊を固くなして更に由斷はなかりけり。爰に越後國春日山の城主上杉彈正少弼景勝は、父の箕裘を繼ぎ勇武を北國に震ふ強將なりければ、秀吉公、佐々

人々よく聞く給へ。我は利長が母なり。今日の後巻は誠に大事の軍なるべし。各心をあはせ高名を顯はし給へ。末森の城を敵に取られなば各も討死し給へ。吾も人手にはかゝり候まじ」とて、又利家の側近く居寄りて「末森落城せば君にもこゝろよく討死し給ふべし。利長も母が此詞をよく聞れよ。これぞ生死の別なり」と申されければ、利家「あら心よや、成政を打破らん事必定なり」といひつゝも、ものの具の上帶をしめて端を切つて捨られける。これを見て雜兵士卒に至るまで、さては今日を限の合戰にこそと思ひ、必死と覺悟を窮めける。利家父子馬引き寄せて打乘り、一參に打立ちぬれば、隨ふ軍兵纔に百騎ばかり、もみに揉んで不破彥三が居城津幡に至る時は、早軍勢一千餘人に成りにける。不破彥三城を出でてこれを迎へ「某先陣仕るべし」とて城中に請じ、湯漬の飯を進め且申すやうは「爰に占の上手なる山伏の候。召して今日の軍を占はせ給ふべきや」と問ふに、利家氣色よからねど、兎も角もとて其山伏を召されけるに、年の頃五十餘の山伏御前に畏り、懷より書物を取出し、籤を取つて卦を布かんとす。利家心いそがはしく座を立ちながら山伏に向ひ「卦は兎もあれ角もあれ、今日の後巻こそ決定したるぞ」と申されけるに、此山伏忽ち書物を懷にをさめ、「則ち今日は吉日なり、時も只今吉時にて候」と申す。利家大きに悅び、「汝は誠に占ひに功者なり。頓て討勝ち賞美すべ

下知し、爰を先途とふせぎ戰へども、目に餘る成政が大軍、切るをも射るをもかへり見ず、無二無三に攻むるほどに、二三の丸を攻破られ、本丸に閉籠り必死に成りて防ぎける。され共此城今はこらへがたく見えぬれば、城將助右衛門も、「今はこれまでなり。自害せばや」と申けるを、助右衛門が妻小褄かいとり、鉢卷しめ刀横たへ、下女に命じて粥を提げ桶に入れさせ、塀内の軍兵共に手自くみのませ、且勇めて申すやう、「昔楠正成とやらん聞えし大將は、纔なる小城に籠り日本國の軍兵を皆敵に引きうけ、堅固に籠城したりけるとや。此城今事急なりといへども、明日は必ず利家卿の後詰これ有るべきに、只一夜をよく防ぎ給へ」といひつゝ夜もすがら打廻るを、助右衛門見て、「今日のふるまひ男子にも勝れり。此城を女の力にて持ちこたへんは口惜き事を」と、戯れて稱讚す。時に此末森の城より、金澤の利家卿へ早打の使其日の酉の刻に著到し「明朝まではいかにしても城を持ちこたへ候べし。早々御後詰下さるべし」と申しけるに、利家聞もあへず息男利長を呼びて、「汝ともろともに末森の後詰を成し、敵の不意を撃て奥村を救ふべし。軍兵を整ふるに及ばず、馬に鞍さへ置きたらば、一騎がけに驅出でよ。一足も早く出づるものを今宵の功と成すべし」と下知し、物の具取つてなげかけ給ふに、はや黑き馬を庭前へ引立てたり。利家の北の方三方に熨斗を置き、父子ともにこれを參らせ、「さて軍兵の

○佐々成政更々越

信長公の舊臣佐々陸奥守成政は、越中富山の城主にして、勇武絶倫の剛將なり。去る天正十一年三月、柴田勝家賤ヶ嶽合戰の砌も、其身柴田が幕下たるに依て一萬三千人の軍兵を引率し、越前大野迄出陣せしに、勝家忽ちに滅亡し、北國秀吉の威風に靡き隨ひぬれば、只一人事を計る共始終全き事能はずと思惟し、一女を質と成し秀吉に和を乞ひ、舊領富山に住しける。然るに同年冬十二月より、秀吉公と信雄卿と其中矛盾に及び合戰に及びぬ。事は前にあらはす 此時信雄より諸國の大名へ觸れられ、秀吉誅伐の議申合はされけれども、當時秀吉の威勢凌ぐべくも非ず、皆羽柴に一味せり。此時佐々成政大きに憤り、「秀吉匹夫の身として主君の君達信雄殿に敵對せる條、誅せずんば有るべからず」と、既に出陣の用意をなしけるが、北國雪深くして上洛かなひ難く、先鄰國の前田利家、秀吉と無二の一味なれば渠を討亡し、然して後上洛すべしと、翌年二月前田の勇臣奥村助右衛門が籠りたる末森の城を攻めたりける。成政軍慮に高たる勇將なれば、「利家父子が後詰せざる内に此城を乘取れよ。爰を打破る物ならば一時に能登を切取るべし」と、自身眞先に馬を驅出し、短兵急に攻めたりける。城將奥村助右衛門僅に三百餘人の士卒に

しもに恐しかりし大鬼の忽ちひさき梅干と化したり。我手を打て、妙なる哉〳〵と譽讃し、其梅干を指にてつまみ早く口のうちへ押入れ、くわり〳〵と嚙碎き一息に服しぬれば、通力自在の鬼なれども、ほどこすべき術もなく、拙者が腹中に納り糞と成り候」といふ。近士の面々大きに驚き、「これは甚しき虚談哉」とて嘲り笑うて退出す。其翌日秀吉公諸將に向ひ仰せけるは、「昨日曾呂利が荒唐話いかゞ聞たるや」と尋ね給ふに、皆敢て答ふる事なし。秀吉公宣く、「渠我行脚を止めんとの諫爭なり。我威勢天下に恐るべき者なきは長二丈の鬼の如し。然れども一人諸國を行脚せば是又梅干に何ぞ異ならん。忽ち庸人の爲に服せらるべし。修行の事は止むべし」と宣ひければ、諸將皆感歎しける。其外紙袋を米倉にかぶせ木釜の咄にて、秀吉公に手を取らせ奉りしなど、皆人の知れる所なれば爰にいはず。一代の奇事擧て算へがたし。曾呂利病に臥して死せんとす、秀吉公より上使を以て病を問はせ給ふ。曾呂利臥しながら上使に向ひ、「野臣重病を受けて落命旦夕にあり。片便宜にて候へども、冥途へ御用候はゞ仰せ附けられ候べし」といひ終て相果てたり。秀吉公是を聞しめし、「今端の期迄輕口を申したり」とて、落涙とゞめ兼ね給ひしぞ有難き次第なりき。

責められければ、曾呂利言下に筆をとりて、

はらみ句やさんご夜中の子望月

人々感じてどよみにけり。又或時秀吉公諸將に向ひ宣ふ、「北條時頼は其身天下の執權として諸國に行脚周流し、民の愁鬱を救ひたりと聞けり。我も時頼が先蹤を追うて諸國を順囘せんと欲す。汝等いかゞ思ふや」と宣ふ時に、前田玄以法印進み出でて申しけるは、「時頼が事其證跡確ならず、實に諸州を巡行せしとも覺え侍らず。君今千斤の重き御身を以て、豈かろ〴〵しく天下を行脚し給はんや」秀吉公宣はく、「日本國は我掌中に等しく、何ぞ我に敵する者有らんや」とて、更に玄以が諫に隨ひ給ふ氣色なし。此時曾呂利御前に出でて申しけるは、「拙者此頃祈願の事候て、河州福王山光の瀧不動尊へ參詣仕りたりしに、兼々承りしよりは大なる飛泉なりし故、暫くながめ居候に、瀧の邊より其長二丈計なるすさまじき惡魔出現し、指にて我を抓み取りて既に引裂き喰はんとす。其時拙者鬼に向ひ申すは、天晴剛鬼や、いかでか尊鬼に敵すべき。我平日奇怪の事を見るを好む、今妙鬼の大なる姿を見て、日頃の本懷を達し、死すとも更に恨なし、心の儘に食し給へ、しかし今生の思ひ出に、今一度貌を變じ、梅の實か桃の實の小き物に化して見せ給へ、其後心まかせに我命を奉るべしと申しつるに、彼鬼尤なりとて、さ

秀吉公御感ありて、「能くこそ祝し申したれ。曾呂利に黄金とらせよ」と仰有りければ、曾呂利謹んで額を下げ、「有難き仕合、とかう申すも恐れあれども、只今御金を拜領仕るよりは、日毎に君の御耳を嗅せ給らば、御金に勝り有難からん」と申上げければ、殿下可笑く思召し、「汝が望に任する間、心の儘に嗅ぐべし」と仰せけるに、曾呂利甚だ悦び、深く恩を謝したりける。夫より後諸國の大名小名登城して御目見の時は、必ず此曾呂利秀吉公の御側にありて御耳を嗅ぎけるを、國々の大小名、さては我身の事を囁き申上ぐるやと心元なく思ひつゝ、内證より若干の金銀を曾呂利に送り、御前の執成しよろしく賴み存ずる旨、日毎に贈り物山のごとく、俄に德附き福有の身と成りけるとぞ。殿下これを聞召し、「例の曾呂利が横著こそをかしけれ」とて笑ひ給ひぬ。又或夜蕎麥搔を好み出させ給ひ、御相伴の衆中へも下したまひけるに、曾呂利器の蓋を取りて、

　うすずみに作りし眉のそばがほをよく〳〵見ればみかどなりけり

又明月の夜、御近習の輩御次の間に宿直し居けるに、曾呂利が御前より下りけるを招き、「其方に今宵狂歌を望みなば、名にしおふ月なれば、兼てより詠置きたる歌を申すならん。それはいかほどの秀逸にても、孕句なれば望なし。さらばはらみ句といふ題にて名月の發句せよ」と





盡し今日の御饗應、會席の握飯は、御前の御差圖か又は御羹鍋方の才覺なるか。日本一の御料理にて候ふ。これにて一首つかうまつりて候」と申す。是なん世に其名高き曾呂利新左衞門なり。秀吉公面を和らげ、「何とか致せしぞ。申せよ」とあるに、

握飯に黑ごまかけて出するは皆人毎にあらうまといふ

秀吉公大に笑はせ給ひ、忽ち御機嫌よくならせ給ひ、「出來したり、よく詠みたり」と讃め給へば、一座の面々興に入り、笑談に時を移しける。此曾呂利新左衞門は、泉州堺南の庄目口町に住せし刀の鞘師なり。其製する所の鞘耦合よく刃を納むるに、そろりと間り鞘口のよく合ふ故に、時の人曾呂利新左衞門と呼習はせり。斯る名譽の細工人なれば、秀吉公へも召出され、每事御用を承りしが、天性滑稽にて狂歌秀句をよくし、輕口噺の上手香道の達人、就中書をよくす。秀吉公其才智を愛し給ふ。常に御側に在りて戯言を以て御怒を解く事度々なり。今日も此新左衞門御前にこれなくば御叱を蒙る者多かるべきに、結句よろしく執成したれば、上の御氣色麗しく、近士の上下おしなべく皆曾呂利をぞ尊みける。又或時御寵愛の松の樹枯れたりしを、秀吉公心よからず思召しつるを、曾呂利伺ひ見て祝しけるは、

御祕藏の常磐の松は枯れにけりおのが齡を君にゆづりて

土の其國人も、めでたしと思ふ種々の美味堆く肴核に盛り、年若く貌麗き婦女四五十人、花のごとく粧ひ酌を取つて酒を進む。土佐の國主長曾我部元親も此時始めて大坂に參勤し、秀吉公を拜し奉り、且獻上する品々は、小袖十重、白銀千兩、一文字の太刀一振なり。秀吉公殊に御機嫌麗しく、「元親早々の上著、誠に神妙の至なり」とて、厚情の御詞數々賜り、同席の大名吉川元春、小早川隆景とともに酒數獻に及んで、黄金の間へ呼入れたまひ、千宗易（利休居士と號す）に命じ、茶を點ぜしめてこれを下さる。元親有難く頂戴して其御居間をつら〳〵見るに、柱 天井 壁障子 悉く黄金を以て熨つけたり。莊棚は梨子地の蒔繪、受塵釘隱には五色の玉を伏せ、庭には緑砂を廣く布き、佳木灌草蔚然として鄧林に入るがごとく、さしもの元親膽を潰し、あなおびたゞしの莊嚴やとて、いよ〳〵歸順の色を顯し、低頭して居たりける。此に諸國より慶賀を申上げん爲登城せる貴賤道俗 夥しく、七五三五々三の饗膳より、程に附品に隨ひそれぞれの配膳に、さしも武將の庖厨といへども上を下へと混雜し、いかゞして取違へけん御前へは出すべくもあらぬ握飯に黒胡麻ふりかけたるを、稚き茶坊主のつか〳〵と持出で、吉川、小早川、長曾我部等が前に置竝べたり。秀吉公見給ひ御氣色少し替りて見え給ふに、御側に有りける男、頭つきより面體格好何となくをかしげなるが、つつと出で御前に頭を下げ、「善盡き美

法師秀信卿を始めまゐらせ、信雄、信益の公達おのづから隨順し、臣と稱して膝行せり。爰に足利の將軍權大納言源義照公は、宇治槇の島退去の後、中國の毛利照元に寄て口に餬し、備後の鞆の津に寓居して居給ひけるを、秀吉公使を立てて大坂に承請し、則ち義昭公に謂て宣ふは、「我今武威を天下に輝し、帝都を守護し朝敵を征せんとす。依て征夷大將軍たらん事を欲す。公は足利の嫡孫にして其職を穢せり、今我を以て養子と成し、大將軍の職を我に授くべし。然らば公身終る迄安富尊榮限り有るべからず」と申し給へども、元來義昭愚昧の小人なれば、私に心に思ふやうは、秀吉舊氏もなき匹夫より經上り、如何ぞ我に狎れ恥しむる事の甚しきやと心に怒り、遂に秀吉の言に從はず。秀吉公も痛に怒つて菊亭大納言晴季卿に相議し給ふ。晴季卿申し給ふは、「公の大膽を以て將軍職を義昭に需めらるゝこそ心得ね。夫職は關白を以て司とす。人臣の高爵士民の景仰、將軍より尊き事いくばくぞや。公を以て關白に任ぜばいかん」秀吉公手を打て大に喜び給ひ、「我關白たらば既に平生の望足れり」と、爰において晴季卿此旨禁廷に奏聞ありて、七月十一日秀吉公を關白に任ぜらる。其外諸侯大夫各爵位昇進せり。是によつて秀吉公金城の內に大宴を催し賀を申す。遠近の大小名郡主村長、諸寺の僧徒社司神職及び大坂堺の町人まで、悉く酒を賜り、山海の珍味は更なり、我國の產ならぬ遠き高麗國唐

所領を其儘にて安堵せしめ候故、手下の郎等へ分與ふべき領所もなければ、止む事を得ず伊豫一國を差上ぐべき旨を申上げつるは、全く敵對申すにては無之候。然れ共御勢下向有之上は、一戰にも及ばず降參仕り候はんも云甲斐なく、一矢は射て候へども、寛仁の御計を以て已前の誤りを宥し給はゞ、謹んで幕下の一將に屬し忠節を抽ずべし。若又免除これなきにおいては、此戰場に討死仕るべきに候」と申送りければ、秀長甚だよろこび宣ふは、「今天下新に治つて、命に順はざる者はこれを征す。秀吉公元來元親に恨これなし、降參して隨順せば本領安堵たるべし」との返答なれば、元親も大に悅び、幼稚の男子孫次郎を人質にさし出し、是より秀吉公の幕下に屬し、兩家の軍勢甲冑を脫ぎ刀劒を納め、萬歲をこそ祝しける。扨此旨大坂へ注進有りければ、秀吉公も御悅不斜、土佐一國を元親に賜り、六月二十七日凱歌を唱へ、秀長秀次の兩將大坂さして登り給ふ。

○秀吉公任關白

于時天正十三年秋七月、羽柴内大臣秀吉公の武德海内に普くして、さしも剛强の長曾我部も手を束ねて幕下に屬し、四國既に平均しければ、更に一道の武威を益し、故右大臣の嫡々たる三

さゝへ戰うたり。長曾我部元親も四萬餘騎を引率し、土佐の白地迄出張し、諸方の味方へ援兵を出し、後を詰て掎角を成す時に、大坂より秀吉公の御使一の宮の陣所に來り、「元親は强勇の將等閑の敵に非ず、勝敗心元なく思召すの間、近々秀吉四國に御出馬有るべしとの御事なり。是によつて秀長秀次兩大將より尾藤甚右衞門を以て大坂に登城せしめ、軍の次第所々の陣取委細にこれを申上げ、猶合戰においては更々御心を苦め給ふに及ばず、近日四國平定なし目出度凱歌を唱ふべし」と言上しければ、秀吉公喜色を顯し給ひ、尾藤に引出物あまた賜り、尚軍令等仰含められ、御暇賜りければ、尾藤拜して四國へと急ぎける。去ほどに秀長卿は大坂より上使を賜はるうへは、纔なる小城に日數を過し征伐延引に及ぶ事、武略の拙きに似たりとて、四方の味方に令を下し、射れども突ども顧ず、揉立々々攻ければ、城兵も爰を專と防ぐといへども、目に餘る寄手の大軍、新手を入替へ攻立つれば、城中手負數多にして、今は防戰の力盡き怺へつべうも見えざりけり。元親諸方の味方利を失ひ、軍民震動せる有樣を見て、とても勝利有るべき戰に非ずと思ひ、軍使を以て秀長卿へ申しけるやうは、「此度の合戰、元親において毛頭御勢へ弓を引き死を爭ふべき所存はこれなく候。元來讚岐伊豫の二州召上げらるべき御諚これ有りしに、元親四國を切取り候とはいへども、降參せる郡主村長には、其領地を改めず

繪本太閤記　五篇巻之七

○長曾我部元親秀吉公屬ニ幕下一

善く生を攝る者は陸に行けども兕虎に遇はず、軍に入つても甲兵を被らず、兕も其角を投ずる所なく、虎も其爪を攝く所なく、兵も其刃容るゝ所なし、何故其死地なきを以てなり。秀吉公の仁勇天下に普く、征する國隨つて服し、伐つ所の人牧悉く順ひ降る。此時浮田秀家、千石權平、黑田官兵衞等、讚州屋島の城を攻落し、又毛利三家の軍勢伊豫國金子の城を拔き、僅に十餘日の間に上方勢所々の要害を攻崩し、勢に乘じ押來るよし聞えければ、四國の軍民震ひ恐れ、上を下へと騷動せり。秀長、秀次の兩將は又大軍を引率し、長曾我部新右衞門親安が籠りたる和氣の城へ押寄せ、竹策を突並べ井樓を組上げ、城中へ火箭を射懸け短兵急に攻討ければ、親安防戰叶ひ難く、是より土州へ引入りけり。上方勢いよ〳〵勝に乘り、一の宮の城を取圍み嚴敷攻む。此城を守る者は、宮内少輔元親が功臣江村孫左衞門、五千餘騎にて籠りけるが、持口を堅め防禦の備密になし、矢石を飛し戰ふ程に、寄手手負死人數を知らず、しばらく

繪本太閤記 五篇第七之卷 目錄

長曾我部元親秀吉公屬幕下
秀吉公任關白
佐々成政更々越
秀吉公越中發向神通川合戰

ば、城兵何ぞ是に敵すべき、さん〴〵に成りて城中へ引入るれば、寄手一同に鬨を作りかけ、逆茂木を引きのけ城際迄攻詰め、鐵炮を打ち矢を飛し、暫時に城を乗破らんと曳々聲して攻立つる。城中も必死に成り、大石を轉し大筒を放ち、嚴しく防ぎ戰ふ程に、元來此城四方皆岩石岨ち人馬の足溜りなき要害固き城なれば、寄手大軍なりといへども急に攻拔くべき方便もなく、矢軍に日を暮しける。蜂須賀小六郎其夜城外の地理を斥候し、營に歸つて士卒を召て申しけるは、「此城要害堅固なりといへども、水の手に事を缺きたると覺ゆるぞ。北の山口に勢を伏せて、若城中より水を汲ば忽ちに打殺し、水の手を斷つべし」と下知をなし、三百人の逞兵をすぐり出し、北の山へ伏置きたり。案のごとく其夜も五六十の人夫水桶を荷ひ谷の水を汲まんとするを、蜂須賀が軍兵四方より取卷き片端より切倒せば、思ひよらざる事なれば肝をちらし魂を消し、さん〴〵に迯げたりける。是より寄手猶々軍勢を四方の山手に陣取をさせ、一滴も水を城中へ汲ませず。是に依て城兵渇に苦しみ、井を掘れども岸高くして水湧く事なく、上下大に力を落し、はや落支度する兵士多かりける。城將桑名左衞門尉、此體にては籠城せん事叶ふべからずと思ひ、或夜風強く大雨頻に降りける時、其物音にまぎれ手勢引具し搦手より城を出で、土佐をさして落行きける。

召上げらるべき謂もなし。しかし羽柴殿今帝都を守護し、武家の棟梁たるよし風に聞きて候へば、伊豫一國を差上げ申すべきに候。其餘の國においては御下知に隨ひ難く候」と申す。上使立歸つて此旨言上に及びぬれば、秀吉公、「さらば軍勢をさしむけ征伐すべし」とて、淡路の須本へ押渡る。軍兵は大和大納言秀長卿を大將として、又畿内の勢三萬餘騎、同國岩屋浦へ向ふ勢は、近江中納言秀次卿を大將として、江州丹州の兵士三萬餘騎、讃岐の屋島へ押寄る勢は、浮田秀家、千石權平、黒田官兵衞等三萬餘騎、毛利照元、小早川隆景、吉川元春等も、秀吉公の御下知に應じ是も三萬餘騎を引率し、伊豫新間に著陣す。四手の勢凡十三萬騎、同時に土佐へ押寄せんとす。是に依て長曾我部元親も、四國要害の城々に軍勢を籠て堅固にこれを守らしむ。大納言秀長卿は秀次と勢を合せ都合六萬餘騎、福良浦より阿波鳴門を斜に渡し北泊に著岸し、木津の城へ押寄する。此城を守る大將は桑名左衞門尉龍之とて、四國に聞えし勇將なれば、大軍押寄すると聞きて足輕二百餘人城より出し、木津の入海を右手へ取りて備を固めて待つ所に、上方勢の先陣筒井伊賀守、中村彌平次、蜂須賀小六郎等、鬨を作て突かゝるを、待ちまうけたる鐵炮の兵、つるべかけてはら〳〵と打ちける程に、先に進みし筒井が士卒三十騎計ひしひしと打倒さる。されども大軍事ともせず、踏越え〳〵切つて懸り、無二無三に攻めたりけれ

名乘り、父が居城岡豐に住す。元國天文八年己亥五月男子を生む。生長に及んで力量衆に勝り、武術國中に敵なし、則ち是を元親と呼べり。弘治二年元國病死し、元親父が箕裘を繼ぎ、自宮内少輔と改め、武威を以て遠近を切りなびけ、國司を始め土佐七郡悉く元親が手裡に入り、續て阿波國を切取り淡路を平げ、讚岐伊豫を併呑み、四國の地悉く長曾我部が令を守り、敢て敵對せる者なし。時に此砌織田右大臣信長公頻に威名盛にして武家の棟梁と成り給へば、元親織田の幕下に屬せんとて音信を通じ、頗る志をかたぶけけるに、計らざりき信長公惟任が逆心により本能寺にて弑せられ給ひぬれば、今は自身天下の武將と仰がれん大志を發し、一向自國の要害を嚴重に構へ、時節を見合せ居たりける。然るに羽柴秀吉公山崎に光秀を殺し、柳瀨に柴田を誅し、權勢自ら强大に成り、近國の大名皆膝をかゞめて服從し、天下一統の兆既に顯れければ、長曾我部元親白眼に是を見て敵對もなさず、隨順もせず、國の守を固くなし靜りかへつて居たりけり。此時秀吉大坂に在城し給ひ、諸國の大名歸順せざる輩を追討なし給はんとて、其評定有りけるに、近くは土佐國の長曾我部元親軍威に募り、四國を押し自國に籠居て、敢て上坂せざる間、先是を糺さるべしとて、上使を以て讚岐伊豫の二國を召上げらるべきむね仰出されけるに、長曾我部御下知に隨はず、「是は某一人の力にて斬取りし地にて、之あれば

とて、同月十六日和歌の浦を遊覧あり。玉津島へ詣で給ひ、勝地の風景を稱し詠じ給ふ和歌に、

　打出でて玉津島より詠むれば緑たちそふ布引のまつ

翌十七日旅軍を引きて大坂に歸城し給ふ。

○四國征伐

土佐國の長曾我部宮内少輔元親といふ者あり、渠が先祖を尋ぬるに、本朝人皇三十八代天智天皇の御宇、故有つて百濟國より吾朝へ珍寶玉帛を貢す。其使日本に止り鎌足大臣に仕へ、信州にて采地を賜り、姓を秦と賜ふ。其後應永年中渠が十七代の孫秦元勝と云ふ者不幸にして代代の領地を失ひ、信州を去て漂流せしが、後土佐國に來り江村某に惠を得て、同國長岡郡に城を築き、則ち氏を曾我部と改む。しかるに復同國香美郡に曾我部といふ地名有りて、其所の郡主も曾我部某と呼べり。是によつて今一字を添へて元勝を長曾我部といひ、今一人は香曾我部と改む。夫より數代土佐國に住し、居城を同郡岡豐に築く。後はるかに年經りて永正の頃、長曾我部元秀なるもの同國の武士本山吉良大平など云ふ者と戰ひ、力盡て討死す。其子千王丸年いまだ幼し。土佐の國司一條房家卿に養育せられ、生長りて長曾我部宮内少輔元國と

うしなひ髻を剪り、遁世眞實發道心の族は、在山すといへども、制の限りにはあらず。

比叡山根來寺の滅亡を以て眼前の炯戒となすべし。

右之條々、衆徒行人等同心においては請狀を捧ぐべし。滿山各々心底を殘さずんば、秀吉も又興隆すべきなり。

天正十三年四月十日　　秀吉判

高野山衆徒等

斯くのごとき文書高野山へ到來しけるに、一山の僧徒寄聚り衆議區々なりけれども、眼前根來寺其外當國の一揆、鬼神と號へし信長すら攻あだみたる溢れ者を、纔に十餘日の内に征せられし羽柴殿なれば、熊野新本宮及び近き村里こと〴〵く降參し、今は紀州一圓に隨順の色を顯し侍るに、獨當山のみ我意を申立て命に逆ふ物ならば、終には一山の破滅なるべし、不如其仰に順はんにはとて、衆議一決し、細井新介に就て請狀を捧げ「銘々嚴命を守り永く違失なく、滿山の老弱一同に恩惠を仰ぎ奉り、若違背有るにおいては成敗を蒙るといへども恨有るべからず」と謹んで申上げ奉れば、秀吉公も大感限なく、寺領等委細に糺し、「以後謹んで命を守るべし」

野を征伐有るべしと、大軍潮のごとく押行き給ふに、此時紀州一國の人民秀吉公の威勢に恐れ、敢て敵對奉らんと企つる者一人もなく、熊野本宮新宮の社人、其外近村の百姓ども、道筋へ迎へ出で膝を折り頭を地に附け、悉く降參しければ、秀吉公莞爾と打笑み給ひ、皆もつて助命せられ、猶仰渡されけるは「熊野の地は道嶮岨にして其中に數多の關所を居ゑ、往來の旅人を苦しめ、且は要害をたのみて亂を起す條言語道斷の次第なり。早速所々の關所を廢し、往來を心の儘にせしむべし」と命じ給へば、新宮本宮の社人ども謹んで命を承る。是に依て皆々御いとま賜り、直に高野山を攻めらるべしと議せられけるが、先上使を以て僧徒のなせる不義を糺し、其上にて征伐有るべしとて、前田法印仰を承りて督責の趣をかく、其書に曰く、

一海師手印の載る所寺領たるべし、其外年來押領する所の者は、速に本に還すべし。然らずんば一山既に海師の法に背き、滅亡の基にあらざらん乎。

一寺僧行人等學問を嗜まず、甲冑弓鐵炮を貯へ置き沙門之事業にあらず、惡逆無道なりといふべし。向後學問を勸め武具を携ふべからず。

一朝敵國敵凶徒怨讎の輩、山中に來り匿るゝ時、僧徒是を扶助す。卽ち是同罪なり。自今以後これを制禁す。若親を喪ひ子を失ひ、或は主人に向背れ、あるひは恥を蒙り面目を

く取圍み、喚き叫んで只一揉にと攻めたりけるに、一揆原かけ竝べたる鐵炮を間なく放ち、矢を飛し石を走らせ、命を捨て防ぎ戰へば、寄手死傷の者數をしらず、容易攻落すべくも見えざりけり。秀吉公是を御覽じ、「かばかりの一揆ばらに、味方の兵士一人も討取せんは便なきわざなり。よし〳〵城中の老少鏖に成してくれん」とて、一萬人の人夫を以て城の四面に高く堤を築き、吉野川の急流を堰入れ水攻になし給ふに、三月二十三日より四月朔日二日の頃は洪水蕩々とみなぎり集り、鼠鼬蛇の類、其外あらゆる蟲類水上に浮び上り、櫓の中陣屋など這込みぬれば、一揆原是をさへ心うしと思ふ程に、時々刻々に水增り、「何樣此體にては、一兩日も怺へたらんには此城水底に沈み、一人も活る者有るべからず」と、城中一同に力を落し、筋目もなき一揆ばら聲を揚て泣きかなしみ、塀矢倉に上り寄手を招き、助けてたべ〳〵」と、身悶せしは淺ましかりし次第なり。これによつて、城中より秀吉公の御陣へ降參のよし筏に人を乘せて希ひければ、秀吉公もあはれに思召され、「一揆の棟梁たる者悉く切腹せば、老少の輩助命せらるべし」と仰出されければ、城中一揆の魁たる者百五十三人切腹し、城を開き相渡せば、秀吉公頓て中村孫平治を以て城代たらしめ、築上げし堤を切つて水を落したまひ、城中の男女我さきにと落行きて、雜賀の一揆も平治しけり。四月五日、秀吉公雜賀表を出立ありて熊

死し又は落失せ、爰に籠りたる者どもは老たる僧幼き童など、物の用にも立つまじき者ばかり三百餘人殘り居ければ、秀吉公の大軍押來るを見て防ぎ戰はんといふ者なく、我先にと落行く程に、寺僧等初の氣勢に引かへて、「此本尊如來はたれがしが背に負うて迯去れよ。それの經巻は此箱に取入れたれば、はやく〱持ちて寺を出でよな」と言る所へ、秀吉公の先陣はや門外へ押寄せ、鯨波をどつと揚げたりけるに、寺中の僧徒腰をぬかし、老たる比丘幼き兒、こけつ轉びつ迯出づるを、老若の嫌ひなく片端より切りまはり、風上より火をかけたれば、焰天に飛び黒煙空中にたなびき、建てつらねたる大殿佛閣一時の焦土と成りけるは、淺ましかりし有樣なり。雜兵ども煙の中へ飛入りて、僧共が年頃貯へ置きし金錢財寶を奪ひ、佛像經巻ふみくだき、さしも大師の靈場なりしも、日こそ多きに、三月二十一日かく敗退に及びぬるは、僧徒の惡行をにくみ給ひ、斯く成行きし事ならんと、見る者これを恐れけり。

○紀伊國平均

翌れば二十二日、秀吉公軍勢を引率し雜賀をさして押寄せたまふ。雜賀の一揆三千餘騎大田村の城に楯籠り、思ひ〱の旗風に靡せ鳴を鎭めて待居たり。秀吉公の大軍四面より鐵桶のごと

四方をにらみ立ちたる所に、筒井家にて大力の聞えある布施小太郎、萬財太郎兩人、切先をならべて打てかゝる。畋一房彼鐵棒を打振つて二人を相手に打合ひしが、布施萬財の兩人共に、鐵棒にて太刀打折れ、かなひ難く見えけるを、桃谷與太右衛門飛入て畋一房に組附たり。畋一房手早く桃谷が上帯摑んでぐつとさし上げ、右手の方へ三間餘投懸けける。布施、萬財兩人、馳寄つて組附くを、左右へふみ附け既にかうよと見えし所に、島新吉、松倉九市郎、右と左の手を捕へ、布施萬財を討せじと揉合ふ時に、森縫殿介、中防左近、山田、名張、服部等むらむらとをり重り、手足に取附き打倒し、なんなく畋一を生捕りけるを、定次下知して「憎き坊主め。切つて捨てよ」と怒りければ、松倉九市郎太刀取直し、首打落して捨てにけり。大一房無三房もさん〴〵に戰ひ、敵を討つ事數をしらず。是も亂軍の內に斬死を成しぬ。かゝりければ今は刃向ふ敵一人もなく、千石堀落城し、討取る首四百餘級其所に切りかけさせ、勝鬨を揚げて進みけるに、積善寺、濱の城二ヶ所に楯籠りたる惡僧及び溢れ者等、千石堀落敗の體を見て魂を消し、城をすてて思ひ〳〵に落行きける。秀吉公味方を令し、「此勢に根來寺を攻めぬけや」と、大納言秀次卿を先手の大將となし、三月二十一日根來寺さして押寄せ給ふ。此時根來寺には、剛勇の僧兵士は千石堀及び三所の砦に楯籠せ、彼所にて喰止むべしと思ひの外、或は討

城中の鳥銃の藥篋に火移り、忽ち烈火四方に飛び、千雷の等しく鳴るが如く、是に觸れて死する兵卒六百餘人、八方の櫓々悉く燃出て防ぐべきやうあらざれば、今は是迄ぞと城門を開き切つて出づるを、筒井・堀、長谷川等きはひかゝつて討つほどに、城兵右往左往に斬立てられ、ちりぐ〵に成りて落行きける。爰に雜賀運平、同大六、根來皈一房、大一房、無三房といへる大勇無雙の强兵あり。討殘されたる兵百餘人前後に引具し、筒井が陣へ眞一文字に切入つたり。筒井勢あますまじとおつとりまいて戰ふ内に、雜賀大六大太刀打振り、寄來る武者八九人斬倒し、筒井定次をめがけ一參に飛來るを、元來剛氣の定次ちつとも動ぜず、重代の筒井丸二尺七寸の太刀眞向にかざし、大六と火をちらして戰ひしが、大六が左の肩先より右の脇まで切りさげければ、流石の大六二つに成りて死たりけり。運平見るより飛かゝつて切結び、定次既に危く見えける所に、筒井が家臣桃谷與太右衛門走來つて後より運平をしつかと抱き、太刀もぎ取りて捨てたりける。運平大きに怒り、ふり放し無手と引組み、金剛力を出して揉合ひしに、運平力まさりにて桃谷を取て引伏せ、首を搔んとせし所を、藤四郎定次右の脇腹に二刀迄刺通し、よわる所を下より桃谷刎かへして首を取りたり。又根來の惡僧皈一房は、一丈計の鐵棒を輕々と打振り、當る者を微塵になし、東西に靡け南北に追拂ひ、猛勇さらに敵するものなく、

餘人的になつて打倒され、乘入る事は思ひもよらず、攻口を一町計退きて暫く息をつぎ居たり。

○根來寺燒亡

筒井藤四郎定次は、秀吉公の御覺も父順慶には劣りて、大和國もめしはなさるほどの次第なれば、あはれ此合戰にめざましき高名をなし、此ころの恥辱を雪がんものと、手勢三千五百人叉鯨波を作りかけ、隍際近く攻寄すれば、是を見て堀、長谷川同じく勢を進めつゝ鐵炮を打懸け矢を飛し、死人手負を踏こえ乘りこえ、功を一擧に爭ひける。されども城中少しもひるまず、持口々々へ勢を配り、新手の射手と入替へ手繁く防ぎ戰ふにぞ、寄手も左右なく近寄り難く、其上此城の隍深き事五六丈、依て稱して千石堀といふ。此故に寄手心は强く勇むといへども、堅固に構へし要害に屈竟の剛兵楯籠り、死力を盡して防戰すれば、手負討死のみにて一人も隍際へ寄る事能はず。四方を圍みし軍勢ども、拳を握り牙を嚙み、城を白眼んで居たりける。筒井定次大きにいらち、斯くてはいつか大功を顯すべきとて、家臣中防飛彈守、伊賀の侍山田、名張、服部等に命じ、城の搦手へ押寄り、風上より火箭を透間なく射込せけるに、時なるかな

兵器を貯へ弓箭を持し、人を殺し土地を奪ひ、强惡のふるまひ夥しかりければ、人これを憎まずといふ事なし。秀吉公敵の要害をかまへしを見て、秀次を旗大將とし、堀秀政、筒井定次、長谷川秀一等を以て千石堀を攻めさせ、細川與八郎、蒲生忠三郎に積善寺を押へさせ、中川主馬太夫、高山右近は濱の城を押へとす。秀吉公の御旗本跡を詰て押しよせたり。時に千石堀の砦には、根來寺の惡僧ばら、諸國の浪人隨分剛勇の兵士をえらみ千五百人楯籠りしが、寄手の先陣堀秀政が勢近く寄するを見て、究竟の射手五百餘人城より出しさん〴〵に射させければ、堀が軍勢面を向くべきやうもなく、射しらまされてすゝみ得ず。秀次血氣の若大將なれば、これを見て旗本に向ひ、「千石堀の要害は俄に構へし砦なれば、塀石垣もはか〴〵敷はあるまじきに、騎馬の武者を以て弓射る敵勢を横様より駈崩し、敵の引く時急に攻詰め附入にせよや」と下知し給ふ程に、はやり雄の武者田中久兵衛尉、渡瀨喜治郎、佐藤隱岐守等一番に馬を駈出せば、秀次卿の旗本三千餘人、一度に噇と鬨を作り、横合よりまつしぐらに突懸れば、堀秀政、筒井、長谷川是も同時に鬨を合せ、八方より斬立つれば、城兵さん〴〵に亂れ大手の門より引入るゝを、「すはや附入にせよ」と寄手の大勢村雲立てひし〳〵と攻入るを、城中より大木大石を投げかけ、弓鐵炮を雨の降るごとく打出すに、寄手の大軍透間なく寄せかけしかば、先に進みし兵士二百

短勇の信長公も其儘に打捨て置き給ひぬ。然るに此度大納言秀長卿紀州の大守に任られ給ひし故、使を以て國中へ觸れられけるは、「今度羽柴大納言平秀長、大和和泉紀伊三國に大守たれば、村々郡々の司たるもの、郡山の城へ早速登城し、國守を拜し令命を承るべし」と仰渡されければ、紀州の國中とり〴〵心々にて、或は畏り參勤仕るべき旨御うけ申す者もあり、又はとかうに事よせ鄰村の計議に同意する者もあり。兎角一決せざる中に、高野熊野根來等は一向に取敢申さず、嘲笑うて居たりける。取譯根來寺の大衆等は、使者を嘲弄し惡言を吐き、早楯をはぎ鏃を磨き、合戰の用意をなしけるゆゑ、上使郡山へ立歸り、しか〴〵の由を申上ぐれば、秀長卿安からず思召し、大坂へかくと告げ給へば、秀吉公大きに怒り、「にくき坊主等がふるまひかな。其儀ならば軍勢を起し先根來寺を蹴潰せよ」とて、大納言秀次を副將となし、細川與八郎忠興、蒲生忠三郎氏郷、中川主馬太夫秀繁、高山右近長房、堀左衞門尉秀政、筒井藤四郎定次、長谷川藤五郎秀一等を先として、其勢都合十餘萬人、天正十三年三月十九日紀州根來寺へと發向ある。根來の僧徒是を聞きて、さらば防禦の用意をなせよと、泉州岸和田の邊において千石堀、積善寺、濱城三ヶ所の要害を構へ、大坂勢を防ぎ支へんとす。抑此根來寺は鳥羽院天仁年中覺鑁上人の開基にして、嚴密の靈地なりしに、此頃は僧徒皆破戒無慙の行をなし、

○秀吉公根來寺征伐

足利の末國々亂れざる所もなく、國主郡主地をかへ所領を失ふ事此代の常にして、國人朝には何某殿を國の司と仰ぎしも、夕には其人の行衛さへ知れず、あられぬ武士又は法師などの令を下し、おのが儘に國政をふるまふ程に、情ある國の制をうれしと思ふひまもなく、荒々しき野武士風情の者に村里を掠められては、夫ある女を奪取られ、祕めたくはへし財寶重器を失ひ、家を燒れ邑を浸れ、朝夕に只鬨の聲攻鼓の音のみ聞て、心もこゝろならざるぞ、げに亂世のさまなりけらし。然るを今秀吉公の武威になびき、かく亂れたる世の中にも、大半正道に歸し、仁義を守り、頗る太平の機を顯しけり。是によつて秀吉公も此頃王命に背き、武家の令に順はざる者を悉く征伐有るべしとて、良其沙汰に及ばせ給ふ。爰に紀伊國と聞えしは日本南海の大國にして、蜀道函谷の固ありて、爾も近年國の主もさだかならず。熊野本新宮の別當、或は諸山の衆徒等猥に國政を執行ひ、土地を掠め所財を盗み、我意を恣になすといへ共、天下騷亂の時なれば、誰か是を制すべき人もなく、たま〳〵故右大臣信長公誅伐成したまへども、國中の一揆等敢て服せず、結句信長公の軍を討殺し、無禮の事度々なれども、其砌は軍事事しげく、

べしと思ひけるが、餘りの事に恥しとや思ひけん、妙心寺に入りて落髪し、後越後にさまよひ行き彼地にて終りける。信長公御在世の時は、柴田、羽柴、瀧川、惟住とて四大老の一人にて、關八州の管領に補せられ、勇名無雙の剛兵なりしが、此時のありさまは哀なる事どもなり。天正十二年四月、秀吉卿の軍將軍殞え、池田勝入齋、森武藏守等、長久手に於て戰死す。其後 交對戰有りしが、同年十月に至つて、富田左近、津田隼人等、兩家に往來して交和を計る。秀吉信雄兩卿是に同じて、同月廿日矢田河原において謁見あり。爰において和睦調ひ干戈忽ちに治り、人民安堵の思ひを成したりける。同年十一月秀吉卿權大納言に任じ、從三位に敍せられ、それよりしきりに官位昇進し給ひ、翌年天正十三年二月正二位内大臣に任じ給ひ、御令弟美濃守秀長卿は從二位大納言に敍し、大和、和泉、紀伊百萬石を領せしめ、御猶子孫七郎秀次卿、官は權中納言位は從三位に昇り、近江國の大守たり。大納言秀長卿に賜ふ大和國は、筒井順慶の領國なりしが、去年の秋病死し、子息藤四郎定次家督相續したりけるに、此定次酒色に亂れ、下民を虐げ惡行少からざりければ、秀吉卿甚だ怒り給ひ、居城筒井の城を縮て纔に爰に住せしめ、郡山に堅城を築せ、秀長卿の居城とし給ふ。是より秀長卿を大和大納言殿と稱しける。秀長卿郡山へ入部し給へば、筒井譜代の舊臣從士皆郡山に參勤し、秀長卿の家士となれり。


貴君
官位昇進



の大守北畠中將信雄卿は、故右大臣薨御の後は、天下をしるべき者は我なりと思しけるに、御令弟三七信孝强勇にして信雄卿の下知に隨ひ給はず、忽ち兄弟矛盾に及び、終に柳瀬大合戰と成り、信孝運拙く生害し給ひぬれば、信雄卿我に刃向ふべきものなしと思しけるに、却て羽柴筑前守秀吉天下の政事を執行ひ、織田の舊臣外樣の大名まで皆秀吉に隨順しければ、信雄卿是を惡み給ひ、今は秀吉を亡さんと密に謀計をめぐらされける。秀吉卿も又あらかじめ其色を察し給ひ、信雄の家臣松島の城主津川玄蕃允、星崎の城主岡田長門守、刈安賀の城主淺井田宮丸に志を通じ、信雄の內謀を伺ひ給ふ。信雄これを疑ひて此三人を長島の城に招き寄せ、終に是を殺害す。これより秀吉信雄敵々と成り、當に天下の大亂を發し、日夜合戰止む時なし。爰に瀧川右近將監一益は、先に信孝、勝家に一味して秀吉卿に敵對せしが、自國の軍大きに敗れ、剰へ信孝勝家も滅亡しければ、秀吉卿に隨順して江州にて五千石捨扶持を領し、云ひ甲斐なくて暮しけるに、今度の合戰には秀吉卿の味方として拔群の忠節を盡さばやと思ひ、蟹江の城主前田與十郎と心を合せ、信雄卿を討挫がんと自ら三百餘人の手勢を引具し、船にて蟹江の城へ入りけるに、敵方より早くも見咎め、大軍ひし〳〵と取圍みさん〴〵に討立れば、瀧川勢半は城に入り半は海に漂ひ、粉のごとく亂れちり、力盡て又信雄卿へ降參し、秀吉卿へ弓引く

岐阜の城主となし、濃州三十餘萬石を進ぜらるゝ後に、岐阜中納言と申すは此公達の御事なり。同月秀吉卿參議に任じ、四位の上に敍せられ給ひ、自ら天下の政事大小となく秀吉卿の掌中に入り、日々に新に月々に盛なれば、惟住池田前田を首近國の大名小名、臣と唱して膝行せり。されば都近くに御座をしめられ帝都を守護し、朝敵を防ぎ給ふべしとて、攝州東成郡石山の地に金城を築せ給ふ。筒井伊賀入道順慶、堀久太郎秀政、片桐市正且元等、造營の奉行として、山陰、山陽、四國、南海、五畿、東山の人夫を以て、二年餘を經て其功成れり。抑此地の形勢と謂ば、西は滄海洋々として白浪則ち天を浸し、東に大和川を帶び、北に淀川を抱て、其中に亭亭たる城郭高くそびえ、山を凌ぎ雲に連り、天府の地勢人目を驚す。湊には河筋蛛手を成し、大江の洪流漲り湧て、數千の艇舸其間に浮め、鐘鼓の聲棹の歌、馮夷蝄蜽を驚かし、其市中は良材巧を盡し、瓦屋堊を塗り、天下の珍寶を積みかさねたる事、鳥の羽の如く集め鱗の如く萃る。鬻ぐ者は贏を兼ね、求むる者は匱しからず。美服して鼎に食ひ、風姿誠に富饒の地なり。爰を稱して大阪といふ。其奉行筒井が陣所の跡を今猶順慶町と唱へ、堀が陣所を久太郎町と稱す。片桐が營は城の艮にあり。爰を片桐町といひしを、今略して片町と呼ぶ。秀吉卿此金城に居を定め給ひ、四國、中國、九州の順はざる者を征せんと、豫め其用意をなし給ふ。爰に勢州

原一町四面に柵を結ひ、警固の武士二百餘人、鐵炮に火繩手挾嚴重にこれを守れり。淺野兩人の刑人を柵の中へ引入れ、斬人の武士玉ちるごとき大刀引きそばめ、立まはつて用意を成す。此時玄蕃頭淺野彌兵衛をかへり見て「我運盡て勝家が下知を用ひざるこそ無念なれ。勝家が下知をだに用ひなば、秀吉幷に汝等を捕へ斯くのごとくせんずるものを。嗚呼果報いみじき筑前哉」と眼を見開き怒りける。淺野是を聞て「此期に臨みよしなき事を申さるゝは、未練にも聞え候。疾う〳〵覺悟致されよ」と申しけるに、玄蕃頭點頭て、辭世の一首を口ずさむ。

世の中をめぐりもはてぬ小車は火宅の門を出づるなりけり

と詠じ終れば、權六も諸共に首は落たりける。盛政は淸和源氏にして、織田の重臣佐久間大學助が嫡男右衛門尉信盛が甥なり。大學助柴田が姉を娶りて生む子なれば、勝家は母方の叔父なり。權六、勝久は勝家が妹の子、父母におくれて孤となり、勝家育て猶子とせり。盛政生年廿八歲、勝久十六歲、其所にて獄門にかけられたり。

○秀吉卿官位昇進

天正十一年夏五月、三法師秀信卿四歲にならせ給ふを、秀吉卿の計とし安土より迎へ參らせ、

繪本太閤記　五篇卷之六

○盛政勝久所レ誅

六韜に曰く、一人を殺して三軍震ればこれを殺せ、一人を賞して萬人悅ばゞ是を賞せよ。殺すことは大を貴び、賞するは小を貴ぶとかや。されば筑前守秀吉卿、神戸柴田が一族を盡く討亡し、濃越の國全く平ぎ、龍の上天せる勢にて五月のはじめ江州に歸國あり。坂本の城に入りて諸方の政事を聞糺し給ふ。時に端午の嘉節なれば、國々の諸侯幕下の軍士悉く參上し、北國穩にたひらぎ、わきて目出たくおはします節句かなとて、さま〴〵の捧物を呈し、賀を演べ、坂本の城下馬輿にて群集せり。秀吉卿の威勢已前に百倍し、夥しかりき事共なり。爰に佐久間玄蕃頭盛政、柴田權六勝久は、山口甚兵衞尉、副田甚左衞門等に監せられ、秀吉の陣に在りけるが、同月七日秀吉の御下知として京洛中を引渡し、六條河原にて梟首せらるべしとて、奉行淺野彌兵衞是を催促し、兩人を守護し京都を引かせけるに、洛中洛外の人民、音に聞えたる鬼玄蕃が最後のやうを見よやとて、街上に群を成し、錐を立つべき間もなし。六條河

繪本太閤記 五篇第六之卷 目錄

成政勝久所レ誅

秀吉卿官位昇進

秀吉公根來寺征伐

根來寺燒亡

紀伊國平均

四國征伐

是を介錯し、其身も倶に切腹しける。信孝最期の際の辭世とて斯くなん。

重代の主を宇津海の浦なればみのをはりをば羽柴筑前

織田新八郎信兼是を見て同じく自害す。兩將の近習五十餘人悉く殉死せしは、潔かりし次第なり。中川頓て信孝以下の死骸を宇津海の禪院に葬り、懇に追福なしたりけり。

招き入れ、信孝對面して其所以を問れけるに、堀尾茂助異儀を正して申すやうは、「當城のありさま今日既に落入らんとす。城を開き退參せらるゝにおいては、一國の主と定め參らすべき秀吉の存念なり。是全く武將三法師秀信君への秀吉が奉公にて候。若又違背の儀これ有るにおいては、天下の爲に候へば、攻打て御命にせまり申すべし」といふ。信孝良思案の體に見え給ひしが、「柴田一家の者皆我に忠節を盡し悉く命を殞り。然るを我一人命を全くし、何の面目ありて秀吉の幕下に屬せんや。其上我は信長の三男、秀吉は我家の奴なり、何ぞ渠に降參せんや。然りといへども今吾武運既に盡たり、鋒先を以て爭ひがたし。しかじ城を開き何方へも身を寄すべく間、城中の兵士不レ殘助けよかし」と申されければ、堀尾委細畏り、城を出で四方の攻口を退け、炮矢を止めて控へける。扨信孝卿は城中上下の軍士に向ひ、數日苦戰の禮謝をなし「我は故有りて退城すべき間、汝等は皆織田家の郎從なれば、命を全くして秀信、信雄に仕ふべし」とて、新八郎信兼を具して船に取乘り、尾張の野間宇津海に到り大御堂寺に入り給ふ。然るに清洲の中將信雄卿、はやく此[redacted]信孝を殺さずんば、再び災を引出さんとて、其臣中川勘右衛門尉に五百餘人の兵士を添て、宇津海をさして押寄せしむ。信孝かくと見るより、今は遁るべき方なしとて、生年廿六歳にて腹切て死し給ふ。郎等幸田彦右衛門孝之

銘駿馬金帛美肴佳酒を獻呈し、皆秀吉の門に來つて降を乞ふ。寛仁の秀吉卿更に是等の諸將を攻ず、却つて其勇功を感稱し、いづれも本領安堵すべき旨令し給へば、皆其大度に服しける。其餘氣比織田の社等の神官、劒、白山、平泉寺、石動山等の衆徒商賈農民、我も〳〵と金銀を捧げ酒肴を呈し、更に北の庄の賑いはん方なし。秀吉卿の威勢實に天下の棟梁とこそ見えにける。

○侍從信孝自害

爰に濃州岐阜の城には信孝卿籠城し給ひ、瑞立寺山に織田新八郎、峯信濃守、平田壹岐守、齋藤玄蕃頭、稲葉刑部、岡本五左衞門を籠め、稲葉山の城を團平九郎、國分佐渡守に守らせ、秀吉に敵大勢の中を切開き、岐阜の城に驅入れり。信孝斜ならず悦び、一所に安否を極めんとぞ勇みける。翌る廿六日寄手六萬餘人、岐阜の城の東西南北より取巻きて洩さじとぞ攻めたりけり。城中も爰を專と戰へども、多勢の寄手防ぎ難く、二の郭迄攻破られ、既に落城と見えし所に、寄手の陣より堀尾茂助隍際に出でて、「信孝殿へ申し入れ度仔細の候。城門を開き對面有つて然るべし」と大音に呼はつたり。城兵是を聞て、先召入れて仔細を聞けとて、堀尾を城中に

亡びぬるありさまを一首つかうまつれ」と仰せければ、幽齋畏りて頓て、

きのふ迄城の修理する勝家もけふは柴たく灰となりける

かく詠じけるに、秀吉卿深く興に入り給ふ。扨城中の雜兵共多く崩れ出でければ、秀吉下知して、落武者を悉く改め、急に城中へ馳入り火を打消して、則ち此所を本陣と定め、爰に十餘日滯留有りて專ら國中の民を懷け、殊に今度の合戰において勳功の諸將士それ〴〵顯賞を行ひ給ふ。先惟住五郎左衞門尉長秀、今度の功戰拔群なりとて、舊領若狹に越前一國、加賀にて二郡、都合百萬石を賜ひ、惟住越前守と號す。前田又左衞門尉、此度の戰始終羽柴家へ志を通じ、殊更秀吉卿と舊交深きにより、加賀、能登半國與へられ、且氏と受領を授り、羽柴筑前守利家と稱す。其子利長を肥前守と號せり。中川瀨兵衞が討死を大感ありて、息秀繁を主馬太夫と成し、感狀并に本領安堵せしめ給へり。扨柳瀨七本鎗の若士等に新地五千石づつ感狀に添て下し賜ひ、虎之助を加藤主計頭と改め、孫市郎を加藤左馬介、祐作を片桐市正、權平を平野遠江守、助右衞門を糟谷內膳正、甚內を脇坂中務太夫、市松を福島左衞門太夫と號す。又石川兵助貞友が老母に金銀若干賜り、懇に追福せしめ給ふ。其外軍功の高低に隨ひ悉く恩賞あり。且北國方不破彥三、原彥次郎、安井左近、德山五兵衞、金森五郎八、佐々陸奥守、上杉景勝等、銘

に在りてうき事を見んよりは早く黄泉に行かばや」と聞えけるに、息女も同じ思ひにて、疎ましの此浮世を何か名残惜からん、母もろともに自害せんと、いさぎよく硯取寄せ、息女、

思ひきや竹田の里の草の露はようへともに消えんものとは

母も涙をおしぬぐひて、

今こゝにむそぢあまりの日の數を只一時にかへしぬるかな

斯くよみて母子劒抜きはなし、心元に突立て、健氣に自害なせし所へ、上村も火の手を見て北の庄の落城と察し、胸ふさがりて馳歸りたるに、末森殿母子早生害しておはしければ、流石は柴田殿の姉君とて、いしくもなし給ふもの哉と、涙ながらに介錯し、草庵に火をかけ死骸を隱し、其身も六十一歳にて、立ちながら腹かき切り、火中に飛入り死たりしを、聞く人袖をぬらしける。

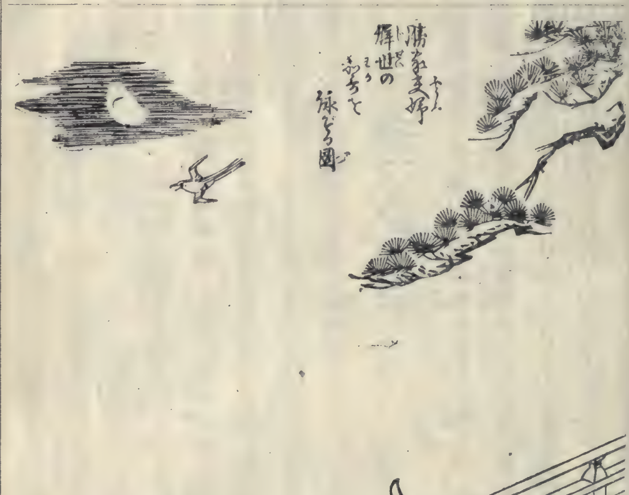
○賤ヶ嶽勳功將士行賞

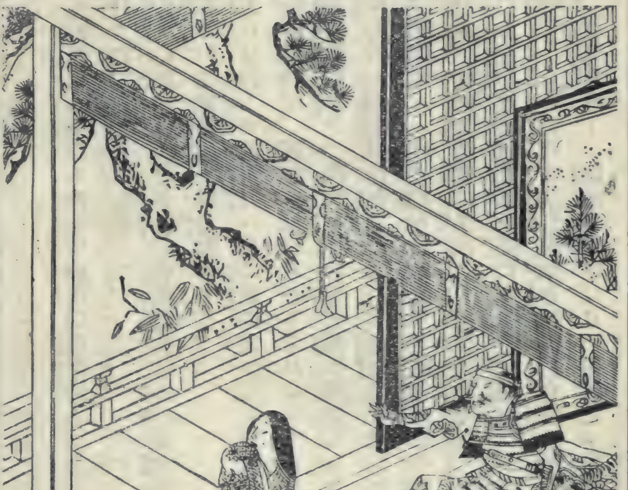
北の庄の城天守に火かゝり、既に落城と見えけるにぞ、秀吉卿額を撫て大きに喜び給ひ、「鬼柴田の勇名ありし勝家も我軍威にあたりがたく、滅亡に及びけるぞや。いかに細川幽齋、柴田が

義弘の刀を拔き腹十文字に搔切れば、文荷齋是を介錯しける間に、一同に火燃上り、黑烟高く空になびけば、文荷齋莞爾と笑ひ、勝家夫婦が尸骸を火の中へ投入れ、腰刀引拔き、是も腹切て死したりける。勝家生年五十八歲、文荷齋四十九歲なり。これを見て籠城せし將士勇卒百餘人悉く腹かき切り、火の裡に飛入て同じ煙と消えたりけり。雜兵原九百餘人門を開きて思ひ思ひに落行きぬ。抑柴田勝家が先祖は淸和源氏の末流にして、斯波武衞家の一族越後國の住人なりしが、中頃小田家繁榮なるに及んで、終に家臣の列に並り。依て小田家第一の臣、殊に勝家智謀勇功肩をならぶる者なかりしに、天命爰にせまり、北の庄の城中にて一片の煙と成り果てぬれども、其名は萬代の後に殘れり。

○上村六左衞門自害

上村六左衞門尉は、勝家の姉末森殿と息女を怪しの輿に舁乘せ、椎が谷の奧竹田といへる里に到り、爰に草庵を需め二人の女姓を入參らせ、北の庄の便を伺はんと往還へ出行きしに、翌る二十四日申の剋計に、北の庄の天守に火かゝり黑煙夥しく立上りければ、末森殿遙に是を見て、「扨は北の庄落城して匠作も自害せられしやらん。とても生果つべき身にしもあらねば、世


勝家夫婦
辞世の
和歌を
詠ずる図



打見やりて、

さらぬだにうちぬる程も夏の夜の別を誘ふほとゝぎすかな

と聞えけるに、勝家も筆を取りて、

夏の夜の夢路はかなき跡の名を雲井に揚げよ山ほとゝぎす

傍に在りける文荷齋も辭世なりとて、

契あれば涼しき道に仕へ行く後の世までも聞くほとゝぎす

となん詠みければ、勝家がたけき心もそれならずなりて、更に袖をぞ絞られけり。折から夜半の鐘の音遠近に響き、勝家小谷の方も閨の裡に入られけるは、是や彼四面楚歌の聲、項王虞氏が深き恨も斯くやと思ひ合されけり。短夜いとはしたなく明渡り、二十四日の朝秀吉の大軍十餘萬人、鬨の聲も上げず攻もかゝらず、態と一方の攻口を開き三方を取圍みて、城中の動靜を見合せけり。中村文荷齋は夕部より匠作の命を承り、本丸の詰々に燒草積みかけ、「大將生害の後に火をかけよ」と士卒等に申含め、殿主に上り、かくの如く用意仕る旨勝家夫婦に告ければ、頓て小谷の御方守刀を拔きはなし自害し給ふ。年三十七。勝家が近習の黨坊太田德菴介錯し、其身も五十一歲にて自殺せり。勝家是を見て今は心に懸る事もなしとて、柴田家重代

ゐらするの間、よきに痛り給ふべし」との事なりけり。富永委細承り、三人の姫達を引具し城中を出でんとするに、姫君達泣悲み、「母上と諸共に同じ道に伴ひ給へ」とて右と左の手にすがり、轉び臥て泣き給ふは、哀なりける次第なり。斯てあるべき事ならねば、富永新六三女子の手をとりて强て輿に乘參らせ、秀吉の陣に到りしか〴〵のよし相宣ぶれば、秀吉早速是を請取り、三女の身の上聊疎意有るべからざる間、心安く生害遂らるべき條返答し、使者を城中に歸し給ふ。此姉姫は、後に秀吉公の妾秀頼の御母堂淀君と申せしは此御方なり。其次は京極若狹宰相高次の室、末の姫君も高貴の簾中に備り給ひ、何もいみじく榮え給ふは、則ち勝家が寸志なりけり。

○勝家自害

去程に勝家は北の方を始め、小島若狹守、中村文荷齋以下の勇士を集め、宵より酒宴を催し舞つ謳ひつ、暫の醉心地に此世のうさを忘れけり。寄手も勝家生害の旨聞えければ、攻口〳〵を守るのみにして弓鐵炮を止め、攻討つ事もせざりければ、城中快く醉を盡し盃も納めなんとするに、二十三夜の月高くさし上り、郭公二聲三聲雲井に音づれければ、小谷の方淚と倶に

倶に生害を窮めけるよな。いで最期の酒宴始むべし」とて、日の暮近き頃より櫓々役所々々に酒肴を送り、勝家は天守に上り、女どもに酌を取せ、更に酒宴を催しける。家勝が功臣上村六左衛門尉は早自害と思ひ定め、經帷子を著し、大將の前に出でて心よく酒を飲む。勝家たのもしと思ひけるにや「いかに上村、勝家が今の期に及んで賴みたき事こそあれ。我姉末森殿親子をいかにもして助けたし。汝引具してこよひの内に城をおち行き、何方にも忍ぶべし。爰にて討死したらんよりは、某が本望なるぞ。疾く〱」と急れければ、上村再三討死せんとあらがへ共、勝家曾て是を免さず。此上は力なしとて末森殿と其息女と二人をいざなひ、其席より直にたち出でて、夜にまぎれて椎が谷の奥へ落行きける。爰に勝家の北の方小谷の御方と聞えしは、故信長公の妹君にて、其名を於市殿の御方とぞ申しける。始淺井備前守長政に嫁して三女一男を產み給ふ。三人の女子は淺井滅亡の後、於市の方と倶に織田家に歸りて信長公のいたはりをうけておひ立ち給ふ。其後三人の女子を附て、於市の方を勝家に賜りけり。勝家富永新六を使者と成し、此三人の女子を秀吉方へ送り遣すべしとて、其口上に、「勝家武運すでに盡き、明朝城中において生害を遂べきに候。夫に附此三人の女子は勝家が子にても候はず、故淺井長政が女にして、然も信長公の因緣にて候。城中において倶に亡ひ候も便なく候故、送り遣しま

かくれば、死傷の者數をしらず。誠に取しづめたる軍令、あはれ名將哉と、兩軍倶に感じける。時に黒田官兵衛好高が從卒玄蕃頭盛政、權六郎勝久の兩人を生捕りたりとて、本陣へ引來りしかば、秀吉悦喜斜ならず、やがて副田甚左衛門、山口甚兵衛に預け置き給ふ。兩人情ある武夫にて、さま〴〵勞はり慰めければ、盛政勝久も深く厚情を感じ、生前の本望かなとぞ悦びける。翌日二十三日秀吉の命を受け、盛政勝久を城外へ引出し、士卒共聲々に、「柴田殿の子息權六郎幷に佐久間玄蕃頭を昨夜生捕て候ぞや。是御覽候へ」とて、一同に嚏と笑うたり。城中はこれを見て力を落し、靜りかへつて音もせず。大將勝家は最早吾生害の時こそ來れと、主君信長公より拜領したる色々の重器どもを、廣間より書院の間に悉く飾り立たりけるに、世の人の常に目なれぬ種々の玉、うるはしき繡、輝めける錦、故代の墨跡、文どれる繪、其外刀劒樂器の類うづ高く盛上たるは、吉野の春、龍田の秋をならべて見たる心地ぞしける。其中に蕪梨子と號し青磁の花入あり。勝家手づから取出して中村文荷齋に向て申しけるは、「此花入は信長公殊に愛し給ふ名器なるを、我に賜ふ時、大國を與ふるより大切におぼしめすよし厚恩をかけさせられ下し賜ひたる花入なり。我なき跡のかたみなり」とて與へければ、文荷齋おしいただき、頓て座を立ちけるが、忽床の柱に打當て微塵に碎き捨てたりける。勝家これを見て、「汝も我と

者也。

と大文字に書附て城内へ入りにけり。此時勝家が腹心の勇士等或は討れ又は落行き、殘り少く成りしかば、惣構を守るべき士卒もなく、外曲輪を打捨て二三の丸の勢配をなし、敵の寄するを待居たり。かゝる所に羽柴筑前守秀吉は、府中より北の庄に押寄給ふ。先陣は堀久太郎秀政、次は賤ケ嶽砦の番手の次第にまかせ、列を亂さず隊を立てゝ押て行く。扨も路上の民家悉く放火して進む程に、此邊の老少男女西に走り東にさまよひ、上を下へと騷動せり。秀吉の軍勢北の庄に著くと等しく、城を十重二十重に取圍み、猶城の邊の人家どもに火を放ち、一度に噇と燒立てぬれば、黒煙天を覆ひ、白日忽ち影を失ひ、暗夜のごとく成りにけり。秀吉卿は愛宕山に打上り敵城を見積り給ふに、煙黒く立ちわたりて物のあやめも見え分ず。頓て士卒に下知し給ひ、「今此煙の中にまぎれ、諸勢一同に隍際へ押詰め、竹策を附けてためらふべし。かまへて物音せぬやうにひそめて際へ押寄れや」と嚴しく仰出さるれば、四方の諸卒我劣らじと、竹策を突き楯を竝べ、或は蔀又は遣戸、つきよせ〳〵難なく堀際へ押寄せける時、西風頻に吹出て餘煙行衞もなく散失たれば、城中是を見て大きに驚き、こはいかにと騷ぎ立つを、勝家馳廻りて急に是を取しづめ、敵をちか〴〵と引きうけて士卒に下知し、弓鐵炮を雨のごとくに放ち

の秀吉、玄蕃頭眼くらみ近寄る事能はずして、牙を嚙で退きけるが、權六勝久に出合ひ倶に敦賀の方へと志し、道もなき山中を落行しが、何さま盛政が武運も爰に盡はてたりや、戰場にて討死すべき身のおめ〳〵落行きけるこそ淺ましけれ。廿一日の申の剋計に、兩人ともに飢に疲れて一足も歩み難く、桑の實を取りてこれを食し、互に手を取かはしたどりけるに、明智の秀吉かく有らんと兼てしろしめしけるにや、美濃、越前、若狹の山途に悉く兵を伏せ、落人を捕へしめ給ふ。玄蕃頭は斯くとも知らず、辛うじて本道へ出でけるを、彼伏兵一同に見咎め、遁すまじと取りかこむ。盛政鬼神も欺く剛勇なれども、昨夜より食絶で心身も勞れ、働く事叶ひがたく、二三人は切捨てたれども、終に黑田が手の者に兩人とも生捕れ、秀吉の本陣へ引かれける。去程に柴田匠作勝家は其日の黃昏に北の庄に著し、秀吉頓て寄來るべしとて、籠城の用意をせられける。志を必死ときはめ取籠る輩には、中村文荷齋、同與左衛門尉、小島若狹守、柴田彌右衛門、松本甚五兵衛、大屋長右衛門、松浦九兵衛、佐久間十藏等なり。其中に小島若狹守が嫡子新五郎は、此頃重き病に侵れ引籠て居たりしが、父と倶に籠城し君恩を報じ奉らんと、輿に助乘せられ城中へ入けるが、大手の門の扉に自ら筆を取つて書附ける。其文に曰く、

小島若狹守男新五郎十八歳。因病氣柳瀬表雖不出張。爲今籠城、而全忠義

より大聲にて、「又左々々、秀吉是まで來りたれ。門を開き對面あれ」と宣へば、利家是を聞て大きに驚き、矢倉へ上り伺ひ見れば、秀吉主從只三人用意の體更になく、主は素袍、家來は上下、打解けたる形勢にて、門外に立居給ふ。又左衞門急ぎ門外へ轉び出で手を取りて上座に請じ、「扨しも合戰の習とは申しながら、味方の軍卒一戰に敗北致し、思ひよらざる只今の對面は面目なき次第に候。此上は御前において潔く生害仕り候はん」と申されければ、秀吉大きに笑ひ、「こは餘所がましき前田氏の申條かな。足下と某は若冠の昔より取譯睦じく、元來貴殿の心腹某よく是を知れり。今一旦の儀によつて敵味方の名を立つれども、武士の常にして珍しからず。秀吉に對し別に恨も候まじ。秀吉も又足下に疎意の儀毛頭これなし。柴田滅亡の以後は、天下の大小事何によらず偏に賴み存ずるなり。相互に志を盡し、早く四海靜謐の大功を立つべきなり」と餘儀もなく見え給へば、利家も大によろこび、頓て酒盃をすゝめつゝ羽柴の幕下に屬せられぬ。

○勝家籠㆓北庄城㆒

爰に佐久間玄蕃頭盛政は、賤ヶ嶽にて秀吉の本陣へ斬入て、既に大將を討つべかりしを、天授

六日利長も病と僞り、府中の城へ歸られける。時に柴田匠作勝家は忠臣毛受兄弟が討死しける其間に、馬を飛して馳たりしが、未の尅越前府中に著て前田父子にかくと案內しければ、利家急ぎ門外へ出でて勝家に對面し、頓てむかへ入れて申されけるは、「某病中にて出陣延引に及ぶの上、愚息利長はからざる急疾、在陣叶はず歸城せし跡にて、賤ヶ嶽の合戰味方の敗北、我我が面目を失ふ所に候。此上は貴客當城に籠られ候はゞ、我等父子力を合せ、上方勢を引きうけ快く合戰すべきに候」と云ふ。勝家莞爾と笑うて、「貴殿の厚情死すとも忘れじ。今度の戰、玄蕃頭盛政我下知を用ひず茲に至れる事、是家運の蹙る所驚くべきにあらず。我は北の庄へ歸り、一戰を究むべし。足下は從來秀吉とよしみ深ければ、何の仔細か是あるべき。秀吉に隨順して家名長久を計らるべし。扨勝家今朝より未食事をなさず、何にても賜らばや」と申されければ、利家頓て湯漬の白飯を進め、猶上下の士卒に酒數盃を呑しめ、懇に饗應しければ、勝家大に悅び、「さらばいとま申さん」とて、士卒を引具し立出づれば、利家も涙ながら門外へ送り出で、互に名殘を惜み北の庄へと急がれける。然る所に羽柴筑前守秀吉は、毛受兄弟を討取て直に大軍を引率し越前へ發向し、其日は今庄といふ所に宿陣せられ、翌廿一日早朝近士加藤虎之助、福島市松兩人計を召しつれ、軍勢は態と本陣に殘置き、府中の城に赴き給ひ、門前

下に屬し、信長討れ給ふの後は明智光秀に從ひ、光秀亡びて秀吉に阿り仕ふ侍畜生、我相手にはあらざれども、死出の途連目に物見せん」といふ儘に、二百餘人圓丸に成つて小川が勢に面もふらず切入れば、小川が軍勢紛々と亂れ立ち、我先にと敗走す。堀久太郎秀政是を見て手勢を繰出し、鐵炮を打ちかけ、討留て高名に備へんと、曳々聲して進むほどに、惟住、筒井、淺野、蜂須賀、細川、桑山、羽田一萬餘人、纔なる毛受が勢を八方より取廻し、喚き叫で戰へば、毛受兄弟は、打殘されたる軍勢二百餘人敵中へ切つて入り、東西に割り南北に馳せ、爰に顯れ彼にかくれ、敵を巴の字に追ひまはし、思ふ計戰うて、亂軍の中に兄弟共いさぎよく討死せしは、健氣なりしありさまなり。されば尸は戰場に暴して草路の露と消ゆるといへども、名は後天に止まつて、譽を子孫に殘しける。

○勝家到府中告別利家

前田又左衞門尉利家は病氣と稱し、越前府中に在城し、子息孫四郎利長柳瀨迄出陣せられけれど、秀吉の體賤ヶ嶽に數多砦を構へ、柴田が計略の裏を搔き、美濃へ迫つて信孝を苦め、其計柴田佐久間の及ぶべき所にあらねば、終には羽柴が爲に滅亡すべしと、早くも見定め、當月十

物してぞ居たりける。秀吉究竟の事こそあれとて、士卒に命じ「汝等が笠をみな〱此方へ渡すべし。其代として後日に褒美を賜はるべし」とて、悉く笠を取寄せ、道々に臥し居たる手負どもに打かぶらせ、日覆にぞせられける。時に茶臼山の麓一むら松の茂りし中に、金幣の馬印押立て勢の程三百計整々として控へたり。京勢是を見て「あれこそ柴田よ勝家なるぞ。我討ちとめて高名に備へん」と閧きけるが、木下半左衛門百五十騎、人には先を取られじと、閧を噇と作つて討てかゝれば、松原の木蔭より彼金幣の馬印を高く指上げ、毛受勝助眞先に馬をかけ出でて大音に呼はりけるは「上方の軍勢共確に聞け。當時日本に其名を得たる鬼柴田勝家、武運究り只今討死を遂るぞ。我と思はん者どもは寄れや、手竝を見すべきぞ」と驀地に斬て入りまくり立てゝ戰ふにぞ、木下が勢ども嵐に木の葉の散行くごとく、撥と一度に逃散つたり。木下半左衛門「きたなし者ども」とて、鎗を上て勝助を目がけ突來るを、何かはしばしも猶豫ふべき、長刀を電光のごとく打振て驅けつ開きつ戰ひしが、木下半左衛門膝の皿より高股かけて薙下られ、馬より下に落ちたりける。勝助が木下が首をも取らず、舊の所へさつと引上げ、隊を立てて控へたり。入替つて小川土佐守五百餘人、閧を作つて斬てかゝるを、毛受勝助陣頭に馬を乘出し「來る者は小川にてはなきか。汝は元佐々木譜代の家人なりしに、主を見放し信長公の幕

ず、道にて敵に追詰られ、後代迄汚名を殘さんより、只爰にて討死せんこそ何程か快からん」と承引の色更になし。毛受重ねて申けるは、「左思しめし候はゞ、恐れながら君の御馬印と御姓名を賜つて某此所に踏止り、敵を防ぎ候べし。早々此所を御引取り候べし」と涙を流し諫めければ、勝家も倶に落涙し、此上は兎も角もとて、金の御幣の馬印を勝助に與へつゝ、士卒を引具し北の庄へぞ落ちられけり。毛受勝助今は心易しとて、緋縅の鎧取つて投げかけ、兄茂左衛門尉照景を始とし、討死と志したる武士二百餘人十町餘り引退き、茶臼山の麓に彼金幣の大馬印を押立て、敵を遲しと待たりける。去程に上方勢は賤ヶ嶽を向下りに迯るを追て進みけるが、大將秀吉諸方の手へ軍使を馳て、「勝家は武功秀でたる兵なるぞ。切所に備へて手いたく防ぐべき間、味方備を立てて進むべし」と、追々下知を傳へ給へば、諸手の將卒實もとや思ひけん、面々手勢を引きまどめ隊を固め、靜々と押て行く。扨も夕よりの合戰に、兩方の死人手負幾千といふ數を知らず、打重つて臥たりけるが、日は早くさしのぼり、四月二十一日巳の剋の事なるに、一點の雲もなく日光輝々しく照り渡り、殊に其日は熱かりしかば、手負ども苦しみ喚き、目もあて難き有様を、秀吉不便に思し給ひ、何どがなと傍をきつと見給ふに、遠村近里の百姓ども、老若男女笠引被き、山の木の間に尺寸の地も餘さずひし〳〵と立竝び、見

繪本太閤記　五篇卷之五

○毛受勝助討死

北國の惣大將柴田匠作勝家は、二十一日の早朝狐塚まで軍勢を押出し、陣を張て味方の安危を伺ふ所に、落武者追々馳來り、賤ヶ嶽の合戰味方惣崩に敗軍し、玄蕃頭の生死も知れずと告ければ、惣軍色を失ひ早ぬけ〳〵に落行て、七千餘騎と聞えし軍勢も今は三千にも足らざりける。勝家怒れる眼に血をそゝぎ、「惜むべし、玄蕃頭が吾下知を用ひずして、斯る敗北に及びたり。併ながら天命のしからしむる所、今は悔みても其甲斐なし。爰に待受け聲花に一戰し自害すべし」と軍の手配せられけるを、勝家が勇臣毛受勝助家照進み出でて、「こは仰とも覺えぬものかな。今此小勢を以て勝誇りたる上方の大敵を引きうけ、いかに戰ふとも勝利有るべしとも覺えず候。斯る途中にて名將の匹夫の鏃にかゝらせ給ひ、命を落し給はんとは口惜しき次第に候。急ぎ御居城北の庄へ引取らせ給ひ、城中にて御自害候へかし」と諫めければ、勝家頭を打振つて、「武士の死すべき所にて死せざれば死に勝る恥有りとや。なま中爰を引かんとて北の庄へも歸り得

繪本太閤記　五篇第五之卷　目錄

毛受勝助討死

勝家到府中告別利長

勝家籠北庄城

勝家自害

上村六左衛門自害

賤ケ嶽勳功之將士行賞

侍從信孝自害

せば、さしもに勇みじ上方勢も、玄蕃頭一人に薙立られ、四方へぱつと迯散たり。玄蕃頭獅子の怒を顯はし、迯るを追て只一騎、きつと向うを見てあれば、小高き山に千生瓢簞の馬印、風にひるがへりてきらめきけるに、玄蕃頭天へも上る心地して、秀吉の本陣ござんなれと、諸鐙を合せ、矢を射るごとく一参に駈上る。此時秀吉卿の本陣には加藤、福島をはじめ、旗本の勇士等盡く敵に向ひ、弱兵纔三百計引具し、馬上遙に軍の體を見給ふ所に、おもひがけなき鬼玄蕃、雷のごとく鳴渡り、件の鐵棒を眞向にかざし、只一打と馬を飛し、秀吉と其間三段計、あはやと見る内秀吉卿鞍かさに立上り、大の眼を闊と見開き、「尾籠なり下郎め」と、叱り給ふ其形勢は、摩利支天の怒りたるが如く、爛々たる眼の光、佐久間が頭に貫きて、勇猛不敵の玄蕃頭、思はず後へ三丈ばかり、たぢ〱とすざりしが、馬は惣身に汗をながし、身ぶるひして進み得ず。時に四方の麓より、思ひ〱に分捕し、加藤、福島、片桐、糟谷、脇坂、平野を先として、ゑい〱聲して上り來る。玄蕃頭は無念ながら、取圍れては叶はじと、長歎して退きける。

事には非ず。玄蕃殿もし敵に圍れ危くば、追散して伴ひ歸れとこそ仰候ひき。今秀吉が軍勢野に充ち山に蔓り、勝に乘じたる其中へ、纔なる軍兵を以て向ひ戰ひ給ふとも、何條事を仕出し候はん。しかじ本陣へ退き候て、父勝家と謀を合せ、今日敗北の恥辱を雪ぎ給へかし」と諫めけるに、玄蕃頭兩眼に涙を浮め「汝が申さるゝ所は理なきに非ざれども、某勝家の下知を用ひず、此敗軍に及びぬれば、その罪吾一人に歸せり。然るを命の惜さに本陣に歸り、何の面目ありて勝家に對面せんや。汝は早く立かへり、我一言を勝家に告申すべし。我は此勢を引具し、上方勢と生死を爭ひ、潔く戰死を遂ん」と云捨て駈行くを、權六郎跡より聲かけ、「御身左ほどに思ひ給はゞ、我も倶に討死すべし。吾一人本陣へ立歸らば、父勝家の、命の惜さに逃たりと思さん事も恥しゝ」と、轡をならべ馳出す所に、筒井順慶、惟住永秀、細川忠興、蜂須賀正勝、木村隼人等が大軍、八方より切て廻り、落殘りたる北國勢を粉のごとく踏崩し、勢に乘て追來るを、佐久間玄蕃頭、柴田權六郎三千餘人を圓丸に備へ、雲のごとき大軍の中へ、眞一文字に突入て、生死しらずに戰へば、兩軍討死數を知らず。されども、上方勢は勝に乘たる破竹の勢、佐久間が兵四途路に成つて、怺へ難くぞ見えけるに、玄蕃頭今は我討死の時なりと、例の鐵棒右手に提げ、群りかゝる敵の中に、噇と喚て討て入り、五人七人馬人ともに打倒

○盛政一騎襲ニ秀吉本陣一

此時賤ヶ嶽の近邊、切所々々に構たる二十餘箇所の砦より一同に鬨を作り、思ひ〳〵に切つて出れば、平場に陣したる惟住、筒井、細川、黒田、赤松、生駒、山内等、家々の旗指物夜嵐に吹なびかせ、同じく鯨波を上げ、我後れじと討出れば、山鳴り谷響き、幾千萬とも勢の程見定め難く、渦卷立て攻討ければ、北國勢の先陣、後陣、魂天外に飛び、足の踏所さへ辨へず、悉く崩れ亂れ、或は柳瀬道へ落つるもあり、又は七里半の山中をよぢ上り、峯傳ひに迯るもあり、親を捨置き、子を跡に殘し、我後れじと敗走するは、見苦しかりし有樣なり。されば義を守り、名を惜む勇士、悉く亂軍の中に討死し、さしも勇猛類なき玄蕃頭盛政も、牙を嚙んで怒りながら、白木の森迄落行けるに、柴田權六郎勝久三千餘騎にて、勝家の命を受け、盛政を救ひの爲此所迄押來りしかば、玄蕃頭大きに悅び、「此新手の勢を以て、勝誇たる上方勢を大がへしに討崩し、本陣へ切入つて、筑前守が首を得るか、叶はずんば討死せん。勝久來れ」と呼はつて、馬引返し駈出すを、權六郎此時年いまだ十六歲、佐久間の轡づらにすがつて申しけるは、「これは物に狂ひ給ふか。父勝家某に軍兵を相添へ、此所迄差越候は、貴殿と俱に討死せよとの

を上げて飛來る。安彦もいかでか是に向はざらん、互に手練の虚々實々、暫く勝負も見えざりしが、片桐元來無雙の剛兵、安彦が鎗法次第に亂れ、叶ふまじとや思ひけん、引返して迯出せば、片桐怒つて遁すまじと追ふ所に、北國の武士豐島以兵衛、長井五郎左衛門等しく馳寄つて片桐と鎗を合す。安彦是に力を得、又取つて返し戰ふにぞ、片桐助作敵三人を相手とし、勇氣益々加はり、喚く聲虎の吼る如く、露ばかりの透間なく、突立々々戰ふにぞ、北國方三人の勇士、當り難く見えけるに、安彦彌五右衛門又一番に逃げ出せば、長井豐島の兩人も、こは叶はじと一時に迯て行く。片桐助作聲を上げ、「きたなしかへせ」と呼つて、半丁計追けるに、左は山、右は谷、一騎打の細き道を、安彦長井豐島の三人押合々々、向う下りに迯たりしが、先に進みし安彦五左衛門、木の根につまづき、眞うつむけにどうど倒るれば、將棊倒に殘りの二人、重りかかつて臥轉ぶを、得たりやおうと、片桐助作穗の長さ六尺餘りの大身鎗にて、只一突に三人を突通し、向の木の根へぬひ附しは、類稀なる高名なり。されば賤ケ嶽先頭加藤虎之助、福島市松、平野權平、糟谷助右衛門、脇坂甚內、加藤孫市、片桐助作等を七本鎗と稱し、石川兵助、伊木半七、櫻井左吉等を三振刀と唱へて、其美談今なほ人口に殘れり。

著し、濃き紫の色よき母衣をかけて、十文字の靑貝柄の鎗を持て、後の方より聲をかけ「止れ止れ」と罵りたり。淺井吉兵衛ふりかへり、月陰にすかし見るに、物の具色よく母衣かけたる武者なれば、生置まじと、五人張の弓に、十三束三ッぶせの大矢を番ひ、引しぼつて切て放つに、孫市早業の手利なれば、飛來る大矢を鎗にてはつたとたゝき伏せ、身ををどらせて飛來るを、射損じたりと淺井吉兵衛、弟矢つがうてひやうと射るに、身を屈めて是を避け、矢よりも早く飛かゝり、吉兵衛が乘たる馬の太腹ぐさと突通せば、主は大地へ落たりける。起しも立てず只一鎗に突殺し、首を取つて進みける。

○片桐助作高名

片桐助作且元は崩行く敵を追廻し〳〵、雜兵士卒を突捨にし、毛色よき物の具したる武者と見れば、首を取て腰に附け、砂烟を蹴立て戰ふは、物々しくこそ見えにけり。爰に越前の勇士に安彦彌五右衛門とて、劒術の達人有り、立蕃頭が旗本を固め居たりしが、崩口の味方を救はんと手鎗を取て馳向ひ、勝に乘たる上方勢に、飯の浦の坂中にて手痛く當り、敵を討つ事七八騎、勇をふるうて戰うたり。片桐助作はるかに此形勢を見てければ、よき相手なり遁すまじと、鎗

知られたる武邊の功者にて、前日、中河が下小屋を燒て、高名したる老練の武士なりしに、武運に盡たりしや、又敗軍に勇氣もたるみけん、鎗を合すと見えけるが、一突に突伏られ、此戰場の土と成りぬ。是を見て北國勢の中より、物の具爽と粧うたる武者、鷲見深治と名乘り、脇坂を目がけ打て懸るを、脇坂怒りて鎗の柄にて、ひし〳〵とたゝき附け、走り寄て右手の谷底へ蹴落したり。脇坂が此勇壯を見て、北國の敗兵肝を飛し、魂を散し、どつとなだれて迯たりける。佐久間三左衞門勝政是を見て、迯る味方に目もかけず、大薙刀をかいふつて、只一騎取てかへし、脇坂に渡りあひ、人まぜもせず、祕術をつくし半時計も戰ひしが、三左衞門さきに飯の浦の坂尻にて、左の肱を鐵炮にて打かすられ、働心に任せざるにや、剛勇の壯士なれども、脇坂が鎗を拂ひ損じ、綿嚙を突つらぬかれ、馬より落て、終に甚内に討れけるは、無慙なりし次第なり。

○加藤孫市郎高名

佐久間三左衞門勝政が幕下の大將、淺井吉兵衞尉則政一手の勢の後殿して、峯傳に足海峠を引行く所に、加藤孫市郎好明、富士形の甲に、佛胴とて、胸板に天人を蒔繪せし白き繊の具足を

にて上方勢に取圍れ、やう〳〵切拔け此所迄來りしが、平野權平にはしなく行合ひ、互に見しれる敵なれば、聲をかけて鎗を合せ、必死に成て戰うたり。北國勢に松村友十郎といふ者あり、平野と小原が戰ひを見て、横合より聲をもかけず、權平が正中を目がけ、只一突と駈來るを、權平早くも是を見て、二人を相手にいどみ戰ひしが、鎗法少しも亂れず、勇氣次第に增し、聲を揚て小原新七が胸板より首の骨へかけて突拔けば、何かは以てたまるべき、尻居にどうど倒れたり。是を見て松村友十郎大きに恐れ、引きかへして迯行を、平野權平飛鳥の如く飛びかゝつて、揚卷附の板よりはすにかけて肩先へ突つらぬき、二人とも首を取り、猶々いさんで馳たりけり。

○脇坂甚内高名

脇坂甚内安春は片鎌鎗の穗長きを追取て、崩れ立たる北國勢を、爰の詰、彼所の谷へ突落し、刎倒し、面白き事に思ひ、追立て〳〵、飯の浦坂を下りに、白木の森迄馳來るに、北國の勇士水野助三兵衞と名乘り、脇坂に向ひ戰ふ。脇坂飛龍の勢をなし、只一突に水野を殺し、いさみに勇で殺突し、又神部兵左衞門が引行くに追附き、聲をかけて突懸るに、神部は北越に名を

北方の一將佐久間源六郎政賴は、手勢一千二百餘騎、賤ヶ嶽の尾崎に備へたりしが、味方の勢七顚八倒崩れ亂れ、惣敗軍と見えければ、いかにもして兄盛政、政次と一所に成り、生死を共にせん物と、雲霞の如く追來る上方勢を切拂ひ〳〵、飯の浦を引取行きしに、手勢皆討死し、或は落行き、纔十五騎馬を早て引く所へ、平野權平長康は白紙子の陣羽織を著し、鎗引さげて、よき敵もがなと馳廻るに、源六郎を見咎め聲をかけ、「そこ引きさふらふな。平野權平見參に入申さん」と呼はつて、鎗をあげて突きかけたり。源六郎政賴心得たりと鎗を合せ、暫くからんで戰ひしが、何とかしけん、源六郎が鎗の中ほどより折て飛ちつたり。今はかなはじとや思ひけん、かいふつて迯行くを、平野權平鎗取延べ、飛上て是を突に、鎧の袖を突通し、臂をかすつて、主は遙に迯延びたり。こは口惜と鎗取直し追行を、源六郎が家人十五六騎、四方より鎗襖を作り、平野一人を取卷しが、大勇無雙の權平事ともせず、左右前後を突伏々々、またゝく内に十騎計頭をならべて突殺さる。是を見て殘りし兵卒大に恐れ、跡をも見ずして迯行くを、のがさじものと追ふ所に、勝家が旗大將に小原新七といふ勇士あり、味方敗軍の故により、諸方の軍勢をまとめ、本陣へ引取すべしと勝家の命を受け、戰場へ來りしかども、味方諸方崩騷ぎ、何と取定めたる事もなく、亂れ立たる折なれば、下知を傳ふべきやうもなし。剩へ方々

○糟谷助右衛門高名

鳥打坂の南の方にて、北國の兵使番の指物さしたる武者と、秀吉卿の小姓櫻井左吉、兩人切先より火烟を出し、さん〴〵に戰ひしが、左吉終に彼武者を切倒し、首を取て進む所に、佐久間が勇臣、宿屋七左衛門と名乘り、踏止つて佐吉と戰ひしに、七左衛門拔群の剛兵なれば、佐吉が刀法次第に亂れ、今は危く見えけれども、退く心露もなく、討死せんと踏込々々、身命を捨て戰ふ所に、糟谷助右衛門と名乘り、眞一文字に突來り、左吉を助けて鎗を合す。七左衛門は旣に左吉を討取べかりしを、糟谷が横鎗に妨げられ、心怒て突合しが、糟谷が手練の尖き鎗先、電光のひらめくごとく、さしもの宿屋七左衛門、あしらひ兼て二足三足跡すざりす。糟谷得たりと飛かゝつて、唯一鎗に突殺す。七左衛門が弟同苗治郎助是を見て、兄の敵遁さじと、長刀打振り一參に馳來るを、「櫻井左吉參り候」と聲かけて、二打三打打合しが、雙方一度に打物投捨て、むずと組でねぢ合ひけるが、左吉力や勝けん、治郎助を取て押へ、終に首を搔たりけり。

○平野權平高名

は更にたゆまずといへども、折節續く味方もなく、多勢の鎗に突伏られ、あはれむべし剛勇の壯士、賤ケ嶽の露と消たりしを、惜まぬ者はなかりけり。

○福島市松高名

拜鄕五左衞門久盈は、猶も追來る敵に當り、玄蕃頭を引せんと、取つてはかへし〳〵、死をかへりみず戰ひしは、是ぞ後口の一番鎗と云つべし。庭戸の濱にて、秀吉卿の小姓福島市松、韋駄天の驅るごとく、拜鄕を目がけのがすまじと、大音に呼はつて、一文字に突來る。拜鄕尻目に急度見て、開き合せて鎗をからみ、雙方聞ゆる剛兵なれば、飛越刎越し、更に雌雄も分ざる所に、後の方に大音聲をはり上げて、「羽柴筑前守が近士伊木半七、北國の勇士大崎園右衞門を討取たり」と聞ゆるにぞ、福島市松心苛ち、おつと喚いて突立れば、拜鄕無雙の勇士なれども、今朝より數ケ度の大戰、心力勞れ福島が勇に敵し難く、左の脇腹突通され、馬よりどうど落けるを、福島市松走寄り、首を取りて差上げたり。

引きしごき、兵助目がけ突かくれば、彼大太刀にてひらり〱とあしらひ、四郎五郎が突出す鎗の穂先をくゞると見えしが、稲妻のごとく附入て、右手の肩先より胸板かけて、八寸ばかり切下げたり。四郎五郎壯年の勇士なれども、深手にたまらず大地へがばと倒るゝを、おさへて首を打落し、立上りたる向うより、紺絲縅の具足して、鴾月毛の馬に跨り、十文字の鎗を叱々とすごき、勝ち誇りたる上方勢を追まくり〱、血の浪を揚て馳來る武者あり。石川兵助是を見て、是ぞよき敵、討取て高名に備へんと、血に染たる大太刀かいふつて、大音に呼はりけるは、「羽柴筑前守が近士石川兵助貞友、太刀の鐵性御覽候へ。勇々敷見え給ふ戰將の姓名はいかに」といふ。かの武者聲に應じて答て曰く、「加賀國大聖寺の城主、拜鄕五左衛門久盈なり。汝小冠者、小賢しき名乘立こそ殊勝なれ。來れ〱」とまねくにぞ、石川大きに怒をなし、馬の諸足薙倒さんと、打ば開き拂へば附入り、左右上下透間なく、土砂を踏立爭ひける。然るに拜鄕が家人二十騎計、此戰を見て一同にどつと討て掛り、石川一人を三方より斬立れば、拜鄕も骨折して詮なしとや思ひけん、戰を家人に讓り、追來る敵に向うて戰うたり。石川兵助大きに叫んで、多勢を相手に祕術を盡し、近寄る武者三騎切倒し、六七騎に手を課せ、跳上つて戰ひしが、最前拜鄕と打合の時、敵は馬上、此方は歩立、右の肩を突抜れ、働心に任せず。勇氣

捨て、いざや組んと、大手をひろげて立向へば、山路も同く鎗を捨て、矢聲をかけて引組だり。何れも劣ぬ勇者なれば、金剛力を出し、曳や〳〵と組合しが、加藤が力や勝りけん、山路を下に引敷き、腰刀拔んとするを、山路元來心きゝたる勇士なれば、虎之助が右の腕首をしつかと摑み、拔せじ拔かんと揉合しが、何とかしけん、虎之助が兜のしころを躑躅の株に引掛け、ふり放さんと頭を振ども、容易離れず。山路下より是を見て、一世の力を出し刎かへさんとす。虎之助は起さじと、互に踏合ふ力足、山の片岸踏崩し、躑躅の株に懸りながら忍びの緒を引切つて、二人の勇士組合ながら、谷合へころり〳〵と轉び落ち、上に成り下に成り、谷底にて戰ひしが、山路は次第に力勞れ、加藤が勇に當り難く、生年四十六歳にて淸正に討れたり。淸正頓て首搔落し、腰に附けたる澁布の首袋へ押込て、彼谷合をかき上り、甲を取て上帶にくゝり附け、又鎗を提げて、敵の方へぞ驅行けり。

○石川兵助戰死

石川兵助貞友は三尺四寸の大太刀打振り、當るを幸斬まくれば、矢庭に鎧武者八騎切倒し、彌勇でなぎたてけるに、越前の勇士安非左近が弟四郎五郎といふ大力の兵、大身の鎗を

自貝を取つて高かに吹立給ふに、最前より拳をにぎり、牙を嚙んで控居る近士、小姓、馬廻りの若侍、思はずどつと鬨を作り、石川兵介、加藤虎之助、福島市松、櫻井左吉、伊木半七、平野權平、加藤孫六、糟屋助右衛門、脇坂甚内、片桐助作を始とし、有合ふ勇士鎗引さげ、一參に敵中へかけ入つたり。賤ヶ嶽の七本鎗、三振太刀とて、世の人口に膾炙せるは、此合戰の事なりけり。

○加藤虎之助高名

「加藤虎之助清正とは我なり。北國の臆病武士、きたなしかへせ」と呼つて、鎗をしぼつて突立れば、北國勢討るゝ者數を知らず、算を亂して倒れ伏す。清正郎等に命じて、悉く首を取らせ、生笹を切て其小枝に首を貫き、眞先に押立て、迯行く敵を八方に追廻れば、北國の兵士大きに驚き、「あな夥しき首の取り樣や、近寄て過すな」と、右往左往へ迯崩る。清水谷口にて、山路將監取つて返し、穗のわたり六尺餘の鎗提げ、聲をかけて清正に突かゝれば、清正何かは猶豫べき、只一突と鎗を合せ、上段に打据ゑ、下段に拂ひ、雙方聞ゆる勇士なれば、繰出す鎗の穗先は、電光のきらめくごとく、互に喚く憤聲は、獅子の吼に異ならず。虎之助苛て鎗投

とするこそ拙けれ。恐らくは孫呉が祕術を得たりとも、いかでか備を固め得んや。今に斬崩し見すべきぞ」と、寛々と四方を見やり、菓子なんど取らせ給ひ、茶をきこし召ておはしける。爰に柴田伊賀守勝豐病氣深重なるによつて、長濱の城に歸り保養して有りけるが、其家臣德永石見守、御陣見舞として、御前近く參著す。秀吉呼出して對面あり、「伊賀守が病氣いかゞぞ」と尋ね給ふに、德永無骨なる鄙人なれば、何の思惟もなく、「今月十六日死去致し候」と申す。秀吉是を聞き、「扨も不運の勝豐哉。追附北國を恩賞せんと思ひし者を」と、やゝ落涙の體に見えさせ給ふ。其座に有合ふ近習、小姓、あな麁忽なる德永が申やう哉と、目引き袖引き笑ける。斯る中にも秀吉公は、始終軍に心を配り、敵の動靜のみ窺ひ居給ひしが、石田佐吉三成を召て、「我馬印を以て敵の後の山へ廻し、押立て臆病神の附たる敵兵をおびやかせよ」と下知し給へば、佐吉畏り、かの金の千生瓢簞の大馬印を士卒に持せ、佐久間が頭の上なる鳥打坂にさし上りたれば、折しも廿日の月、東の方より輝き出で、月光恰も晝の如きに、こがね色なる大馬印、夜嵐に吹かへり、光渡りて見えけるに、北國勢是を見て仰天し、「すは例の瓢簞が目の先に有るるを見ざるか、前後左右は皆敵なるぞ。引けよ迯よ」といふ程に、踏直したる玄蕃が陣、色めき立て見えけるにぞ、秀吉采配取て立上り、「驚破小姓ども時こそ來れ。かゝれ〳〵」と下知し給ひ、

戰し、五町計は引きたりけり。玄蕃頭是を見て大きにいらち、あらゝかに聲を勵し、「きたなき味方の有様かな。原、拜郷の兩人、かへし合せて戰はざるか」と罵れば、拜郷五左衛門嘲笑うて、「あれ御覽候へ、我々が傍半丁計は、敵兵曾て近附ず候へども、多勢の崩れ立て候故、敵群り來り喰附候ぞや。此上は我々が討死するを御覽ぜよ」と云捨て、鎗を揚げ、敵の中へかけ込たり。是を見て北國の勇士長井五郎右衛門、原勘兵衛、鷲見源治、青木勘七、豊島以兵衛、毛屋新内、鷲津九藏等同く敵中に切入つて、火花を散して戰うたり。此隙に佐久間玄蕃は、賤ヶ嶽の北なる飯浦坂の南の岡に隊を立てんと下知する所に、羽柴殿の旗本、小姓の面々、追崩して分捕せんと勇み立を、秀吉制して「汝等はやる事なかれ。暫く我下知を相待べし。今敵兵に取かけなば、味方多く損亡すべし」とて、許し給はず。加藤虎之助賢々しく進み出で、「敵備を固め候ひなば、追崩さん事難儀に候はん」と申けれども、「いや今惣がかりに攻討ては、勝利有りても味方多く過有らん。汝等を始め味方の勇士あればこそ、我を秀吉とて人の恐るれ。又我あればこそ、汝等が勇も人よく知る。されば猥りなる戰して、一人も勇士を失はんは、深く吾かなしむ所なり」と宣ひければ、傍に有り合ふ近士、小姓有難涙にむせびける。秀吉又佐久間が陣を遥に指さし、「あの盛政の不覺人が、敵を頭の上に置きて、崩れ立つたる大勢を備へん

を失ひ、「されば味方の大事に及びたるぞ。先爰を打す」と、清水峠の邊迄引取り、備を立て戰はんと、原彦治郎、拜鄕五左衛門を後殿として、賤ヶ嶽を引取行く。さる程に羽柴侍從秀吉は、美濃部勘左衛門を案內者として、觀音坂を押上り、茶臼山を經て猿馬場と云ふ所にて挾箱に腰をかけ、暫く息をつぎ給ふに、追々馳集る軍兵千騎五百騎三百騎、駈附々々雲霞のごとく見えにけり。是によつて、四方に構へし砦々勇み悅び、鬨の聲はいまだ揚ざれども、人氣天に突のぼり、おう／＼と喚く聲山谷に響渡り、夥き事いはん方なし。北國勢今は峠にも怺へ難く、崩れ立て引行くにぞ、拜鄕、原の兩人、鐵炮の者十人、精兵の討手五六人程づつ、半丁每に伏置て、追來る敵を妨げよとて引行くに、賤ヶ嶽の城より桑山、羽田、惟住が勢、敵の引くを追討んと鬨を作て馳出れば、秀吉の御勢も東南へ押廻し、黑みかゝつてをめきしは、百千の雷の、頭の上に落かゝる思ひをなし、原、拜鄕が伏置たる弓、鐵炮の伏兵も、矢をはげ玉を込むべきいとまもなく、なだれになだれて迯たりける。されども原、拜鄕の兩人は勇氣たゆまず返し合せ／＼、雲霞のごとき上方勢を切拂ひ／＼、身命を惜まず戰うたり。惟住五郎左衛門鐵炮の兵二百人をえらみ、山の高みへよぢ上らせ、引行く佐久間が後備へ、一同にばら／＼と打懸れば、北兵大きに肝を冷し、さん／＼に崩行くを、喰止々々追けるに、原彦治郎、拜鄕五左衛門勇を振うて血

繪本太閤記　五篇卷之四

○七本鎗三振太刀

自重からざる者は辱を取る、自畏ざる者は禍を招く。柴田匠作勝家は、佐久間盛政が勇に誇り下知に應ぜざるを苦み、玄蕃頭を討せては叶ふまじと、本陣の隊を押出し、今市と東野の間なる狐塚に陣を布き、猶子權六郎勝久に三千餘騎を分ち、佐久間が急を救ふべしとて、賤ケ嶽へさし向け、備を固めて控ける。然に賤ケ嶽の佐久間玄蕃が陣中俄に騒立ち、秀吉後詰の爲大垣より馳附け、後より攻來ると犇きければ、拜郷五左衞門盛政の前に來つて、「先刻より諸方の砦々より火を上げ、鬨を作る體、何樣秀吉只今此地へ馳附たりと覺え候。御由斷有るまじく」と申す。玄蕃頭も心ならず、大崎對馬守を召て、「見て參れよ」と下知すれば、大崎畏り、蜂が峯筋を馳下り、黒田の觀音坂の峠へ馳出て、南を吃と見やりたれば、東西の兩道數萬の炬火ひしと立つゞき、恰も白晝のごとく、餘焰天を焦して夥し。又木本のあたりより人馬の足音大地を動し、大軍寄來る形勢なれば、心驚き馳歸つて、盛政に斯と告ければ、さしもの盛政色

繪本太閤記 五篇第四之卷 目錄

七本鎗三振太刀
加藤虎之助高名
石川兵助戰死
福島市松高名
糟谷助右衛門高名
平野權平高名
脇坂甚内高名
加藤孫市郎高名
片桐助作高名
七本鎗明神
盛政一騎襲秀吉卿本陣

山路を照し、幾千萬の軍勢とも見えわかぬは、夥しかりき形勢なり。

づかり餅を取つて食し給ひ、感悦限なかりける。諸軍勢も大きに勇み、早討出ん有樣なり。此褒美として、天下一統の時、長濱の地子を許し給ふ。今において、諸役免許の土地とはなれり。斯る所に大垣より、木本迄の百姓原、是も大將の下知を承り、數萬の松明燈しつれ、「御迎の者どもなり」と、聲々に呼はるにぞ、秀吉猶も勇み給ひ、「大勢の百姓ども一々其名は知るべからず。村の名を覺え置よ。賞祿を與ふべし」とて、歩卒に命じて問せ給ふ。是に依て、百姓ども己々が村名を呼はり、御帳面に記し認め、悦ぶ事大方ならず。爰に木本の西千田村に、美濃部勘左衞門といふ者あり。其先祖は佐々木の家臣なりしが、父三郎右衞門浪人して、此千田村に住しけるが、先年勘左衞門秀吉卿に就て、信長公に仕へ奉りしが、志剛なりといへども、身多病にして勤仕しがたく、再び千田村へ蟄居せしに、今日秀吉卿大垣より一騎がけに、木本まで著給ひしと聞き、餘所に見んも本意なしとて、頓て來て見參に入參らするに、秀吉卿感悦かぎりなく、頓て勘左衞門に命じ、近鄉近在の農民を招き集め、大垣街道長濱の鄉民と是を合せ、勘左衞門を大將と成し、田神山の嶺にのぼせ、天地も崩るゝ計り鬨の聲を上させ、味方の城へ力を添へ、直に賤ケ嶽へと息をはかりに馳給へば、次第に重なる味方の大軍、此時にはや三萬餘人、ゑい〱聲を出し押すほどに、左右の山々峯々は、數萬の松明星の光を奪ひ、空に輝き

玉を込み、ばら〳〵と打出せば、思ひがけなき北國勢、矢庭に三十人計打倒され、扨は謀りたるにこそ、其儀ならば一息に攻崩せよとて、揉にもんで攻立れば、城中より雨のごとく打出す鐵炮に、面もむくべきやうもなく、暗夜なれば、道の高低知れざれば、手負死人おびたゞしく、攻惡んで見えけるに、後よりは大將盛政大に怒り、追立々々攻寄する。元來此城、道嶮岨に要害よき構なれば、隍際迄も攻寄せがたく、前にすゝめば飛來る矢炮に疵を蒙り、後へ引ば味方の勢に押立られ、嶮しき坂路、暗さは闇し、上を下へと騒ぐのみにて、攻拔べしとは見えざりける。然る所へ、惟住五郎左衛門長秀手勢を引具し、加勢として入城しければ、城中の將卒悦ぶ事限りなく、更に一倍の英氣をまし、鐵炮を放ち矢を飛し、鬨を作つて防ぎける。長秀は軍使を以て、諸方の砦、要害の陣々、其外の近邊の村里へ「惟住五郎左衛門加勢として、只今賤ケ嶽の城に籠りたり。心を保んじ計議を定めて合戰すべし」と觸廻しけるにぞ、諸方一同に力を得て、勇まぬ者もなかりける。誠に惟住が動靜、軍に馴たる老練の大將かなと、後に人皆感じたり。去程に羽柴殿は、其日の夕陽、木本の宿に著給ひ、地藏堂前にて、暫く人馬の息を續せ給ふに、軍勢追々馳來り、見る内にはや一萬餘騎と成りにける。然る所へ長濱近邊の地下人ども下知に隨ひ、てんでに兵粮秣を用意して、夥しく持連ねて參りければ、大將秀吉卿も手

未の剋、纔に一千餘人、兵船七八艘に取乘り、葛藟尾迄漕附ける。此時賤ヶ嶽の方に、炮聲頻に響き、火の光高く揚りければ、士卒に向ひ、「早賤ヶ嶽は攻落されぬと覺ゆるぞ。急ぎ船を汀に著よ」と、下知せられけるに、家臣坂井與左衞門、江口三郎右衞門等詞をそろへて申けるは、「賤ヶ嶽の味方敗北と見え候上は、此小勢にて向ひたりとも、勝利有るべしとも覺ず候。早く坂本の城に取籠り、防禦の用意候べし」と、聞も敢ず、長秀眼を怒らし、「愚なり汝等、すべき軍をなさずして、圖を外すを良將の恥る所なり。我に深き謀計あり、早く陸へ船を著よ」とて、又郎等望月次郎を呼んで、「汝是より早船にて、海津口に至り、殘し置たる軍勢を以て、當表へ加勢すべし」と下知せらる。望月次郎申けるは、「畏ては候へども、海津迄五里の海上漕歸り、軍勢を催し、又五里を參らんに、何ぞ危急の用に立候はんや」五郎左衞門叱て曰ふ、「惟住長秀が、當城の援兵として籠たりと敵方に聞なば、定めて多勢なるべしと恐れ、少しは猶豫に攻口ゆるみ、合戰の期は延なん程に、急ぎ歸つて後詰せよ」と、いひ捨て、渚に上れば、望月は船を飛し、海津をさして漕行たり。此時佐久間玄蕃頭は、賤ヶ嶽の城を取圍み、大野路山に旗本を居ゑ、日の暮るをぞ待けるが、早く太陽西山に傾き、黃昏時に成りければ、賤ヶ嶽の桑山、羽田へ軍使を立て、「早々城を開き渡すべし」と云送けるに、城兵今はせんかたなく、用意の鐵炮に

其二




北
西
木本
井口
千田
東物部
石動山
横山
西物部
唐川
東高田


美濃大垣
近江長濱
より木之本へ
の街道乃
地理
小谷山
上山田
下山田
馬上
保
柏原
徳山寺
山脇
高日
八日市
速水
小倉
宇根



伊吹山
相撲
野村
八幡
小田
井口
勝山
今村
宮部
三河
國友
大井
中沢
五村
大寺
万郷
中野
小沢
河毛
三ツ矢
長濱
唐國
曽根
出口
細江
相撲
西郊
落合
南
大

吉公はさながら風の發するごとく、強く驅させ給ふ程に、玉村を過ぎ藤川村にかゝりて、馬を乘倒し給ひけるが、先日大垣へ出陣の時より、斯る危急の備にとて、村々里々に駿馬多くかくし置給ひければ、頓てかの乘替に打乘て、息をもつがせず急ぎ給ふ。扨、かねて馬と倶に伏置たる小走の者を召れ、「一手は街道筋の村へ走り廻り、日の黄昏にならん時、家々より松明を多く出し、跡より來る軍勢を送るべし」と觸させ、「又一手は長濱の道筋へ走り、百姓も町人も米一升、大豆一升を出し、米は粥に煮き豆は秣にして、木本の宿へ持來れ。今宵中に柴田勝家を討滅すべき計策あり。本意を達して後、十倍の褒美を取すべき」と觸させ、又諸鐙を合せて馳給ふ。馬上村にて又馬を倒し、乘替を召て急ぎ給ふ。爰に尊照寺村といへる所に、稱名寺とて一向宗の寺あり。此住僧日頃秀吉卿の恩惠を蒙りぬれば、急ぎ菓子なんど持出で、秀吉卿に捧げ奉れば、殊外悅び給ひ、扨、「あの村は何と申や」と尋ね給ふに、稱名寺答へて、「馬上村にて候」と申す。秀吉卿、まけ村の名を不吉に思召ければ、「南まけか、北まけか」と重て尋給ふ。稱名寺其心を推し、「必定北まけにて候」と言上すれば、秀吉卿「さも有らん」と笑ひ給ひ、又鞭をあげて走り給ふ。後天下一統の時、此恩賞とて、稱名寺へ七屋敷、六十石を下し賜ふ。今も猶舊の如し。然る所に、海津口に固め居たる惟住五郎左衛門尉長秀は、賤ヶ嶽表の樣子心元なく、其日

行けり。

○秀吉江北進發

此時、賤ヶ嶽の諸壘より、美濃の大垣秀吉卿の本陣へ、思ひ〳〵に急を告る事引もきらず、飛馬雪の飜るよりも繁し。其日の午の時過、中川淸秀討死の注進有りければ、秀吉其早打の使を呼びて、「玄蕃頭は引取りけるか」と尋給ふ。彼使の申す、「未だ引取らずして大野路山に陣を取り、外の砦をも攻べき體に見えて候」秀吉聞も敢ず、腰刀を拔て額にあて、「八幡、此合戰には勝たるぞ」と、五六度計躍りあがり、大垣の陣所に、氏家内膳正堀尾茂助を留て押へとし、馬引寄せてひたと打乘り、「諸軍跡より追附べし」とて、一騎驅に馳出し給へば、馬廻の者侍、我後れじと狼狽騷ぎ、鞭を合せて追立けれど、やう〳〵七騎ぞ續きける。秀吉馬上より大音にて、左右の人家へ向ひのたまふは、「我は羽柴秀吉なるぞ。今必勝の謀ありて、賤ヶ嶽へ馳附け、北國勢を鏖に成す間、追々馳來る味方の軍兵共に食物を與へよ。十倍の恩賞せん」と、呼はり呼はり打過給ふに、跡より三騎或は五騎、引連れ〳〵追附く武者、終夜引もきらず。其邊の百姓ども、てん手に粥糝なんどを持出でて喰たれば、軍勢餓る事なく、皆々追立々々急ける。秀

君の常に教へ給ひし物を」と、乘たる馬を蹴立て、轡を引かへして元の道へ馳たりければ、栗山感涙を流し、「誠に父君の御子にて有りけるよ」とて、從て黒田が陣へぞ歸りける。此吉兵衞成人て後、黒田甲州長昌とて、類なき勇將なりし。又筒井伊賀入道順慶は、堂木山と東野山の間、柵の外に陣を取りて居たりしが、此陣中も上を下へと騷動し、士卒皆落支度のみしたりけり。是を見て軍將順慶大に怒り、「中川、高山が砦、敵に取れたれば迚、味方敗軍にも定るまじ。敵も寄せざる以前に、落支度する臆病者は、吾陣中に在ても益なし、一足も早く迯行くべし。今に秀吉の後詰來り、佐久間柴田を打崩すべし。此陣に殘らんものは、力を落さず備を固めよ。令に背き下知に隨はざる輩は、首を刎ねて軍法を正すべし」と、嚴に下知しければ、やう／＼に陣中鎭り、初めて人心地の附けるもをかしかりき。順慶かくは下知せられけれども、味方の勝敗心元なく、島左近友之を召て、敵陣を斥候せしむ。左近畏り、馬を飛して馳行しが、暫時の內に立歸り、「大將は勝に誇り、幕下の諸將は疑ひを心にいだき、士卒は皆油斷して見え候へば、此軍味方敗北する事は有るまじく候。秀吉元來心きゝたる名將に候へば、一騎駈にて後詰有るべし。某御迎として途中まで罷り出で、敵の形勢言上せば、軍令の一助と成り候べし」と云ふ。順慶大に悅び、「直さま打立候へ」と下知しければ、左近は馬を飛し、美濃路をさして馳

此急を救ひ給ふぞや。諸軍少も騒ぐ事なく、堅く備を守るべし」と、呼はり〳〵陣營を馳巡れば、落支度したる者共も、此一言に勵され、惣軍鳴をしづめて怺へける。是神子田が當意の卽計なりけれども、果して其言葉に違はず、秀吉馳來り給ひけるも、羽柴の高運の然らしむる所なるべし。爰に黑田勘兵衛好高は、遊軍として野陣を固めて控けるに、今朝より俄に合戰はじまり、味方の諸壘浮足に成り、既に敗北と見えければ、敵よせ來らば強く支へて、鬪死せんと思ひ極め居たりしが、家臣栗山四郎兵衛を呼て、「汝は我子吉兵衛を具して此所を遁れ、我後嗣の絕ざる事を計るべし。吉兵衛年僅に十歲、虎口を避たりとて、家の瑕ともなるべからず、却て吾深慮有る事を稱すべし。はや〳〵召連立退くべし」と聞えけるに、栗山大きに迷惑し、「是は餘人に命ぜられ下されたし。某に於ては、此所に有りて御馬先にすゝみ出で、合戰致し候べし」と辭すれども、官兵衛さらに聞入れず、「今吉兵衛を無事に退かしめたらんは、爰に止つて討死せしより、百倍の忠節と思ふ間、時刻の移らぬ先に」と急がるゝにぞ、栗山今は已むことなく、畏つてこれを許諾し、吉兵衛を呼で馬に打乘せ、先に立て一里計も馳けるに、吉兵衛栗山に向ひ、「我をば何方へ具して行くぞ」と問ふ。栗山しか〳〵の由委しく物語れば、吉兵衛幼けれども甚だ不興し、「父に離れて何方へか遁れ行んや。武士は北るといふ事のなき者ぞと、父

に劣り。勝家もはや老耄に成られたり」とて、その後は返答にも及ばざりければ、軍使空しく馳歸つて、斯と勝家に申しぬ。勝家長歎して「嗚呼拙きかな玄蕃頭、一戰の勝利に誇り、おくれを取らん事今にあり。然れども後陣は備を全くし、敵の來るを待べし」とて、專ら用意をせられける。誠に勝家が下知のごとく、玄蕃頭軍をかへし、越後の上杉景勝に心を合せ、佐々、前田等と勢を合せ戰ふものならば、上方勢百萬人にて押來るとも、危き事有る可らず。故人も、强勇は必ず破るといへるは、盛政等が類なるべし。併ながら秀吉をして勝家に代しめば、自身玄蕃頭が陣に行て引立てて歸るべきに、無用の使者數度に及ぶ內、はや日暮れ道暗く、其儘に打過ける。秀吉、勝家兩將の勝劣は、是を以ても知るべきなり。

○賤ケ嶽之諸壘騷動

去程に、堂木山、賤ケ嶽の要害、數ケ所の砦々には、中川討死し、高山寨を捨て落行き、今賤ケ嶽の砦を攻打と聞えければ、諸軍氣を喪ひ力たるみ、今ははや、此要害の城々、粉のごとく成らんと、動顚周章大方ならず、ぬけ〳〵に落行く者夥し。是を見て神子田半左衞門大に驚き、斯くては味方惣敗軍に及ぶべしと、馬に跨り大音にて、「明曉大將秀吉卿大軍を帥る來り、

又密に人を走らせ、北近江の地侍、郷民等に言はせけるは、「銘々御味方に參るべきにて候間、御旗指物等を賜り候べし」と、僞りけるに、盛政はいよ〱勇み、勝誇る事甚し。勝家が軍使は本陣に馳歸り、盛政の口上を委細に申達しければ、勝家色を失ひて大きに驚き、「玄蕃頭左樣の心得にては、秀吉が謀中に落入べし」とて、又引かへして使者を遣る。其口上に、「羽柴は元より、惟住、筒井等皆戰場のかけ引に熟練し、軍の圖をはづさぬ者どもなれば、透間を見て切懸るべし。あなどつて油斷をなさば、辛き目を見るべし。早々本陣に引取るべし」となり。時に不破、原、安井、德山の將士傍に有りけるが、倶に盛政に申けるは、「勝家の御下知尤に覺候なり。味方の勇將前田孫四郎利長、去る十七日病惱頻なりとて、越前へかへれり。是味方の勇みを失ふ一つなり。然るに秀吉馳かへつて大軍を下知なさば、多分味方の敗軍なるべし。勝家の令に隨ひ、速に本陣へ引取り給ふべし」といへども、玄蕃頭敢て肯はず、「各左程此合戰の恐しくば、本陣へなりとも越前へなりとも、心次第に引るべし。我に於ては、爰に有りて敗を致さば、快く討死せんに、何條事の有るべし」と云ふ。諸將是に恥しめられ、再び詞を出す者なく、共に宿陣したりける。其使いまだ歸らざる内に、又本陣より使者來著し、片時も早く歸陣せらるべしと、以上三度の早打なり。玄蕃頭心怒り、左右を顧みて申けるは、「老騏は駑馬

に勞れたり。勝利に誇らず、今日中に早々引取り、本陣へ歸るべし。しからば上方勢を切崩さん事、只一戰の中にあり。努々敵を狎るべからず」と、くれ〴〵申含めて遣しけるに、玄番頭此時中川、高山を追落し、上方勢を見る事、童を見るがごとく、彼軍使に對面して申すやうは、「勝家、我中川を討ち、高山を破たる形勢を見給はざるゆゑに、左樣なる下知をせられ候なり。夫軍は一陣破れて、殘黨全き事能はず。今勢に乘じ、秀吉が此要害を踏碎き、信孝殿を助け上洛して、旗を京都になびかさんとす。秀吉今美濃國へ向ひ、岐阜を攻る、飛鳥にあらずして何ぞ今日明日の内に馳來るべき。其上、上方勢の中より內通せる者もこれあれば、吾今宵は爰に一宿し、明日快く一戰を遂げ、上方勢を追散し、其後に見參に入るべし」とて、其使をかへしける時に、盛政賤ヶ嶽の砦、桑山、羽田が方へ軍使を立て、「急ぎ城を開き渡さるべし、命計は別儀候はず。否と候はば忽ち中川、高山がごとく成すべし」と申送れば、桑山は今朝敵軍大岩山へ寄懸けし初めより、早馬を以て秀吉へ急を告る事、白浪の打寄するがごとくなれば、時刻をうつさず當表へ出馬有るべきと思ひ居ければ、佐久間を欺きて答けるは、「我々微勢を以て、いかでか防戰の叶ふべき。命を助け給はる上は、開城いたし退くべきに候。去ながら日の間は空鐵炮にて、合戰の體にもてなし、夜に入りなば早々開城いたすべき」とて、使者をかへし、

出し、大岩山を救はんとする所へ、柴田勝家軍勢を引て、佐久間が後を詰なば、實に羽柴方の敗北惣崩にくづるべし、軍功場數の將士なれば、此事を思惟して、己々が砦を固く守りし故、後の勝利は有りけるとぞおぼえ侍る、いづれ中川が時運なりけると、惜まぬものはなかりける。

○盛政誇勝家戻下知

高山右近長房は、岩崎山の要害に防戰の用意を成し、敵の寄するを待居けるに、德山五兵衞、佐久間久左衞門三千餘人、盛政が下知によつて岩崎山に押寄せ、討つ討れつ火花をちらして戰ひしが、中川瀨兵衞討死し、大岩山落城して火の手高くさし登れば、高山勢大に狼狽へ、裏崩してさんぐ〵に迯たりければ、右近踏止まつて下知すれども、其身も三ケ所深手を負ひ、力盡て落行けり。高山が勢討るゝ者三百餘人、是によつて北國勢海山二ケ所の砦を攻落し、喜ぶ事限りなく、中川瀨兵衞が首、竝に物頭等の首ども十一を、使番の者に持せ、惣大將勝家が方へ遣し、軍の次第をいひ送りしかば、勝家も大に悅び、「佐久間が働今日にかぎらざる事なり」とて、先其使に引出物を數々與へ、又勝家より別使を立て、佐久間が方へ申遣しけるは、「味方大利有りと雖も、氣ばやき秀吉多勢を以て、追附寄來るべし。味方は長途を經るといひ、且戰

同彦作、田熊村杢左衞門、入江土佐、寺井彌右衞門、村上太郎助、高山惣吉、大藪新八、玄正坊等を始めとし、恩顧の者ども五十餘人、枕を並べて討死せり。淸秀時年四十二歳。今尚大岩山の麓に墳墓あり、其銘の詩に曰く、

昔日屯軍地　慨然憶指揮　壘虛山鳥遇　碑濕岬雲歸

登陟攀空翠　躊躇對落暉　功名著竹帛　千載欽英威

去程に寄手の勢勇み進み、我先にと乘入ば、大將玄蕃頭盛政氣色ばうて、釆配打振り、「來れ來れ」と、一番に城中に駈入り、陣小屋の棟に打上り、ゑい〱おうと勝鬨を揚けるが、いかゞしたりけん、棟木おのれと打折て、彼小屋ひし〱と潰れにけり。さしも鬼神の如くなる佐久間玄蕃も心にやかゝりけん、「是は怪き事かな。氣味わろきことかな」と、繰かへしていひけるが、果して不吉の兆にて有りけると、後には思ひ合されたり。此時中川方の討死四百五十餘人、佐久間方にも六百餘人討れけり。元來秀吉卿、堂木山、海山所々の要害に數多砦を築せ、前後左右相たすけて、かゝるあやまちなからん爲の陣取なるに、此時佐久間が猛威鬼神のごとく、當りがたくや思ひけん、諸方の砦、遊軍の輩も、敢て中川を救ひ來らず。をしむべし勇將中川を討死せしむる事、他の救ひなき故なり。然れども退いてよく惟れば、諸方の砦より軍勢を

○中川瀨兵衛討死

玄蕃頭、項王の勇を顯して是を打てば、瀨兵衛、樊噲が威をふるひて迎へ戰ふ。上段下段透間なく、喚く聲山谷に響き、見る者魂を飛し、肝を冷し、忙然たるありさまなり。盛政が近士に近藤無一郎春祐といふ者あり、主人の身の上心元なく、鎗を上げて走り來り、横合より淸秀目がけ突懸れば、中川ふりかへつて切はらはんとする所を、玄蕃頭大喝一聲、微塵にせんと打込む鐵棒受け損じて、中川が左の肩先へ打込れ、馬よりどうと落たりしを、無一郎走り寄て、押へて首を揚たりけり。哀むべし中川淸秀、和田伊賀守を津の國にて討しより、雄名天下の耳を轟かし、所々の合戰に一度もおくれたる色を見せず、山崎において强敵惟任光秀を一番に突崩し、其勇を唱へては、萬卒皆舌を振はし、むかふ所敢て敵なく、未曾有の强將なりけるに、玄蕃頭が一棒に命を落し、賤ヶ嶽に勇名をのみ殘しけるは、天命なりといひつべし。九郎次郎も淸秀が討死を見て力たるみ、佐久間源六郎に突伏られ、其外中川が家臣古田喜助、榧野五助、熊田孫七、同兵部、同三太夫、森本道德、山岸監物、杉村久助、森權之丞、鳥飼四郎太夫、太田平八、今中孫之丞、熊瀨藤助、久保甚吾、野尻出助、松田孫三郎、田代太左衛門、員彦太夫、

る士卒を從へ、本城さして引取りけるを、北國勢是を見て、「中川殿と見しは僻目か。きたなくも引給ふは何事ぞや。返し合せて勝負あれ」と、聲々に罵れば、中川清秀大に怒り、かへすに難き事の有るべきやと、馬の頭を引返し、はゞき下まで血に染たる大太刀をひらめかし、群り來る越前勢の正中へおつと喚いて斬て入り、八方にあたり四面に向ひ、當るを幸ひ眞甲より切下げ、胸板を割附け、蜘蛛手に薙立て角繩に打倒し、叱聲憤聲猛虎の如く、千變萬化に勇を震ひ、雲の如く寄來る大軍を追退くる事九囘、砂烟をあげて戰ひしは、誠に希代の勇士哉と、兩軍互に感ずる聲、暫しはどよみわたりけり。時に中川九郎次郎、清秀が馬の轡にすがつて「こは何事にて候ぞや。爰にて雜人の手にかゝり命を殞し給はん事、口惜き次第なり。はや〳〵城中へ引入りて御自害候へかし。其間は某防ぎ戰ふべし。疾く〳〵」と勸むる所へ、敵の大將佐久間玄蕃頭盛政件の鐵棒りう〳〵と打振り、「中川瀨兵衛そこ引き候な。玄蕃頭盛政見參」と呼はつて、眞一文字に討て懸れば、瀨兵衛何かは猶豫ふべき、よき敵なり勝負せんと、太刀をかざして馳向へば、佐久間が後より源六郎政頼鎗をそばめて驅寄すれば、清秀が後よりも中川九郎次郎同じく鎗を上段に構へ、聲をかけて突來る。是によつて盛政は清秀と戰ひ、九郎次郎は源六郎と鎗を合せ、命限りと戰うたり。

鎬を削り切先より火焔を出し、一足も引じと爭ひける。拜鄕又左衞門は此戰ひをしり目に見、つかとぬけて中川が砦へ取懸け、兼て用意の長柄の鎗にて、塀越に突立れば、城に殘りし中川が家臣、辻喜太夫、古田庄右衞門、市浦六藏士卒を下知し、きぎしく鐵炮を打出し、防ぎ戰ふといへども、塀越の鎗に玉を込むいとまなく、矢をはさむに便を失ひ、面々鎗を取つて突開き、必死に成りて戰ふといへども、兼ての覺悟相違しければ、防ぎかねてぞ見えたりけり。中川淸秀砦危しと見てければ、手早く勢をまとめ、引かへさんとする所を、前面より佐久間玄蕃頭鎗先を揃へ、すきまなく突かゝれば、中川小左衞門、同淵之助命を捨て大敵にあたり、ちかづく者を切落し突落し、勇を震うて血戰し、終に亂鎗の中に討死す。此隙に中川淸秀拜鄕が後より、龍の雲中を走り、虎の怪風を生ずるごとく、咄と喚て打てかゝれば、拜鄕が軍兵左右へ颯と引きわかれ、鎗ぶすまを作つて突て懸れば、跡よりは佐久間玄蕃頭鬨を作つて押來り、纔なる中川が勢を三方より押包み、喚き叫んで戰ふ所に、最前盛政が下知により、神部兵右衞門一千餘人麓より後へ廻り、下小屋に火をかけ、一同に鯨波をあげたりければ、案にたがはず、中川が勢忽ち八方に散亂し、討るゝ者數を知らず。中川も大きに驚き、今は叶ふまじとて、討殘されたる

中川が陣へ使者を馳て「曲て此方へ御入候へ」と云遣しけれど、使者のいまだ行著ざる先に、寄手の大軍、大岩山の砦をおつ取巻き、鯨波を作り矢叫を成し、大山も崩れ湖水も涌騰るばかりに、喚きにをめいて攻登る。中川瀬兵衛清秀心きゝたる勇士なれば、軍勢を従へ討て出で、三尺ばかり築上たる芝土手を前にあて、玄蕃頭が先手佐久間三左衛門、同源六郎、不破彦三が勢に鐵炮を打懸け、鎗先を揃へ、込入れば追出し、追出せば又込入り、互に雌雄を爭ひしが、中川が勇威天神のごとく、佐久間が勢戰ひ勞れ、備も立てかね浮足に成りて半町ばかりも引たりける。玄蕃頭盛政心荒き强將なれば、大に怒り「きたなき味方の形勢かな。敵は小勢ぞ、打破つて城を乘取れ」と、八角に打のべたる鐵の棒をふり廻し、士卒を下知して息をも續せず攻立れば、北國勢又いさみを成し、もりかへして戰ふにぞ、鐵炮の響、矢叫の聲、人馬の足音、山岳を震動し、すさまじかりし合戰なり。盛政の家臣拜鄕又左衛門は、老功場數の勇者なれば、大將盛政に申すやうは「敵將中川大勇無雙の者なれば、此體の戰にては、味方の損亡も多く、兎角に時刻を移す間に、外に構へたる城々より後詰をなさば、却て味方危ふかるべし。一手の軍兵を以て此要害の麓へ廻し、下小屋に火をかけ燒立なば、中川の軍兵心散亂し、一擧に勝利を得べし」といふ。盛政尤なりと是に同じ、神部兵右衛門に一千餘騎を分ち與へ、計略を申含め、

○佐久間盛政拔二大岩山砦一

去程に討殘されたる雜兵ども、さんぐ\に成りて桑山が陣所へ逃歸り、しかぐ\のよし物語るに、桑山驚き、斥候を出し見せしむるに、馳かへつて申けるは、「北國勢一萬餘、中川殿の要害へ、取懸る體に見えて候」と申す。桑山驚き、急に中川が砦へ使を馳て申けるは、「其許の要害淺墓にて、多勢を引受け防戰成難く候はん。急此方の砦へ御つぼみ候へ」と云送りけるに、此時中川が軍勢、いづれも兵具に身を堅め、防戰の用意最中なりしが、桑山が使を得て、清秀大に悅び、對面して申すやうは、「御厚情淺からず悅入て候。併ながら此尾崎の要害二ケ所を、高山右近と某兩人うけ給りて堅め候へば、清秀一人退き申さん事、武門の恥辱にも候へば、高山も一所につぼみ候はゞ、兎も角も仕らん」と答て、其使をかへしける。桑山是を聞て尤なりとて、高山が砦へ又使を走らせ、右の次第をいひ送りければ、右近聞て、「砦は面々大將より預りたる固に候へば、今更立退べきやうなく候」と返事しけるに、桑山頭を撫て身をもみ、又

繪本太閤記 五篇第三之卷 目錄

佐久間盛政拔大岩山砦
中川瀨兵衛討死
盛政誇戻勝家下知
賤ヶ嶽之諸壘騷動
秀吉卿江北進發

時に玄蕃頭盛政軍士等に下知しけるは、「中河が砦昨今に築たれば、塀の土いまだ乾ざるよし、是を攻るには塀越の鎗利あるべし。されば十文字鎗鎗などは此時に利少し。長柄の數鎗を諸手に配るべし」と申ければ、諸軍十文字鎗鎗を捨て、皆長柄をぞ持たりける。早剋限にも成りしかば、行市山を打立ち、忍で峯を傳ひ、人馬に枚を銜せ、足海峠を下り、余吾の入海をつたひ、公方山の麓へ打廻れば、既に東雲の頃に成りにけり。斯る所に桑山修理が郎等池西傳右衛門、可古川平吉が下人ども馬の足を冷さんと、入海の磯邊に居たりけるを、盛政見附け、「軍神の血祭にあの下郎ども打取れや。若者共」といふや否、士卒どもばら〳〵と取巻て、矢庭に四人斬倒せば、殘る者どもわつと叫び、跡をも見ずして迯たりけり。

闕たる所の候は、賤ヶ嶽の尾末、海山二ヶ所の要害、大岩山、岩崎山の砦は、多くの城々に隔たり、敵あひ遠きを頼み、構も淺間に壁などもいまだ乾かず候。是を攻めて御覽候へ」と申ければ、盛政大きに喜び、「是敵の不意を撃ものなり」とて、山路を伴ひ勝家が本陣に來り、右の次第を物語り、「某一手の勢を引率し、大岩山中川瀨兵衛が砦を攻拔き、上方勢の英氣をくじき申すべし」と、勢込で望みけるに、勝家良暫く思案せしが、「汝大岩山を攻るとも、戰の勝敗に拘はらず、一攻攻めなば速に歸陣すべし。愼んで滯る事なかれ」と云ふ。盛政委細を領承し、「今宵は味方油斷の體に見せかけ、明夜押寄せ、敵の不意を打べし」とて、其用意を成したりける。先諸方の砦どもに、押の勢を置くべしとて、手勢を定むるに、前田孫四郎利永は、一昨日より俄に邪氣に侵され、大熱にて在陣なしがたしとて、柴田、佐久間に暇を乞ひ、越前へ引たりければ、此合戰には洩たりける。是兼て父利家と定め置きたる計なり。されば木村、蜂須賀、大鐘等の押として、柴田三左衞門勝政、小原新八郎、安井彌右衞門等三千五百人、堂木山の尾本に向ひ陣を取らしむ。桑山、羽田が押には、原彥治郎、安井左近三千餘人、賤ヶ嶽の西の方に備へしめ、大將佐久間盛政は舍弟佐久間三左衞門、同源六郎、不破彥三、德山五兵衞、拜鄉五左衞門等其勢一萬餘騎、天正十一年三月十九日、夜半の頃より押出さんと、其手配り旣に全し。

山路將監が妻子共なるぞ。番船の兵士等追懸て生捕れ」と、聲々に呼るにぞ、番船數十艘四方より取廻し、山路が船を動かせず。文太夫今は是迄ぞと太刀ひらめかし、船端に顯れ出で近寄り、番兵を湖水の中へ斬て落し、死狂ぞと大手を廣げて立つたる所へ、木村が討手山本左内弓に矢番ひ射たりけるに、文太夫が胸板にぐさと立つて、眞逆に水中に落入つたり。番船ども是を見て、終に山路が老母妻子悉く生捕り、早川、山本に渡しければ、生捕共を請取て、賤ヶ嶽の陣へ引返し、木村に斯くと告ければ、木村大きに悦び、「斯る叛逆の者の母や妻子なれば、諸人の見ごろしにせよや」とて、同月十六日、山路が老母妻子七人を敵陣近く引出し、逆磔になし、「返忠をなせし天罰、山路是見よ」と、一同に咄と笑ひける。皆是山路が不義より起る事とは云ひながら、無慙なりし事どもなり。

○佐久間玄蕃頭攻＝大岩山砦＝

北國先手の大將佐久間玄蕃頭盛政は、山路將監を近く招き、敵陣の要害軍中の虛實を問ふに、將監謹で申けるは、「當表の要害は、秀吉心を籠て構へ候へば、長蛇の如くに砦を築き置き、前後左右相助けて防ぐべく備へて候へば、猥りに攻懸け給ひなば、味方多く敗北すべし。爰に

一人は宵より詰所に有りしが、今は何地へか行し見えず候」と申す。山路「偖は渠に出抜れたるこそ口惜けれ。此儘にては敵の擒と成りぬべし。長濱に殘し置たる老母妻子を、急ぎ船に乘せて落せよ」と、甥の山路文太夫をさし遣し、山路は直に郎從を引具し、夜に紛れて柴田が陣へ迯行たり。斯る所へ、野村庄治郎又あわたゞしく、木村の前に來りて申けるは、「山路謀計の顯れたるを知りたるならん、陣所殊の外騷動致候」と申すにぞ、將監を討もらしては甲斐なしとて、士卒を引具し、山路が山鼻の要害を取圍みけるに、早落失て人陰もなし。木村足摩して大に怒り、「手延して山路めを討もらしたるこそ安からね。急ぎ長濱に在る妻子共を生捕や」とて、早川彦次郎、山本左内已下騎馬の武者六七騎、長濱へ走らせける。去程に山路が老母妻子共は、取物も取敢ず小船に取乘り、東の方へと志し落行けるに、湖の上にも數十艘の番船、堅固の守有りければ、こはいかにせんと惘惑ひ、をさなき者は早泣入て騷しければ、山路文太夫嚴く是を制し、ひそ〳〵と漕出すに、彼番船の兵ども熟く寢入て、鼾の聲高く聞ゆ。天の助と大に喜び、忍びやかに通りけるに、いかゞしたりけん、番船の碇綱へ、山路が船の櫓を強く打當けるに、數十艘の番船一同に、ゆら〳〵と動くにぞ、番兵ども目をひらき、「怪しき船ぞとゞまれ」とひしめく所へ、木村が追手の船、飛ぶが如くに漕來り、「其船に乘りし者は、敵方へ返忠の

村謀計とは夢にも知らず、參るべきよし領承しけるに、山路仕すましたりと悦び、又々今井野村を招きよせ、組討にせよと、さま〴〵謀を構へけるぞ、あやふかりける次第なり。其夜子剋過る頃、木村が陣門を叩く者あり。木村が郎等大崎宇右衛門といふ者、夜廻して有りけるが、立出て誰そと問ふに、「野村庄次郎にて候。木村殿に大事の儀申入度夜中推參致候。急ぎ門を開かれ候へ」と云ふに、「暫く御待候へ」とて急ぎ木村に斯と告ければ、「野村ならば苦かるまじ。門を開けよ」とて、頓て内に入れて對面す。此野村庄次郎は柴田伊賀守が近士なりしが、誤有りて既に斬らるべきに定りしを、木村隼人折節秀吉公の御使として、長濱に來り合せ、此事を氣の毒に思ひ、さま〴〵と伊賀守を宥め、終に其怒を解きて舊のごとく勤仕せり。此故に、野村常常木村が厚意を感心し、此恩を報ぜばやとぞ思ひ居けるに、不計も山路將監敵方へ返忠をなし、木村を討ん謀を野村に談じぬるにぞ、爰ぞ木村が恩を報ずべき時なりと、夜陰私に來りしなり。扨野村聲を密め、山路が密計を委敷語り、「明朝の茶會必ず出席有る可らず」と告けるにぞ、木村大に驚き、「よくこそ大事を知らしつれ。其儀ならば今朝未明軍兵を以て取圍み、山路を討て捨つべし」とて、其用意をぞなしたりける。山路將監は、尙も木村を討洩すまじき方便を工夫しけるに、又々今井野村と申合すべき密談有りて、急に兩人を呼ければ、「今井は直に來れ共、野村

ふ。忠三郎申すやうは、「柴田殿は北國の藩鎭、信を以て人を制す、豈僞り給ふ事これあらんや。某が僞を申すやらんと疑ひ給ふ者ならん。今二刀を貴殿に預け申すべし、吾を伴ひ柴田殿の陣に至り、若某僞を申して候ものならば、勝家の御前にて我首を刎候へ。起證文、誓言より猶堅き誓に候はずや」と。爰に於て山路將監大に笑ひ、「萬事は貴殿よろしく取なし希候なり。兩三日の内、未明に此陣をのがれ出で、柴田殿へ見參に入候べし」忠三郎大に慶び、約束を堅くなし、別れて陣所を忍び出でけり。

○山路將監返忠

山路將監は、思ひ設けざる鵜野が辯舌に說伏せられ、柴田方へ返忠をぞ約しけるが、柴田殿我武勇ををしみ、歸參を勸め給ふに、おめ〳〵と見參に入らんも傍輩の見る所いと恥かしき次第なり、誰にてもあれ、大將分の首一つ取て、柴田殿へ土產にせば、天晴勇々しかるべしとて、誰渠と思ひ廻らすに、近く砦を預りし木村隼人を欺き討べしとて、おのが與力今井平七、野村庄治郎兩人に申含め、斬手と定め置き、十二日の夜、木村が營へ申遣しけるは、「只今長濱より、肴一種到來いたし候故、明朝御茶進上申度候。來駕給はり候はゞ大悅たるべし」と申しければ、木

故に、止む事なく柴田殿の御敵と相成候。是某が私に敵對申すにてはこれなく候。然る所今羽柴殿某を二心なき者と思召れ、一方の固をも命ぜられて候へば、今更返忠仕らんも、羽柴殿へ對し名義立ちがたく候。然りと雖も、故君柴田殿の御事に候へば、毛頭疎略には存不レ申候」といふ。忠三郎重て申すやうは、「足下の所存尤にも聞え候へども、御申の如く、柴田殿は年久しき足下の主人故に、貴殿の勇剛を惜み、一城の主に取立てんと思ひ給ふは、よく足下の智謀を知らせ給ふが故なり。羽柴殿は昨今の主人、何ぞ足下の勇略を知り給はん。其故は、さしも武事に委しき足下に、かばかり用なき砦を守らせ候は何事ぞや。某が見る所、此所には兒女を以て守とすとも、敵のいらふべき所にあらず。爰を以て、柴田殿の足下を用ひ給ふ事の重きを知り給へかし。諺にも、女子は己を愛する者の爲に粧し、士は己を知る者の爲に死すといはずや。足下柴田へ歸參有るに於ては、伊賀守の領地、丸岡十二萬石をたまはるべきよし、秀吉いかんぞ貴殿にさばかりの高祿を與へられんや。云はずとも察し見給へ」といふ。爰に至つて、山路忽ち慾心に引れ、笑を含んで申けるは、「實に丸岡十二萬石を下し賜ふ物ならば、謹で命に隨ひ、返忠いたすべきに候。凡武士の軍門に勇を逞しうし、死て以て名をおもふは、只子孫の後榮を思ふのみなり。足下今の詞に相違なくば、柴田殿の墨附を申受て賜はるべし」とい

ふ。佐久間暫く頭を傾け思惟しけるが、忽ち横手を打て申けるは、「究竟の者こそ候へ。鵜野忠三郎こそ山路と同國の產にして、爾も日頃交り深し。是に命じて說せ給へ」と云ふ。柴田實もとて、頓て鵜野を召寄せ、右の事を細々と物語るに、鵜野いと易く領承し、其夜雜兵の水汲體に立出で、密に山路が砦に至り、門を守る者に私語て申けるは、「某は將監殿同國の者なるが、急に告げ申度大事の候故、忍びて夜中に參り候。鵜野忠三郎が見參に入度旨、將監殿へ通じ給へ」と云ふ。番兵是を聞て、斯と將監に達ければ、將監暫思慮しけるが、「何事にもせよ對面せでは叶ふまじ」と、令して門を開かせ營中に請じ、互に別後の素意をのべ、暫く說話に時を移しぬ。山路左右の者を退け問て申ける、「足下夜中敵方の營中に來り給ふは、果して事の仔細有るべし。詳に語り給へ」といふ。忠三郎此時近く居寄り、「某只今夜をおかして當營へ參る事、私の事に非ず。則ち主人勝家公の御使に參りたるなり。勝家足下の勇壯を惜み、あたら武士を恨みなくして、敵の將たらしめんこそ殘念なり。若舊情を忘ずして味方に歸參候者ならば、一城の主となし、厚く恩惠有るべしとの御事にて、某を以て此事を申させ給ふ。是我と貴殿と常に交りふかきを知らせ給ふ故なり。足下の心底いかゞに候や」と云ふ。山路つくゞ是を聞て、「古主勝家公の厚意有難きに似たり。某元來柴田殿の家臣なれども、當時伊賀守に附參らする

も近江へも走るべしと、仰ふくめられ、三月二十三日、長濱へ歸城し給ひ、直に濃州へぞ發向し給ひける。

○鵜野忠三郎說二山路一

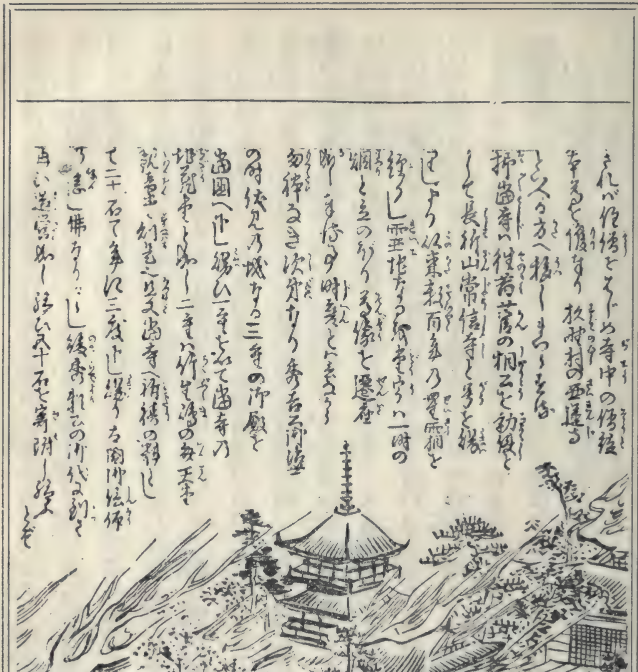
然るに四月八日、柴田勝家が陣所へ、岐阜の信孝より飛脚來つて申けるは、「羽柴秀吉其表を捨置き、我が國中を侵し掠め、岐阜城を數重に取卷攻動す事、更に晝夜の分ちもなし。此體にては落城せん事近きにあり。急ぎ勢を出し後詰せらるべし」とぞ告たりける。勝家是を聞て大きに驚き、「信孝殿危難に遇給ふこそ安からね。吾今軍兵を引て後詰すべけれども、敵の要害數ヶ所の砦前につらなり、爰を越べき道もなし。口惜きかな、猿面冠者が軍略に苦しめられ、信孝殿を救はざるこそ恨なれ」と、牙を嚙でぞ怒りける。勝家もと老錬の大將なれば、つく〴〵思慮をめぐらすに、いかにもして當表の要害一たび打破る物ならば、岐阜の圍はおのづから解べしと、種々工夫を凝しけるが、佐久間玄蕃頭を召して申けるは、「今敵方堂木山の砦を固め居る山路將監は、元來當家の郎等なれども、去年以來伊賀守に附置し故、今敵とは成りたるなり。渠生得勇にして慾深し。高祿を以て招なば必ず味方へ歸るべし。誰か山路に此事を說んや」と問

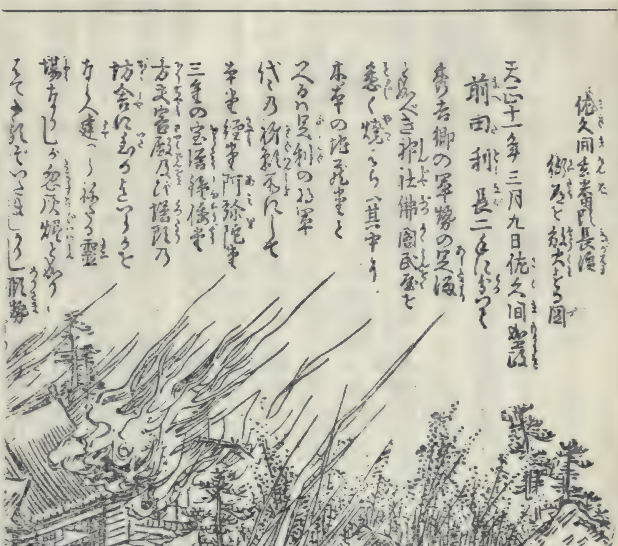
給ひ、當座の引出物數々下し賜りぬ。扨又敵と味方の分際を見ばやとて、氷室の上なる篠尾峠に上り給ひて、佐久間が陣所より柴田が屯、及び尙も味方の要害をとくと伺ひ給ひ、今は手配り十分に調ひたりとて、手分を改め砦々を守らせ給ふ。賤ヶ嶽の城を桑山修理亮、羽田長門守をして是を固させ、田神山の要害には、羽柴美濃守秀長惣大將として是を本陣と定め、菖蒲谷の城に堀久太郎秀政、大岩山に新に築きたる砦には中川瀬兵衛清秀、岩崎山に是も新城を築き、高山右近長房に守らせ給ふ。堂木山の尾崎の要害は山路將監、同右手の方は大鐘藤八、是等兩人は柴田伊賀守が幕下の勇士なるが、此時伊賀守勝豐病氣次第に深重にして、在陣難レ成により、其身は長濱の城に歸り保養を加へ、此所には是等の武士を殘置たり。其一段上の砦は蜂須賀小六郎政勝、其左手の尾崎には木村隼人を籠置き、山路將監が要害堂木山より東野山迄柵を振せ、其間に小川土佐守を入置れ、其外筒井順慶、黑田官兵衛、山內猪右衞門、生駒甚介、赤松彌三郎、細川與八郎等悉く地理に隨ひ陣所を構へ、前後左右へ相通じ、弱き味方を助んと、遊軍と成つて控たり。惟住五郎左衞門長秀は、海津口のおさへに備へ、手分既に定りしかば、柴田が謀計の裏をかき、自ら濃州へ押向ひ、信孝を急に攻拔べしとて、江州木本より美濃の大垣迄の間なる村々宿々に、駿馬小走の者を夥しく隱し置き、深き計略あれば、下知に隨つて美濃へ

こそよるべけれ、勝家などが分際として、此秀吉を謀討んとは、螢火を以て月の光を推んとするがごとし。看々吾計略を以て、勝家並審を討取べし」とて、其日より卒に令を下し、數千人の人夫を以て賤ヶ嶽木本を始とし、所々詰々に要害の砦を作らせ、尤も其法は割普請にて、晝夜を分ず下知し給へば、日あらずして諸方の砦成就せり。佐久間盛政是を見て、日々越前に早使を馳せ、勝家に申けるは、「秀吉賤ヶ嶽、木本山二ヶ所に附城を構へ、其外堂木山、菖蒲谷以下の詰々に要害を拵へ、普請出來しなば、秀吉は引取るべき體に相見え候。早々出陣有り、秀吉を討取給へかし。附城悉く出來揃候上は、秀吉を討洩すのみならず、味方の軍兵上方へ押通る事叶ひがたし。片時も早く御出馬候べし」と告たりける。勝家是を聞て、實もとや思ひけん、三月十八日、三萬餘騎の軍士を引率し越前を立ちて、翌日江州間瀬の中尾山にぞ著れける。此日拂曉、筑前守秀吉賤ヶ嶽の尾崎より攀上り、味方要害の砦々を見給ふに、闕たる所二ヶ所有りとて、又數千の人夫を召て命じ給ふは、「大岩山と岩崎山の兩所に、要害の砦なくては叶ふ可らず、汝等身力を盡し今日中に築くべし。全く出來成したらんには、厚く恩賞すべし」と命じ給ふ。人夫ども畏り、死力を出しゑい〳〵聲を合し營む程に、石垣低く塀の壁薄けれども、翌の日巳の剋には、兩所の砦全く成就し、秀吉卿にかくと申上げければ、秀吉大に喜び

ぬれば、筒井方より足輕の射手二百人計えらび出し、さん〴〵に射たりけるに、盛政兼て巧みし術あれば、敵を數日引附け置んと、常の血氣に事かはり、敢て戰を好まず、輕卒百餘人を出し會釋せ、矢軍に時を送りける。是を見て、天神山の麓に控へたる東方の先手堀久太郎秀政、筒井に替つて鬨を作り、鐵炮を打懸け戰を挑むに、佐久間方よりも又鐵炮備を出して、是を迎へて打合す。秀政下知して大に鯨波を作り、電光のごとく突いてかゝるに、佐久間勢颯と引上げ、楯の板を雌羽に突ならべ、鎭りかへつて弓鐵炮を雨の如くに打出す。斯くのごとくして其日も申刻に及びければ、兩軍勢を引上げ、備々を固めけり。羽柴筑前守秀吉は慮ふかき大將なれば、今日の佐久間が行勢こそ心得ね、必定敵方に深き謀計を構たる者ならんと、明る未明に竹中半兵衛が子の半之丞と福島市松只二人を召具し、足輕の體に出立ち給ひ、雜兵に紛れ、敵の陣所に近き山の峯に攀上り、佐久間が陣所及びすべて北國の屯々をよく〳〵巡見有て、急ぎ本陣に歸り給ひ、舍弟美濃守秀長其外左右に伺する近士に向ひ宣ふは、「昨日盛政が軍の擧動、心得難く思ひし故、敵陣をよく〳〵伺ひ見しに、勝家も老功の者なれば、味方を爰にて永々と釣附置き、我うか〳〵と此所に在陣して有らん間に、信孝、瀧川に內意を通じ、渠等をして美濃伊勢を攻隨へ、直に當表へ押向ひ三方より指挾み、包み討んと計る成るべし。夫は相手に

千七百餘人、三番は木村隼人重綱、前野勝右衛門友忠、堀尾茂介吉晴三千餘人、四番は淺野彌兵衛長政、生駒甚介遠守、黒田官兵衛好高、明石與四郎則遠三千餘人、五番は木下勘解由左衛門尉、山内猪右衛門一豐、黒田甚吉、中村孫平次等一萬千六百餘人、六番高山右近長房千五百餘人、七番堀久太郎秀政、千石權平秀久二千六百餘人、八番赤松彌三郎則友、伊藤掃部介義之、神子田半左衛門等千九百餘人、九番細川與八郎忠興、桑山修理進廣長三千餘人、十番中川瀬兵衛清秀千五百人、十一番羽柴孫七郎秀次、小川土佐守重光二千四百人、十二番羽柴美濃守秀長、同次丸一萬二千餘人、十三番は惣大將秀吉卿、小姓、馬廻には、加藤虎之助清正、石川兵助友興、平野權平長康、片桐助作且元、加藤孫一吉明、福島市松正則、脇坂甚内安治、糟谷助右衛門武則、田屋右馬介繼陰、石田佐吉三成、大谷慶松吉隆等を首とし、面々晴と綺羅を莊り、旗本の勢一萬五千餘人、後陣は杉原七郎左衛門、荒木兵太夫三千餘人、兵粮小荷駄を司る。其外諸國の集り勢、都合七萬八千餘人、三月十日柳が瀬さして進發有る。其勢を二行に立て、一番より六番迄は西の山筋に添て押出し、七番より十二番迄は東の山に添て押寄る。西の方の先手筒井順慶は三丁計先達て、東野村に屯すれば、後の五段は天神山に陣を取る。此時筒井勢は、佐久間が陣所行市山の麓へ押寄せ、一同に鬨を噇とぞ上たりける。佐久間が陣にも同く鬨を合せ




佐久間玄蕃允長浜御坊を放火する図
天正十一年三月九日佐久間玄蕃ハ
前田利長と共に

一千餘人、先手の惣大將として加州尾山の城主佐久間玄蕃頭盛政、其勇臣同國大聖寺の城主拜郷五左衛門尉久盛一萬五千餘人、先手の惣勢三萬六千人、後陣は越中富山の城主佐々陸奥守成政一萬三千餘人、越前大野城主金森五郎八長近四千餘人、柴田權六郎勝久三千餘人、後陣の惣大將柴田勝家は、毛受勝助家照、同久左衛門照景、松原甚兵衛教高、中村與左衛門重次等の勇士、近習、馬廻七千餘人、其勢合せて惣軍凡六萬七千餘人なり。北の庄の城には勝家が從弟柴田彌右衛門勝次、兒島若狹守祐全を城代として、其勢二千餘人是を守らせ、手分既に定りければ、先手の大將前田利永、勇み進んで押出せば、前後の軍將、旗頭、備亂さず打立ちける。明る八日、先陣江州木本の宿に著陣すれば、後陣の勢は柳が瀬に陣を取る。翌九日、先陣木本にて兵を二手になし、一手は前田利永を大將とし、美濃街道を春照の宿迄放火し、一手は佐久間玄蕃頭を將たらしめ、長濱の道路北早水村迄燒拂ひ、軍勢を余吾の行市山へ引上げ、陣を取て居たりける。去程に羽柴筑前守秀吉は、北國勢柳が瀬へ出張のよし聞給ひ、出陣の手分をなし給ふ。先岐阜を遠巻なさしめたる羽柴美濃守秀長、同孫七郎秀次兩將を呼かへし、蜂谷出羽守賴隆を以てかはらしめ、扨備を十三段に立て給ふ。先一番は筒井順慶九千餘人、柴田伊賀守病中ながら三千餘人、督令して順慶に隨ふ。二番は赤松次郎則宗、蜂須賀小六郎政勝父子二

聰明なる事父に勝り、事に附て決斷早き生質なれば、進み出て申けるは、「今度柴田、羽柴の合戰、其勝敗は時運によると雖も、豫め是を算るに、柴田は勇あれ共謀略に拙し。秀吉は計策を好んで人和を得たり。故に勝瑞は羽柴に有りて、敗體は柴田にあり。されば此度の合戰こそ、損利存亡當家にかゝれり。私に思ふに、父は病と稱し出陣に後れ、勝家が後陣に續き給ひ、兩家の取合に預り給ふべからず。不肖に候へども、某一番に柴田が催促に應じ、抽でて先陣を乞受け、勝家が疑を免れ、且は南北兩家の利害を察し見、機に臨み變に應じ、羽柴に恨を結ばず、柴田に惡を受けず、運を兩端に見て、謀のよろしきに隨ひ候はん」といふ。利家是を聞て大によろこび、利永を大將として軍卒四千餘人相副へ、北の庄へぞ赴せける。

○羽柴柴田張二陣賤ケ嶽一

天正十一年三月七日、北國の藩鎭柴田修理進勝家岐阜の城を見續ぎ、羽柴筑前守秀吉と雌雄を一時に決せんと、大軍既に押出ぬ。先陣は前田孫四郎利永四千餘人、次は佐久間久右衛門政次、同源六郎政賴四千餘人、越前勝山の城主佐久間三左衛門勝政六千餘人、東郷の城主安井左近家淸二千餘人、不破彦三氏次二千餘人、原彦次郎元治二千餘人、加賀御幸塚の城主德山五兵衛尉


信孝卿
早馬を以
勝家へ
報ひを給ふ図



らず。先早馬を以て柴田勝家に急を告げ、後詰の勢を得て、計を定めて合戰すべきより、外に議すべき術もこれなき」由申すにより、信孝直に早使を以て、此旨越前北庄柴田勝家に告らる。勝家是を聞て甚驚き、「猿冠者めが吾謀を推察し、先じて信孝を攻討ち、我と戰ん時、後の患をなからしめんと計るこそ安からね。さらば美濃、近江の邊に討て出で、秀吉を討亡すべし」とて、其用意いそがしけれど、時正月の下旬なれば、越路の雪人馬の途を塞ぎ、攻上るべきやうも有らざれば、胸臆鬱悶しく、降積し雪を白眼み、怒を壓へて日を過しぬ。二月の初には、遉春陽の氣雪中に顯れ、海邊、川邊の雪寛みて見えければ、勝家心いらち、三百餘人の人夫に命じ、街道の雪を切開かせ、專ら出陣の用意他事なかりき。是に依て、「近國の武士を催し、二月の末、三月のはじめに出陣すべし」と、いらち立てぞ下知しける。爰に越前府中の城主前田又左衛門利家は、信長公在世の時より勝家の幕下にありて、朝倉及び上杉征伐の一將なりしが、此度も勝家より岐阜後詰の催促を蒙り、領承の旨謹で返答せしが、去年勝家秀吉が和睦の砌より、兩家の心謀を計知り、將に天下の大亂いづれにか勝利有らんと、事を兩端に計り、時の變動を伺ひけるに、今度勝家が催に應じ、出勢せずんば叶ふべからざる勢なれば、息藤四郎利永腹心の郎從を集め、謀を議せられけるに、藤四郎利永此時いまだ若年なりといへども、

繪本太閤記　五篇卷之二

○前田父子算二勝敗一

故人の曰く、兩雄相立ずと、信長公の功臣柴田、羽柴の兩人互に權威を爭ひ、勝家常に以爲く、渠は新參の猿面冠者、我は織田家累代の功臣、何ぞ能吾にあたらんやと、秀吉も又おもへらく、勝家は匹夫の勇、我是を見る事小兒のごとし、豈よく吾を服し得んやと、因レ玆忽朋輩の親みを捨て、矛盾の中と成りけるこそ、實に織田家滅亡の端なりと、悲しむ者も多かりけり。神戸侍從信孝は、去年岐阜の城に旗を飜し、三法師君と羽柴秀吉に敵對の色を顯しけるに、柴田、瀧川が加勢なさず、力足ず僞て和睦を乞ひ、北國雪消え、勝家が上洛を待ちて、瀧川等と三方より攻討ち、秀吉を滅んと、密に其計議をせられけるに、正月下旬なり、羽柴秀長、同秀次及び池田、稻葉、森が輩、秀吉公の下知に隨ひ、岐阜の城を遠卷し、本府の兵は勢州に發向し、瀧川一益を攻るよし聞えければ、信孝大に苦しみ、家老稻葉刑部少輔、鹿伏兎右京亮、織田新八郎信兼（故七兵衛尉信澄が弟なり。）等を集めて評議有りしに、「所詮當城一手にては、秀吉が大軍を防ぐ事叶ふ可

繪本太閤記 五篇第二之卷 目錄

前田父子算勝敗
羽柴柴田張陣賤ケ嶽
鵜野忠三郎說山路
山路將監返忠
佐久間玄蕃頭攻大岩山砦

長濱へ歸陣し給ひ、北國へ斥候を遣し、柴田が音信を伺はせ給ふ。

したり」と罵るにぞ、秀吉手を打て大きに笑ひ給ひ、使番を召れ、「今瀧川が討て出しは、此程の籠城に退屈し、夜討して味方を騒し、其紛に落行かんとする謀なり。味方の先勢少しも動かず、備を堅め、敵引取らば追ふ可らず。瀧川今勢を失ふと雖も、老功の武者強く窮ば、死狂に士卒を多く損亡すべし。弓鐵炮にて打すくめよ」と、頻て下知を傳へ給へば、使番の侍畏り、此旨大音にて觸廻れば、中川が軍兵鐵炮の筒先を竝べ、雨のごとく打出すに、瀧川勢強て戰ふ氣色もなく、又城中へ引入りたり。中川も大將の下知を守り、追ずして陣を守れり。其夜一益一族郎等、諸大將諸共に、悉く船に飛乘り、水門より拔出て、蟹江の城へ落行ける。抑瀧川一益、去る永祿の始より信長公の幕下に屬し、桑名の城を取りしより、向ふ所敢て敵なく、終に關東の管領に補せられ、智勇備へし强將なりしが、此時に至て愚なるが如く痴なるに似り。施べき計もなかりしや、又討死も心苦しとや思ひけん、おめ〳〵と夜に紛れ落行しは、見苦しかりし有樣なり。夜明ぬれば、城に殘りし雜兵二百騎計、門を開き降參し、一益が逐電を告ければ、「扨こそ我推量に違ざりけり。今は瀧川が諸翼をもぎたれば、此儘に捨置とも何程の事有らん。されば北國の勝家を討べし」とて、桑名の城に關安藝守、一柳市助、山岡美作守を止めて一益の押とし、龜山、峯の兩城を中將信雄卿に參らせ、二月八日、惣軍勢を引率し、江州

叫んで攻けるは、すさまじかりける軍威なり。

○桑名落城

瀧川左近將監一益は士卒を勵し、矢倉炮穴より弓鐵炮隙なく打出し、きびしく防ぎ戰ふにぞ、寄手大軍なりといへども、左右なく攻破る事能はず、矢軍のみにて日を過しけるに、城中に外に助けの勢なく、晝夜の防戰に勞苦しみ、寄手は龜山、峯の兩城へ向ひし軍勢、皆城を乘取て、悉く桑名に集り力を合せ、新手を入替へ攻けるにぞ、城中今は退屈し防ぎ兼てぞ見えにける。然るに二月七日の夜、濃州岐阜、神戸侍從信孝の押として向ひたる羽柴美濃守秀長、池田勝入齋信輝より早打の使、秀吉卿の本陣へ到著す。是によつて秀吉其使を近く召て、事の樣子を尋給ふに、此使謹で申けるは「岐阜侍從信孝、瑞龍寺山の砦に軍勢を籠置き、堅固に籠城致し候によつて、味方勢を分て二城を遠卷し、御下知なき故、いまだ攻掛り不申候所、此頃北國の柴田勝家大軍を驅催し、岐阜の城後詰の爲馳登り候よし、しきりに風聞いたし候。桑名表に押の勢を殘し置れ、早く越前口へ御出馬これ有るべし」と言上す。秀吉此使に向ひ、答をなさんとし給ふ所に、俄に陣中騷立ち、鬨の聲高く響き「城將瀧川一益味方の先將中川瀨兵衛が手へ、夜討

互の厚意なり、若狐疑をいだきて退城延引有るに於ては、大軍一同に攻寄せ、四方より火をかけ燒崩すべし、と訇る故、城中の兵卒皆大きに力を落し、早落支度を成し候故、某馳廻つて是を制し、敵の謀計に落て、此城を落行き、道にて討るゝ事なかれ、持口を堅め防戰すべしと、しきつて下知を致せども、白子、宮地が墓なき討死を見しより、臆病神の附たる弱兵ども、耳にも更に聞入申さず、早木戸を押開き、ばら〳〵と落行候程に、某もせんかたなく、一先當城へつぼむべしと、手勢を引具し搦手より落出で候處、案に違はず敵の伏兵四方に起り、味方の勢大半討れ、某も討死と覺悟を極めては候へども、君の御事心元なく、一方を切破り、這々遁れ參りしは、何ぼうか口をしく候」と、あら涙を流して物語れば、一城の軍兵是を聞て、更に詞を出すものなく、あきれて面を見合す所に、又々龜山の城より、落武者二十騎計馳來り、注進しけるは、「羽柴の將蜂須賀小六郎、堀久太郎、千石權平等大軍にて押寄せ、味方も勇を振うて防ぎ戰ふといへども、大軍終に敵し難く、搦手より討破られ、瀧川三九郎、關大藏、佐沼新助は切て出て討死し、鵜殿齋はいづくともなく落失せ、龜山落城致し候」と告ければ、一益を始め、城兵再び肝を失ひ、いかゞはせんと議する所へ、秀吉の大軍潮の如く押寄せ、旌旗、鎗刀空にきらめき、楯をつき、竹束を押並べ雨霰のごとく鐵炮を打懸け、一時に城を乘破らんと、喚き

かせ、桑名と長島の兩城をおびやかせしに、瀧川も狼狽へ桑名へ引取候由、斥候の者の注進によつて、軍勢を引上げ罷歸り候」と申す。秀吉大きに喜び給ひ、「汝等圖を外さず、奇兵を用ゐたりしこそ滿足せり。我又筒井順慶に命じ、一益が跡を追せたりしに、さしもの一益粉の如く成りて、桑名へ引取つたり。此勢に押寄せて、一攻に攻崩せよ」とて、則諸軍に令を下し、桑名をさして押寄せ給ふ。去程に左近將監一益は、桑名の城に入て、秀吉の寄來ん事を察し、城戸を堅め、矢石を備へて待かけたり。然る所に、一手の勢旗を伏せ、馬印を倒し、さん〴〵に成りて驅來る。一益敵か味方かと矢倉より透し見るに、峯の城に籠らせ置たる甥の儀太夫詮益なり。一益大きに驚き、先城門を開き迎へ入て、其仔細を尋るに、儀太夫跪きて申しけるは、「某嚴命を蒙り、峯の城に楯籠候所、寄手の大將は黒田官兵衞、小川土佐守、伊藤掃部介、一柳市介、堀尾茂助等、大軍を以て攻寄せ候故、矢石を飛し防ぎ戰ひ候所、味方の將白子六左衞門、宮地左内、敵の惡言に怒をなし、某が下知を用ゐず、城戸を開いて打て出で、兩人勇なりといへども、大敵に當りがたく、終に白子宮地も討死し、兵卒を失ふ事四百餘人、是によつて城中色を失ひ、防禦はか〴〵しからざる所に、敵兵等隍際に進み寄り、聲々に呼るやうは、桑名の城今既に落城せんとす、早く爰を捨て、本城を見繼るべし、此事を申送るは、武門の情、相

桑名へや向はん、こゝに備て、追來る勢をや打破らんと、前後を白眼で立ちたりしが、桑名は我が本城なり、敵に取られては叶ふまじと、又馬の頭を北へふりむけ、桑名をさして一參に驅たりけり。寅の時、早本城へ程近くなるほどに、いつの間にかは、火の光も消え〴〵にうすくなり、鐵炮の響も曾て聞えず。跡より追來る人馬の音もやみて、また陰寒きむつきの月、中空にさし上り、寂寥と人氣もなし。軍勢皆あきれまどひ、「こは狐狸なんどの妖をなすにや」と喧く罵つて止ず。瀧川一益一人は、秀吉の奇兵に欺かれたり、殘念なりと、牙を噛んで怒れども、更に詮なし。桑名の城中よりも一益を迎ひの爲、倉地鄕太夫といふ士、五十騎計にて馳來り、「敵一人も寄せずして、引取し」と告けるにぞ、一益彌心怒り、「おのれ猿面の草履抓、頓て此報思ひ知らすべき」と、人數を引きて終に桑名の城に入れば、遠寺の鐘聲こう〳〵と響き、將に夜も明なんとす。

○秀吉圍㆓桑名㆒苦㆓一益㆒

夜も明ぬれば、淺野彌兵衛、次丸秀勝、加藤孫一、中村孫平次等手勢引具し、秀吉の本陣へ馳歸り、謹で申けるは、「御下知の如く、山手海上に夥しく松明篝を焚立て、空鐵炮透間なく響

日の合戰に味方の英氣を折かれ、安からず思ひければ、味方の將士を令して、夜の子剋に兵粮をつかひ、丑上剋に羽柴が陣を夜討せんとす。時に桑名の城には、瀧川が留主居室山備中、水野左一兵衞、海老名十左衞門等四門を堅め、怠りなく守り居けるに、亥剋過る頃より、近きあたりの山々、木の間〳〵に、ちら〳〵と火の光の見ゆるにぞ、怪し、敵兵なるや、味方の勢かと疑ふ所に、また海上にも篝火を照し、桑名を目がけ押來る體、一城の軍士甚怪み、目を放ず見る内に、次第々々に數重り、子剋に至り、山々峯々一連に、松明を燈しつれ、桑名へ向ひ押寄すれば、沖の船等ははや城近く漕寄せて、海陸の火光天にたなびき、こはいかにと見る程に、鐵炮の音隙なく響き、鬨の聲近く聞ゆるにぞ、城兵色を失ひ、今此空城へ夜討をかけられ、いかに防ぐとも、一刻もこらふべからずと、早馬をもつて、四日市の一益へ追々注進したりければ、一益大に驚き、「其體ならば、暫も此所に宿陣しがたし。我自ら引かへし城兵と挾んで、敵勢を踏崩すべし」と、俄に軍勢を調へ、夜討の手術も打捨て、あわてふためき桑名をさして引取りける。扨馬の足を早め、駈立て〳〵行程に、桑名の方は火の光天を焦し、鐵炮の音おびただしく聞えぬれば、合戰も最中ならん、落城しては詮なしと、一益馬蹄は地に附ず、揉にもんで馳けるに、跡より鯨波しきりに起り、秀吉の軍兵追來る有樣なれば、さしもの一益驚き騷ぎ、

入れ替へ戰ふ程に、瀧川勇なりといへども、新手の大軍あたり難く、繰引に退くにぞ、細川、高山、中川等關を作つて、喰止め〳〵戰ふ程に、兩勢討死數をしらず。一益老鍊の剛將なれば、備を亂さず、鎗を取りて敵にあたり、殿してしづ〳〵と引取りける。此時日既に西に沒し、夕闇のいとくらければ、敵に構へたる計もあんなれとて、細川、筒井其外の軍將、場數巧者の手垂なれば、陣を堅めて敢て追ず。是によつて、瀧川も心靜に四日市まで退き、態と爰に野陣を構へ、篝を焚て軍威を張る。

○秀吉奇計破㆓一益㆒

其夜羽柴筑前守秀吉卿諸將を集めて下知し給ふは、「瀧川一益元來武略にたけたる男なれば、今日の合戰味方の勢を謀り、必ず夜討する事有ん。先手の將等怠りなく、士卒を令し不覺を取事有る可らず。我又別に計をまうけ、瀧川をして手足の置所なきが如くならしむべし」と仰せければ、諸將謹んで令を承り、備々を堅固に守り、少しの油斷もなかりける。秀吉また淺野彌兵衛、次丸秀勝、中村孫平次、加藤孫一を呼で、何か密計を私語き給ふに、各畏り手勢を引き具し、思ひ〳〵に打立ける。其時夜の初更なり。扨も瀧川一益は、秀吉卿の明察に違はず、今

川瀬兵衛が弟同苗淵之介、討取て手柄にせよ」と、大音に呼り、勢込だる瀧川勢の正中へ、面もふらず切入つたり。瀧川が先將山路九郎太夫、鎗を上て突來るを、淵之介薙刀いなづまの如くひらめかし、二打三打戰ひしが、おつと一聲をめくと見えしが、九郎太夫が咽輪を、肩へかけて長刀にすくひ、ひるむ所を附入て、馬のひら首手綱をかけて斬下れば、人馬もろとも屏風を倒すが如く、横ざまにどうとたふれたり。淵之介が郎等二人、馳寄て首を取たり。中川勢これに氣を得て、鬨たかく鳴り、土を蹴立て、砂煙を立て、一丁餘も敵の芝居を追ひまくれば、瀧川が先手うき足に成りて、既に敗形を顯せり。此時瀧川が後軍より、忽鬨の聲天に轟き、金鼓の音地を動し、大將左近將監一益、家の子熊田木會兵衞、市浦浪之助、大楯才兵衛等眞先に進み、惣勢二千餘騎、烈風のごとく殺出し、味方の先手岡部、谷崎が勢を左右へ押開き、勝色立たる中川が備の中へ、眞一文字に突入りて、あたるを幸薙立れば、中川勢、瀧川が新手の勢に打碎れ、ばたばたと備を崩し、三丁計引きたりける。一益勇で鐙ふんばり、采配打振り、後の味方をさし招き、「來れ進め」と下知すれば、瀧川が逞卒圓丸に成て、矢を射る如く斬立れば、さしも強勇の中川淸秀、あしらひかねて見えけるにぞ、羽柴方の諸將聲々に、「中川を救ひ瀧川を討取れや」と、細川與八郎、筒井順慶、高山右近、鹽川伯耆守、備々をくり出し、入替へ

同彦治郎等三千餘人、一益は旗本の勢日置五郎左衛門、谷崎忠右衛門、山路九郎太夫、小林直八、岡部常藏、玉井彦三、彼是其勢八千餘人、いづれも矢石、玉藥、澤山に用意をなし、桑名の城に立籠り、敵の寄るを待居たり。去程に秀吉の大軍、神戸、白子に充滿し、火を放て民屋を燒き、亂暴狼藉おびたゞしかりければ、勢州の百姓私財、重器を手に携へ、「老少を肩にかけ、東西へ迯れ南北にさまよひ、其騷動大方ならず。瀧川一益是を見て大きに怒り、「あなけしからずの秀吉が行跡哉。其儀ならば、此方より逆寄に押懸け、追散して捨べし」とて、先陣谷崎忠右衛門、山路九郎太夫、岡部常藏五百餘人、自ら旗本の兵三千餘人を引率し、揉にもんで、秀吉の本陣へ突てかゝる。こなたの先陣中川瀨兵衛淸秀一千四百餘人、向へ合して陣をすゝめ、敵間ちかく成るほどに、雙方鐵炮の組、備を押出し、つるべかけて打出せば、炮烟眞黑に立蔽ひ、物の色目も見えざる中より、鯨波一聲大に作り、早兩軍鎗を合せ、突からみてぞ戰ひける。瀧川が先將山路九郎大夫眞先に馬を躍せ、大身の鎗をりう〳〵と打絞り、聲をかけて突立る、またゝく中に馬武者二騎突落し、猶も進で惡戰すれば、瀧川勢勇進み、我後じと得物〳〵を追取て、吐と喚て切つて懸れば、中川勢少色めき見えにけり。中川が旗本より、淡紅に黃なる絲を交織したる鎧に、桃の實形の甲を著し、摺墨の如き黑馬に騎り、白柄の長刀かい込み、中

長一等旗大將にて、手勢二萬餘騎、濃州岐阜へ向はしめ、信孝を押へしむ。一手は黑田官兵衞、小川佐渡守、伊藤掃部介、一柳市介、堀尾茂介等旗大將として、其勢一萬餘騎、土岐多羅口より亂入し、一手は蜂須賀小六郞、堀久太郞、千石權平、羽田長門守、關安藝守等旗大將にて、是も一萬餘騎、君畑口より押て入る。秀吉は安樂越より向ひ給ふ。其勢又二隊と成し、先手は細川與八郞、中川瀨兵衞、高山右近、鹽川伯耆守、後陣は筒井順慶、蜂谷出羽守、次は秀吉卿の旗本の勢、次は淺野彈兵衞、木下半左衞門、小荷駄を司り、其勢都て三萬餘人、軍威强大にこそ見えにけり。瀧川左近將監一益是を聞て、諸士を集めて申けるは、「彼猿智慧の羽柴筑前、信孝、勝家が和平の僞りなる事を知り、北國いまだ雪消ざる先に、我國へ亂入し、前後をふさがれじとの軍立、左こそ有るべき次第なり。我又秀吉を曾て恐れず、一戰に追まくり、破竹の勢を以て、一時に江州を切隨へ、直に越前に亂入し、味方なりと心をゆるせし勝家が、北の庄を踏破り、聟信孝を武將と仰ぎ、自ら執權して、忽ち天下を掌に握ん事、只此一擧にあり。勉よや方々」とて、勇み喜び、既に軍の手配りに及びけり。先龜山の城には、瀧川三九郞、佐沼新介、鵜殿齋、關大藏等を首とし、堤兵四千餘人是を守らせ、峯の城には甥瀧川儀太夫を大將として、白子六左衞門、宮地左內、青地賴母等手勢三千七百人、長島の城には、瀧川源八郞、

外細川父子、池田、稻葉、高山、中川、鹽川、蜂谷、堀が輩、皆秀吉卿の幕下に有りて、功を抽でんとぞはげみたり。

○秀吉大軍討ニ一益一

秀吉卿は、山崎寶寺の陣所に御座て、世の動靜を考へ給ふに、三四月の頃、北國雪消え、人馬の往來自由を得ば、勝家大軍を以て攻上り、信孝、一益同時に起り、三方より押包で我を討べし、いかんぞ渠等が謀計に欺れんや、まづ雪の消ざる内に、信孝、一益を討亡し、勝家が兩臂を拔べしとて、正月十七日、卒に諸國の味方へ囘文を以て令せられけるは、秀吉勢州表誅伐すべきの間、來る二十日より二十三日迄に軍勢を催促し、江州草津へあつまるべし、其所において、勢揃し、手分を定め、亂入すべきとの趣なり。是によつて、國々の大小名、郡村の主、銘々手勢をかり催し、日限に先立はあれど、遲參せる者は一人もなく、凡其勢六萬餘騎、大津草津に充滿せり。秀吉卿は、小姓、馬廻り、弓、鐵炮の兵一萬五千餘人、惣勢都合七萬八千餘騎、分つて是を四隊と成す。一手は令弟美濃守秀長、孫七郎秀次、（秀吉の養子、三位法印一路が子、一路初名は中村彌介、母は秀吉の妹なり。）を大將として、池田勝入齋父子、遠藤但馬守、稻葉伊豫入道一徹齋、氏家常陸介、森正藏


中谷方之像


柴田修理進源勝家之像

砥厲せずといふ事なし。此兒の威風朝輝のごとく、後來世を蓋ふの氣あらん」と、慈母の靈夢、相者の奇言、世の人盡く傳へ聞り。依て戰國の習、天下の主たらんと望む者は、秀吉の動靜を見て、忌妬まずといふ事なし。故右大臣信長公の三男神戸侍從信孝卿は、日來兄信雄卿を押て、天下に自立すべき志ありしに、今度山崎の合戰に、逆臣光秀を討取り、大功を立給ふ上は、彌天下の武將は我成るべしと思ひ居給ふに、中將信雄卿生質遲鈍なりといへども、弟に職を越られ、何の面目有て其下位に立たんやと、兄弟漸矛盾に及ばんとす。然るに秀吉卿の計として、故中將信忠卿の公達、三法師秀信卿を以て、武將の御遺蹟に定め、信雄、信孝の二卿を以て、故見となすといへども、天下の政事大小となく、悉く秀吉卿の手裡にありて、兩卿は有てなきがごとし。是によつて、信孝卿秀吉の威を惡む事甚し。故に其志を、北國の藩鎭柴田匠作勝家と、關東の管領瀧川左近將監一益と通じ、謀計を以て秀吉を亡さんとす。柴田、瀧川の兩雄も、元來秀吉卿の威勢を妬み、共に計略を合體し、信孝卿に與せり。秀吉卿も又、渠等を押すべき志深きが故に、信長公の舊臣、諸國の勇將等に賞を加へ、昵を厚くす。既に惟任五郎左衛門長秀が二男宮內高吉を、美濃守秀長が養子とし、筒井順慶が長子藤四郎定次が妻は、信長公の息女なれば、先達て、その弟君御次丸を我養子となし、かねて順慶に交深し。其

繪本太閤記　五篇卷之一

○賤ヶ嶽之軍之趣意

夫國家巨也といへ共、戰を好む時は則ち凶なり。天下安しといへ共、戰を忘るゝときは必ず危し。是故に戎器を修て、以て不虞に備へ、武事を講じて非常を戒む。故に出るを治兵と曰ひ、入るを振旅といふ。危を忘れざる所以なり。此時世戰國に入て、乾綱紐の如く解け、坤軸將に碎んとす。是によつて、天下の諸侯威を爭ひ、列國悉く戰を受る。嘉吉より天正に至る迄、生民の塗炭既に極りぬ。羽柴羽林平秀吉民間より出でて信長に仕へ、輕卒より經上り、今中國の探題として、別所の大敵を亡し、毛利の强敵に的り、山崎一日の合戰に惟任を討て、主君の憤りを休め給ひしより、其德風に靡かぬ草木もなく、富貴日頃に百倍し、さながら四海の政務此人に有るが如く、一旦時運に乘じては、龍の如く飛び、虎のごとく驅り、東略、西征、南伐、北討、大功の速なる事、誠に太陽一たび昇り、萬物皆照らさずといふ事なきがごとく、終に天下を併し給ひけるも宜なる哉。慈母、日輪懐に入ると夢見、又相者の曰ふ、「日の照る所、

繪本太閤記 五篇第一之卷 目錄

賤ケ嶽之軍之趣意

秀吉大軍討一益

秀吉奇計破一益

秀吉圍桑名苦一益

桑名落城

去る年の内には、夜さへも穩に寢所へ入らせ給はず、誠に昨今の熟睡理にこそ」とて、互に痛み思ひける。三日の午後、漸くによろぼひ出給ひ、「聊休息し侍りし程に、氣力殊外に冷かに成りて、今は鬼とも組つべうも覺え侍るぞ。さらば年頭の禮を受べし」とて、「在姫路の士計、今日中に仕舞候へ」と仰出されしかば、我先にと進みし程に、町口より御城迄、連々とせき合ひ、良時を移せども、御前は絶間もなく、拜謁に賑ひけり。四月五日は近國の侍、城主、郡主、或は諸寺諸社の僧官、神人參じつどひ、其樣誠におびたゞし。朝には大名小名に對し、親愛を盡し、夕は寵臣、近士に向ひて、政道の損益を評し、天下泰平の工夫、更に懈怠もなかりけり。

ばかりは安くあらせ給はん事なるに、是は急なる事なりとて、つぶやきながら其用意いと閙し。

熟去し年の事どもを思ふに、如月の半、木曾の深雪を凌ぎ、信忠卿甲信兩國へ亂入し給ひ、武田勝賴父子を亡し給ひしが、又夏は、右大臣御父子とも、逆臣光秀が爲に弑せられ給ひ、さまざまの事ども移り變つゝ、人の心も何となう靜ならず、上下安き心もなかりしに、夢のごとく年も暮はてて、天正十一年の元旦の祝儀も改り、漸く半日は春の心地して、兎や角と罵りけるほどに、午の剋より姬路へ下向し給ふべきとあれば、今年も忙しく有るべき年の始め哉とおもひやられ、先あらかじめ安き心もなかりける。夜半計に姬路に著せ給ひて、「明日二日は、上下の將卒泰に休息すべし」とて、樽、肴、銀子、八木など下し賜りければ、過し年の勞をも忘れ、是は目出度御事にて御座すにとて、朝より夜半に及びて、爰も彼所も謳ふ聲々悠々として、萬歲を唱ふ形勢、勇々しかりける年の首なりけらし。秀吉は休息もし給はず、却て心に勞を盡し、右筆を召れ、誰渠年々の恩祿、或は馬、太刀、小袖、八木、馬の飼料等を記し立て見給へば、八百六十餘人に及べり。則ちそれぐの奉行十人計に仰附られ、五ケ日の內に與ふべき旨を令し給ひ、二日の午剋後より、深く睡眠し給ひしに、是や傳へ聞く、百合若大臣軍に勞れ、熟睡せられしにも越たりとて、近習の士私言申す樣は、「凡人の機根も續く程こそ有べけれ、

子二千兩獻じ奉り、其外近士外樣の面々へも、悉く其沙汰に及びしかば、中々忠義正しき行跡かなと、上下おしなべ感じぬる事夥し。かくて二十六日、山崎寶寺の城に歸陣ありて、二十八日、今度濃州表出勢の諸將には、小袖十、白銀百枚、樽、肴十荷づつ、并に其家中の組頭へ、何も小袖二つづつ、使者を副られ、嚴寒の節、煩勞の段悅び入る趣、いと懇に申謝せられけるに、誰か是を感ぜざらん。此大將の御事ならば、いかなる疲勞をも物の數ならず、あはれ大功を抽でて、感稱に預るべしと、勇まぬ者ぞなかりける。

○天正十一年元旦之事

大志ある者は、務て人の心に入るべきなり。秀吉卿天下を掌握し給ふ器備り給へば、家人はいふも更なり、外樣の諸士、幕下の輕卒といへども、實心に感服し、令を用ゐる事、水の下につくがごとし。大業既に成就せしも、宜なりといふべし。されば相從ふ面々、今年の春より備中に在陣し、毛利三家と挑合ひしより以來、一日片時も休息の暇なく、軍事のみに暮しけるが、今日なん心を寬て、年を越なんとて、銘々浴し、髮あらひなどせし所に、明日元旦の朝飯後より、播州姬路の本陣へ下向有るべき間、其用意由斷有る可らざる旨觸られければ、せめて元日

をかけ、秀吉へ降參を諫む者もあり、又丸岡に父母妻子持たる者は、暇申して別去も有り。或は成るべき程は、父母を呼取見候はんと、急ぎ下る者もありて、其騒動云ん方なし。秀吉卿は、城中の老幼を人質に取り、木村隼人を城代と成し、惟住、池田、筒井、細川、中川、高山等が軍兵合せて五萬騎、信孝を討んとて、同月二十七日、風雪を厭ず、濃州さして進發有り。其道々味方に屬せざる者は、忽に攻平げ、甲を脱て降參せるは是を懷け、所領安堵の書を賜ひ、終に濃州大垣に本陣を居られ、美濃一國大方味方に屬し、扨押寄せて町家を放火し、岐阜の城を裸城と成し、即時に乘取べしの催、甚だ急なり。痛しき哉、信孝卿、心は剛に猛けれども、國中の城主、郡主、悉く心を變じ、敵に與しける上は、支へ防ぐべき力なく、此上は秀吉と和睦せんより外なしとて、丹羽長秀が陣へ、其趣を仰遣されけるに、流石信長公の公達にてましましければ、痛はしく存奉り、秀吉に委細申達しけるにぞ、是も又、主君の御事にてこれあれば、押て攻ん事もなし難くて、御老母と、三法師の弟君を人質として、安土の城に送り參らせ、軍勢を悉く引上げ、濃州一國平均して、江州長濱へ歸り給ふ。扨北國押への城々を丈夫に普請し、鐵炮の玉薬、武具、兵粮、馬の飼迄夥しくこめ置て、諸方の手配濟ぬれば、十二月二十三日歸陣に及び、其夜は安土に宿陣有りて、幼君歳暮の御祝儀として、御小袖十重、銀




秀吉安土より初君に謁たる圖

田同心の者ども悉く亡し、三法師君の御代と成し參らせんと欲す。然れども柴田は織田の大臣、空しく滅亡せん事、頗る本意なきの次第なり。伊賀守忠志有て降參し、倶に三法師殿を守立て、世業を安くなさしめば、勝家が亡ん後も、猶柴田の家名全く相續すべし。疑ひを生じ許容これなきにおいては、大軍一時に攻討ち、人馬城壁悉くこれを燒ん。秀吉平世の交情を空くせず、某を使者たらしめ、此一事を勝豐に申す。委しく思慮を加へて、返答有るべし」と云ふ。爰において德永、木下の兩人、先使者を厚く饗應し、諸臣を集め、勝豐が前に出て評定す。此時伊賀守病に臥て有けるが、秀吉の口上を聞き、兼々佐久間盛政と不和にして、父勝家にも疎まれぬれば、幸の事に思ひ、殊に秀吉が器量、尋常の者に非ずと、心底を恐れ居れば、忽是に同心し、降參の趣謹で返答し、秀吉の使者をかへし、扨同月二十五日、組頭の者共大鐘喜八、疋田左近、神谷越中守等を呼集め、養父勝家に對し、怨みの數々十七箇條を記し立て、是を披見せしめ「此箇條の内に、我非義の條もあらば、諫め正し候へ」とて見せけるに、誠に餘儀もなき御事かなと、皆々領承に及びければ、「此上は父子義絕に及び、秀吉へ降參すべき間、越前に父母妻子有る者は、急ぎ我居城丸岡へ歸りて、勝家に奉公すべし。又我に與せんと思ふ輩は、姓名の上に點をかけて、明日誓書を致すべし」とて、卷紙に諸士の名を記して出しけるにぞ、頓に點

り。去程に、羽柴侍従秀吉は、山崎寶寺に在陣して、更に油斷の色なく、所詮勝家が縁者、又は親しき知音などをば、一向敵と定め、其國々へ年の內に軍勢を出し、一當的てて敵の英氣を塞くべし。其上腹あしき勝家に、來春無謀の軍を起させ、思ふ圖に引受け、一戰に討果すべしとて、天正十年十一月二十四日、池田、惟住、細川、中川、高山、鹽川等を催促し、其勢都合五萬餘騎、まづ江州へ發向し、長濱の城に籠たる勝家が猶子、柴田伊賀守勝豐を攻討んと、長濱近邊を取圍み、在家少々放火して軍威を示し、早攻かゝるべき催なり。城中是を見て色を失ひ、先持口々を取固め、力限り防戰して、討死と覺悟を極め、皆合戰の用意をなせり。此城元來、秀吉卿年久しく住馴れ給ひし事なれば、要害萬端殘りなくしろしめせば、一時に攻干とも安かるべけれども、伊賀守近き頃、養父勝家并に佐久間盛政と不和にして、怨みを含む事多ければ、說て味方に降しめんと、大谷慶松吉隆を使者として城中へ遣し、伊賀守が家臣德永石見守、木下半右衛門に對面して申けるは、「柴田勝家不忠の心を抱き、幼君三法師君を拒み奉り、己が武勇に強慢し、信孝卿を語らひ、瀧川一益を誘ひ、秀吉を亡し、三法師殿を失ひ奉らんとす。然るに冬の最中に當つて、北國雪深きに泥み、先に僞つて我に和平を乞ひ、來春雪の消るを待て、大波の如く押寄せ、秀吉と勝負を決せんとなす故に、秀吉却て軍勢を催し、柴

柴田勝家の令によつて、不破、金森等と城州山崎に赴き、柴田、羽柴の和平を調へ、兩家盟約滯りなく相濟み、本國へ歸りける。倩事の形勢を考ふるに、故右大臣御在世の時より、柴田、羽柴不和にして睦じからず、信長公薨去の後は、白地に敵對の色ありて、清洲の城にて會合せしより、大德寺御葬送の砌、燒香の爭ひに至る迄、互に權勢を逞しうし、既に大亂に及びなんとせしに、今勝家卒に强慢の心をひるがへし、秀吉に和平を乞は、必ず內に深き計策有と覺えたり、然るに平世遠慮深き羽柴秀吉、一儀にも及ばず悅んで諾し、和睦調ひしも、又不思議の所なり、いかなる計略かこれあらんと、目を閉ぢ手を拱きて案けるが、忽ちに是を悟り、勝家の計は、北越雪深くして、人馬の往來、兵粮の運送、自由ならざるを以て、僞つて和平を成し、秀吉が心を怠らしめ、來春暖氣の時節に乘じ、北方に旗を揚なば、秀吉怒つて、大軍を卒し向ひ來らん、此時瀧川一益勢州より起つて、京都及び秀吉が後を斷切り、さし挾で討ん結構なるべし、秀吉が才智、勝家の上に有ば、疾此計策を推察し、態と欺かれたる體にもてなし、却て北國いまだ雪消ざる內に、瀧川信孝等を討ば、勝家が後詰の勢深雪に塞れ、敢て出づる事叶べからず、其隙に瀧川信孝を攻亡さん秀吉が遠計なる事、鏡にかけて見るがごとしと、獨り心に是を收め、時宜に隨ひ計略こそ有るべしと、密に工夫を廻らしけるは、勇々しかりける良將な

に參詣し、落涙ともに拜禮し、僧を請じて經を獻讀し、夫より伊賀守は長濱へ歸り、三使は又越前さして急ぎける。霜月下旬、北庄に歸著すれば、勝家大に喜び、三人の勞を謝し、此度こそ秀吉を欺き得たりと、喜色してぞ見えける。秀吉は寶寺に有りて、柴田が使者を送返し、聲を發し大に笑ひ給ふ。蜂須賀小六、木村隼人等御前に有りて、其笑ひ給ふ謂所を問ふ。秀吉答て宣ひけるは、「此度勝家が和親の事、皆以て僞の謀なり。勝家歸國して軍勢を催促し、卒に攻登んと思へども、北國は深雪道を埋み、出陣せん事叶ひ難し。爰を以て僞つて和平を乞ひ、我をして惰しめ、明年雪消え人馬の往來自在なる時、急に馳登て我を攻ん勝家が計略なり。我旣に是を知るといへども、彼が謀計に附て、味方の手術を成さんと欲し、態と其詞に隨ひ、欺きかへしたるは、我深き軍慮あり。抑我を方便ん者は、異朝にては張子房、我朝にては楠正成にてもこれあらんか。勝家などが愚意を以て、某を計見んとは、蟷螂が斧なるべし。片腹痛き事哉」と、嘲り笑ひ給ひけり。

○秀吉攻㆓落長濱城㆒

遠き慮なき時は、必ず近き憂有とかや、されば越前府中の城主前田又左衛門利家は、旗大將




前田
雪中
と

降積み、軍を出さん便もなく、先の謀に隨ひ、前田又左衛門、不破彦三、金森五郎八を呼んで申けるは「信長公御父子、大變に依て薨じ給ひ、いまだ年をも改めざるに、我と秀吉兵刃を動し、萬民を苦めん事、人の嘲りを免れず。就中、織田家相續の害たるべし。故に志を改め、秀吉と和睦を成し、相共に幼君三法師君を翼奉らんと欲す。汝等勞を辭せず上京して、我本心を秀吉に告げ、和平の儀を取結ばゝ、某が雀躍、何事か是に如ん」と。是に依て、前田、不破、金森等、此旨を領承し、勝家の贈物、越前綿一千把、鹽鮎二桶を取持せ、十月下旬、越前北の庄を出て、深雪を踏み北風を凌ぎ、都をさして登りける。日を重ね江州長濱に到り、勝家が猶子伊賀守勝豐に對面し、事の仔細を物語り、相共に山崎寶寺に赴き、富田左近將監に附て、勝家が口上、及び異心なき志を秀吉に申達す。秀吉是を聞て大に喜び、是織田長久の基、萬幸何れか是に如んとて、四人の使者に對面し、ていねいに是を饗應し、且申されけるは、「勝家は織田の元臣、我何ぞ其詞に背くべき。今和平をなして、脣齒の交をなさん事、元來某が希ふ所なり。然る時は、一紙の起請文を以て、兩家異心なきの徽と爲ん」と。是に依て、三使甚だ悅び、則ち使者を越前へ遣し、柴田が盟書を取て秀吉に與ふ。秀吉も又誓紙を認めて、是を三使に渡し給ふ。三使、勝豐も大に悅び、萬歳を唱へ、山崎を立ちて京都に入り、信長公の御墓

秀吉と和睦をなし、彌渠が心を怠らしめ、内々東國、北國の士を語ひ、雪の消るを待て一時に討て登んに、勝ずといふ事有る可らず。足下國に歸つて後、使者を以て和平を乞ひ、必勝の計策を成し給へ」と云ふ。勝家大に悦び「此計きはめて妙なり。我謹んで是に隨はん」と、互に謀計を申合せ、卒に歸國の用意を成し、同十九日、前田、金森、不破等を引具し、越前へこそ歸りけり。瀧川一益も同廿日軍勢を整へ、關東さして馳下れば、其餘の諸士、大名小名、いづれも秀吉にいとまを告げ、おのが國々へ引取りける。爰に於て、秀吉、三法師君秀信卿を安土に居まゐらせ、長谷川丹波守、前田玄以法印兩人を以て、幼君の補佐と成し、信雄卿は清洲城、信孝卿は岐阜城に移し、幼君の後見と定め、其身は城州山崎寶寺に要害を構へ、京都及び近國の政事を司り給へば、秀吉卿の威風凛々として海内に輝き、追日勢强大なれば、諸國の大名、國々の諸士、秀吉の幕下に屬せんと、山崎寶寺の門前は市を成し、遠近の使者、或は飛脚到來して、其國の名産、山海の珍物を捧呈し、此邊の賑ひいはん方なく、我一に勳功を勵んとこそ勇みける。此時既に秀吉卿の威勢、信長公にも劣り給はず、はやくも武將の兆現れ、勇々しくぞ見えさせ給ひける。柴田勝家越前に著し、間者を以て、秀吉が形勢を窺ふに、權威日々に强大なれば、忌み憎む事大方ならず。されども、瀧川が云ひしごとく、北國早く雪

に諂ひ、内に諸將と因を結び、頗る人心を得たり。昨夜、我旅館へ織田家の諸士を招き集め、餘所ながら其心底を探り見るに、池田、惟住、中川、高山、鹽川、筒井を始とし、近國の武士悉く秀吉に心を寄せ、今にも合戰始らば、忽ち秀吉が先鋒に進み、功を立て、銘々子孫の昌を得んと欲す。我々に一味し、秀吉に弓を引くべき者は、只不破彥三、原彥治郎、金森五郎八、前田又左衞門等のみなり。其中にも、前田は渠、犬千代のむかしより、秀吉とは斷金の交あり。當時匠作の幕下に屬する故、味方同心の色をなせども、是も强て賴むべからず。されば火急に事を發しなば、味方兵少く、合戰將に難儀に及ん。我々一先本國に歸著し、より〳〵鄰國の將士を語らひ、味方の英氣を養ひて、只一戰に猿面冠者を討亡しなんは、何ぼうか快よからん。謀を好んで成すは、智者の欲する所なり。是に依て、急に歸國せんと思ひ候は、いかゞに候や」と尋ければ、勝家元來老功の武者なりければ、諾きて申けるは、「我は日ごろ、粗其計略を工夫なし、先本國へ退き、都の内にて秀吉が心の儘に、勢を震しめ、渠が心驕るを俟て是を討ば、全く功を立つべきとこそおもひつれ。足下の判斷、某が心に符合せり」といふ。一益是を聞て、賀して申けるは、「匠作今、此一事に心附きたるは、將に織田家の幸、秀吉を亡さん事、掌の中にあり。我つら〳〵考ふるに、北國雪深くして、來年三月迄軍を出さん事難し。今僞つて

田が内縁に繋れぬれば、某柴田と同意成らんと思ひ、倶に我をも恥しめたるものならんか。我においては、只織田家相續の恙なからん事をのみ希ひぬれば、内縁ある柴田なりとて、私の所存を以て、何ぞ是に同心すべきや。爰を以て諸將を招き、各の主意を承はらんと欲す。池田、惟住其外中川、高山、筒井の諸將、いかゞ思し候や」と、姦計邪智の瀧川一益、表裏定めぬ詞の端、池田、惟住かねてより、羽柴に一味の人々なれば、瀧川が申條、我々が心腹を探り見ん計略なりと、早く推察したりければ、「いや〳〵瀧川殿の仰もさる事に候へども、先原、金森、不破等の申さるゝ趣、我々が所存も同意にこそ候へ。併ながら、兩家事なく和平せんには如く可らず」と、よらず障らぬ詞つき、筒井、中川一座の面々、「我々も兼て斯こそ思ひつれ。何れ事なきに勝る幸は有るべからず」と、彼もいひ、是も語り、口々に喧しく罵れども、銘々心に思ふ一大事、いかんぞ顯はして是を云んや。夜もいたく更ぬれば、其夜の宴は事終り、皆旅館へぞ歸りけり。

○瀧川一益計策和ニ柴田羽柴ヲ

其翌十八日、瀧川左近將監一益、柴田が旅宿に赴き、勝家に語て申すやうは、「秀吉上に媚び下

時に又、金森五郎八進み出でて申けるは、「兩所の判斷理にこそ候へ。何は格別、一昨日燒香の節、秀吉が行跡こそ、光秀に勝りて恐ろしく相見え候。其故は、諸國の將士相集り、先君御葬式の時に當つて、公達信雄卿、信孝卿を誹謗なし、古老大臣の柴田、瀧川を惡言し、幼君の補佐と稱し、自第一番の燒香せしは、普く諸國へ我勢を示し、織田家の武士を屈服せしめん謀計に非ずして何ぞや。某が愚見を以て是を論ぜは、柴田、羽柴が和平を好まず、織田家に忠を盡さんと欲する者は、勝家に同心して、秀吉を討亡すべし。一座の諸將、所存はいかに候や」と、聲を勵し申ければ、瀧川一益態と是を制し、「旁の所存、尤道理これ有て聞え候。併がら某退いて兩士の遺恨考察するに、又秀吉に理なきにあらず。我いまだ上洛せずして、其委しきは知らずといへども、清洲の城において、勝家、盛政兩人、さま〴〵秀吉に對し失敬過言の事有りと聞り。それは格別、目前見えし事は、秀吉の所領江州長濱五萬石、酒宴の席にて、迫つて是を奪取れり。假令勝家、織田家において功老の舊臣たりとも、秀吉も又功を立て、先君より下し賜ひたる領地ならず哉。然るを勝家、己が威に募り、非道に是を奪ひたらんに、秀吉にあらずとも、誰か是を憤らざらんや。一昨日、大德寺にて、秀吉謀計を以て柴田を恥しめたるは、清洲の鬱憤を報いし者なるべし。」我は秀吉と聊遺恨なしといへども、柴

面を見合せ、敢て猥りに言葉を出す者なく、暫黙して居たりける。時に原彦次郎元治、漸くに口を開て申けるは、「羽柴氏山崎の一戰に、逆徒光秀を討亡したるは大功と稱すべし。柴田氏當席の主瀧川氏なども、其勇武においては、羽柴氏に劣べきかは。然りといへども、途遠くして弔合戰に洩たる事は、限りなき無念といふべし。さはいへども、柴田、瀧川をはじめ、不肖に候へども某等、皆信長公の厚恩に浴し、叛臣怨敵の光秀が亡びたるを、悅びざる者の候べきや。爰を以て是を思ふに、勝家の心底、いかんぞ秀吉を偏執すべきや。只密に恐るゝは、秀吉山崎の功に乘じ、幼君を補佐すべき體にもてなし、終には天下を掌握すべき大志の見えて候故、勝家深く是を歎き、事によせて秀吉を討亡さんと計られ候と、察し候。不才の某かく申すも、諸士の所存計がたく、をこがましく候へども、眞實の忠心は柴田にありて、羽柴にはこれなしとこそ覺え候」と申す。不破彥三氏次是を聞て、「彥治郎殿の仰、尤に覺え候。柴田氏は古老といひ、勇武と申し、先君御在世の折から、殊に股肱と賴み給ひ、今北國の藩鎭として、誠に當家柱礎の大臣なり。然るに一昨日大德寺に於て、秀吉のふるまひ傍若無人にして、柴田、瀧川は有りて無が如く、諸國の大名集りし中にて、此上もなき恥辱を蒙り、斯のごとくして怒らざる者、豈天下の間にこれ有るべきや。されば勝家が怒は理にして、秀吉が過言は非なり」

に喜び、悉く座に請じ、酒飯の饗應善美を盡し、宴會既に酣なり。時に一益盃を差置き、諸士に對して申けるは、「今日諸將を此所に會する事、他の儀にあらず。一昨日、紫野大德寺において、燒香の順列、前後の爭ひにより、柴田、羽柴の兩人頗る爭論に及び、既に大事を引出さんとす。某退いてこれを思ふに、柴田は當家累代の臣、殊に先君の妹君小谷の方、勝家に嫁し給へば、內緣といひ、譜代といひ、一方ならぬ老臣なり。羽柴も又、其以前は卑賤なりといへども、數年の軍功數を知らず、亡君の御取立を以て、當時播因の國を領し、尤も織田の大身、是又等閑の將にあらず。然るに今、織田家柱石の大臣不和にして、內亂を起しなば、諸國の敵徒忽蜂起し、當家の危き事累卵に等しかるべき歟。我苟も先君の恩惠を蒙り、老臣の數に連りながら、斯る大事を餘所に見んも不忠の至り、さればとて、雙方相互に一理ありて、故なくて和平すべき體にあらず。是に依て各を會し、銘々存ぜらるゝ心底を承らんとこそ存じ、扨こそ、今日の集會を催し候へ。織田家の御大事、幼君の御爲にて是あれば、各所存を腹藏せず、此席において、柴田と羽柴が是非善惡を評論せらるべし。其論に附て、我工夫をめぐらし、兩家和談を計らんと欲す。是私の事にあらず、當家相續の根元、時に取ての忠義にて候へば、憚る事なく申談ぜられて然るべし」と、異儀を正して申けるに、一座互に

繪本太閤記　四篇卷之十二

○瀧川一益會織田功臣

瀧川左近將監一益は、織田家の大身といひ、神戸侍從信孝卿の舅にして、柴田勝家が妹聟なり。されば世の用るも輕からず、元來武勇絶論の者なりければ、羽柴が下風に立べき將にあらず。今度信長公不慮の災に懸り、薨去ならせ給ひ、秀吉三法師を守立て、天下の權柄を掌に握れる事を惡み、柴田が謀に與し、いかにもして秀吉を失ひ、聟君信孝卿を、天下の武將と成し、政道を心の儘にせんと、日夜謀計を廻らしけるが、今織田家の舊臣、其外天下の將士、秀吉が山崎の戰功に服し、渠に一味すべき者多かりければ、輕々しく事を成し難く、信長公追福の後、京都の旅館において、織田家新古の臣下を悉く招き集め、餘所ながら其心底を試し見んとす。是に依て、其招きに應じ、一益が亭に集る人々には、惟住五郎左衛門長秀、池田勝入齋信輝、同壹岐守、中川瀨兵衛清秀、高山右近長房、鹽川伯耆守國漏、蜂谷出羽守頼隆、堀久太郎秀政、前田又左衛門利家、不破彦三氏次、原彦次郎元治、金森五郎八長近、筒井順慶等なり。一益大

繪本太閤記 四篇第十二之卷 目錄

瀧川一益會織田功臣
瀧川一益計策和柴田羽柴
秀吉攻落長濱城
天正十一年元旦

堀秀政之臣
鹽川吉太夫
山口兵太夫
惟住長秀之臣
丸毛喜四郎

其餘諸國群參の將士、大抵知行の高下、年齡の老若を以て、席上に前後を定め、凡靈前に近寄り、燒香の座に著く者二百餘人とぞ聞えし。寔に生涯別離の悲み、誰か是を悼ざらん。勝家、秀吉を始とし、同席の諸士、外樣の勇夫、袖は雫にぞ濡にけり。斯て秀吉卿、亡君の御位牌所として、爰に一字を建立し、惣見院と號し、印塔の料として白銀一千枚是を給ひ、猶永代寺領として、紫野において五十石を寄附し給ふ。斯る追福の營み、叮嚀に執行ひ給ひし上は、是ぞ莫大の忠臣かなと、其頃の貴賤道俗押なべて、感涙をこそ流しける。されば秀吉卿の威勢、誠に朝輝の登るが如く、池田、惟住を先とし、織田の舊臣、古老迄、皆秀吉の下風に隨ひ、勢既に天下を動じぬれば、柴田勝家、瀧川一益等、彌是を惡み嫌ひ、一向秀吉を亡さんと、其計議のみに日を送りけるぞ、實に織田家の衰亡なりと、心有るものは私に眉をひそめける。

福島市松
平野權平
加藤左馬介
脇坂甚内
糟谷助右衛門
石川兵介

池田勝入齋之臣
片桐半左衛門
伊木清兵衛

中川瀬兵衛之臣
中川小左衛門

筒井順慶之臣
島左近

鹽川國漏之臣

不破彦三元次
毛利輝元之名代
小早川隆景之名代
吉川元春之名代
上杉景勝之名代
浮田秀家之名代
蜂須賀小六郎政勝
淺野彌兵衛長政
黒田官兵衛孝高

福原越後守
中島主馬
谷川市太夫
直江山城守
花房近江守

山崎合戰勳功によつて燒香の列に連る陪臣

羽柴秀吉之臣

堀尾茂助
加藤虎之助
片桐助作

高山右近長房
同断
池田勝入齋信輝
同断
筒井順慶法印
同断
鹽川伯耆守國漏
前田又左衛門菅原利家
堀久太郎秀政
森勝藏長一
佐久間玄蕃頭盛政
蜂谷兵庫頭頼隆
金森五郎八長近
安部仁左衛門友行

北畠中將平信雄卿
神戸侍從平信孝卿
羽柴於次丸平秀勝
御臺所御名代
蒲生右兵衛太夫藤原秀賢
織田源五郎尉平長益
柴田修理進匠作勝家
瀧川左近將監一益
惟住五郎左衛門尉長秀
羽柴美濃守平秀長
羽柴孫七郎平秀次
山崎合戰軍功を以て席を進む輩には
中川瀨兵衛淸秀
同斷




秀吉の伏兵四方に起る大徳寺を圍む圖

分は今ぞと、羽柴美濃守秀長、相圖の狼烟をさつとあげ、空大筒をどつと放せば、寺内四方の帷幕の内より、數千の勇兵剛卒ども、鐵炮の筒先を竝べ、すはと云はゞ討殺さんと取巻ば、生駒新八、小西彌九郎一千餘人の軍兵を以て、大德寺の四方を取圍み、一人も洩すまじとひしめく程に、醍醐、船岡、梅津、東寺、四ツ塚、西岡に伏置たる羽柴が軍兵、相圖の狼烟を見るや否、旗指物を高く押立て、鬨を作り金鼓を鳴し、八方より詰寄せ大德寺を遠卷せしは、夥しくも恐しゝ。是を見て、柴田、瀧川、佐久間をはじめ、一言半句の返答なく、竝居る諸國の大小名、針の席に坐すごとく、すはや大事出來れりと、安き心はなかりける。秀吉猶も聲を勵し、「何れも非を正し、惡を戒むべき筈なれども、今日は亡君御追福、後日に禁め正すべし。前田玄以燒香の次第を讀上げ、順に隨ひ拈香すべし」と云終て、三法師を抱きながら、卓の前に座をしめて、先燒香にぞ及ばれける。前田玄以法印、高聲に順列を讀上れば、各謹で是を承る。其略記に曰く、

　惣見院殿贈太相國一品泰巖大居士追福燒香之順列
織田三位中將三法師秀信卿之御名代
　羽柴四位少將平秀吉

夫にても叶ふまじく思ひしや、我上洛を待侘び、剰へ采配を取りて諸軍を令する事能ず、惣大將の大任を我に讓り、山崎の合戰には、齋藤内藏介が爲に敗北し、孝もなく勇もなく、智もなく禮もなき匹夫のみ。柴田勝家は織田家の舊臣、先君の親戚に繋りながら、弔合戰を急ぐ心もなく、たま〳〵上國せんとなしつるも、上杉に追討せられ、徒に日數を重ね、光秀が首だに見ずして、何面目に此席に列り、兩亡君の靈前に出でて大言を吐きぬるぞや。實に武士の道を辨へ知るならば、靈前にて快く殉死すべし。瀧川一益も、其罪は柴田に比すべし。柴田、瀧川の腰拔武士、信雄、信孝の臆病者、亡君の仇を討つ志はなく、三法師君の御家督を妬み、謀計を構へ是を奪はんとし、勝家は織田の舊臣なれば、正しく幼君を守護すべきに、淸洲の會合にも、無禮失言、傍若無人の行跡を成すこと幾度ぞや。我新參にて、初め賤しき下郎なりといへども、信長公の御目鏡を以て、山陰西海の追捕使に命ぜられ、播州一國を下し賜ふ。然るに我を侮り不禮をなすは、君を恥しむるに異なる事なし。又秀吉、今苟くも位四品、職は少將、禁廷の官人に對し、卑賤の身を顧みず過言をなすは、是又王命を輕んずるにあらずや。只今勅命の重きを頭に戴き、非禮、非義の汝等が罪を正す。申譯有りや否や」と、怒りの顏色、柴田、瀧川が心根を挫ぎ、勇なき信雄、信孝は、面色忽ち土のごとく、ふるひ怖き居たりける。時

師殿の先へ進み給ふも理なり。今日の御法事は、是右大臣信長公の御弔ならずや。父君の靈前へ公達の拜なさるゝを、孫の三法師殿、何の理有て支へらるゝや。況や秀吉新參の身を以て、非禮なりとの失言、何辨へての狂言なるぞ。其上不孝不忠なりとの過言、上を嘲する不道人。勝家が家人はなきか。佐久間玄蕃、秀吉を引出し、已後のこらしめ額を打や」と罵るにぞ、勝家が後に控へし毛受勝介、佐久間盛政氣色して立たんとすれば、秀吉が左右に竝居る加藤、福島、片桐、糟谷、脇坂、平野等の勇士ども、近寄ば切捨んと、柄に手をかけ目を配れば、一座の諸士、外樣の諸侯、すはこそ珍事出來せりと、手に汗握て見合せける。秀吉、勝家をはつたと白眼み、「三法師君、信長公の御家督に定り給ひ、三位中納言に敍せられ、天下の武將に備り給ふ。然るに北畠、神戸兩家相續の信雄、信孝、先君の世繼四海の棟梁を差置き、先じての燒香は、非禮にあらずして何ぞや。信雄卿は勢州にて二萬人の勢を督し、京都の大變父兄の難にあはせ給ひ、御生害有りしを聞ながら、弔合戰の催もなく震ひ恐れ、惟任が爲に安土の城も襲ひ取られ、おめ〳〵と清洲へ集り御遺跡を爭ふとは、不孝とや云ん、臆病とやせん、譬ふるに物なし。又信孝卿は、大坂に在陣して、是も軍勢二萬餘人、京都近き津國なれば、惟任が叛逆を聞ば、取物も取敢ず馳登て合戰すべきに、光秀が軍威に恐れ、惟任五郎左衛門が紀州に有りしを呼登し、

の後見にて是あれば、何れを前いづれを後と、いかでか定めん。是は兩公達、等しく御燒香然るべし」と申すにぞ、柴田、星崎是に隨ひ、信雄信孝を誘ひて、靈前に拜禮し、既に燒香の席に直り、香箱に手を懸給へば、左の方の帷幕の內より「信雄、信孝燒香暫く待れ候へ。羽柴四位少將秀吉見參候」と、寺中へ響く大音聲、何れもはつと氣を呑れ、兩公達も附人も、柴田、瀧川一統に、見ゆる此方の幕引絞り、緌したる冠に、黑き闕腋の袍を著し、玉の平緒、金の魚袋、螺鈿の太刀緩に帶び、裝束、衣紋搔繕ひ、三法師を抱きまゐらせ、悠然として立給へば、加藤虎之助、同孫一、福島市松、片桐助作、石川兵介、糟谷助右衛門、平野權平、脇坂甚內、石田佐吉等、萬夫不當の勇士十六人、肌著の上に小具足堅め、肩衣引つけ袴の稜高く取りて、八方に眼を配り、すはといはば一摑に取挫んず勢にて、左右を圍ひ守護すれば、並居る諸國の大小名、此形勢に仰天し、更に詞を出す者なく、息を詰て控ける。秀吉兩眼くわつと見開き、「不孝の信雄、信孝、不忠の勝家、一益、嗣君三法師御燒香未相濟ざるに、靈前に近づき非禮の行跡尾籠なり。控へ候へ」と、威有て武き其よそほひ、信雄、信孝思はずはつと座を退き、蹲居て言葉なし。柴田勝家是を見て、怒れる髪髭逆に立上り、大に聲を勵して、「無禮なり秀吉。信雄、信孝の兩卿は、故右大臣の公達、三法師殿の叔父君にてましますぞ。信忠卿の御燒香ならば、三法

を誦す。都鄙遠近の貴賤、男女拜禮群集して、雲のごとく霞に似たり。法經の其次第は、鎖龕は怡雲和尙、掛眞は玉仲和尙、起龕は古溪和尙、念誦は春屋和尙、奠湯は朋升和尙、奠茶は仙岳和尙、拾骨は竹簡和尙、康炬は咲嶺和尙なり。則ち秉炬の偈に曰く、

四十九年夢一場　威名說二什麼存亡一
請看火裡烏曇鉢　吹作梅花遍界香

時に役僧二人、卓の上に香爐捻香を乘せ、正面に押直せば、前田德善院玄以法印、燒香の次第を奉書紙に記し、卷て是を手に捧げ、左の方の座に著ば、長谷川丹波守右の席に坐し、高聲に申けるは、「燒香の順列を讀上げ候間、各〻次第を亂さず、捻香有りて然るべし」といふ。此時前田德善院、彼奉書に認めたる卷を捧げ、口より拔き讀上んとする所に、柴田勝家大音にて、「亡君の弔合戰にて、勳功有し侍從信孝卿、はや〳〵燒香是有るべし。柴田修理進勝家附添奉らん」と、信孝卿の膝を推引立て出でんとす。北畠の長臣星崎長門守、大に呼りけるは、「信孝卿暫く御控へ候べし。中將信雄卿こそ、故右大臣の二男にましませば、一番の燒香相濟て後、跡より席を立せ給へ。信雄卿いざ〳〵御燒香有るべし」と、中將に引添ひて座を立つを、瀧川一益暫しと押止め、「信雄卿は御二男、信孝卿は三男にて在せ共、當時日本を東西に分ち、三十三箇國

事を司り、生駒新八、小西彌九郎兩人は、一千餘人を督令し、大德寺の四方を圍み、非常を戒め、且又相圖を聞て、洛外四方へ知らせの手配りを成し、舍弟美濃守秀長一萬餘人を率し、惣奉行職を蒙り、萬事の下知を加へしむ。其外寺外三町四面に、獅子垣結廻し、四門には帷幕を垂れ、遠見の役人ひしと相詰め、役所、番所には警固の武士、長柄を立て鐵炮に火繩をはさみ、すはと云はゞ、打出さんず勢にて、皆小具足に身を固め、威儀嚴重に備へたり。時に諸國の大小名、御法事の刻限巳上尅より群參し、今日を晴と綺羅を錺り、大德寺中へ詰込たり。御葬式の結構は、先沈香を以て、右大臣の像を造り、是を棺中に安置し、錦綾、金銀、七寶にて棺郭を包み莊り、御棺の前轅は池田小新輝政是を舁き、後轅は信長公の御末子、秀吉の猶子御次丸秀勝是を舁奉る。秀吉は不動國行の御太刀を持て、御輿に副ひ歩行す。引續て北畠中將信雄卿、神戸侍從信孝卿、御臺所の御名代蒲生右兵衛太夫秀賢、柴田勝家、瀧川一益、惟住長秀池田勝入齋、前田利家、細川藤高、佐々成政、中川清秀、筒井順慶、高山、鹽川、森、金森其外織田家恩顧の諸士、袖をつらね袂を交へ、威儀を繕ひ御供す。外樣の大名、代參の使者、毛利、上杉を先として、我も〳〵と引添にぞ、喪衣の者一千餘人、上下の御供三千餘人、二行に供奉し列を引くは、實に夥しき次第なり。五山、十刹、洛中洛外の諸寺諸山の僧徒來會して、諷經

行ふとや、いざ參りて拜んとて、使者の行たるも行ざるも、銘々思ひ〳〵の香奠を獻じ、我先にと上京せしは夥しき事なりけり。されば諸國の大小名、皆京中に町宿を構へ、辻々門々に名札を立て、是は關東の管領瀧川左近將監が旅館、又は北國の藩鎭柴田匠作の本陣、或は上杉、又は毛利等我劣らじと陣所を定め、陣幕を張り長柄を立て、門毎に役所を構へ、際掃應對尋常ならず、諸方の名家、織田の功臣、是ぞ一世の晴なりと、美を盡し、互に負じ劣らじと、皆分外に威を震へば、京洛中の町人ども、是に乘じて利を得るもあり、又往來を止められ迷惑する者も少からず、何れ京中は上を下へと返しける。

○織田家舊臣燒香爭二順列一

天正十年冬十月十五日、羽柴筑前守秀吉紫野大德寺において、故右大臣の葬式を執行ふ。兼て計略有りし事なれば、密に醍醐、山科、舟岡、梅津、東寺、四ツ塚、西岡等へ、黑田、蜂須賀、淺野、大谷、神子田、仙石等を大將として、數多の軍勢を分ち遣し、相圖によつて、大德寺を遠卷すべきよし申含め、又小川土佐守、羽田長門守、桑山修理介、木下將監等は、禁廷に參じ大裏を守護し、杉原七郎左衛門、桑原治右衛門、副田甚兵衛等は、法事奉行として、寺內に

似たり。問尋は相互、秀吉が使者を越たるも、さのみ怪むべきに非ず。然れ共、今度の儀においては、定めて秀吉の深き計策有る事とこそ覺え候。其所以は、織田家の臣下に於て、柴田勝家が右に出づる者なく候へ共、智に於ては秀吉に竝ぶ者も有るまじく候。畢竟今度の葬禮を申立て、天下の大小名を招き集め、秀吉が威を示さんとの謀にて候べし。何にもあれ、無禮の行跡なきやうに、此方よりも弔ひの使者を立て、秀吉の行勢を伺ひ給ふべし。君の御上洛なんどは思ひもよらず。所詮今度の弔使は、某罷上り、秀吉が器量も試し見、其外織田家の家臣悉く出會し、篤と虛實を見聞せば、當家の爲に幸なり」と、柴田、羽柴が心根を見拔し直江山城守、實に上杉の謀臣なり。景勝大に喜び、頓て香典として金子三十兩、山城守是を持して、京都へこそ上りけり。時に瀧川左近將監一益、關東に有て秀吉の使者到來し、信長公御葬式の事承り、是も心に思ふやうは、是全く柴田、羽柴が威勢爭なるべし、我衆を抽で、今度の議論を見破し、柴田にもよらず、羽柴には猶よらず、諸國の大名集りし中にて我器量を顯して、あはれ天下の政事を執權せばやと、心私に悅び、是も上洛したりける。されば織田家新古の家臣は言も更なり、毛利の名代福原越後守、小早川の名代中島主馬、吉川は谷川市太夫を名代とし、其外近國、近在、一郡、一村の主たる者、武將信長公の葬送の式を、羽柴筑前守が執

度の燒香は我男威を以て、三法師殿を退け、信孝卿に一番の燒香せしめ、秀吉が勢を挫ぎ、普く天下の大小名に我威光を輝さん事、却て望む所なりと大に喜び、再佐久間、前田、不破、佐々が輩を伴ひて、京都さして上りける。爰に上杉彈正少弼景勝は、信長公大變に懸り給ひ、光秀滅亡の時を幸に、織田の領國を切取べしと軍議しけれ共、本國に謀叛を企る者多く、召て他國へ軍を出さん事も叶ひ難く、評議のみに日を過しぬ。織田の將柴田勝家も、信長公御他界の後は世中騷々しく、御家督の計より萬につき閙く、殊に秀吉と睦からず。只あらずして合戰にも及ぶべき勢なれば、上杉の大敵を後に受ては、始終難儀なるべしとて、北國へ使を立て、攻取し城々を殘らず戻し、和睦の事を取計ふ。景勝も國中騷亂の砌なれば、是を幸なりと、雙方和平に成りにける。秀吉此事をかねて聞召ければ、今度葬式に附て、上杉へも使者を以て觸られける。景勝、秀吉の使者を得て、家老を集め評議して申けるは、「我此頃迄信長と衡を爭ひ、討つ討れつ鎬を削りし敵なりしに、信長亡び、假に和睦の形をなせども、渠も我も心は敵なり。然るに今信長が葬式をなさんとて、我に使を立て招んとするは、秀吉が心體許がたし。然りといへ共禮を以て我を招くに、不往は無禮ならん。何に計ふべきや」と申されけるを、執權直江山城守進み出て申けるは、「仰の如く、昨日は敵國なれ共、今日は和談調ひ親きに

繪本太閤記　四篇卷之十一

○秀吉紫野大德寺營葬禮

終を愼み遠きを追ふ期は、民の德厚に歸す。扨も羽柴筑前守秀吉は、大阪に在陣して有けるが、同年九月、上洛して今度は紫野大德寺において、亡君信長公の御葬式を營むべしと議せられける。是秀吉が深き思慮より出たり。されば秀吉より使節を以て、右大臣御葬送の儀を相觸らるゝ人々には、北畠中將信雄卿、神戸侍從信孝卿、柴田匠作勝家、佐久間玄蕃頭盛政、瀧川左近將監一益、池田勝入齋信輝、惟住五郎左衛門長秀、前田又左衛門利家、佐々陸奥守成政、森勝藏長一、中川瀨兵衛淸秀、高山右近長房、鹽川伯耆守國滿、筒井順慶、細河幽齋父子、其外不破、金森等を首、小田家の恩を蒙りし者は、大身小身に拘らず悉く是を知せ、外樣の諸侯には、毛利右馬頭輝元、吉川駿河守元春、小早川左衛門督隆景、上杉彈正景勝、南條、小鴨、三好等も各使者を以て相告る。去程に、北國に有りし柴田勝家は、秀吉先君の葬禮を營むに事よせ、天下の諸侯を會せしめ、己が威勢を顯ん計略なりと知りければ、心に屹と謀計を生じ、今

繪本太閤記 四篇第十一之卷 目錄

秀吉紫野大德寺營葬禮
織田家舊臣燒香爭順列

し、京都に暫く在陣して、上下の政道を執行はれける。然るに當月二十一日は、故右大臣御父子の四十九陰に當りければ、本能寺にて追福の佛事執行すべしとて、兼日より申し渡されけるは、此本能寺は、先君御自害の跡なれば、織田家に於て不吉なりとて、京極通り押小路にて、替地を賜り、假の本堂を營みて、前後七ケ日の間、日蓮宗十五本寺の僧達、法華經一千部讀誦し、秀吉より米千俵、鳥目一萬貫寄附し申され、其外設齋萬事心を附られ、首尾よく佛事終りけり。滿齋の日、細川刑部太夫藤高、同息與八郎忠興、追善の爲とて、本能寺の假屋にて連歌興行あり。此費悉く細川父子是を營む。公家、門跡、武家、僧俗、歌道に志ある者、悉く來會す。此時筒井順慶も出席して、香奠として金子百兩、本能寺へ寄附せしむ。其發句に、

墨染のゆふべや名残り袖の露　藤高

魂まつる野の月の秋風　聖護院　白

國有りしは、勇々しかりける行勢なり。佐久間玄蕃是を見て、あな夥しの秀吉が手配かなと、兼ての計略悉く相違し、今は施すべき謀も有らざれば、すご〳〵清洲へ立歸り、勝家に斯くと物語れば、柴田も「案に違ひたる秀吉が結構や。斯る恐しき筑前守、生置ては大患なるべし。彌工夫を廻らして、秀吉を亡さん」と、日夜計議を成しにける。

○本能寺追福連歌

柴田匠作勝家、秀吉を亡さんと、種々謀計を構へぬれど、天性怜悧の羽柴筑前、いかでか勝家が計略に落入んや、事なく江州へ歸國せられければ、勝家彌心を苦しめ、晝夜、秀吉を害すべき計議のみなり。時に同月十五日、清洲の城を打立て、北國へ赴かんとて、先猶子柴田伊賀守勝豐をして、江州長濱へ遣し、秀吉より城を請取り、則長濱に在城なさしめ、秀吉の押へとなし、上方筋において、我に親しき大名を彌親しみ交を厚くなし、羽柴に恨ある輩を懐け置き、佐久間、前田、不破、安井等を相具し、北陸道へぞ下りける。然る上は、羽柴筑前守が威光日々に盛んにして、惟住、池田、筒井、中川、高山等をはじめとし、近國の大小名、おのづから羽柴の下風に隨ひける。去程に筑前守は、同月十六日、長濱の城を柴田伊賀守に引渡

云じに違はず、連綿と軍兵續き、鎗を伏せ太刀を鞘拔き、鐵炮を構へ、佐久間が兵を見て起り立たんず氣色をなす。さしも強勇の玄蕃頭、あきれて更に進み得ず、急度心に思ふやうは、斯迄大勢を伏て、秀吉を討取んと計る者は、西國の毛利か、但は四國の長曾我部なるべし。我軍兵を人違して取込みなば、柴田の恥辱、羽柴の幸、此道を退いて、秀吉が通らん時遠方より是を伺ひ、此勢どもが行跡を見て、其上に手術有るべし、秀吉たとへ天狗の通を得たりとも、斯る大勢埋伏して討んとせば、遁るゝ事ある可らず、人の手を借て渠を討ば、此上の幸なしと、田の中を傳ひ、畦道を經て、十町計東なる山手の方へ退き、爰にて樣子を窺ひける。夏の夜の短き十三夜の月西に傾き、東雲の空朗に明渡れば、遙に千生瓢簞の馬印、高く朝あらしに飜り、秀吉が上下の兵三百餘人、前後を圍うて靜々と歩せたり。佐久間玄蕃頭是を見て、すはや、秀吉が伏兵に圍るを見物せよと、六百餘人の軍兵ども、三丁計も先へ進み、あはや伏兵の起るらんと、息を詰て見る所に、彼埋伏したる軍勢は、秀吉が敵ならず、加藤虎之助、福島市松、片桐助作、脇坂甚内、糟谷助右衛門、平野權平、石川兵助、大谷慶松、小西彌九郎、淺野彌兵衛等を首とし、羽柴の勇士數を盡し、手勢々々を引圓め、路上の警固嚴重に、次第々々に勢重り、江州に入られたる時は、其勢一萬三千人、旌旗雲を凌ぎ、鎗刀日に映じ、威風を拂うて入

兵を埋伏せんと、爰よ彼所と見巡る所に、怪しや何れの勢とも知れず、百騎餘り、早先立つて理伏せり。玄蕃更に心得ず、躊躇して見合せけるが、何者の勢にもせよ、咎められては大事の妨げ、是より先に伏べしと、三丁計急ぎけるが、不思議なるかな、爰にも五十騎計の伏兵有り。こはいかにとためらひけるに、彼伏兵の中より兵士一人走り出でて、「何者なるぞ。我勢を伺ふは胡亂なり」と咎めたり。血氣の盛政、惡くき奴かな、討散さんと思ひしが、いやいや大事の前の小事なりと、是もうち捨て先へすゝみ、又一丁程行過て、其邊を窺ふに、奇なるかな、又此所に百騎餘りの勢隱れ居たり。玄蕃爰において甚だ怪しみ、心利たる士卒をえらび、行先を窺はすに、或は百騎、又は五十騎、七十騎、爰もかしこも伏兵にて、其勢幾ばくといふ限りなし。士卒大に肝を潰し、馳歸つて申しけるは、「此街道の兩邊には、行先もいく、伏勢絶る事なく、いづくを果とも見定め難し。其軍兵のおびたゞしき事、幾萬有りとも計知られず。あな怪からずの伏勢や」と、大きに恐れて注進す。佐久間更に不審はれず、「何者が斯くのごとくおびたゞしく勢を伏置きしや。これは羽柴筑前守が歸國の街道、外に恨る人ありて、秀吉を討取らんず結構なるか。何にもせよ、我術行はずんば歸るまじ。さばかりの伏兵なりとも、長濱迄は續くまじ。思ひ設し事なれば、先へ行越し待べし」と、六百餘人揉にもんで急ぎけるに、斥候の士卒が

○佐久間玄蕃頭爲㆑害㆓秀吉㆒

清洲在勤の諸侯、太夫、幼君御遺跡調ひし上はとて、思ひ〳〵に御暇申上げ、己が居城へ引取りける。柴田匠作勝家は來る十五日發足の旨相定め、とり〴〵旅行を營みける。羽柴筑前守秀吉は、十三日歸國すべしと、北畠、神戸の兩卿、柴田勝家へも申達し、既に用意に及びける。時に柴田勝家又も佐久間玄蕃頭を近く招き申けるは、「扨も此度羽柴筑前守を殺さんと、さまざま計れども、渠猿智慧を出して、遁れ得たり。詮ずな所、秀吉を生置ては、我心中穩ならず。明十三日、秀吉當地を發足し、長濱へ立寄り、城を開て我に與へ、然して本國播摩へ歸る成ん。汝逞兵を引率し、今宵より秀吉が通行すべき街道に埋伏し、ぜひを云せず討殺せよ。たとへ從者は遁すとも、秀吉さへ殺しなば、我心安かるべし。仕損ずる事ある可らず。急げ〳〵」と下知すれば、佐久間玄蕃頭畏り退いて、秀吉が出立の勢を伺ふに、纔に三百餘人なり。玄蕃心安しと、一倍の軍兵六百餘人を勝り出し、十二日の暮過より、清洲をひそかに打立て、街道筋へ急げる。羽柴筑前守秀吉は、十三日の朝寅剋に清洲を立ち、三百餘人の手勢前後を圍み、長濱さして出でられけるは、危りける次第なり。時に佐久間盛政は、清洲の城下一里計去て、軍

のごとく垢を磨せ給ふ。彼癩人后に向ひ、我腫物痒くして忍びがたしと、后爰において、口を附て彼癩膿を吸給ふ。此乞食悦びて湯に入ると見えしが、忽ち光明を照し、金色の佛體と化して飛去り給ひぬ。此后ほとけの敎、後生の爲に、さしも尊き皇后の御身にて、癩人の膿血を吸給ふさへ厭ひ給はず。是他なし、佛教を心實に尊み、我身を捨て勉め給ふなり。天子皇后すら猶かくのごとし。今秀吉の身に於る、頼み奉る主君に後れ、天下いまだ定まらず、西に毛利三家あり、東に北條氏政あり、北に上杉景勝、四國に長曾我部元親あり、當家の危き事、風の前の燈に等し。然るを四方の敵國より、いまだ軍を出さざるは、匠作をはじめ惟住、池田、不肖に候へども某等、幼君を補佐する故によれり。今匠作の心にたがひ、我と戰うて相死せば、織田家の柱石忽ちに崩れ、四方の敵徒一時に起り、さしも先君の始め給ひたる大業も、爰に空しく成りなん事、秀吉が身命にかへて悲しみ思ふ最上なり。況や匠作は織田家の大老、匹夫よりなり上りし秀吉が、足腰を撫摩りたりとて、恥辱とは思ひもよらず。我は只當家相續の事のみ思ひて、身の恥を思ふに暇なく候」と申されければ、勢込みし佐久間玄番頭、空寢入せし柴田匠作、池田、惟住、前田、中川、その餘の諸士も一同に、實に理なる秀吉が心體やと感涙を落し、暫く言葉はなかりけり。




光明皇后の故事

勝家も、餘の不禮、傍若無人、一座の諸士の思はん方も恥かしく、空寢入して居たりける。秀吉頓て手を止め立ちて元の座に著ば、血氣にはやる佐久間玄蕃頭、秀吉の餘り堪忍強に腹立し、秀吉の膝元へどつかと居り、「貴殿只今のありさま、某若年ながら其意を得ず。たとへ匠作の望にもせよ、當時足下は何人ぞや、播州一國一城の主、兼ては中國の探題として、一方の惣大將ならずや。然るに人に媚諂ひて脚腰迄撫摩るとは、言語に絶たる事共なり。某を足下になさば、たとへ此場にてずた〳〵に切裂るゝとも、同輩の足腰を撫摩る事は得致さず。是を以て、貴殿を伺ふに、輕薄を面とし、內心は深き大望有りと覺えたり。今天下の武將は、二歲にならせ給ふ三法師秀信卿、其大老の數に列る羽柴筑前守、人の按摩に雇はれては、天下の政道判斷は心元なし。若輩の某斯る失言、いまはしと思ふ心あらば、尋常の勝負仕らん。いかに候、秀吉」と、切刃を立て爭ひかゝるを、大膽不敵の羽柴秀吉、微笑して答へて曰く、「古へ人皇四十五代、聖武皇帝と申す天子御座ましける。其御后佛道を歸依し給ひ、御身より光さしたるにより、是を光明皇后と稱し奉る。此后大願を發し給ひ、湯殿を立て施浴をなし、后自一千人の垢を磨らせ給ふ。然るに九百九十人を終り、今一人の時に至て、癩疾の乞食來り、肥肉こと〴〵く爛れ、膿血外に溢れ、其臭氣忍ぶべからず。然れども后是を厭ひ給はず、かた

御父子の中陰も勤めたき志は深かりけれど、斯る騷動の折節なれば、久しく滯留かなひ難く、近日歸國すべしと、是も用意に及びける。七月十日、柴田匠作諸將を會して、歸國の暇乞を成し、此日は勝家面を和らげ、相和して酒宴を成す。是によつて、一座の面々安堵して、快く酒酌かはし、やゝ興を催しける。勝家は大盞にて引受け〳〵、いたく飮て大醉し、肱を枕とし臥けるが、暫く有て目を開き、痿たる舌にて、「羽柴筑州は何處におはす」と云ふ。秀吉傍にありて、「是に候」と申さる。匠作、秀吉を顧みて申けるは、「二十年前早二昔、貴殿木下藤吉郎たりし時、我按摩を賴みたりし事あり、巧者の撫方今に忘れず。我頃日の積鬱にや、酒後甚だ身内だるし。貴殿の按摩所望なれど、今は大身羽柴筑前守にておはす程に、按摩を賴んも氣の毒なり。玄番頭いかゞ思ふや」と云ふ。玄蕃、秀吉に向ひ、「匠作の貴殿の按摩所望し給ふ。はや〳〵揉で進ぜられよ」と云ふに、一座の諸將肝を潰し、こは不怪の匠作が失禮や、又もや騷動疎ましと、眉をひそめて居たりけゐ。秀吉更に怒れる顏色なく、「拙者も久しく導引致さず。いかゞ有るべきや心元なし。其上酒に堪ざれば、日來の手練も出申すまじ。然共大老の命、辭退せんも無禮なれば、いで捻で參らせん」と、少しも恥らふ氣色もなく、自若として肩衣脫ぎ、肩より腰、足の端迄揉給ふ。池田、惟住そのほか同席の諸士顏見合せ、あきれにあきれて言葉なし。さしもの

十萬石を領し、岐阜に在城あり。羽柴筑前守秀吉が新領丹波一國、柴田修理進匠作勝家新領江州長濱、池田父子三人に新領大坂、尼ヶ崎、兵庫十二萬石、惟住五郎左衛門長秀は、若州幷に江州の内、志賀、高島兩郡、堀久太郎秀政は江州佐和山、其外瀧川左近將監一益に五萬石、蜂谷兵庫頭頼隆に三萬石、各是を得替し、又は居ながら加増せしめて領知とす。就中秀吉、長秀、勝入齋は、今度光秀退治の軍功によつて、其配分他人よりも多し。是衆議の上の定めなれば、柴田、瀧川等心に染ずといへども、又強て拒み難し。筒井順慶は今度の戰功拔群なりとて、三法師秀信殿より駿馬金帛を賜り、和州一國安堵すべき旨命じ給ひ、順慶は大和國へ歸りけり。

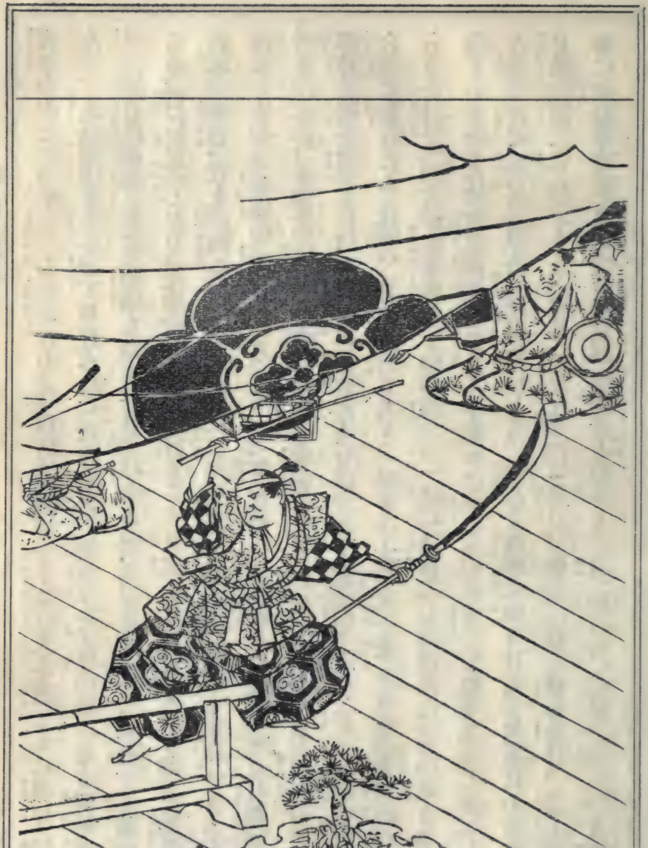
○秀吉忠言令﹂感﹂諸老臣﹂

去程に織田家の家督相定り、諸國の闕地配當も濟み、暫く世上穩なりければ、銘々持國へ歸るべき催を成す。又佐々陸奥守成政は京著の後、病惱甚しく、醫療を加へ休息し、度々の會合にも預らず、漸此頃平愈しければ、柴田、佐久間、前田等と談じ、北國の事も心元なく、六月二十七日、兩亡君の墓に詣でて、二十八日、北國の人數を預り、北陸道へ赴きける。取譯柴田は北國の藩鎭として、上杉の大敵有り、瀧川も關東の管領北條の强敵に對すれば、故右大臣

といふ。秀吉立て、臺に載せたる大根を挾んとす。匠作是を止めて、「否我所望する核は食物には非ず」秀吉答へて、「亡君の月辰なれば謠曲歌舞も憚あり。いかゞ仕らん」と有りけるに、匠作の曰く、「足下の領地、江州長濱五萬石、我年來望あり。只今肴に與へられよ」といふ。秀吉些疑機せられけるを、玄蕃頭盛政又進んで、「今匠作に核なくば、足下の命に害有らん」と刀に手をかけ詰寄れば、驚破事こそ出來たれと、池田、惟住、前田、中川、不破、原、安井、筒井の面面膝を立て、雙方に目を配り、息を詰て居たりける。秀吉莞爾と笑うて、「我核に匠作の首をさへ賜るべきよし、五萬石の地は何より以て安く候。併長濱は、我淺井長政を追伐の功により、先君より賜ひたる一所懸命の地なるが故に、暫く是を疑機したり。されども大老の御望、豈辭する事有らんや。潔く送り申さん」と云ふ。柴田、佐久間先當座の禮儀に快く、「然ば長濱を永々賜るべし」とて、殘りし酒を皆飲みて、扨闕國配領、衆議に及び、功に隨ひて定むる事左のごとし。先信忠卿の長子三法師君、三歳なるを守立て、三郎平秀信と改め、安土の燒跡に假の御所を造營し、前田玄以法印、長谷川丹波守を附人とし是に居奉り、近江の内三十萬石を以て御厨料とす。北畠中將信雄卿は、三法師秀信卿の後見、陣代として、尾州淸洲に在城あり。尾張、伊賀、北伊勢、近江の内、新古の領地合せて百萬石、同後見神戸侍從信孝卿は、美濃一國五

秀、羽柴秀吉と某の四人は、此後水魚のごとく相親しみ、天下の政道を相談ずべき旨、互に其覺悟ありて然るべし」とて、大なる盃に滿々と酒を酌せ、さらりと呑干し、秀吉にさして曰く、「事新き申事なれ共、我若年の昔より先鋒を志し、强きを破り堅きを碎き、一身疵を蒙らざる所もなし。是忠を盡さんと思ふのみなり。然るに思はざりき、兩君他界まし〳〵、今は我露命も聊惜む事なし。如何や秀吉、足下の肴に我首を與へ申さんか」と云ふ。秀吉四相を悟る人なりければ、柴田が我を殺さん工なりと知り、苦笑して靜に答へけるは、「今日は亡君月忌の追福なるに、織田家の舊老匠作の首を、新參の某に賜らんも、過分の儀に候べし。只今よりは幼君を守立て、國家政道の評議こそ供養たるべく候」と申す。惟住、池田も何樣銘々相和して、「御家督堅固に相續の計こそ、あらまほしう候」とて、暫く盃を巡らしけるに、また匠作秀吉に向ひ、「筑州先其盃に三盃を飲で我に與へられよ。我も又三盃を呑べし」と。秀吉答て、「我元來下戸にして、數盃を飲に堪ず。且は匠作へ盃を返さん事も恐れ有り」と申されけるを、佐久間玄蕃頭づつと出で、「匠作の命を返すこそ恐れなれ。呑で返すに何の恐れか有べき。某酌取り酌申さん」とて、推て三盃酌にけり。秀吉止む事なく勉めて是を飲乾し、柴田へ呈す。匠作其盃を取て、同く玄蕃頭に酌を取せ、一盃受て其半を飲殘し、「筑州肴致されよ」

舊老の中にて、尤秀し英雄なり。柴田勝家、瀧川が上著せしを聞て大に喜び、相計て秀吉を亡さんと、或夜瀧川を私に招て申けるは、「此度右大臣御父子、不慮の儀に附き御他界あり。御跡目、足下の婿君信孝卿をこそ相續し給ふべき大功有るを、秀吉是を拒み、幼君三法師殿を御家督に取立る事、既に治定したり。是秀吉が深き謀計とこそ見定めたれ。足下信孝卿と親族の因もあれば、旁當家の御爲、我と計略を合せ秀吉を討亡し、先君興業の遺跡、永く退轉せざらんこそ、互に願ふ所ならずや。貴殿の心底承るべし」と、席を進んで物語るに、瀧川左近打點頭き、「貴察の如く、秀吉が本心、此度の大變を幸に天下を掌握せんと計は、我も疾より推量せり。併秀吉姦智邪謀の深き男なれば、急に渠を亡さんとせば、却て猿面冠者の計に落入り、足下も我も弔合戰に後れたるを嫉み、秀吉を計りしと、天下の人の笑を蒙りなん。先當時の有様にては、緩々と事を計ひ、秀吉が惡逆露るゝ時を待て、一時に誅伐なし候はんに、何の難き事か有らん。足下と我と心を合さば、彼筑前守を亡さん事難きに非ず。心を安じて時を見合し候べし」と云ふ。柴田是を聞て甚だ悦び、兩人閑談數刻にして、別れて旅宿に歸りける。然るに七月二日は、故右大臣、月忌の辰に當れりとて、諸將悉く淸洲に集り、靈前に拜し齋を設け、然して後、柴田匠作諸將に向ひ申すやう、「今日は闕國の地ども割分ち、各配分可レ然候。夫につき池田勝入、惟住長




瀧川一益軍中ヌ猿樂をみる図

率し、小田原を出て武州甲山に出陣す。先陣松田尾張守、大道寺駿河守、芳賀伊賀守等、氏政に先だつ事、坂東路五里を隔つ。武州鉢形の城主北條安房守三千人を率し、甲山の手合として、倉賀野川を渉し、瀧川勢と合戰をはじむ。瀧川の先陣は、篠岡平右衛門、伴田治右衛門、瀧川文之丞、堀田武介、富田喜太郎、牧野傳藏、日置五郎左衛門等鎗を合せ、大きに戰ひ勇み討て、北條安房守をさん〴〵に追まくり、勝鬨を揚たる所へ、甲山の先陣松田、芳賀、大道寺等、二千餘人を神奈川に伏て、三千餘人にて瀧川勢に向ひ戰ふ。瀧川が兵士勇み進んで相戰ふに、北條方の伏勢起り立つて四方より攻討ば、瀧川方利を失ひ、伴田治右衛門、篠岡平右衛門討死す。一益自身敵に當り、烈く戰ひ、終に相別に成つて、瀧川は倉賀野の城へ引入りたり。其夜國人等に暇を告げ「今日の合戰某に於て大慼限りなし。我上國の後は、皆北條に屬し、居城に安堵致さるべし。武門の禮儀是迄なり」とて、人質を返し遣し、終夜酒宴を催し、猿樂を興行し、一益自身鼓を打て、其勇を軍中に示す。翌十二日、倉賀野の城を出でて笛吹峠を打越え、追分に宿陣す。十三日、信州小室に至て、三日滯留して人馬の足を休め、夫より道を急ぎ上國し、十八日、勢州に著しけるに、光秀早く滅亡しける由聞ければ、爰に又暫く滯留し、二十一日清洲に參じ、三法師殿を始め舊老の諸士に參會す。此瀧川一益は神戸信孝殿の舅にして、當時織田家

繪本太閤記　四篇卷之十

○織田家功臣關國配分

其翌二十一日、瀧川左近將監一益、淸洲に參著す。是は去る四月、故右大臣の台命によつて、關東の管領と成り、上州厩橋の城にして、相州小田原の城主北條氏政と合戰す。然るに今月七日、上方の飛脚到著して、信長公御父子薨御の事を告ぐ。一益愁涙を押へて、逆臣光秀を退治のため、北條を打捨上洛せんと企つ。是によつて上州の諸將をあつめ、京都の變を語つて、諸士の志を問ふ。諸士皆一益が至剛に服し、銘々人質を獻じ、二心なきよしを示す。一益大きに喜び、上國の用意をなしけれども、北條氏政當時關東において並なき大敵なれば、快く一戰し、勇威を鄰國に示し、然して上國すべしとて、同月十日、手勢一萬餘人、幷に國人箕輪の城主內藤大和守、新田の城主由良信濃守、松山の城主上田安獨齋、忍の城主成田下總守、館林の城主春尾新五郎、嶺の城主小幡上總介、倉賀野の城主倉賀野淡路守、深谷の城主上杉左兵衛尉等一萬餘人、都合其勢二萬餘人厩橋を立て、翌十一日和田に著陣す。北條氏政是を聞て、自大軍を引

繪本太閤記 四篇第十之卷 目錄

織田家功臣闕國配分
秀吉忠言令レ感ニ諸老臣一
佐久間玄蕃頭爲レ害ニ秀吉一
本能寺追福連歌

り、過言をなせども、今の言皆大老匠作への返答なり。匠作は故右大臣の親戚、汝が爲に主人と同じ。不敬、失言宥しがたし」と、刀追取立上るを、一座に並居る池田、惟住、中川、高山、前田、筒井、兩人の中を押隔て、中にも筒井順慶は老功の武者、怒る佐久間を押宥め「畢竟今日の會合は、相互に忠心を磨き、織田家相續を計るにあり。大臣の面々、爭論に身命を果し候はんは、全く先君へ不忠にてこれ有るべし。つら〳〵愚意を以て案ずるに、信雄殿、信孝卿、日頃其中睦からず。今兩人の内、いづれを世繼に定めたりとも、必ず亂を生じて、當家長久の計にあらじ。幼君三法師殿を御跡目と定め、信雄、信孝兩卿を以て後見と成し、柴田匠作、池田勝入、惟住長秀、羽柴秀吉の四人、大老職を司り、天下の政務大小事によらず相談じ、宜に附て執行ひ給はゞ、將に天下平定し、織田の家、金石よりも固かるべし」爰において、一座の諸將一同に尤と同じ、此儀に決定したりける。されば柴田、佐久間も、兼ての計議相違しけれど、一統評議の上なれば、強て申すべきやうもなく、御家督は三法師君に定り、北畠、神戸兩卿を後見とし、柴田、池田、惟住、羽柴を四老と成し、一座大名、小名各此趣相違なく承知奉る旨、誓紙を認め、差出し畢ぬ。猶闕國、闕地各衆評の上、配當せしむべきとて、其日の評議は果にけり。

分天下の權柄を握り、北條時政が行ひを成んと謀るは、織田家の叛賊、遮て御跡目を支へなば、玄蕃頭計ふべき所存有り」と、鬼とも組ん佐久間盛政、摑挫がん有樣なれど、秀吉更に騷ぐ色なく「こは思ひよらざる事を承る物かな。先に大老新古貴賤を論ぜず、志を申すべき旨仰せられ候故、某が所存を申出したるのみなるに、幼君を取立て、某天下の權柄を掌にせんかとの疑念、甚だ迷惑千万なり。たとへ幼君三法師君、御世繼に定り給ふとも、上に大老匠作あり、同列の士に池田、惟住、瀧川、前田、佐々、中川、高山、森を始とし、舊臣古老數を知らず、某權を恣に成したりとて、豈是を其儘に差置んや。況や某氏もなき匹夫なりしを、故右大臣の厚恩を蒙り、不思議に一方の將を命ぜられ、只今に及びし身の、いかんぞさる大望を心に思はんや。且又山崎の合戰においても、信孝卿をはじめ參せ、此座に在る諸士池田、中川、高山等、皆某を勸めて主將たらしむ。某再三辭すれども、衆人皆敢て許さず。所詮今度の合戰、人々君父の仇を報る弔合戰なれば、速に討て、右大臣の御憤を散ずるにあり。兎角内談に日を費し、光秀五畿内を占め根元を堅くせば、容易に退治成し難し。二葉に爪を切ずんば、斧を用ゐるに至らん。爰を以て、諸士の詞に任せ、某假に主將と成り、急戰を催したり。獨立せん志にあらず」と。佐久間玄蕃頭彌怒り、「無禮なり秀吉、我を若年なりと侮

臣御父子を害し、人を懐ん爲に、五畿内は云ふに及ばず、大小の諸侯、陪臣、下郎に至る迄、信を以て是を愛し、仁を以てよく恵む。爰を以て人心皆光秀に服し、將に天下を掌に握んと欲す。然るに、羽柴筑州只一人上國し、弔合戰を營むとも、誰か同志して命を戰場の塵と成さんや。先君の公達信孝卿、主將と成り給ふを以て、織田家恩顧の大小名命を捨て戰ひ、光秀を亡したるは、全く其功信孝卿一人にあり。然るに筑州、惣大將の職を奪ひ、主人の公達をさし置き自ら采を取て、自分の功に備へし心底、甚不審し。此事は御世繼定りし上、諸士一統の議論も有るべし、御家督に於ては信孝卿たるべし」と云ふ。羽柴筑前守此時席を進んで申されけるは、「大老の判斷理なきにあらずといへども、天下の御遺跡は私の事にあらず、公道を以て論ずべき事なり。信雄卿、信孝卿御兩君は、故右大臣御在世の時より、二男三男たるを以て、既に北畠、神戸の他家を相續し給へり。今信長公の嫡々、信忠卿の長男三法師君、幼稚なりといへども爰にまします間、御跡目の事に附ては、論ずるに及ばざる所なり。其嫡孫を捨て、他家相續の信孝卿を御跡目に立ん事、理に的らざるにて候はんか」と、憚りなく申されける。時に佐久間玄蕃頭進み出て、秀吉をはつたと白眼み、「新參の羽柴筑州、大老たる匠作に詞をかへし、剰へ理に當らずと誹謗せるは、何事ぞや。其上、水上の泡に等しき幼君を御世繼と定め、自

天下を掌握せんとする謀略、光秀に増る事十倍なり。我苟くも織田の舊臣、親戚の數につらなり、奸臣を亡し、先君の世業全くせずんば、何を以て大老の任に當んや。然ども今、故なくして彼を殺しなば、山崎の功を偏執して、罪なき秀吉を亡したりと、諸士の思はんも口惜し。さればとて此儘に捨て置ば、織田家の世業悉く秀吉に奪れ、其時いかに謀るとも叶べからず。我今忠心を先にし、私の意を後にし、諸人の論を厭はず、席上にて秀吉を殺さんとこそ覺悟を究めて候へ。然る上は、先君御家督評議の席において、秀吉を恥しめん。渠が怒るを待ちて、汝忽ちに摑み殺し、我心を安くすべし」と、盛政委細畏り、「秀吉を殺さん事、鼠を殺すより安く候。重ねての參會には必ず斬捨候はん」と、密談數刻に及びけり。其翌日、又御跡目相續の儀を談ずべしとて、織田家大小の家臣、淸洲の城に集り評議を成す時、柴田匠作異儀を改め申けるは、「先より申通り、當時戰國の時、武將の御家督定まらずしては、一日も天下靜なるべからず。今日の會合は、何れにも御家督を相究むべきの間、新古貴賤を論ぜず、各所存を申談じ、宜敷に附て議論有るべし。先某が所存は、神戸信孝殿を御世繼に定むべし。其故は、信雄卿を兄とは稱し奉れども、實は左にあらず。それは兎もあれ、山崎の合戰逆臣光秀を亡し、先君の御憤りを散じ奉りしは、是皆信孝卿の力なり。羽柴筑州自分の功とばし思はれそ。光秀、右大

門といふ者、清洲に參じて言上し、遲く聞し召れし故に三男と定めらるゝ。是によつて、信孝常に鬱憤を指挾み、我次男たりといへども、不幸にして信雄に越され、三男と成しこそ安からね、あはれ變異の事もあらば、我信雄に越て上に立たんと思されける事年久し。然るに今度山崎の合戰、亡君の仇を報ぜらるゝ事、一方ならぬ大功なれば、天下の武主たらん者は我なりと思しけんも宜なり。されども信雄卿は、先君の兄と定め給ひし御事なれば、又是を誰か拒ん、弟に世を繼すべき謂なしと、爰を以て評議果ず。其中にも銘々所存有て、柴田、瀧川等、信孝卿を立て武將とせんと計り、蒲生、池田等は、信雄卿を遺跡に著んといふ。抑柴田匠作勝家は、故右大臣には妹婿にして、且累代の重臣なれば、老功といひ、織田家に於て、其右に出づる者更になし。然るに、北國は道遠く、此度光秀誅伐の合戰に後れ、筑州秀吉主敵を亡し、威を萬士の上に高くし、且天下も併呑するの機あるを見て、惟任光秀に續て、織田家の叛臣、我家の蠹毒は秀吉なるべき間、おのれ筑前守討亡さで有るべきやと、深く是を思慮しける。是に因て、甥加州金澤の城主佐久間玄蕃頭盛政を密に招き、囁きて申すやうは、「織田家幕下の諸士數多なりといへ共、我に詞を返す者は、獨り羽柴筑前守のみ。山崎の功を以て、威勢を諸士の上に震ひ、其行狀尊大なり。羽柴が心腹、元來我よく是を知れり、表に忠信仁義を錺り、裡に大望を企て

家、池田勝入齋信輝、惟住五郎左衛門長秀、外樣の諸侯は筒井順慶、細川刑部太輔、中川瀬兵衛、高山右近、鹽川伯耆守等を始めとし、信長公恩顧の大名小名、前田、佐々、森、金森、不破、堀の面々悉く參會し、右大臣家御家督の事は、天下一統の武主と仰ぎ奉る御事なれば、正道に著沙汰有るべき旨、樣々評定有けれ共、群談區々にして一決せず。北畠信雄卿は信長公の二男にましませども、今度光秀誅伐の合戰に洩れ、先君へ對し不孝と云ふべし、神戸信孝卿は秀吉と倶に光秀を亡し、自ら手を碎て光秀を誅し功有と雖も、三男にして二男を越ゆる儀なければ、是も又不可なるべし、其上信雄、信孝の兩將、故有て兄弟常に不和なり、若一人を武將と仰ぐ時は、必爭論出來て、天下亂と成るべしとて、諸臣心々の趣意を述て事果ず。其來由を尋るに、故右大臣の御臺所は、齋藤入道道三が息女なれ共、御子なきにより、妾腹に出來させ給ふ若君を、御臺所の養君として、嫡男たるを以て、信長公の御代繼と定む。是則ち中將信忠卿なり、實母は尾州生駒氏の女なり。其翌年、又公達二人生れ給ふ、一人は信雄卿にして、是も信忠卿と同腹、生駒氏の女の生給ふ所なり。是によつて、家臣等崇敬して二男に相定めらる。今一人は坂氏の女の腹にて、信孝卿是なり。此母儀、凡下の人なるが故に、熱田の神司岡本某が宅にて出生し、信雄卿より二十餘日も先達て生れ給へども、遙程經て、岡本が息太郎右衛

秀、高山右近、鹽川伯耆守、筒井順慶等、皆清洲に參著す。

○織田家舊臣等評㆓定御遺跡㆒

尾張國清洲の城は、舊右大臣信長公の居城なりしが、信長公濃州岐阜に移り給ひ、清洲を中將信忠卿に讓り給ふ。其後天正四年、近江國安土山に城を築き、右大臣是に居城し給ふにより、又岐阜をも信忠卿に賜ひけり。是によつて、中將岐阜の城に移り、清洲には織田信包を城代として守せ給ふ。然るに今年六月二日、前田玄以法印、信忠卿の遺命を蒙り、京都を遁れ岐阜に到り、幼君三法師幷に御簾中を誘ひ、清洲の城に移らせ奉り、是岐阜の城は、中將の御居城なるを以て、光秀より討手の向はん事を恐れてなり。然るに羽柴筑前守秀吉、西國より馳登り、逆臣惟任光秀を山崎の一戰に亡し、直に京都の仕置を令し、亡君右大臣の御遺跡を定めんと、三法師のおはします清洲の城に參向有り。北畠中將信雄卿も、右大臣の御臺所、蒲生右兵衛太夫秀賢と倶に來り給ひ、父兄の御跡目、天下の武將に備はるべきは我なるらんと思しけるに、又三男神戸侍從信孝卿は、山崎表にて弔合戰をいとなみ、右大臣御父子の追福に備へたれば、信長公の遺跡相續せんは我なるべしと、是も急いで清洲に參じ給ふ。其外織田の舊臣柴田匠作勝

狂氣せしか、又虚説を申せしに究り、切腹致さば大なる幸、誠に望む所なり。虚説にあらず、切腹に及ばざらん事を憂るのみ」といひつゝ、外繋に立たる馬の湯洗するに、暫して前掻す。鬼頭馬の健盛なるを語りて、讃る事甚し。梅心歸りて此由を申上げ、「鬼頭更に狂氣に非ず」と申す。信雄卿こはいかにとて、猶信じ給はざる所に、其翌朝、諸方より早飛脚追々に、信長公御父子大變の次第を告來る。爰に始めて驚き給ふ事限りなし。扨都に馳登り、惟任を討て先君の仇を報ずべしとて、弔合戰の用意をせられけるに、元來勇氣なき信雄卿、今日よ明日よとて出陣延引し、六月九日、近江日野、蒲生秀賢と申合せ、倶に合戰を營まんとて、勢州土山まで出陣ありしに、伊賀國の一揆蜂起し、仁木入道友按が居城、池尻を攻る事急なり。友按加勢を信雄卿に乞奉る事頻りなり。是によつて、後詰として澤源太郎、秋山右近、芳野宮内、本田左京、天野佐左衛門、下村仁助等七千餘人、伊賀國へ發向す。爰において、信雄卿も土山に滯陣ありて見合せ給ふに、同月十四日、彼一揆原悉く追拂ひ、御勢土山迄歸陣せり。然間に賊將光秀、山崎表において秀吉が爲に滅亡し、京都靜謐に及びければ、今は上京しても詮なしとて、再び一揆原が殘黨を退治し、同月十九日、蒲生秀賢、故右大臣の簾中を同道にて、是も尾州清洲へ參會ある。其外神戸三七信孝卿、惟任五郎左衛門長秀、池田勝入齋信輝、中川瀬兵衛清

信長公恙なくましく〳〵て、某斯る大事の僞を申なば、日本の地には身を置く所有るまじく候」內藏介又曰ふ、「我今信長公御父子を御窺の爲上京致す所に、斯る大變これ有る上は、上京せんも無用なり。一時も早く立歸り、主君信雄卿へ申上ぐべし。然れ共半途にて足下に此事を聞たりと申共、信雄卿誠とはし給はじ。我と共に、長島へ來られ候はんや」安仲申けるば、「某直に參じ、信雄卿へ言上致すべきは厭ひ候はねど、貴殿は馬上、某は歩行、いかでか同じく參り著ん。某が脇差は、先年信雄卿より拜領致す所なれば、必ずよく見覺え給ふべし。此脇指を貴殿と差替へ、夫を證據に言上あらば、疑ひ給ふ事有る可らず。猶後より某も參上を遂げ、具に申上ぐべし」と云ふ。內藏介尤と同じ、互に脇差を取替へて別を告げ、內藏介は鞭に鐙を合せて、一參に長島さして馳戻る。其日の晩景、三十餘里を馳て終に長島に著ぬ。然れども此馬勞れず、誠に希代の駿足なり。扨信雄卿の御前に出でて其趣を申上ぐるに、信雄更に信ぜられず、脇差を出し證として是を申せども、猶々誠なりとし給はず、却て亂心ならんと怪しみ給ふ顏色なり。鬼頭今は詮方なく、「頓て注進これ有るべし」とて、己が宅に歸りける跡にて、信雄卿、梅心といふ茶人に命じ、鬼頭內藏介が宅を訪ひ、其體を覗しむ。此時鬼頭沐浴し、浴衣ながら梅心に逢て、「我が狂氣したるかと思召すにより、足下をして暗に窺はせ給ふならん。あはれ某が

鎗を提げ、諸卒を下知して切まくり〳〵、數ヶ所の合戰悉く討勝ち、寄來る一揆を追拂ひ、上方さして上りければ、猿ヶ馬場といふ所より、敢て跡を追ふ事なし。爰に長一國人の人質を悉く突殺し、終に虎尾を踏で長途を恙なく、六月十七日、濃州岐阜に來る。時に羽柴筑前守、早くも光秀を討亡しぬる由聞えければ、是も上洛して詮なしとて、同尾州清洲に集りける。爰に信長公の次男北畠中將信雄卿は、此砌勢州長島に御座けるに、去る六月朔日、御父信長公幷に御令兄信忠卿、京都迄御出陣の旨聞召され、御動定伺ひのため、家臣鬼頭内藏介を京都へ登せ給ふ。然るに信長公の笛の役に、伊藤安仲といへる者あり、藝道に長じたるを以て、常に信長公の寵を蒙り、此度も御供に召具せられ、本能寺の御本陣に宿しけるに、惟任光秀逆心を企て、不意に本能寺を取圍み、終に信長公を弑し奉る。伊藤安仲武士にあらざれば遁れ出て、山科の方へ迯行けるが、端なく信雄卿の使鬼頭内藏介に出合ひたり。安仲鬼頭を見て涙を流し、「貴殿いまだ知るまじ、信長公惟任日向守が謀叛によつて、本能寺において弑せられ給ひぬ。我等如き者迄も途方を失ひ、行衛も知らず迷ひ出でたり」と云ふ。内藏介これを聞き大きに驚き、暫く詞も出でざりけるが、餘の事に疑ひて申けるは、「當時日本の内に於て、信長公御父子を安々と討亡し申すべきや。汝僞を申すにてはなきか」安仲面を正しうして、「僞も事にこそよれ。今

大に利を得、光秀已下の賊徒、悉く誅戮し畢ぬ」と告ければ、勝家大に驚き、足摩して遲參を悔めど詮方なく、今は入洛しても用なしと、直に尾州清洲にこそ赴きけり。

○森勝藏長一上洛

去程に、大田切口へ向ひたる森勝藏長一は、去る頃國人の人質を取堅め、越後へ働き、飯室、野尻の道に敵の首塚築せ、景勝が居城近き關山迄切入り、三本杉に陣する所に、柴田勝家より右大臣家御父子御生害の由告ければ、取物も取敢ず、信州川中島の居城へ立歸り、伊奈の城主毛利河内守を相伴ひ、亡君の讐を報ぜん爲、早々上方へ打立んとす。時に信州の住人春日周防守等、長一に訴へけるは、「足下上洛せんとの企有ば、我々が人質を早く還し申さるべし。若し此儀同心これなきにおいては、我々兵を構へ上洛の路次を相妨ぐべし」と云ふ。長一是を聞て大に怒り、「汝等右大臣家の變を聞て、我勇氣たゆみたらんと思ひ、今其詞を發するならん。さあらば汝等十分多勢を催し、只今一戰し某を討取て、其上にて人質を取返すべし。我命の有らん限りは渡すまじ」と罵りければ、春日を始め國人共いかんともすべきやうなく、爰において、長一即日川中島を進發し濃州へ上りけるに、忽ち一揆發て道々に相遮る。長一怒つて自ら

是を見て佐々、佐久間の軍兵ども、得たりかしこしと取て返し、鬨を作て相戰ふ。上杉勢も踏止り、身命を惜まず乘越え〳〵、互に引じと戰ひしは、いつ果べきとも見えざりける。此時日も山の端にしづみ、宵の間の月雨雲に覆れ、太刀筋更に分ねども、雙方引じと爭ひしに、折しも白雨盆を傾くるごとく、篠を亂して降來れば、今日の戰ひ是迄なりと、物別れして三丁計引退き、互に陣を固めけり。勝家急に味方を下知し、おびたゞしく篝を焚せ、旗、指物を陣中に數多立置き、直に軍勢を驅立て、上方指て一參にこそ登ける。翌る曉天、上杉勢又鬨を作り押寄て戰を催せども、敵一人もなく、空しく旗のみを立てたりければ、諸卒大に腹を立て、又追懸けて討止んとひしめきけるを、直江山城守是を止め、「味方軍卒今は十分に勞れたり。此上に追討せば却て敗北を需むるなり。歸る軍は追ふ事勿れ、此儘に引取るべし」とて、討取る首九百餘級其所に切梟させ、本國へこそ歸りける。柴田勝家は辛じて上杉勢を透し、息をはかりに馳たりしが、京都の騷動、信長公御父子御生害の由、頻りに風聞有りければ、爰に五百騎彼所に七百騎の野武士ども、所々方々より出來り、勝家が軍を支へ上洛を妨げしかば、佐々、佐久間等驅散し〳〵戰うて上る程に、或は半日又は一日、國々にて日數を重ね、六月十八日、江州柳ケ瀨に著陣せしに、羽柴筑前守より飛脚到來して、「去る十三日、光秀と山崎に於て一戰し、

ぞ追たりしに、加越の國境にて、端なく柴田勢に追附て喰止たり。柴田が後殿佐久間玄蕃允斯と見るより、後備を先手に成し、鐵炮を打懸け防ぎ戰ふ。上杉勢何か暫しも猶豫べき、直江山城守、本條出羽守、齋藤下野守等、自鎗を上げて突かゝれば、我劣じと上杉の勇卒、得道具を打振り〳〵、喚き叫んで戰へば、佐久間も爰を破られじと、勇を震うて戰へども、京都の大變にて浮足に成りたる軍兵ども、さん〴〵に切立られ、佐々陸奥守が備に、なだれ懸つて敗走す。佐々成政、柴田伊賀守兩人取つて返して戰へども、越後勢の尖き鋒先に突立てられ、惣崩に成つて討るゝ者數を知らず。此時勝家は、旗本の勢三百餘人を引率し、衆軍を跡に殘し、只一人上方さして馳たりければ、佐々、佐久間等が、上杉勢に追討せられしも知らず、若狹國迄上りしが、佐々、佐久間等が早馬の使跡より追附き、事の次第を注進しければ、勝家大きに驚き、いかゞはせんと思慮するに、今事急なりといへども、衆軍を捨て我一人都に上りたりとも、惟任光秀尋常の敵にあらず、小勢の對陣討損じては、後代迄の恥辱なり。不如引返して上杉勢を打散し、衆軍を引きて上洛せんと、忽ち馬を乘かへし、後陣へこそは急ぎける。然るに上杉方は、追々馳來る軍勢加り、佐々、佐久間等さん〴〵に成りて迯來るを、横合より柴田勝家無二無三に突立れば、思ひがけなき越後勢、一同にばつと突しらまされ、四五丁計引きたりける。

勝家が魚津の陣所へ、濃州岐阜前田玄以より急使到來して、「昨六月二日、京都本能寺二條室町の城において、右大臣御父子、惟任光秀が叛逆により、御生害ましく〱畢ぬ、然れば、一刻も早く上洛ありて、逆臣光秀を誅伐有べき」旨告たりければ、柴田勝家、佐々成政、前田利家その外將士、軍卒大きに驚き仰天し、只闇夜に燈灯を失ひ、中流に楫を絶たる心地して、騷動する事斜ならず。大田切口の森勝藏、三國峠の瀧川儀太夫へも、早速使を以て此凶變を告ければ、何れも動天周章譬んものなし。時に、勝家諸將を集め申けるは、「信長公不慮の儀にて、逆臣の爲に弑せられ給ふ上は、我々暫くも此所に滯陣成すべからず。片時も早く馳登て、惟任を討亡し、君の御怒を報い奉らん。銘々其用意是有るべし」と、これに依て、越後[illegible]人の事は打捨て、俄に上國の用意とりぐ〱にて、上を下へと返しける。明れば六月六日の曉、佐久間久右衛門、同源六兩人に、五百餘人を督令せしめ、魚津の城に殘し置き、勝家一番に馬を馳て、都を指て登りければ、佐々、前田、佐久間我後じと、追立て〱備を亂して上りけるは、誠に希有の珍事なり。實にや好事門を出でず、惡事千里を走るとかや。織田家の諸將穩便に上洛せしかど、北越七州一時に此事隱れなく、上杉景勝是を聞て大きに悦び、「いざ上方勢の周章ふためき引行を、追かけて討取れや」と、直江山城守、本條出羽守、岡野左內等五千餘騎、備を亂し揉にもんで

豐前守、戸山、末盛の城代、其外十三人の大將等大きに怒り牙を嚙み、本丸へ攻込で、火花を散して戰うたり。河田豐前守は、斯有んとは兼て思ひ設けし事を、安々と謀られぬるこそ口惜けれ、いで最期の一軍快くすべしとて、敵中に切て入り、西より東へ追靡け、北より南へ馳通り、合ぬ敵と見る時は、鐙の端にて蹴て落し、毛色よき武者と見ては、眞向押附、揚卷の所を嫌はず切立薙立戰ひしに、敢て近寄る者ぞなき。されども其身も十三ヶ所深手を負ひ、三の丸へ引入りしに、吉江を始め軍卒、士將、五ヶ所七ヶ所痛手を負ぬ者もなく、今は是迄なり、自害すべしと、柴田專齋、佐々新右衛門尉兩人を一鎗に突殺し、皆一同に腹搔切て死たりける。是によつて、柴田、佐々等勝鬨を三度上げ、直に越後へ亂入せんと、いさむ事大方ならず。

○上杉勢追ニ討柴田勝家一

去程に、織田の軍將織田、佐々、森の面々合戰に勝利を得、勢ひ利刀の竹を破るが如く、不日に越後を攻崩さんと、其軍議とりぐなり。春日山には、上杉景勝六月四日歸城して、諸方の敗軍、味方存亡の時なりと、長臣直江山城守、甘糟近江守等を先として、多くの將士寄集り、大田切口をや加勢すべき、柴田が勢をや押ゆべきと、是も評定最中なり。然るに六月五日の暮方、

んも無念なり。流石世に名を知られたる我々が、命を惜み城を渡し、剰へ敵の謀計に透殺されたりと云はれんは、此身ばかりの恥辱かは、主君にも悪名を残すと云ひ、只々當城を固守り、矢種、玉薬の有らん程は防戰し、運盡なば太刀の目釘の續かんだけ、驅入て戰ひ、討死とこそ思ひ定めて候」と云ふ。是に依て、城中の將吉江織部正、同喜四郎、同常陸入道、中條越前守、竹股三河守、阿部右衛門尉、龜田小三郎、寺島、若林等の銘々、此議に同じ、右の趣を以て勝家に返答す。勝家再び使者を城中に遣し、押て申けるは、「城中の諸將、我々が謀計有らん事を危み、開城無之と覺え候。左候はゞ、當方より人質を遣し候間、心を緩て退去有るべく候」と申す。是によつて、又々衆將評定して、「敵方より人質を送り越す上は、別に仔細有る可らず。然るに於ては、一刻も早く春日山へ馳參り、君の御馬先にて討死せば、是ぞ誠の忠志なるべし」とて、既に開城すべきに事極りける。頓て、勝家へ斯くと返答しければ、勝家が從弟柴田入道專齋といふ者と、成政が甥の佐々新右衛門尉と、兩人を質として城中へ送りけるに、城將是を請取て、吉江河田を始め、城兵悉く三の曲輪へ窄入て、本丸を佐々成政にぞ渡しける。成政思ふ儘に敵を謀り課せ、本丸を請取と否や、忽ち鐵炮を打懸け、矢を放て攻立つれば、柴田勝家・佐久間盛政、同時に起り立て城門を打破り、内外より喚き叫んで攻討ければ、吉江織部正、河田

繪本太閤記　四篇卷之九

○魚津落城

翌六月二日、柴田勝家、佐々、前田等と計を定め、魚津の城の四面より、鐵桶のごとく取圍み、ゑい〳〵聲して攻立けり。城中の將士必死と覺悟し、矢玉を飛し、大筒を放ちかけ、命かぎりと防ぎ戰へば、上方勢大軍なりといへども、隍際へも近寄難く、攻惡でぞ見えにけり。勝家兼て謀を設けぬれば、引貝を吹いて諸卒を圍め、城中へ使者を立てて云入けるは、「今朝上杉殿當處を引取られ候。其故は、森勝藏長一信州より討て出でて、北國第一の切所を打破り、春日山へ亂入に及び候。是によつて、景勝ぜひなく此所を退かれ候なり。然る上は、旁此所の籠城詮なき事に候。此城を開渡し、春日山の後詰を成し、景勝の旗本へ一騎なり共加勢せられ候こそ、肝要の事に存候。能々思慮候べし」と申送る。城主吉江織部正、諸將を集めて評議しけれども、衆口區々にて更に一定せず。時に河田豐前守進み出て申けるは、「我々當城を明渡し、景勝公の旗本を見繼なんは、元來の本望なれども、敵將柴田、佐々等に謀り出され、暗々と命を失

繪本太閤記 四篇第九之卷 目錄

魚津落城

上杉勢追討柴田勝家

森勝藏長一上洛

織田家舊臣等評定御遺跡

龍が大功を立たる上は、越後勢氣後して、此所の對陣も叶ふ可らず。今天神山の陣へ押寄せ、一戰を催すべきや。春日山へ引く時に、追討にや切崩ん」と、種々軍議を成したりける。果して上杉の陣中、諸方の敗軍を聞て騷動し、議論紛々として更に靜かならず。爰において、大將景勝諸將を集めて商議しけるは、「大田切口の軍破れて、關山へ引取りける由、敵續て寄來らば、小勢の味方利を失ふべし。然らば敵勢氣に乘じ、春日山へ亂入せんか。吾居城へ鏑矢一筋をも射かけさせんは、景勝が末代迄の瑕瑾なり。然る上は、一先此所を引拂ひ、關山の味方に加勢をもなし、又は春日山の本城を、堅固成らしむべし」とて、評議是に一決し、六月朔日の夜、天神山を引拂ひ、直江山城守殿して、關山さして退きける。柴田が兵卒是を見て、追討せんと勇みけるを、勝家制して敢て慕はず。魚津の城中には、景勝退陣の樣を見て力を失ひ、今は此城を枕とし、只討死すべきなりと、上下一致に心を合せ、敵の寄するを待居たり。

せんと、其軍議最中なり。爰に長與一景連といふ者あり。去る頃、上杉景勝の命を蒙り、能登國へ渡海し、上杉家の下知に隨はざる者どもを攻め、平げんため、爰に押寄せ彼所に攻詰め相戰ふ程に、能州上を下へと騷動す。是によつて、柴田勝家に急を告る事、櫛の齒を引くが如し。勝家頓て長九郎左衛門連龍を以て、能州に赴かしめ、此騷動を鎭めんとす。此長九郎左衛門連龍といへる者は、元來能登國の住人にて、いにしへ治承の時、源三位入道頼政に與し、以仁親王三井寺に落させ給ひし節、只一人御所に止り、目覺しき働して、名を後代に顯したる、兵衛尉長谷部信連が後胤なり。當時、能登國守畠山義則家運衰へ、家臣、國人等主人を追出し、互に渠と戰ひ是と爭ひ、合戰一日も止む間なし。其中に温井備前守、三宅備後守は、上杉の幕下に屬し、長九郎左衛門は信長公の幕下と成る。依て數年合戰をいどみけるに、九郎左衛門連龍勇武の者なれば、數度の戰に勝利を得て、終に温井、三宅を降參せしめ、信長公の幕下と成す。右大臣家御感少からず、能登國にて所領數多賜り、今越中に在て、國人等を征す。さるに依て、勝家此連龍を以て能州を治めしむ。連龍則ち軍勢を引率し、能登國に歸國し、長與一景連と柵木の城に相戰ひ、終に景連を討取て、上杉勢を追拂ひ事なく平治す。此旨急使を以て、魚津の陣所柴田勝家に告しかば、勝家大に喜び、「大田切口の森勝藏が勝軍といひ、又九郎左衛門連


長ノ九郎左衛門
連龍が先祖之とぞ


信連が事
此図は高倉の宮の侍長兵部丞信連
宮を三井寺へ落しまゐらせ只一人
御所にとゞまりて六波羅の軍勢
三百余騎と戦ひ数多切ふせ
されども一人なれば遂に生捕られ
六波羅へ引かる宗盛嘲て宮の
何処に渡らせ給ふとも

まを作つて、無二無三に驅立れば、「すは敵の謀に落入たるぞ。引や〳〵」といふ程こそあれ、我先にと迯出すを、「森勝藏長一是に有り。尋常の合戰せよや」と、大音に呼はつて、穗のわたり七尺餘の大身の鎗を、りう〳〵と打絞り、崩立たる敵の中を、縱横無盡に突立れば、上杉勢討るゝ者麻のごとく、舊來し道へ崩行くを、森、春日、高坂、加賀見、大塚が兵士、追立々々討程に、手負、死人其數を知らず、喜陀川へ追落され、爰にても數多討れ、さん〴〵になつて迯たりける。爰に森が副將遠藤但馬守は、宵より密に川を渡り、敵の後へ廻り、小松原の中に埋伏し、合戰の樣子を見合せけるが、時分はよしと、兼て苅置たる枯草を山のごとくに積重ね、一同に是に火を附ければ、火炎天をこがし、黑烟空中にたなびき、其中より大に鬨を作り、鐵炮を打出し、金鼓を鳴し突出すれば、上杉勢大に驚き、手の舞足の踏所を失ひ、主討るれども是を助けず、父たゝかへ共救ふ事なく、我先に道を求めて走りけるを、森が軍兵前後よりおつ取包み、餘すまじと切廻れば、上杉の大將垣崎彌五郎、安田惣八、山岸右衛門尉踏止つて敵に當り、垣崎は重手を負ひ、山岸は森勝藏に討れ、安田惣八は亂軍の中に、討死をぞしたりけり。此間に上杉勢辛じて迯延び、關山迄引退き、城中に入て堅く守り、早打を以て景勝に救を求む。森勝藏は思ふ儘に討勝ち、是も早馬を以て勝軍の次第を柴田勝家へ申遣し、猶も進んで越後國に亂入

此日、上杉方の討死百三人、手負三百餘人、森方には八十九人討死し、手負二百七十餘人、雙方牛角の戰なり。

○森勝藏大田切破ニ上杉勢一

明れば天正十年五月廿七日、森、上杉の兩勢再び喜陀川を中にはさみ、戰ひをこそ始めける。時に上杉の軍將安田筑後守、遙に森が陣押を見て「今日の敵の有様、何とやらん心得難し。油斷して不覺を取る事有る可らず」と制する內、はやり雄の若者、ゑい〳〵聲して、早川へ乘込だり。森の先手加賀見伊豫大掾、大塚主税同川を打渡し、兩勢川中にて鎗を合せ、鐵炮を打懸け戰ひしが、上杉勢鉾先强く、森が先手を向うの川岸へ追上せ、勢ひに乘て殺出すれば、始め愼みし安田筑前守を始とし、昇坂、垣崎、新津、山岸等、一同に鬨を作り、勇みいさんで討てかかれば、加賀見、大塚三丁計追立られ、又踏止つて挑み戰ふ。されども引立られたる軍勢の癖として、紛々と亂騷ぎ、戰ひ更に一途ならず、さん〴〵に切崩され、七八丁も引たりける。時に左の方の小山の上に、赤き吹貫を高くさし上げ、相圖と見えてひらめかせば、右手よりは春日周防守、高坂源吾、左よりは森勝藏、都合其勢四千餘人、上杉の中軍へ鐵炮を打懸け、鎗ぶす

猶豫しに、此勢に引かされて、ぜひなく川へ打入たり。新津丹波守、安田筑前守、敵の川を半渡すを見すまし、すは今ぞ打てかゝれよと、先手勢六百餘人鐵炮の筒先を竝べ、川中なる森が勢を、一同にどつと打立れば、矢庭に百餘騎打倒され、浮ぬしづみぬ流れける。此鐵炮の烟の中より、上杉勢をつと喚いて、切先を揃へ、無二無三に切崩せば、森が軍兵七烈八裁に切倒され、川水に溺れ味方の勢に押倒され、死する者數をしらず、散々に成て三丁計迯たりける。森勝藏長一は味方の敗軍とも知らず、しづ〳〵と押來るに、遙に此體を見て大に怒り、何かは暫しも猶豫べき、兼て備へし鐵炮の勢八百餘人、眞先に進ませ、上杉勢の正中へ雨や霰と打出せば、勝誇たる安田、新津、垣崎、昇坂が軍兵、ひた〳〵と打倒され、どつと川中迄なだれ落たり。森長一得たりやおうと、鎗を取て味方を招き、一文字に切つてかゝれば、先よりの戰に勢勞れし上杉勢、粉のごとく討なされ、我先にと迯行を、垣崎彌五郎、山岸右衛門、安田筑後守、同惣八、新津、丹波守嚴しく下知して「引な者ども、爰にて死や。進め〳〵」と、眞先に馬を乗出し、必死に成て戰へば、森勝藏、遠藤但馬守、高坂源吾、春日周防守、我劣じと自鎗を追取て、追つかへしつ戰ひけるは、凄じかりき戰なり。時に日光西山に沈み、人顔も見えわかず、殊に川中の戰ひなれば、互方同士討を恐れ、鐘を鳴らして軍を收め、相引に成りてわかれける。

に、瀧川方四百餘人討死し、一里餘退いて、猿が京といへる城にぞ籠りける。上杉方猶も氣に乘り、栗林肥前守、松本左馬介兩人、手勢五百餘人にて、猿が京へ逆寄し、鐵炮を打懸け、鬨を作つて攻けれども、瀧川儀太夫固く守つて出合はず。此時信川更科の城主森勝藏長一は、高坂源吾、春日周防守等を首とし、川中島四郡の軍勢一萬三千人、柴田勝家加勢の爲、大田切口より亂入す。上杉方當手の請手には、垣崎彌五郎、山岸右衞門尉、安田惣八、昇坂刑部丞、安田筑後守、新津丹波守等其勢三千五百餘人、大田切を隔て陣を取り、森が先陣加賀見伊豫、落合右衞門八百餘騎、明光山の南の方、喜陀川迄進んだり。二陣は遠藤但馬守、本陣は大將森長一、高坂春日が軍勢、六七丁も跡より進んで打せけり。上杉の先陣垣崎、山岸、昇坂、川を渡して戰はんと備を繰出し、先手の若武者既に川へ打入らんとするを、後陣に控へし新津丹波守、安田筑前守是を見て、一參に馳來り、大音に是を止めて申けるは、「敵川端を少し退き猶豫ひ居るぞ、猥りに渡して過すな。敵の涉すを待て討こそ兵家の習、血氣にはやり敗を取るな」と、乘廻し下知しければ、皆川を少し退き、陣をつらねて見合せけり。森が軍勢敵の退くを見て、「すは敵の引色に成りたるぞや。此氣負に突崩せよ」と、何の思慮なく、我先にと一同にさつと川へ乘入たり。旗大將加賀見伊豫、落合右衞門尉は、敵の虛實を知らざれば、いかゞあらんと

たりける。

○瀧川森亂二入三國峠大田切一

去程に柴田勝家は、彌陣の備堅固に構へ、家々の旗木々の梢に翻し、秋の野の千種の花、風に靡くがごとく、劍戟、鎗刀の白日に映じたる形勢は、枯草に布る曉の霜に異ならず。夜は數萬の篝火を焚せ、時々剋々怠りを示し、何なる逞兵强勢たり共、斯る嚴重の堅陣なれば、夜討朝懸の手術も盡き、魚津の城兵、景勝が後詰の勢も、倶に苦しみ屈しける。爰に瀧川儀太夫は、武藏、上野兩國の勢一萬餘騎を引率し、三國峠より亂入せんと押來る。此三國峠といふは、信濃、上野、越後三ケ國の境にて、尤嶮岨の切所なり。上杉方此所の請手として、長尾伊賀守、栗林肥前守、高橋修理亮、松本左馬介等一千二百餘人、峠の此方に兼てより嚴しく陣を張り、敵の寄るを待懸たり。頃は五月廿三日、瀧川儀太夫自ら眞先に馬を進め、鬨を作て攻上に、上杉勢兼て期したる事なれば、同く鬨を合せ、山上より弓、鐵炮、大木、大石を、雨のごとく放ちかけ、ひるむ所を一同に、どつと喚いて眞下りに切つて懸れば、瀧川勢、敵をかさに請て、なじかは一溜も怺べき、崩れ立つて敗走すれば、越後勢得たりかしこしと、追かけ〳〵討つ程

血氣盛の若者二十騎計、勝家がいましめも打忘れ、我討取んと陣門を開き、拔連て切つてかゝれば、佐五之允むくと起上り、鎗を上げて相戰ふ。上杉方の勇士等、「倉田討すな、佐五之允に續けよ」と、一同にどつと馳寄にぞ、柴田が陣中よりも百餘人、押竝べ討て出で、火を散て戰ひける。爰に陸奥守が郎等に、井筒隼人といへる大剛の若者あり、四尺八寸の大太刀電光のごとく閃し、當るを幸に切立つれば、上杉勢足に追まくられ、三段計引たりける。上杉の士に松本外記、悪き敵のふるまひかなと、是も三尺九寸の太刀眞向にかざし、互に名乘て二打三打戰ひしが、いかゞしたりけん、井筒隼人綿嚙の外れより、鋒先下りに切込れ、眞仰向に倒れけるを、松本乘かゝつて首を搔んとする所に、隼人が弟井筒刑部丞、目前兄を討せて、なじかは怺ふべき、無二無三に飛込で、忽ち外記を切倒す。上杉方、名山太郎兵衛追續て、刑部丞と戰ふ。名山が勇や勝りけん、又是を討取り、首を取て差上たり。かく端なく合戰を始めければ、上杉方先手の足輕大將に、丸田伊豆守といふ者、三百餘人を二手に分ち、敵の右手へ詰寄ば、續て下條釆女、佐口傳兵衛尉左の方より押包み、鬨を作て進み來る。此時柴田勝家は、思ひよらざる合戰を始めけるを大に怒り、「何者か我下知を用ひず猥に戰ひ、軍令を亂しぬるや」と、自ら陣前に出で味方を引上げ、嚴く鐵炮を打て門を固め一人も出さざれば、上杉方も詮方なく、勝鬨を作て引

守なんどを始とし、叛心の者數多ありて國既に危し。今戰を急にして、自然我大軍を一度に打崩さば、國中の敵徒一時に亡ぶべし。戰はずして日數を經る內、魚津の城兵粮に盡きて落城せん事、日を算へて待つべし。加之國中の武士等變心を抱き、如何なる凶事を引出さんも計り難し。此故に景勝は運を天に任せ、强ひて我と戰はんとす。我はまた堅く守つて鉾先をまじへず、英氣を養うて勝利を得べし」とて、返書を認め、また矢文にして討返しける。その書に曰く、

披札令拜見候。我々當表出張に及び候へ共、打出て城をも攻まじく候。又足下と合戰をも望み不申候。兎角籠城の體にて、永く滯陣可致に候間、軍の手術は何樣とも、其許の思慮に任らるべく候。依而返書如件。

天正十年五月十三日　　柴田修理進

上杉彈正少弼殿

上杉勢是を見て愈腹を立て、中にも倉田長尾兩人は、敵の柵一重引破り、さまぐに惡言す。上方勢是に依て、弓、鐵炮を雨のごとく打出し、寄附じと防せけるに、倉田佐五之允が乘たる馬の靮の上を、鐵炮にて打拔れ、主諸共に屏風を倒すごとく倒れければ、上方勢是を見て、

の陣所近々と進寄り、篤と虚實を伺ひける。織田方の兵士是を見て、「あれこそ大將景勝なるぞ。我討取ん」と犇きけるを、柴田勝家是を制して、「景勝小勢を以て我營に近寄り、自斥候を成すは、我討て出でん事を望む故なり。深き謀なくして、豈輕々しく爰に來んや。麁忽の軍仕出して、後悔する事有る可らず」と、堅く陣門を閉て一人も外へ出さず。景勝は、敵兵の鳴を鎭めて戰ひを愼むを見て、足輕に命じて鐵炮を打懸けさせ、且倉田左五之允、長尾加賀守兩人を柵際迄進ましめ、一通の書翰を矢文にして射込ましむ。上方勢是を取つて勝家が前に捧ぐ。勝家披き見る、その書面に曰く、

上杉彈正少弼景勝、爲魚津後詰、爰令出張。數日之對陣未遂一戰候條、頗背本意候。御勢雖大軍、如籠城被備堅固候者、會而難心得覺候。若年之景勝非以武勇可被恐。快可被遂一戰候。信長北國之弓箭兼而會得候得共、於景勝未被知候哉、一手涯可申爲見候。不備。

天正十年五月十三日　　上杉景勝

とぞ書たりける。勝家是を見て笑ひて申けるは、「敵は速に戰を決するに利あり、味方は戰はざるを以て利とす。其故は、上杉方小勢にて外に見繼の勢もなく、剩へ國中に新發田因幡

へして見えにける。河田豐前守は味方の右に備へしが、敵の先鋒佐久間玄蕃頭が先手、折井彌太郎が備を一戰に驅崩し、二の見に進みし玄蕃が備も、眞一文字に突開き、敵と味方を餘所に見て、魚津の城へと馳せたりける。前田利家これを見て、手勢八百餘人八方より取廻し、我討取んと戰ふにぞ、河田手勢を引纏ひ、眞圓に備へ、前田が陣へ、をつと喚て馳通り、南の方へ切拔て、魚津の城へ驅入れば、城將吉江織部正、其餘の諸將一同に、悅ぶ事限りなし。誠に故謙信の勇武、今に至て空しからず、越後の武士大小上下、死を輕んじ勇に進む國風なれども、河田豐後守が今日の有樣は、摩利支天の再來にやと、敵も味方も擧て是を稱美しける。

○上杉景勝自爲ニ斥候一

四月二十三日、上杉彈正少弼景勝、魚津後詰のため春日山を進發し、長臣直江山城守景綱を先陣として、自ら二陣に備へ其勢三千五百餘人、越中の天神山に著陣す。然るに魚津の寄手柴田、佐々等が軍勢は、土手を築き柵を附け、恰も籠城の如く堅固に構たれば、さしも勇氣を逞しうせし越後勢も、纔に三千餘人にて、織田勢の大軍に當るべき樣もなく、相守りて控へたり。五月十三日、大將景勝敵陣を斥候すべしとて、屈強の逞兵五十餘人、足輕百餘人を勝出し、敵

中危難に及ぶ時に至て、餘所に詠めて是あらんは本意に非ず。されば快く一戰し、是非々々敵中を切拔け、城中へ入り候はんと覺悟いたし、扨こそ松倉の城を切て出でて候へ。各我に力を合せ、一合戰催し給へかし」と、勢ひ込で申けるに、上條彌五郎を首とし、皆々、「是は無益なり。斯大敵の圍の中を、いかにしてか切拔け、城中へ入り候はん。危き事なし給ひそ」と、詞を揃て止れども、河田敢て承引せず。諸將、「此上は力なし。然らば一戰を快く挑むべし」とて、同月二十一日、上條彌五郎を大將として、味方の備を八つに分ち、寄手の陣へ押懸る。上方勢も是を見て、備を十三段に立て、旗を進め、兩陣互に一聲嚾と鬨を揚ぐる程こそあれ、突入て相戰ふ。柴田方越中の士に、德山五兵衛尉と云ふ者あり、物馴たる勇士なれば、「敵は小勢ぞ、引包んで討取べし。越後勢の軍立は心憎き物なるぞ　鎗の穂先を揃て、乘込む敵の馬を突蹶ね、落したる武者共を、突捨にして首を取な。後へ引く弱兵は、味方なりとも突殺せ。進め〳〵」と下知を成し、味方の中を十文字に乘廻し、馳廻つて勵せば、上方勢是に氣を得て、勇みに勇み、切れども突どもかへり見ず、曳々聲を出し戰ひしは、大山も崩れ、坤軸の碎けやすらんとおびたゞし。爰に上杉方、能登國の住人河田軍兵衛、味方の引立を見て眞先に馳出で、近づく敵六七騎切て落し、「我に續や者共」とて、敵中へどつと乘入れ、七顚八倒して戰ふ程に、又もりか

の兩城防戰難儀なるべしとて、先手として上條彌五郎、齋藤下野守、河田軍兵衛、石動山城守一千餘人、魚津を指て發向す。柴田勝家是を聞て、軍勢を二手に分ち、後詰の勢に向ひ、陣を堅め芝土手を築き、竹束を突並べ、刀簇を植ゑ柵を振り、堅固に陣を取しめたれば、城中よりも打て出べき手術もなく、寄手も敢て攻懸べき氣色なくて、只食攻にすべき模樣なりければ、松倉の城に籠りし大將河田豐前守、つく〴〵と敵味方の形勢を考るに、寄手は五萬騎の大軍、味方は纔に三千人、いかに防ぎ戰ふ共、始終の勝利心元なし、其上敵兵魚津の城を强く圍み、此城をおさゆる兵士、五六千には過べからず、此體にては、敵の勢を分減せしといふにもあらず、徒に守つて魚津の落城を詠め居んも、勇なき所爲なるべし、所詮此城を捨て、後詰の勢、上條、齋藤、石動と一手に成り、快く一戰し勝利を得るか、但は敵陣を切破て、魚津の城へ驅入り、味方一所に存亡生死を倶にすべし、と思ひ定め、城中の勢九百餘人、一文字に突て出で、群る寄手を八方に切靡け、山續を馳通つて、宮崎の後詰の陣、上條彌五郎が備迄、一參に驅入しは、いかめしかりし形勢なり。扨上條、石動、齋藤等に對面して申けるは、「此度我々籠城のはじめ申合せしは、某松倉の城に於て、始終の首尾合はざる時は、魚津へ一所に籠るべしと、吉江織部正をはじめ、傍輩の諸士と堅く契約を申して候。然るに今其詞に違ひ、魚津の城

此方は主戰、主客の異同、天地懸隔の差別あれば、敵容易く懸つて、合戰は得せまじきぞ、然らば對陣に日數を送る内に、兵粮運送の便を失ひ、人馬ともに勞べし、其時後詰の勢を待受け、兩方より指挾み切てかゝらば、敵いかに大軍なりとも、打崩さで有るべきやと、將卒共に英氣を逞うして、魚津、松倉兩城を堅固に守り、敵の寄るを待居たり。時に天正十年四月上旬、柴田、佐久間、佐々、前田等四萬八千餘人越中へ打入り、上杉方の捨置たる戸山の城に、佐々成政が軍兵を止め、敵將景勝後詰せん時、打破るべき手配に備へ、惣勢魚津、松倉の兩城を、鐵桶の如く取圍み、息をも繼せず攻たりける。されども越後勢、更に屈する氣色なく、矢石を飛し鐵炮放ち、嚴く防戰成しければ、容易に落べき様ぞなき。剰へ十日の夜、吉江喜四郎手勢を引て城中を忍び出でて、敵陣を夜討し、喚き叫で攻立ければ、寄手大に途を失ひ、さんざんに敗走す。此時勝家が從弟柴田右近、吉江喜四郎が郎等、長島宮内と戰うて討死し、傷死の者三百餘人、城兵は思ふ程戰て、かろく城へ引入りけるに、柴田佐々をはじめ寄手の諸將、攻啞んでぞ見えにける。此上は遠巻にして、敵の氣を屈せしめんと、攻口を少し退き、大軍ひしと陣を連ね、英氣をかゞやかし、旌旗天にひるがへり、軍卒山谷に充々て、勇威を顯はし、巻攻にこそしたりけり。時に上杉彈正少弼景勝は、春日山に有りて此由を聞き、後詰せずんば、魚津松倉

輩、銘々勝家に力を合せ、國々の軍勢を催促し、諸方より同時に攻討ち、一擧に上杉を切崩さんと、其用意様々なり。先柴田勝家は、佐々陸奥守成政、前田又左衛門利家、佐久間玄蕃頭盛政、柴田伊賀守勝豊等と倶に、越中より攻入り、森勝藏長一は、信濃より大田切口へ襲ひ、瀧川左近將監一益が甥の儀太夫は、沼田より三國峠へ懸り、越後へ亂入せんとす。此時上杉景勝は、春日山の本城に在て此事を聞き、諸方の虎口々々へ受手の勢を手分して、織田の軍を支へんとす。勝家がむかひたる越中表、松倉の城には、河田豊前守、同國魚津の城には、吉江織部正城主たり。其外戸山、末盛等の城々へ加勢として、吉江喜四郎、中條越前守、寺島六藏、吉江常陸入道、竹股三河守、長與治をはじめとし、侍大將十三人、軍勢纔に一千六百人、勝家が軍兵は、都合四萬八千人、野に滿ち山に蔓り、只潮の湫る如く押寄せしは、叶ふべしとも見えざりけり。

是によつて、上杉方の諸將會合して、軍議を評定しけるは、味方纔なる小勢を、四ヶ所の城に分ち、敵の大軍に當らん事、中々思ひもよらず、此上は戸山、末盛の兩城を打捨て、魚津の城へつぼみ、命を限りに支ふべし、但松倉の城は、此儘に抱へ置き、敵の勢を分減させ、大將後詰の便とすべし、夫も叶はざる時は、此城も打捨て、城主河田豊前守魚津の城へ引籠り、力を合せて防戰すべし、是敵は案内知らぬ他國の勢、味方は自國の兵、地理に委し、彼方は客戰、

繪本太閤記　四篇卷之八

○柴田勝家北國亂入

天正十年六月十五日、羽柴筑前守秀吉本能寺に到て、先君御落命の跡を尋ね、御遺骨とおぼしき物を悉く拾ひ收め、直に尾州清洲へ下向成し給ひ、三法師殿に拜謁し、光秀を誅伐せし旨、委細言上に及び、暫く滯留してぞ御座ける。抑此三法師殿と申すは、故中將信忠卿の御嫡子にして、濃州岐阜に御座けるが、去る六月二日、前田玄以齋法印、信忠卿の遺命を承りて、岐阜の城に歸り、御簾中竝に三法師殿を御供成し奉り、尾州清洲に移し參らせ、堅固に守護し奉る。此玄以齋は、後德善院法印と稱し、秀吉公五奉行の一人なり。爰に柴田修理進勝家は、去る四月、信長公甲州の武田一家を誅伐有りし砌、諸將各恩賞行はれけるに、柴田勝家を北國の藩鎭とし、越後國を賜りければ、勝家北國に在陣して、上杉彈正少弼景勝と合戰す。然るに、當時上杉景勝は若年なりといへども、故入道謙信の威勇を繼ぎ、隣國悉く是が幕下に屬し、武勇の將士堅固に守護しければ、容易に退治成し難く、織田家の功臣佐々、前田、瀧川、森が

繪本太閤記 四篇第八之卷 目錄

柴田勝家北國亂入
上杉景勝自爲斥候
瀧川森亂入三國峠大田切
森勝藏大田切破上杉勢

人々、各首さし寄せて「何様是は疑ひもなく、削りて書きたる痕あり。誠に紹巴が申すごとく、讒者の所爲なるべし」とて、秀吉の御覽に備へければ、秀吉つく〴〵と見て、更に詞を出し給はず、良有て「紹巴己は才智賢き入道かな。陳じ申す趣相立つ上に死罪を免し、永く城州の地を追放せしむる間、疾う〳〵罷立べし」と命じ給ふ。紹巴は危き虎口を遁れ、拜謝してこそ退きける。誠に紹巴が才覺人に越たり。知といふ字を削り、成といふ字を書かずして、舊の知と書たる故、縲紲の死を遁れ、其後は江州に赴きて、三井寺に蟄居しけり。

公へ訴へ奉る事もなく、終に御生害に及ばせ給ふは、汝、光秀と同罪のがるべからず。陳謝する事あれば、急度申斷るべし」と、宣ひければ、紹巴畏て、「是は驚入り奉る仰にて候。某大恩ある信長公、何怨有てか咒咀し奉るべきや。又何好ありてか光秀に與力仕るべきや。去る五月廿八日、愛宕山にて光秀連歌興行仕るべき旨申候に依り、何の覺悟もこれなく登山仕候。勿論、光秀連歌堪能の人にて候へば、某に代句致させ申すべきやうもなく候。且其節の發句は、天が下なる五月哉とこそ、聞え候ひつれ。今嚴命のごとく、天が下知ると候はんには、某爭か心の附で候べき。是はいかさま此紹巴を偏執する者有つて讒言を構へ、某を失はんとの仕業とこそ存候へ。詮ずる所は、かの愛宕山にこれ有り候懷紙を召寄せられ、御披見もや候べき」と、申ければ、秀吉急ぎ愛宕山へ人を走せ、彼懷紙を取寄せ披き見給ふに、正しく天が下知る五月哉と有りければ、秀吉眼を見開き、「いかに紹巴、今は何とか陳ずべき。是見よ、天が下知ると書きたるぞや。斯る證據正しき事を知りながら、片時の難を遁れんと、秀吉を誑せし事こそ安からね。兼ては流罪にもと思ひしが、今度は首を刎ぬべきなり」と怒り給へば、紹巴少しも騒がず、袖かき合せて、「何なれば此紹巴、斯く迄人には憎まれ候やらん。先に天が下なると書きて候を、文字を削て知るといふ文字に書きかへて候。是御覽候へ」とて、差出しければ、御前に有りける

非常を禁め、政事を正し、専ら仁政を施し給へば、秀吉の威勢朝輝のごとく赫きぬ。されば光秀が殘黨、餘類は、悉く山林に隠れ江湖に身を潜め、頭をさし出す者なし。時に去る五月廿八日、光秀愛宕山に登り、西の坊威徳院にて連歌興行し、發句は則ち光秀にて、

時はいま天が下知る五月かな

是は光秀、信長公を討て、天下の政事を知るべき事を祝して、作り出せる句なりければ、此時京中の男女専ら此句を評し、或は紹巴が代句なりと、囁く者も多かりければ、紹巴大に是を恐れ、光秀山崎にて滅亡しぬと聞しより、直に愛宕山に馳登り彼威徳院に入りて、「前の懐紙を些と披見いたし候はん」と、所望し出し、傍へ退きて、發句の、天が下知るの知といふ文字を、小刀を以て密に削り、又其上に、舊のごとく知と云ふ文字を書きて、さらぬ體にてかへし與へ、自若として歸り居りける。然るに案に違ず、秀吉此事を聞給ひ甚だ怒り、「紹巴事は亡君殊更に惠み給ひし者なるに、斯る不道の形勢や有る」と、直に紹巴を召れ、嘖て申給ふは、「紹巴入道、己右大臣家の厚恩を蒙りながら光秀に與し、愛宕山において、天が下知るといふ發句を代作せしよし、是光秀天下を知るべきといふ意を含み、信長公を咒咀し奉りしと覺ゆるぞ。假令光秀が作りたる句にてもあれ、汝其道の達人として、斯る句意を悟ざる事や有るべき。然るを信長

此ごろ拙僧念佛に太鼓、鉦を調せ、拍子をかしく唱へて洛中洛外を勸化仕る所、彼軍事に聞慣れたる鉦、太鼓故か、又は拍子の珍らしきか、思ひの外に寄進多く、今は日夜出精いたし、此太鼓、鉦にてはやし歩行き候處、計ずも御陣の傍を勸化いたし、御聞に達し候條恐入候なり」と、委細詳に言上しければ、秀吉大に笑ひ給ひ、「實に面白き念佛かな。是を以て彌修行おこたりなく勤むべし」とて、陣太鼓を賜ければ、彼僧有難く拜領し、御暇賜り、悦び勇みて歸りけり。其翌朝、彼光福寺の住持、大德寺の本陣へ、太鼓念佛御免の御禮として參上し、且御目見えの驗なりとて、干菜一連を獻上す。秀吉大に喜悅ありて、干菜山と號を賜ふ。是則ち今の六齋念佛の由緒とは聞えし。六月十八日、羽柴筑前守秀吉參内ありて、菊亭大納言春末卿に就て奏し申されけるは、「微臣秀吉天の助けを蒙り、逆臣惟任光秀を山崎において誅戮せしめ、殘黨悉く是を退治し、今は皇都の內に亂を起さん者是なく候。然りといへども、皇居近く兵革を動かし、叡慮を驚し奉る條、尤恐れ入り、天意を伺ひ奉る」の由、謹んで奏聞あれば、春末卿頓て天氣の旨を令し、勅答し給ふ樣は、「今度惟任追伐の儀、速に功を成し、洛中を平均せしむる條、高名たるべきなり。以後京都の守護怠りなく、勤仕令むべし」と、仰せ渡さる。秀吉謹で命を令し、退出せられける。是に依て、京都守護代として堀尾茂助吉清を止め置き、





○織田家公達功臣等會二清洲一

羽柴筑前守秀吉、山崎の一戰に逆臣光秀を討亡し、亡君の怨を報じ給ふにより、權勢忽ち秀吉に歸し、五畿内の大小名皆悉く隨身し、陣門に市を成せり。六月十七日三井寺を立つて京都に入り給ふ。先陣は堀久太郎秀政千五百人、二陣は中川瀬兵衛、高山右近二千餘人、次は秀吉の旗本一萬餘騎、後陣に池田勝入齋三千五百餘人、遙引下つて惟住五郎左衛門、筒井順慶其外の大小名思ひ〳〵に手勢引具し、御供にこそ參りける。今宵は大德寺を本陣と定められ、先陣はや紫野に入らんとする時、早夜の初更に及べり。然るに京の町端に、太鼓鐘の音喧しく聞え其拍子いと怪しければ、先手の軍卒馳行て是を伺ふに、黑き衣を著たる僧四五人、手毎に鉦、太鼓を叩き、念佛を唱るなり。軍卒甚怪み引捕へ、本陣に連來る。秀吉是を近く召れ、「汝等僧の身として、鉦太鼓を以て人を驚しむる條、言語道斷の所行なり。其由縁を申すべし」と、嘖りたまふ。彼僧等大に恐れ、中にも年長じたる僧、御前に頭を下げ申けるは、「拙僧は今出川東の河原に、光福寺と申す住僧にて候。近年打續兵亂の爲にて、寺も大破に及び、諸旦那へ勸化仕れども、穩ならぬ世のさまゆゑ、米錢の寄進も無レ之、次第に寺困窮に及び、いかんとも詮方なく、

爲には、倶に天を戴かざる君の仇なり、何ぞ是を助け置給ふべき。順を以て逆を殺せしに、仇討する法やある、愚なりといふべし。汝光秀が最期を聞ば、其所にて生害せんに、誰か是を誹謗せん。我常に内藏介は智勇の士なりと聞しに、今の行ひを見るに、愚なる事甚し。惜むべき事に非ずや」と。内藏介是を聞て、頭を低て詞なかりしが、良有て頭を上げ、「石田三成は才智を以て、秀吉の寵を得たりと、宜哉、今の一言、尤某があやまりなり。然りと雖も、譬非義にもせよ、運盡ずしてねらひ寄ば、筑州の御首を以て、日向守が墓に手向ん。是も叉潔よからずや。豫讓が志には劣るとも、恐らくは勇夫の心に恥べからず」と、わるびれる色曾てなし。此時小栗栖野村の百姓、中村長兵衛が持參せし光秀が首、溝尾、並河等が首と倶に、内藏介を日の岡山に引出し、首を刎て、殘らず獄門に梟られたり。内藏介生年四十歳、最期に臨み辭世あり、其詩に曰く、

主仇有レ前白刃空　殺レ身曝レ尸報ニ君公一
可レ憐晉國刺衣客　共感生涯一夢中

和歌あり、曰く、

消えて行く露の命はみじか夜の明日をも待たず日の岡の峯

石田三成、齋藤に向ひ申しけるは、「汝光秀が股肱とたのみし勇士なりしが、山崎の合戰に討死もせで、捕はれと成りたるは、勇者の恥る所なり。誠に命は惜き物かな」と云ふ。内藏介三成をはつたと白眼み、「我山崎の戰場を切拔たるを、命の惜て迯たりと思ひしは、汝が心のきたなき故なり。大丈夫の死を見る事、舊へ歸るに等し、何恐しとて迯隱るべき。抑山崎の合戰、味方敗せしは、十三日の暮方、主君日向守、勝龍寺の城へ入りしとは聞ど、先手に有りし某、敗軍の中なれば、然るや否やを聞も定めず、兎角戰ひ挑む内に、味方の陣々瓦の如く解け、四角八方へ散亂す。爰において、某主人と安危を倶にせんと、圍を切拔け、宇治の方より堅田の浦に至り、明日十四日味方の便を聞に、日向守殿討死せられ、翌十五日坂本の城も落たり。此時にこそ山崎にて死たらば、今の悲みは有るまじきと、始めて是を後悔せり。然りといへども匹夫匹婦の如くに、何ぞ屈死せんや。あはれ秀吉に近附寄り、さし違へて死せんものと、身を忍び伺ひしに、運盡て生捕れしも、勇士の成す所にして、我爲を恥る事なし。唯快く死に著んのみ。汝等小輩のよく知る所に非ず」と云ふ。石田三成是を聞て、莞爾と笑ひ、「誠に勇士なれども、智は甚だ暗し。身を忍び容を變じて仇を報うは、晉の豫讓是なり。我君筑前守殿と、汝が主光秀とは、智伯、范仲氏と異なり。光秀は右大臣御父子を弑逆したる謀叛人、筑前守が

二百騎計引連れ、光秀が殘黨を搜しけるに、端なくも行合たり。内藏介堀尾なりと見たりしかば、笠を傾けて行過るを、心利たる堀尾、怪しき者と早く見咎め、士卒に下知し捕へしむ。内藏介今は是迄なりと思ひ、太刀拔はなし、寄來る兵士七八人、疊かけて切殺し「日向守が股肱の臣、齋藤内藏介が最期の道連、堀尾茂介相手に取て不足有るまじ。首取て手柄にせよ」と、一文字に切つて懸る。堀尾元來大勇無雙の兵なれば、云ふにや及ぶと、太刀打振り、人まぜもせず、只二人切先より火を出し、鎬を削り戰ひける。堀尾が兵卒二百餘人、四方を圍み、主危くば助んと、白刃を竝べ取卷たり。齋藤が運既に盡たりけん、打込む太刀のほつきと折て、鍔元四五寸許殘りたり。大力の覺ある堀尾茂助是を見て、太刀投捨て「いざ組ん」と引組しが、雙方聞ゆる强兵なれば、獅子の如く哮え、虎のごとく猛り、踏ならす足音は大地に轟き、頃は六月十七日、漿の汗を流し揉合しが、堀尾が力や勝りけん、終に齋藤を組敷たり。數多の士卒是を見て、噇と喚いて折重り、繩を懸てぞ引立けるは、無慙なりし有樣なり。此時羽柴筑前守殿、三井寺に本陣を居ゑ諸方の敵徒を捕へ給ふ。堀尾茂助齋藤内藏介を生捕り、三井寺に引具し、斯と言上に及びければ、秀吉大に悅び給ひ「齋藤は無雙の勇士、堀尾に有らずんば、生捕る事能ふまじ」とて、再三褒詞ありて、黄金、太刀を下したまひ、齋藤を白砂に引出さしむ。ときに

を附けねらひ、運盡て討死し給はゞいかにせん、淺ましき御身のはて候や」と、さめ〴〵と歎きける。內藏介淚を止め、「さる理を辨へ知らざるにはあらねども、さらでだに便りなき老の身の一人の子を失ひ、嘸や苦しと思ふらんと、其歎を思ひ計り、生害せんと成しつるなり。汝が諫に隨ひ我一旬の命を借り、たとへ本意を達したりとも、又叶はで討死するとも、其時の死こそ汝への云譯ぞや」姥は淚をとゞめ衆、「世の中に、武夫の身程かなしき物はなし。今の生害を止め參らせども、明日は忠義のために命を落し給はん。甲斐なき此身は生ながらへ、育君を失ひ、子を先立て、つらき命の絕ざるは、うらめしの世なりける」と、淚にはてしなかりける。

○齋藤內藏介被誅

齋藤內藏介利三、乳母の姥が介抱にて、堅田の浦に身を忍び、諸方の音信を聞侍るに、日向守光秀は、十三日の夜、小栗栖野にて、土民の爲に命を落し、龜山の十兵衛光慶病死して、後見隱岐五郎兵衛惟恒も切腹し、坂本の城も落去して、長閑齋左馬介光秀の室、公達に至る迄、悉く自害のよし、追々人口に噂しければ、內藏介今は討死と思ひ定め、あはれ秀吉に伺ひ寄り、主君の怨を報ぜんと、六月十七日京都さして上りけるに、大津の町にて、堀尾茂助吉晴が、手勢

たりしが、今ははや歸るべきを、何として遲く候やらん」と、いと案じたる有樣なり。内藏介姥に向ひて申けるは、「今某が乘來りし馬を、軒下に繫ぎ置たり。見覺有りや無しや」と。姥立ちて其馬をよく〳〵見、「是なん我家に養し馬にて候へ。是に召れて候上は、我子ははや、君の見參に入候と覺え侍る。何方へか參りたるや」と問ふ。内藏介涙をはら〳〵と流し、「我武運もはや盡果たるとこそ覺る物かな。さしも日向守殿の股肱と頼まれ、今日合戰の先手に選まれ、百戰勇を震ふといへども、味方惣敗軍に及びぬれば、力なく共に敗走し、敵と組んで討死すべき命を、生て秀吉に一太刀恨を報ずるか、主人と生死を倶にせんと、山崎を切りぬけ、宇治の方迄來りしに、馬を引て來る者あり。某其時道に勞れ、彼馬士を一太刀に斬殺し、馬を奪て道を走れり。誰か知らん、其馬士は汝が子にて有らんとは。たま〳〵我に力を合すべき若者を、我手を以て是を殺し、頼む木下に雨もりて、斯る微運の我身の果、高運に乘じたる羽柴筑前守、爭か近寄討課すべき。山崎にて死すべき身の、なま中なる忠義を思ひ、老の身に歎きをかけ、我身もよしなき罪を作れり。所詮本意を遂べきにあらねば、切腹して死すべき間、夫にて恨を晴せよ」と、脇指に手を懸れば、姥周章すがり附き、「是は物に狂ひ給ふか。誤て家人一人失ひしとて、其主君の切腹し給ふやうや候べき。此所にて犬死し給はん御命をながらへ給ひ、羽柴殿

落行難く、此馬を奪て落行んと、馬の傍へ立寄と見しが、彼馬士を拔打に切倒し、馬にひらりと飛乘て、一參に大津に出で、唐崎を經て堅田の浦に著にけり。此所に、內藏介が乳母の年老て住けるを尋んとて、そこよ爰よと見廻りしに、柴の庵の戸ぼそを開き、六十有餘の老嫗の、人待貌に佇みたり。此時夜いたく更て、往來する人もなく、幸の事なり、乳母の家を尋んと、馬より下て近く立寄り、月影に彼老嫗を透し見るに、是ぞ尋ぬる乳母なりけり。先嬉しとて詞をかけ、「なつかしや無事にぞ有りつるよな。內藏介利三なるは」と云ふ。乳母打驚き、「こは育君の來り給ふか。夕部の燈花に希人の來ります祥こそ見えつれ。疾く入らせ給へ」と、いとせまき居處を淸め、內藏介を請じ入れ、「扨しもいかに、供人も召連たまはず、夜さへいたう深たるに、あやしき姥が庵を尋ね來り給ふこそ、世に心苦しう候ぞや。今日山崎の合戰に、君も打出給ふと聞ば、御味方敗北にてこそ、爰に渡り候ならん。合戰のさまはいかにぞや」と、老の心のせはしくも尋ね侍るに、內藏介山崎の始終をあらく〳〵と物語り、「日向守殿の音信を聞て後、秀吉を一太刀恨みん爲、惜からぬ命を全うし、爰迄は落來れり」と云ふ、姥是を聞て、「去御望も候はば、穴賢、忍びて爰に隱れ給へ。我子代介賤しき土民にて候へども、力も强く候程に、御方人に相成りて、筑前守を討せ申さん。夫に附け、此代介暮方より、宇治の里まで馬に荷を課せ參り

知せにより、其子友之丞重仲と倶に、是も佐和山を捨置き、上下の軍兵八百餘人、坂本さして急ぎけるに、山崎の敗軍、小栗栖野にて惣大將光秀討死の事を聞き、軍勢ぬけ〳〵に落行き、今は主從十餘人に成り、西近江まで來りけるに、坂本の城落著し、長閑齋左馬介も討死の由聞えければ、今は詮方なく朽木越に懸り、丹波國へ赴きけれども、爰にも羽柴の兵滿々て、剰へ龜山の城も十兵衛光慶病死して、早落城と聞えければ、今ぞ天地の間廣しといへども一身を隱すべきやうもなく、天に跼つて恐れ忍び、地に蹐して隱れ歩行み、又近江の坂本にさまよひきたり、城跡を見るに、いつしか草蕭々と生ひて昔の跡とも覺えず。近き頃までは、大厦高墻嚴に構なせしも、忽須臾に轉變し、忠を以て仕へ奉りし君、信を以て交りし朋友、皆悉く世になき人と成りて、誠に盛者必滅の理、眼前に思ひ知られ、金爐香絕ては、草一叢の烟を殘し、玉殿燈消ては、螢五更の闇を照すと云ひけんも、斯る事にやと、そゞろ涙に咽び、忽ち髮を切て釋門に入り、諸國修行に出でたりけり。爰に齋藤內藏介利三は、十三日の夜、山崎を切拔け、宇治の方へ落行けるに、はや夜も子剋に近く、さしも無雙の勇士なれ共、今朝より數度の戰に勞れ、其上飢に臨みたれば、暫し木蔭に立寄り、木の根に尻かけて休息せしに、後の方より馱荷馬を引き馬方一人、歌を謳ひて來かゝりたり。齋藤是を見て、我身勞れ、步行して

に獻ず。秀吉も左馬介が心底を感歎し、開き見る。其品々は、不動國行の刀、二字國俊の太刀、薬研藤四郎吉秀の脇指、奈良芝の茶入、紺ふごの水差、無名の天目、徽宗皇帝の鷹の繪、千鳥の香爐を首とし、世に希なる重器六十餘品、悉く目錄に記したり。扨日も高く差上れば、寄手同時に鬨を作り、ひた〳〵と堀際まで押寄れば、左馬介城戸をさつと開き、腹心の郎等、家人七十餘人、稻麻竹葦の如く取圍みたる寄手の中へ切つて入り、前後左右に切開き、半時計に百餘人討取り、二百餘人に手を負せ、味方も悉く討死し、今は纔に十四五騎に成りぬれば、是迄ぞと城中へ引入れば、早本丸より火燃出で、一城の上下三十九人、皆生害して死たりける。光秀の室四十八歲、二男十治郎十二歲、三男自然十一歲、女子九歲、末子乙壽丸八歲、長閑齋六十七歲、左馬介四十六歲、其外奥田左衞門一之、同淸三郎、妻木勘介、船木八之丞皆自殺して火中に飛入り、其日の午剋、坂本の城落去しにけり。光秀が妻の兄妻木主計頭範賢は、一千餘人長濱の城代なりしが、十四日の暮方左馬介が告によつて、阿閉萬五郎友近と共に、長濱の城を打捨て、惣勢湖水に船を浮め、坂本へと志し、遙の沖へ漕出しけるに、俄に惡風吹起て數艘の船ども悉く覆り、哀むべし、妻木主計頭、阿閉萬五郎をはじめとし、一千餘人の軍卒、一人も不殘、琵琶湖の水屑と成りしこそ詮なけれ。又佐和山の城代荒木山城守行重も、左馬介が

繪本太閤記　四篇卷之七

○明智左馬介生害

天正十年六月十五日の曉天、羽柴の大軍坂本の城を十重二十重に取圍み、既に合戰を始んとす。此時城中には、光秀の室照子の方、長閑齋左馬介最期の酒宴をなし、潔く自害せんと、其用意をなしたりけるは、哀れなりし次第なり。時に左馬介櫓に上り大音にて申けるは、「先手の隊將に一言申度事の候。かく申すは、明智左馬介光春なり。近く出て見參有れ」と呼れば、先陣の大將堀久太郎秀政、堀際に馬を乘出し、「何事の候ぞや、羽柴の隊下堀久太郎秀政候」と、同く大音に名乘たり。左馬介申すやうは、「只今我々此所に於て生害を遂げ、城に火をかけ終り申すべきの覺悟に候處、信長公御所持の珍寶名器當城に祕置たり。千歲の重寶爭か心なく失却せんや。是によつて目錄を相添へ、其御陣へ送り申すべきにて候間、此旨羽柴殿へ能々御披露給るべきに候」とて、錦にて包たる寶物を、矢倉より釣下せば、秀政感淚を流し、「あはれ仁義の武士哉。羽柴殿の御前、委細言上に及ぶべし」と、頓て數多の寶器を請取り、軍使を以て秀吉

繪本太閤記　四篇第七之卷　目錄

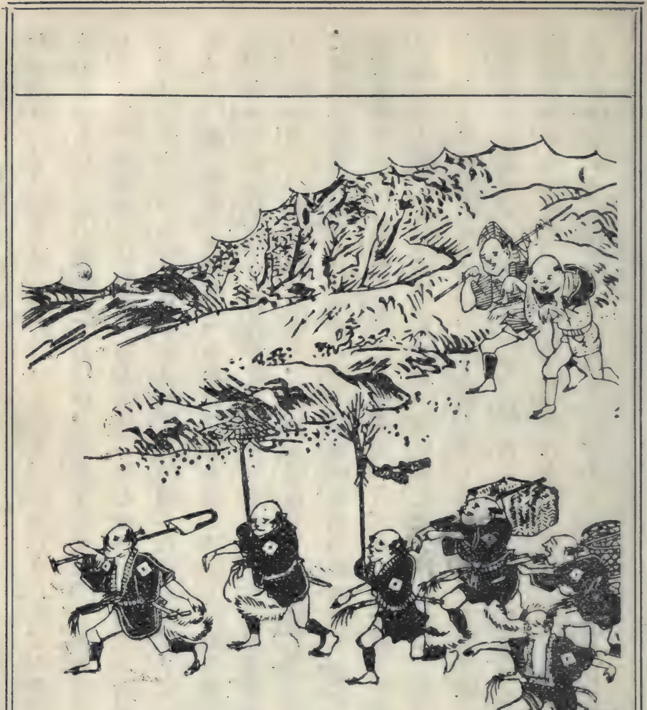
明智左馬介生害
齋藤内藏介被誅
織田家公達功臣等會淸洲

吹山の狐を狩んと欲せば、却て恥辱を人口に觸しむるものなり。そのうへ佐々木の首尾も計難し。只穩便に濟せ給へ」と樣々に諫めければ、長兵衞も理に服し、「兎角此度の始終有るまじき次第、貴殿の思さん事も面目なく、せめては狐狩を成して恥を雪んとこそ存ずれ。此上は足下の心に是を收め、努々人に語り給ふな」と申ければ、左馬介、「仰なくとも、何ぞ人の恥辱を顯はし申さんや。心易かるべし」と別れて家に歸りける。長兵衞、流石家中の聞えも氣毒なれば、病氣と唱し佐々木の暇を申し浪人して有りけるに、後堀久太郎に隨身して此攻口に向ひけるが、昔の好を思ひ出し、只一人拔驅せしは、勇氣ありての事にあらず。

なるが、前に我々が魁の白狐を殺されし其恨を申さん爲、斯る形勢、赦させたまへ。此後は仇をなさじ」と云ふ。左馬介彌怒り、「白狐を殺せしは某なり。我にこそ怨は報うべきに、入江殿をたぶらかせしは何事ぞや」老狐の曰く、「君は勇氣逞く更に寄附く事能はず、爰を以て入江の主を恨み奉り、其が餘り伊吹山を狩立狐の從類を斬盡さんと宣ふ故、今日なん其を止めん爲に參りたり。君が手に捕へられし上は、我は將殺さるべし。あはれ伊吹山に住む數多の狐を赦させ給へ」と涙を流し詫ければ、左馬介大に笑ひ、「己ごとき獸類も同族を哀れむかや。よしよし先望に任せ、只今燻べ殺すべし」と荒繩にて強くいましめ松の木に縛附け、落葉を積て火を附れば、黑烟四方より立覆ひ、七顚八倒苦しみて、終に火中に死たりける。長兵衛父子は只茫然と人事を知らず、妻は悲しく傍に立寄り、「こは何事にて候ぞや、左馬介殿の勇氣にて狐を捕へ、只今燻べ殺し畢ぬ。心を附て禮謝をも成し給へ」と背を叩きて氣を附くれば、長兵衛漸く人心地附て、床の間を見れは、先には異靈なる神像を掛有しが、今見れば、ちぎれたる泥障を横ざまに引かけ、新薦にて有りしは糞にまみれたる古筵、備へし供物は皆土くれにて、更に正なき有樣なれば、長兵衛も肝を潰し、左馬介に對し面目なく、今は身上を抛ても多くの人夫を催し、狐狩を成して此恨を晴さんものと、踊上つて怒りけるを、左馬介是を宥め、「今人數を催し、伊

立切り閉籠れば、妻女をはじめ家内の者、皆次の間に伺ひ居る。奥の間には鈴の音心耳をすまし、中臣六根の祓いと尊く、家内の者も信心を起し、坎艮震巽離坤兌乾を唱ふる所へ、明智左馬介は此時三宅彌平治小七郎が歸たるを聞き、悦の爲來り内に入りて是を見れば、家内の男女皆愁然たる色ありて、奥の方にいとも幽なる聲して祓を成す。左馬介怪しき事に思ひ、耳を定めよく聞に、更に人の聲に非ず、さいつ頃伊吹山にて、白狐の命を助からんとて、物いひし聲によく似て陰陰と物冷く、何さま是は狐狸の妖を成すならんと、物をも云ず奥の間へ馳行にぞ、長兵衛妻あわて押止め、「今日小七郎が歸りし所、狐に化され人事なし。是によりて夫長兵衛諸共奥に入りて祓の最中、かの神職祓の終るまで、人の入る事を止め給へば、御身暫く爰に待給ひ、祓終りて後對面すべし」といふ。左馬介、「心得候」と諾しけるが、其儘長兵衛が妻を突倒し、奥のふすまをさつと開けば、長兵衛親子は立たり居たり、彼神職を禮拜の體、神職は左馬介を見て大に恐れ庭の方へ迯行を、左馬介飛かゝつて引とらへ、前栽の飛石に捻附れば、一聲きやつと叫びけるが、忽正體顯して、年經る狐と成りにけり。左馬介大に怒り宙に提げ、「己畜生の身にて有ながら、人を誑し嘲弄せるこそ安からね。今に思ひ知らせん」とて、下人に命じて庭の落葉を搔寄させ、火を附て燻べ殺さんとす。此狐又人のごとき聲を出し、「我は伊吹山に住む老狐

七歳、狐の爲に化されて、あられぬ狂言、忌はしき有樣、心を鎭めておのが相貌を見るべし」と嘖りけるに、小七郎始めて心づき、我身を見れば、衣類皆ずた〳〵に裂亂れ、擂疵、突疵數ケ所にて、惣身は朱に染み、目もあてられぬ風情なれば、小七郎も仰天し、召連し供廻はいかになりしやと、戸の外へ出でて見れば、何地へ行きしや、さばかりの同勢、乘輿、引馬のかげも見えず、彌狐の所爲なりと、あきれて詞もなかりける。長兵衞怒心頭より發り、「我兼て聞及ぶ、伊吹山には狐住て人を化かす事數を知らず、究めて是も伊吹山の狐の所爲なるべし。此上は人足を催し、伊吹山を取圍み、古狐共を狩出し、此恨を晴すべし」と牙を嚙で怒りける。時に此長兵衞常に信仰しける御釜祓する神職此所へ參り合せ、始終の事共殘らず聞き、長兵衞を諫めて申すやうは、「誠に御憤はさる事ながら、今人夫を催し、伊吹山を獵立給ふとも、彼狐の種類悉く絕るといふにもあらず、殊に執念深き獸なれば、後にいかなる仇を成さんも計がたし。其上今戰國の時なれば、多人數を催し給はんも、上の聞えよろしかるまじ。其上小七郎殿の血色を見るに、今に邪魅退かず、妖相尤甚し。拙者爰に參り合せしこそ幸、祈禱して邪氣をしりぞけ參らすべし。先奥の間に伴ひたまへ、祓終る迄、家内の人其間へ入る事を禁むべし。小七郎父子二人我に附て來られよ」と先に立ちて奥に入れば、長兵衞も尤と同じ、小七郎を誘ひ襖





狐妖人を悩す図

下し賜ふ間、早々古郷へ立歸り、父にも語り悅ばせ、同道にて上洛すべし」と御時服迄を拜領し、有難しと直に都を立出づる、其行列ぞいかめしけれ。金紋の先挾箱、持鎗、持弓、數の道具伊達道具には、臺笠、立傘、大鳥毛二行に打せ、供人多く召連て、彼朱買臣が錦の袂、暗には古鄕へ歸らじと、白晝に江州へこそ歸りける。近隣の老若男女、すは小七郎が歸りしよと、門に立出大路に轉び、腹をかゝへ口をおほひ、笑ふ事甚し。小七郎悠々と我家の内へ通り、「小七郎只今罷歸りて候」と、大音にて呼はれば、長兵衛夫婦大に驚き、こはいかに、小七郎が戾しとやと、周章ふためき走り出て、其體を見れば、衣服は破れ、月代のび、おどろの髮は肩に懸り、正體なき形勢なれば、彌々驚き、「汝家を出て既に七日、方々を尋ね搜せども、在所曾て知れず。今日迄何方に居りたるぞ」と、おろ〳〵淚に尋ねければ小七郎少しも騷がず、「さん候、某事將軍家の召によつて都へ登り、三淵大和守、和田伊賀守を師として、軍學、兵法、射禦および武道の奧儀悉く傳授を得て、江州七萬五千石の身上となり、一方の軍將に命ぜらるゝ。只今數多の供人を召連れ、父を同道致すべきの台命を蒙り罷歸り候」と有りし事共そこはかと物語れど、跡先更に聞分がたく、誠に世俗のいへる、鍬をかたげて手を放し、耳を取て鼻をかむといへる諺の如く、何の譯なき次第なれば、長兵衛夫婦仰天し、「己武士の家に生れ、年も早十

黄縅の鎧に白銀にて秋の野彫たる裾金物打たるを、草摺長に著なし、螺貝頭の鉢に三日月の前立したる甲を著し、朱柄の采配を鎧の引合せにさし、赤銅作の太刀を帶び、白月毛の馬に跨り、長刀は従者に持せ、靜々と乘出したる武者、適一人當千の兵とこそ見えにける。三淵大和守進み出て申けるは、「此程より鍛錬せし武術、上覽有べきとの御事なり、早く御前において手練の程を顯されよ」と下知すれば、小七郎馬上に平伏して此旨御請申上げ、直に采配追取て軍を進め、又は退き、城攻の下知、夜軍の號令、馬乘り廻し指揮する形勢、實に百萬騎の師といひつべし。扨弓矢を取てぞ馳出し、一三に驅ながら弓と矢打つがひ、引絞て切て放つにあやまたず、的の正中射通したり。又乙矢をねらひ堅め、へうと射るに、再び星を射抜ければ、列座の面々一統に、「射たり〳〵」と譽聲暫しは鳴も止ざりける。猶打物の業御覽有べしとの台命に隨ひ、薙刀取て水軍に廻し、四方に當り八方をはらひ、千變萬化の祕術を顯はし、馳通り馳戻し、其形勢の烈しき事電光のごとく、三管領は云に及ばず、上下に並居る大小名思はず感聲高く鳴り、是ぞ希代の勇士かなと、口々に稱讃あれば、小七郎馬を乘鎭め、將軍へ目見えなし、御盃も頂戴し、面目身に餘り平伏すれば、將軍家、上野中務太夫を以て仰下さるは、「汝が今日の武術甚感稱まし〳〵、一方の陣將に命ぜられ、江州において七萬五千石の地を

れ思ひの外の出身なれば、有難き旨御請申す。扨名をも改むべしとて、入江左門と召れ、當時戰國の砌なれば、御旗本の士といへども、豫兵法、武略、劍術、鎗法、城攻、野戰、夜軍其外軍中の駈引等、覺悟なくては有る可ずとて、和田伊賀守、三淵大和守兩人に預け遣され、晝夜兵術を鍛錬し、武藝の稽古にかゝりける。小七郎は何事もみな仰に隨ひ、三淵和田の兩人を師として兵法を習ひけるに、さのみ出精せるにもあらざれども、何なる事にやめき〳〵と奥儀を悟り、武の道において一事も知らざる事なく、術においてもまた堪能に致り、天晴一方の旗大將たるべしと、和田三淵も賞讃すれば、小七郎は我身ながら其由縁を辨へず、何さま暫くの間に武術兵學殘りなく記憶せるに、我世に希なる奇才有りけるものを、父母の噴のみを蒙り、今まで愚人なりと思ひ居けるぞはかなけれと、卒に軍將の奇象備り、哀れ近き内に大戰のあれよかし、高名して諸人の目を驚さんものと、是のみ心に願ひけり。時に小七郎が武術將軍御上覽有るべきとの御事にて、長岡兵部少輔藤高是を承り、六具、馬、鎗等を送り與へ、小七郎に斯くと語聞せぬれば、小七郎謹で領承し、頓て御前へ出でにけり。此時將軍家上段の間に出御あれば、三管領を始とし、仁木、石堂、吉良、一色、上野、長岡左右に侯し、三淵、和田の兩人は、師範たるを以て、縁側に出て是を見る。時に彼入江左門其日の出立には、萌

盡し美を盡し、彼唐土の阿房宮も、是にはしかじと覺えたり。其外番所々々に弓鐵炮を錺り、數十本の長柄を立並べ、上下の侍嚴重に是を守り、諸士及び奴僕小者に至る迄、出入の人數を改め正し、實に將軍家の御座所とて、威儀調ひて見えにける。小七郎は彼民部に誘はれ、大廊下の下白砂を過て、諸侯大老の詰所とおぼしき次の間に這上り、頭を上て上の間を窺ひ見るに、其頃の管領三好修理大夫義次、岩成主税介を首とし、御家人上野中務大夫、長岡兵部少輔、三淵大和守、和田伊賀守、末席には白髮交の鬢髮苦き顏色して控へたるは、音に聞えし松永彈正久秀なり。其外仁木、石堂、吉良、畠山の面々、列を正して相詰たり。小七郎は甚恐れ、只低頭して仰を伺ふ時に、岩成主税介高聲に申けるは、「入江長兵衛が忰小七郎とは汝が事か、其方が祖父入江長左衛門儀、將軍家江州御危難の砌朽木土佐守と心を合せ、忠勤の働ありし舊功を思召出され、疾にも召るべきの所、打續軍事繁く、延々に相成しに、長左衛門も病死いたし、長兵衛は佐々木家に仕官の身、其子小七郎才智明敏なるよし、將軍家御聞に達し、則ち今日召出され、御家人の列に加へ給はる間、有難く存ずべし」と申されけるに、小七郎は只はつ〳〵と計にて、何といらへ仕り奉るべきやうも知らず。其上我祖父に長左衛門といひし者のありて、將軍家へ忠勤有りし事も今聞初めにて、萬事合點は行ねども、何にもあ

の事を申候はおろかに候。子を生かゝりし狐ゆゑ助んとの事なれば、所詮狩に出ぬぞよからん。今朝より此深山を狩くらし、兎一疋取得ぬ所、一方ならぬ白狐を見附け、打ずして止べきか」と、長兵衛を突退け〳〵、ねらひ堅めし鐵炮の引金に障と見えしが、只一炮に件の白狐を打殺せり。左馬介大に喜び、今日の得物こそ抜群なれ。餘の獣は取得ざれども、白狐なれば此一疋にて事足れり。日も西に傾きたれば、いざ家に歸るべしと、彼狐を鐵炮に結り附け、ふりかたげて立歸る。道すがらも長兵衛は何となく心にかゝり、兎思ひ角思ひ、鬱々として銘々家に歸りける。

長兵衛が一子小七郎、今年十七歳、其夜表に人ありて「小七郎々々々」と呼ぶ。小七郎誰なるらんと表へ出れば、供人美々敷四方髪の侍小七郎に向ひ、「某は將軍家の臣下荒川民部といふ者なり。將軍家貴殿の明才を聞召し及ばれ、御家人に召抱らるべき條、早々都へ上り御目見えて然べし」とて、乘物指寄せけるに、小七郎大に驚き、某年未少く、身多病にして將軍家の御召に應ずべき者に非ず、人違にやと訝るを、荒川民部手を取て乘物に押入れ、「急の御召、遲滞あらば却て御咎を蒙るべし。はや疾々」と勸むるにぞ、小七郎は夢の心地にて、兎角の思慮も出ざる内、乘物を飛し、都をさしていそぎけるが、頓て室町の御所に到り、始めて見たる將軍家の御館、玄關、廣間、評定所、白書院、黒書院、常の御居間、奥御殿、玉の臺金の梁、善

入江は味方の陣へ入りに只今の教訓に隨ひ、安居の地を需むべし」とて、互に名殘を惜みつゝ、入江長兵衛此軍果て後、仕を罷て京けり。昔の黄金三百兩といふは、今の三千兩よりも尊し。是武夫の本意には師に仕し、町人となり貨殖を宗とし、富家と成りて老後の歡樂を極めける。舊近江佐々木承禎の家人なあらざれども、身を殺にはまさるべき乎。此入江長兵衛といふは、入江と睦じりしが、永祿のはじめ、左馬介いまだ三宅彌平治と呼し時、浪人して江州に仕し、爰彼く交りけるが、彌生の末つかたのどやかなるに、伊吹山に狩せんと、兩人鐵炮打かたげ、休息所獵り歩けど、今日はいかなる事にや、兎の兒一つだに得ざれば興を失ひ、木蔭に坐して遁しけるに、傍なる林の中より狐三疋飛び出で、一參に此方の森へ馳入たり。兩人是を見て、とすまじと森の内を捜せども、何地へや迯たりけん、更に其跡なし。猶も山深く求めけるに、此狐ある洞の中に白き狐の屈居たり。左馬介甚悦び只一打と鐵炮の筒をさし向るに、不思議や涙を流し、人のごとく聲を出し、「我今産の氣附て、既に子を生んとす。なさけに助け給はれ」と、手を合せて拜みける。長兵衛是を聞て哀を催し、左馬介が筒先に立塞り、「此狐産の期に臨み、宥しさしも年經し白狐の通力も失て、迯去る事も叶ざると見えたり。誠に不便の有樣なれば、遣りて外の山路を狩せん」といふ。左馬介大に笑ひ、「足下常に勇氣鈍き生得故、物に感じて左樣

と、夜の中より塀下に附て、明るを遲しと待居たり。左馬介は何心なく櫓に上り、挾間の板を細く拔き、寄手の陣を詠居けるが、塀下に人の忍び居る有り、敵か味方かと目を定めて透し見れば、入江長兵衛なり。左馬介聲をかけて、「そこに居候は入江殿にて候はずや」入江仰ぎ見て、「左云ふは光春殿にて候か。某當城の一番乘を志し、前刻より是に忍び候。朋友の交盡ずして、不思議にも詞を交し候ものかな」と云ふ。左馬介是を聞て申すやうは、「我今鐵炮を以て貴殿を討んに、たとへ翼有りて飛去とも生ん事叶ふ可らず。然りと雖も我足下と朋として、深く交しは既に廿年前、頗柔弱の士にて有りしが、今此城の一番乘を心がけ、只一騎塀下に附て、合戰を待れ候勇志に感じ、敢て貴殿を殺さず。今此城陷り、我身死せん事今日を限れり。末期の一言を以て貴殿に遺さん、あだし言とな思し給ひそ。我少かりし時より戰場に臨む每に、魁殿の功を心とし、武名を揚んと勵みしも、畢竟身を殺して子孫の後榮を思ふのみなり。然ども天命縮り、運盡る時は今日の我なり、生前いくばくか危阨を侵し艱苦を嘗め、終には身を葬るの地さへなし。貴殿も又かくの如くなるべし。願くは仕を止め、身を安きに置て、危に陷る事なかるべし。今貴殿に黄金を與へん、是を以て恆の產とせられ候へ」とて、黄金三百兩革袋に入れて投出す。入江此詞を聞て淚を流し、黄金を推戴き、「足下の厚情今に始めず、謹で

指の柄に手を懸れば、長閑齋、左馬介、北の方諸とも周章押止め、左馬介重て申けるは、「是は旁物に狂ひ候か、今此城に楯籠り、始終かなふべしとも覺え候はず。然れば我々も北の方公達を具し奉り、先丹州へ忍び下り、扨いかにとも謀略を廻らし、亡君の御志を繼ぎ、再び惟任氏の家名相續すべき志にて候。今一所に退去いたすべきに候へども、餘り物騷しく人の目にも立ち候へば、早々當城を立退き候て、面々其身を堅固に、君の御家名相續專一と心にかけ候はんは、此上の忠義有るまじく候。此上にも遲々せられ候物ならば、北の方公達是にまします、二世迄の勘當たるべく候」と嗔を含んで申けるに、此上はぜひに及ばず、仰に隨ひ申すべき旨領承しければ、兩大將大きに喜び、敵の攻寄ざる前に疾く〳〵と勸むれば、光秀の妻室、金銀を入れたる袋一つづつ賜り、其外の經卒百餘人、皆米錢金銀を分與へけるに、皆涙を流し心々に落行ける。長閑齋、左馬介今は心易し、敵兵を引受一軍して腹切べしと、腹心の郎等七十餘人、敵の寄るを今や〳〵と待居たる。時に其日も早暮て、堀、惟住、池田が一萬千餘人、戌時に坂本の城を取圍みけれど、夜軍せんも詮なき事なり、合戰は明朝と定め、皆堅固に陣を取り、篝を焚て夜の明るを見合せけり。爰に堀久太郎が麾下の士に入江長兵衞と云者有り。左馬介とは親しき交り有りければ、あはれ人の手にかけ失んより、彼に逢て頭を申受け、我高名に備へん

清武(和泉守が子)今峯新助泰政(頼母が子)中川源太郎清政、内藤三次郎忠長、尾石藤左衛門武清(與惣が子)萩野河内守友晴、安福宇右衛門長盛、中澤四郎右衛門知景(豐後守が子)久下三左衛門勝元等以下二十六人の勇士列座して、討死自害をともにせんとぞ勇ける。此内に山崎の合戰を遁れ、光秀が討死を知らずして、此坂本へ來る者多し。就中村越三十郎は十二日の夜、勝龍寺より光秀が後陣に備へ、坂本へ心ざし馳たりしに、道に一揆ばら充々て、味方の勢ちり〴〵になり、村越は三百餘人の野武士等に取圍れ、さん〴〵に合戰し、光秀が切腹をも知らず、夜の明方に坂本へ著たりける。されば此城を枕として快く討死せんと、銘々殺氣を面に顯し、其下知を待居たり。時に長閑齋諸士に向ひて申けるは、「扨しも一座の面々、當家の先途を見屆らるべき爲、是迄附隨ひ候事、誠に一方ならざる深切、申謝べきやうなし。猶此上の芳志には、急ぎ此所を立退れ、主君の御子孫を見繼參らせ、御菩提をも弔ひ申され候はゞ、二世までの忠義なるべく候。此旨北の方よりも呉々仰出さるれば、早々退參の儀然るべし」と申ければ、皆一同に面色を違へ、「こは仰とも覺え不ㇾ申候事を承り候物かな。我々多くの傍輩を離れ、かやうに罷在る事は、何國迄も御一所にと覺悟致し候所に、急ぎ落行べき旨仰出され候は、誠に未練の者と思召故ならん、甚だ面目を失ふ次第に候。所詮一刻も早く切腹致し、我々が心底を御覽に入れ申すべし」と、皆々脇

繪本太閤記　四篇卷之六

○明智左馬介入江長兵衛與黄金

左馬介光春は、大敵を凌ぎ坂本の城に入りければ、明智十郎兵衛光廉、入道長閑齋、左馬介を待受け、先到著を喜びながら、山崎の敗軍、光秀が討死を物語り、互に涙にむせびける。此長閑齋は明智十郎左衛門が父にして、光秀が叔父なり。扨いかゞ計を設くべきと評議しけるに、光秀が妻室は妻木主計頭範賢が姉照子、奥より立出で申けるは、「當家の時運此體に成果ぬる上は、兎角の評定に及ぶまじく候。郎從の面々を何方へも落しやり、城に火をかけ、旁をはじめ自親子、自害いたし候はんと兼て思ひ設け候。よしなき長詮議に時刻を移し、敵に寄られ敗亡せんは、未練の覺悟にも相聞え、且は家人の輩落行間も有るまじければ、早々此旨に決せられ然るべし」と申されければ、兩將此よしを承り、「實に至極の決斷尤に覺え候。女姓の所存にて、かゝる金言を承る事、誠に難有き次第に候」と、感涙を流しける。扨城中に籠たる勇士を呼に、三宅周防守業朝（式部が子）村越三十郎景則、堀口三太夫貞教（三之丞が弟なり）四王天又兵衛政實（但馬の守が子）村上吉右衛門

繪本太閤記　四篇第六之卷　目錄

明智左馬介入江長兵衛與黄金

腰を打かけて、遠山に日の丸を出せし軍扇を開き、暫く暑氣を淩ぎける。京勢は左馬介を討もらしぬる殘念なりと、急に進んで追來る。左馬介是を見て、又馬に打乘り、しづ〳〵と步行て坂本の町に入り、十王堂の前にて馬を下り、手綱の輪を切て堂の格子に括り附け、矢立を取出し、疊紙に光春　涉　湖　馬　といふ五字を書き、手取髪に結び附け、步行して坂本の城に入りにける。是は光春寵愛の駿足なれば、城中にて倶に殺さん事の便なければ、此所に繫ぎ置き、敵に送りて馬の命を助けしなり。松永久秀が平蛛の釜を打碎きしとは、雲泥の相違なりし。

期に至りて主從の契約をたがへず、ともに討死遂げ候事、忠心義勇いつの世にかは忘るべき。いざ心よく討死をなし、三途の川を諸共に、手を引連て渡るべきぞ。來れ〳〵」と勇れば、今迄太刀を杖につきて、立兼たりし痛手の兵士、「仰にや及べき、主從三世の睦びあれば、後の世も猶たのみあり。死出の合戰急ぐべし」と、偃たる太刀曲たる鎗を踏直し、勢込で見えければ、左馬介心に喜び、三尺五寸の太刀先向に指かざし、堀、惟住が數千騎の軍兵に、一文字に切てかゝれば、敵は大勢四方より取圍み、疊みかけて討つ程に、手負の從卒一人も不殘討死し、名を大津の濱に止めけり。左馬介、今は是迄なり、さのみ罪作りて何かせんと、雲のごとく集りし堀が一千五百人の其中を、おつと喚いて只一騎、利刀の竹を割る如く、只一筋に乘入たり。敵の兵士蹄に掛られ鐙に當られ、忽一路の死人を築き、つと乘拔けて一鞭くれ、一躍三丈湖水の中へ一文字に乘込だり。堀惟住が兵卒ども、あれよ〳〵と呼つて、磯端に並び立ち、打詠めてぞ居たりける。左馬介只一人、さしも遙なる湖を、彼雲龍の羽折比叡山おろしに飜り、武具の文粲然に、馬は名におふ大鹿毛、聲をかけ息をくれ〳〵、引上々々およがせしは、風流といひ武勇といひ、實に逞しき武士やと、數千の軍兵一時に、よいや〳〵と譽る聲、琵琶湖の浪に響きつゝ、暫しは鳴も止ざりけり。難なく唐崎の濱へ乘上り、一ッ松の下へ馬を寄せ、木の根に

者は閻魔の廳に我名を傳へよ。來れ〳〵」と野太刀を以て敵を招くは、左ながら二王のごとくなり。堀、惟住が軍兵ども、此勢に氣おくれし、跡ずさりして見えけるに、小ざかしき若者三十餘人、しや物々しき敵の形勢かな、いで討取て高名に備へんと、白刃を並べ聲を合せて切てかゝるを、半四郎得たりおうと懸合せ、右に切据ゑ左へ薙伏せ、勇威粲然と傍を拂ひ、速なる事電光の如く、人を討つ事大山の崩るゝに似たり。蜘蛛手に斬立て角繩に拂ひ、人なき所を歩行に異ならず。或は猿臂を延べて人礫をなし、又は一刀に三人五人打殺し、算を亂して働きしは、樊噲が勇、項羽が力もなどか是にや勝るらんと、只一人に薙立られ、堀、惟住が大軍は一同に崩れ立ち、さん〴〵に成りて逃たりけり。半四郎は、「きたなし返せ」と云儘に、逃る敵を七八人打倒し、野太刀打捨て、兩手にて敵を二人引挿へ、勇士の討死を見よやとて、湖水の中に飛入て、終に其名を打出の濱に殘しけるは、恐ろしかりし有樣なり。

○左馬介馬而涉二湖水一

左馬介光春は、林半四郎が討死を見て、あはれ大剛の者かなと歎息し、味方を見れば僅に十四五騎、皆深手重疵を蒙り、生存命べき者一人もなし。光春涙を流し、「汝等皆深手課たるよな。此

が最期の鎗先、冥途の土産に受て見よ」と、鎌十文字の鎗打振り、村雲立たる大勢の中へ、をつと叫で馳入れば、荒木、石川、村上、野村、三宅を首とし、必死と究し手垂の勇士、得物〳〵を追取て、西に當り南へ追ひ、東を切り北へなびかし、半時計戰ひしが、堀が軍勢討るゝ者三百餘人、關寺の傍迄備を亂して迯たりける。左馬介つつと出て味方を見れば、數剋の戰ひ悉く討死し、今ははや十六騎にぞ成りければ、側なる石に腰打掛け、爰にて討死すべきや、又切り拔て坂本へ至るべしやと、暫く思案を廻らす所に、以前に懲ず堀が軍勢、後陣の惟任五郎左衛門が勢を合せ、雲霞のごとく推寄て、纔なる左馬介が勢をあますまじと取巻たり。左馬介にた〳〵笑ひ、「こは怪からずの敵の形勢、手並は先に知りぬらん。いで三ツ瀨川の道連にせん、來れやつ」と大音に呼り、鎗を絞て突來る。左馬介が後よりゆらり〳〵と立出づる六尺有餘の大男、實も烈く戰ひしと見えて、左右の大袖草摺も二三間ちぎれ落ち、兜は脫て大童に成り、其年頃三十七八と見えて、頰骨あれて色黑く、圓眼大口、髮髯逆に立上り、刃のわたり六尺餘の野太刀を右手に打振り、左の手に亂髮をかき上げ、鐘を撞く計の大音にて呼りけるは、「日向守殿丹州征伐の時、保月の城主赤井惡右衛門を討取し林半四郎武俊とは我事なり。今日亡君追福の爲、此所にて討死するぞ。武士の手本に見置て、生殘らん者は後の世の物語にせよ。死せん

にて道を急ける所に、江州佐々木、淺井家の浪人野武士等、爰に五百七百、彼所には千人千五百人、道を遮り通さじ物をと支へしに、左馬介事ともせずに引返しては打殺し、打破つては驅通り、さん〴〵に戰ひて、打出の濱に著せし時、千餘人の軍兵或は討れ、又は山崎の變に心まよひ、落行く者も少なからず。今は石川幸治郎、野村喜右衞門、比田玄蕃、野川新八、藤田藤右衞門、三宅傳八、原半右衞門、幼兒庄吉、林半四郎、荒木友之丞、船木八之丞等纔に三百餘人、彌道を急ぎけり。此時池田が先陣、堀久太郎秀政が千五百人と端なく大津打出の濱にて出合ひたり。左馬介少も恐れず、堀が千五百人の其中へ、二百餘人を圓丸に備へ、噇と喚て突懸り、鎬を削り鍔を破り、眞黑になつて戰へば、堀が士卒敵は小勢なりとあなどりしに、左馬介が勇威に打崩され、三丁計迯たりける。此時左馬介が出立は、黑絲に薄紅を緘し交たる鎧を著し、白銀星の兜の緒をしめ、大鹿毛といふ駿足に青磁の鞍を置き、厚總の尻がいは燃立計の朱に染なし、此頃の能畫狩野永德が畫し雲龍の白綾の陣羽織に、緋の裡打しを鎧の上に引被き、追つかへしつ戰ひしは、實に光秀が賴む勇士なりけりと、皆武者振を賞美せり。堀久太郎味方を下知し「敵は僅に二百計ぞ。引包んで切崩せ」と、自ら馬を眞先に乘り出す。堀が軍勢又もりかへし、鬨を作つて突來る。左馬介是を見て莞爾と笑ひ「やさしき敵の振舞かな。光春

の家臣涙と倶に其屍を收め、心々に落行きけり。

○明智左馬介打出濱合戰

去程に明智左馬介光春は、六月四日、隨身の兵六百餘人、江州安土の城に打入りしより以來、國士を懷け江州平均し、國々を治んと種々に思慮を廻らし居るに、十三日山崎の合戰味方敗績して、同苗十郎左衛門をはじめ、並河、山本、諏訪、妻木、奧田、齋藤、柴田、三牧、藤田等の勇士等討死し、剩へ小栗栖野にして大將光秀竝びに溝尾、進士、比田等自殺せしと聞えければ、安土の城下又々騷動し、羽柴が兵士早押來るよし、さま〴〵に沙汰しければ、左馬介思ひけるは、爰にて獨犬死せんより、坂本の城に入りて、向州が妻子城代長閑齋等と安否をともにすべし、又は透も有らば京都に忍上り、秀吉を伺ひ討か、二つの内に有りと思案を極め、諸方の集り勢は悉く暇を出し、丹波勢千餘人、十四日辰剋、安土の城に火をかけ一片の煙となし、且佐和山の荒木山城守、長濱の妻木主計頭兩人へ使を立て、各其城を捨て坂本へ一所に籠らるべしと申遣し、直に坂本へぞ急ぎける。然るに羽柴筑前守が下知として、惟住五郎左衛門、池田勝入齋、堀久太郎等一萬餘人、安土と坂本を心ざし一參に寄來る。左馬介は逞卒千餘人

の合戰破れ、光秀討死のよし取々噂ありて、世上騷しかりしかば、龜山の城に有りける妻木七右衛門範之、内藤三右衛門忠次、主人の死骸竝に惟恒が屍と諸共に深く地中に埋み、其後髻をはらひ僧となり、主人の跡を弔ひける。彼晉の豫讓が貌を變じて、舊君の恩を報じたるには似ざれども、切ての事なりと覺えて哀れなり。去程に十四日の曙、秀吉の下知として、筒井順慶を大將として、蜂屋出羽守、中川瀨兵衛、鹽川伯耆守、高山右近等一萬三千人、勝龍寺の城を十重廿重に取卷き、鯨波を揚たりける。時に城代三宅藤兵衛綱朝、兼て期したる事なれば、並河八介、中澤豐後守等三百餘人討て出て、落花微塵に戰ひ、寄手八十餘人討取り、二百餘人に手を課せ、味方も百五十餘人討死し、城に入て忽火をかけ、三將ともに自害して、勝龍寺の城は落たりけり。三宅藤兵衛四十三歲なり。又丹州八上の城主日向守が從弟明智治右衛門光忠は、去る六月二日、二條攻に鐵炮に中り、深手なれば立つ事不ㇾ能、知恩院に入て治療せしに、山崎表の敗績、向州一家の滅亡を聞き、家臣佐野太郎、澁谷次郎、友田三郎等、「丹波國へ退き給へ」と勸む。光忠莞爾と笑うて、

誰がための名なれば身より惜むらんはかなきものは武士の道

といふ古歌を繰かへし吟じつゝ、四十三歲にして、十四日朝、知恩院にて自殺しければ、三人

が首を打取て、猶光秀が首を求むるに、田の中に足跡あり。夫をしたひて北の山際に到り見るに、土少し高く盛りて、何樣物を埋みたる體なれば、頓て土搔除けて地中を見るに、物こそあれと引出すは、馬韉に包し光秀が首なり。長兵衛大に喜び、光秀、溝尾等が首十一、秀吉殿の本陣へ持參し、實檢に備へければ、まがふ方なき光秀の首なりける。秀吉是を見て大に喜び、軍扇を以て彼首を丁々と打ち、「君を弑せし天罰早く來て、土民の手に命を落せしは快き哉」と罵給ふ。彼長兵衛には黃金數多賜り、其手柄を稱美し給ふ。今も伏見の里に此長兵衛が子孫有りといふ。此時光秀行年五十五歲、溝尾庄兵衛四十三歲、進士作左衛門四十八歲、比田帶刀四十六歲なり。爰に哀れなりけるは、光秀が嫡子十兵衛尉光慶、今年十四歲に成りけるが、器量勝れて才覺も賢かりしが、去る卯月の始より、龜山の城にて風の心地に煩ひしが、後には重き病となり、京都より名醫數多招き寄せ、樣々療治なせし程に、少は快氣の氣色なりしに、當月一日、光秀京都にて信長公を弑逆し、殊更帝都に旗を立て、天下の執權せるよし聞しより、光慶一入煩ひ苦み、疾病次第に重行きて、同十三日の夜、光秀小栗栖にて生害と同刻、龜山の城中にて終に空しく成りけるこそ、不思議なりし事なりけり。光慶が後見隱岐五郎兵衛惟恒は、主君の死去を歎き悲み、其座にて腹搔切り、行年五十一歲にて、殉死してぞ果にける。然るに此日山崎

に附て身を立て、名を世上に知られし事、莫大の君恩いかにしてか報ずべきや。暫く待せ給へ、御供仕候はん」と、進士は光秀が自害したる脇指を取て心元に突立れば、比田は自ら首を掻落し、兩人ともに光秀が死骸に抱き附て死たりけり。溝尾も一所にとは思へども、敵に主人の首を取れん事もいかゞなれば、比田進士が面の皮を削り、主君の首を馬韉に包み、山越に狼谷といふ所を急ぎけるに、此邊にも一揆ばら充滿して、通るべきやう有らざれば、北の山際に首を埋み立退しが、今は浮世に思ひ置く事なし、自害して主君の恩を報ぜばやとぞ思ひけるに、溝尾が草履取に與七郎といふ者只一人、跡を慕うて其所へ尋ね來りければ、「筐のものを妻子の方へ送るべし」と云置て、腹掻切て失にける。時に一揆ばら又此所へ襲ひ來れば、與七郎主人の首を隱すべき間もなく、其身計漸く岩根を傳ひ山林を凌で、故郷へこそは落行ける。

○光慶病死幷治右衛門光忠自害

小栗栖村の百姓中村長兵衛は、光秀が死骸首なきを改め見るに、昨夜藪の中より正しく我突留たりし騎馬武者なるが、草摺に金銀を以て桔梗の紋の金物を附けたり。扨は山崎の大將光秀にて有しやらん、首を隱せしこそ無念なれと、方々搜求る所に、又溝尾庄兵衛が死骸を見附け、是


光秀
小栗栖の里にて
落命の図

をしたゝかに突通し、力を入れて繰けるに、流石の光秀、太刀を拔て鎗の柄を切折たり。溝尾庄兵衛高聲に呼はりけるは、「やをれ僻事する曲者め、味方打して何とするぞ。翌なん此報恩ひ知すべきぞ」といふに、藪の内より聲々に、「往還にもあらぬ道を忍びて通る者やある、落人に疑ひなし。逃すまじ」と取廻せば、進士、比田等太刀ひらめかし、追ちらし〳〵、さん〴〵に戰ひける。此間に光秀は溝尾庄兵衛と只二人、三丁計落行しが、光秀馬よりがばと落たり。溝尾庄兵衛甚だ驚き、倶に馬より飛下りて、「いかに候」と尋るに、光秀溝尾が手を取りて、最前の鎗疵より腸の出でたるを探らしめ、かくの如き痛手にて、中々坂本へ入らん事叶べくも覺えず。爰にて切腹すべき間、首を妙心寺へ持行き、灰と成して捨て候へ」とて、鎧の引合より疊紙に辭世の句書たるを取り出し、庄兵衛に渡す。其句に曰く、

逆順無二門　大道徹心源

五十五年夢　覺來歸一元

明窓玄智居士書

光秀脇差を拔て、腹十文字に搔切れば、溝尾庄兵衛泪ながら首打落し、立上る其所へ、進士作左衛門、比田帶刀一揆ばらを驅散し、後馳に馳來り、此體を見て大に驚き、「我々此年月龍鱗

三宅藤兵衛大に喜び、其身は中澤豐後守、並河八介等三百餘人にて勝龍寺の城に止り、光秀は津田與三郎、進士作左衛門、開田太郎八を先に備へ、溝尾庄兵衛、比田帶刀、村越三十郎等後を守り、上下の兵士五百餘人、十三夜亥刻計に、川端を上へ、北淀より深草を過て坂本の城へと急ぎける。然るに此傍の野武士一千計群り起り、「落人の通るぞ。討留て武具剝取れ」と呼り、貝鐘を鳴し鬨を作つて支ければ、溝尾、比田、進士等の勇士さんぐに切立て、道を求めて走りけるに、薄の穗にも恐るゝ光秀が弱兵、爰彼所にて落失せ、小栗栖の傍にては、僅に三十餘人になりけり。光秀是を見て甚だ苦しみ、「疾に龜山坂本に籠城するか、偖は勝龍寺にて自害すべき身の、坂本へも通り得ず、途中に屍を肆んこそ口惜けれ」と、身體爰に究り、今ぞ齋藤内藏介が謀を慕ひ、三宅藤兵衛が諫を悔れども詮なし。津田與三郎は十餘人にて跡に下り、一揆ばら五六十人切伏せ、其身もそこに討死す。光秀は溝尾、比田、進士等と倶に、藪疊したる塀の許を忍びやかに急ぎけるに、此時夜ははや丑刻なり。爰に小栗栖野の百姓中村長兵衛といふ者、落武者を仕止んとて、十餘人此邊を徘徊せしに、此體を見て、落人ござんなれとて、彼藪の内に忍び居て、藪越に先に進みし村越を三間柄の鎗にて突たりけり。されども村越の胴丸の實强かりしかば、身に中らず。光秀は第六騎目を打せけるが、光秀とも知らず、又藪越に右の脇腹

せり。坂本に御臺所を始め參らせ、長閑齋を城代として、金石の勇士八百餘人籠城す。安土に勇將左馬介光春五千餘人、長濱に妻木主計頭防閑萬五郎一千餘人、作和山に荒木父子八百餘人、其外京都に三宅式部、淀に番頭大炊頭、伏見に池田織部、宇治に奥田庄太夫等、悉く千二千の軍卒あり。味方の軍兵集めて一萬二三千はこれ有るべし。左馬介、妻木、荒木等を坂本に籠城させ、君は溝尾、比田、進士、津田等を召具し龜山に楯籠り、天下の變を見合せ給ふべし。鬼神の如く人の恐れし信長公御父子をさへ討奉り、京都の守護として萬民に渇仰せられし御身を、輕々しく御生害なし給はんとは不覺の事に候」と、涙と共に諫めければ、光秀聞て、「いしくも申ける三宅哉。然れども我當月二日信長公御父子を殺せしより、露命ながらふべきに非ざる身の、今朝山崎表の合戰に、股肱の臣多く討せ、爰を遁れ來るさへ世に心苦しく覺ゆる物を、又もや遁れ龜山へ落行ば、武士の瑕瑾此の上有るべきや」と、太刀の柄に手をかけ、既に自害と見えければ、三宅、溝尾、比田、進士左右の手にすがり、「是は物に狂ひ給ふものかな。源頼朝は朽木の中に隱れ居て、遂に海内を手に握れり。尊氏は西海の波に漂ひながら、是も天下を掌に收たり。片時も早く爰を落行き、めでたき御運を開かるべし」と、或は怒り或は恨み、さま〴〵勸め參らすれば、光秀も又默止がたく、四人が詞に隨ひて、一先坂本へ落行べしとぞ定めける。

繪本太閤記　四篇卷之五

○光秀落㆓命於小栗栖野㆒

夫軍は時の運により、且大將の心に在とはいへども、今朝齋藤内藏介が諫に隨ひ、光秀京安土を捨て、明智左馬介、同十郎左衛門が手勢五千餘人にて坂本に籠城せしめ、其身は丹州龜山に楯籠り、一國を固く領し、時節を伺ふものならば、兩城ともに兵粮玉藥は澤山なり。元來軍者の光秀、光春いかに大軍を以て攻るとも、豈容易落城せんや。三年もこらへたらんに、國々に大變發り、敵方心々に分離すべし。然らば喩天下を掌握せずとも、十ヶ國十五ヶ國を切取らでは止べからず。時運とは申しながら、口惜かりし次第なり。扨も日向守光秀は、臣下の諫にしたがひ、心ならずも勝龍寺の城に落籠り、上下の從兵八百餘人、最期の一戰快くなして腹切んと思ひ定めたりしに、城代三宅藤兵衛綱朝諫めて申けるは、「凡軍の大將たらん者は、先命を惜み、靜に時運を計り、必勝の謀略を廻すべき事に候。君山崎の一戰に打負たればとて、切腹し給ふ御事や候べき。龜山には公達光慶殿を大將として、隱岐五郎兵衛五百餘人にて在城

繪本太閤記 四篇第五之卷 目錄

光秀落命於小栗栖野一
光慶病死幷治右衛門光忠自害
明智左馬介打出濱合戰
左馬介馬而涉湖水一

數萬の死骸を突刺々々改むるに、山本山入、村上和泉守兩人を見出して、二人ともに首を取て、秀吉の實檢に備へたり。夜の子刻首實檢相濟て、銘々分取高名を帳面に記し、後日恩賞の沙汰有るべしとて、諸軍一統に今日の合戰拔群の働を感稱有りて、山崎の南に大に營を連ね、其夜は野陣に宿し給ふ。神戸侍從信孝自ら立て中川瀨兵衞淸秀が傍に寄り、其手を取て、「今に始めぬ事ながら、今日汝が働は、恰も天神のごとく見えたるぞや。かく戰に勝利を得、全く本意を遂たるは、其方の戰功に依てなり。いづれの時か是を忘れん」と、かへす〴〵稱美し給ふ。時に其後の方にて、筑前守秀吉輿に乘ながら、「中川瀨兵衞骨折々々」と申されしを、瀨兵衞聞て大きに驚き、「筑前守がなめ氣なる言葉つき、其顏もと、早天下を我物に成したる形勢なり」とつぶやきけるこそ、誠ぞよく的れりとおぼえ侍る。

首實檢をせられける。此時さしも山崎の野邊廣しといへども、今日未明より戰暮したる事なれば、敵味方の死骸纍々と横倒り、丘のごとく又山に似たり、誠に足の踏所さへこれなし。秀吉が旗本の勇士、大將の本陣計は先死骸を取除けて首實檢に入るべしと、銘々立寄り、竪樣横樣に倒れ伏たる死骸どもを、手を取り足を引て傍へ積重ねけるに、怪しや死骸の中に一人うごめくやうに有ると見えけるが、むく〳〵と立上り、短刀を振て大將秀吉を目がけ一參に飛懸る。片桐助作立塞り、鎗を絞て掛合たり。彼死骸、持たる短刀をからりと投捨て、太刀引拔き打向ひ、祕術を盡し戰ければ、數十人の勇士ども、「いざや死人の太刀打するを見よや」とて、四方を取巻き見物す。片桐助作大に怒り、「おのれ曲者、生捕て仔細を問ん」と、突外しく〳〵、二三度透して打合しに、彼者手垂の勇者にて、受つ流しつ、踏込み〳〵烈き太刀先、片桐心に感じ入り、此奴生捕る事叶まじと、大に喚て繰出す鎗先、左の肩口突拔たり。彼曲者ひるみながらも手錬の勇者、片桐が鎗の柄を片手なぐりに切折たり。片桐氣早く太刀拔放し、右の肩先八寸計切割て、終に首をぞ取りたりける。秀吉を始とし數多の勇士、「何者なるぞ、よく首を改めよ」と、松明さしよせ透し見れば、是なん明智十郎左衛門光近なり。「扨は死骸の中に敵の餘黨隱れ居るぞ。捜せよや」といふ程こそあれ、神戸、池田、中川、高山、鹽川、蜂谷等が手下の勇士、手鎗提げ

強將むざ〳〵犬死もし給ふまじ、我身今に一ヶ所の薄手さへ負ざれば、一度爰を落行きて、主人と生死を倶にするか、又は秀吉に近附寄り、一太刀に今日の怨みを雪がばやと、忽ち一聲大に叫び、一方を切り破て、いづくともなく落失けり。

或書に曰ふ、利三信孝が勢を十方に追崩し、自ら敵の勇士五人討取り、八人に手を課せ、其身も五ヶ所疵を蒙り、終に信孝が手に討死す。生年四十歳なりと云々。思ふに齋藤程の勇士、さばかりの敗軍に逃れて身を全うせんや。山崎の合戰未だ始まらざる已前に、惟任氏の運命を察し、既に討死と究め、弟大八郎を筒井勢の來る道に伏置き、則ち大八郎は討死を遂たり。然るに其身一人此戰場を遁れ去しと云はゞ、始終の見識相違せり。されど山科日の岡峠に内藏介が古跡有りて、秀吉公の爲に誅せらるといふ。いづれか是なるや、後の考を俟つ。

羽柴筑前守秀吉は、山崎の合戰十分の勝利を得、主將光秀は未討ずといへども、股肱と賴みし勇士數を知らず討取り、凡首數三千七百餘討取り、手負は敗軍故幾千人といふ數を知らず。羽柴方討死三千三百餘人、手負四千餘人に及べり。誠に烈しき合戰なりと、聞く者舌を震しける。扨も十三日の夜に入れば、秀吉諸手の軍勢を山崎の廣野に陣せしめ、篝火夥しく焚立させ、先

方なく、是を介錯して其身も倶に死たりける。爰に惟任方先陣の大將齋藤内藏介利三は、味方惣敗軍と成り、或は落行き或は討れ、七轉八倒して崩行けども、其身薄手さへ蒙らず、百餘人の士卒を隨へ、爰に顯れ彼所に支へ、死憤の勇を顯し、縱横無盡に戰ひしは、人間業と見えざりける。あはれ透間あらば秀吉の旗本へ切入り、指違へて死んずと、傍を屹と見てあれば、一群の軍勢赤地に瓜の紋附し大旗を立て、金にて作りたる杵の馬印を立て、藤田が殘兵を追來る。内藏介兵士に向ひ、「此敵は三七信孝なり。是ぞよき敵、先渠を討取れ」とて、一同に打てかゝれば、信孝が軍兵思ひよらざる事なれば、東西に驅ちらされ、さん〴〵に崩れて迯たりけり。されども大將信孝は、返合せて踏止り、嚴しく下知して戰ひしが、内藏介信孝を目がけ一文字に切て懸り、既に危く見えし所に、津田左内、同喜内、同又藏、同新助、同成藏、矢部源藏、松井新介、植柘喜八郎、同喜九郎、平手兵八郎等の若侍、驅隔て討死しける間に、信孝は辛じて遁れたり。

此一戰に神戸方三百餘人討死し、五百人手負たり。内藏介は猶も勇を震ひ、電光のごとく薙立ければ、恐れて近寄る者もなし。振りかへつて味方を見れば、悉く討れしと見えて、一人も續く兵なし。今は是迄なり、よき敵も來よかし、差違て死せんものと、暫し息繼ぎためらへ共、敵更に寄附ず。爰にてつら〳〵思ふやうは、主人光秀は勝龍寺へ落延び給ふと聞ば、さしもの

忠藏、安田作兵衛は、主人光秀を落さんとて、討殘されたる兵三百餘人を一備とし、群りかゝる羽柴勢と渡し合ひ、十方に變化して戰ひ、三百餘人討取り、三百餘人に手を課せ、皆枕を竝べ討死す。安田作兵衛はいかにして遁れけん、後天野源右衛門と名乘り、去諸侯に仕へたり。前篇に見えたり。柴田源左衛門は、修理進勝家が片從弟左馬介光春が妹聟なり。其外の勇士強卒、或は敵と刺違へ、又は相討にて死するもあり、切つ切られつ、夏野の原は忽に紅の花を開き、血色に染てぞ見えにけり。此時猶藤田傳五郎は、敵を引受け敵ひけるが、味方大半討死し、殘る勇士長子傳兵衛秀行、弟藤藏行久、諏訪飛彈守、櫻井新五左衛門四千餘人、神戸信孝の先手峯信濃守、平田壹岐守が一千餘人と渡し合ひ、散々に苦戰して敵七十餘人討取り、猶も進んで戰ふ所へ、神戸の勇臣國分佐渡守三百餘人、横鎗を入て突懸り、相戰うて互に勝負も見えざりしに、大將信孝、山路彈正、鹿伏兎右京等、大軍を以て打て懸れば、藤田方終に討負け、悉く討死す。傳五郎は六ヶ所迄深手負ひ、眼に血入て動く事叶はず、自害せんとする所を、郎等岡本治郎介馳寄つて馬にかき乘せ、淀の方へ落行けるが、傳五郎大きに怒り、「敵に後を見するは何事ぞや。敵の中にて殺せよ」と罵れども、郎等さまぐ\云透し、漸淀の小橋にて船を求め、傳五郎を乘せて落行んとす。傳五郎此船中にて切腹し、終に空しく成りにける。岡本治郎介今は詮

端なう覺え候。某筒井勢の中にて討死仕るべきにて候へども、此一事心に懸り、手勢を引上げ是迄來りし甲斐有て、御討死を止め奉るは、生前の本望此上の事や候べき。此場は不肖に候へども、某父子をはじめ相殘る勇士等、命を捨て戰ふべき間、溝尾、比田、進士等の勇士を召れ、早々勝龍寺の城まで御引取り有るべし」と、血の涙を流し諫る中へ、敗軍喧となだれ來り、最早兎角の問答にも及ばれず、柴田父子は敵に向うて馳出せば、光秀は生る心はあらねども、臣下の諫め又默止難ければ、戰場を見返り〳〵、比田、進士、溝尾をはじめ七百餘人を引連て、勝龍寺の城へ落行ける。

○惟任方勇士等討死

惟任光秀は比田、溝尾、進士等と共に山崎を引取りければ、いとゞさへ騷亂れし惟任勢、七裂八裁に打なされ、討るゝ者麻のごとし。羽柴筒井が大軍四方より引包み、備へを亂して切廻れば、惟任が勇士土岐兵太夫、同半太夫、明智兵介、溝尾五右衛門、（溝尾庄兵衛が子なり。）進士作之丞、（進士作左衛門が子なり。）堀尾三之丞、隱岐内膳、（光秀が姪聟隱岐五郎兵衛惟恒が弟なり。）等、潮の如く寄來る敵を、右に受け左に靡け、三五度は追かへして戰ひけれ共、其身金石にあらざれば、皆討死をしたりける。柴田源左衛門、同

互に見知りし晴の軍なれば、屍は野外に曝すとも、迯て名を後世に汚さじと、主討るれども良從は是を乘越え、親手を課へども子は顧みず、家々の旗指物入り違へ〳〵、頃しも水無月十三日、草木も動かね暑き日に、人馬諸共火に成て攻戰ふ。光秀今日を涯と烈く下知して切廻れば、さしも勇みし羽柴勢、陣脚動いて見えたる所に、筒井順慶一萬餘人、光秀の後より噇と一同に鬨を作り無二無三に突立れば、惟任勢一時に崩立ち、惣敗軍とぞなりにける。光秀馬上に長歎し、討死の時こそ來れと、馬を敵中に駈入んとす。比田帶刀、進士作右衞門、溝尾庄兵衞、光秀が馬の轡にすがつて諫めけるは、「御短慮に候光秀公、合戰の勝負は其時の運によれり。始終の勝利こそ大將たる者の詮とする所に候。先勝龍寺の城に引退き給ひ、坂本龜山の勢を合せて重て恥辱を雪ぎ給へ」と、馬の口を引廻せば、光秀怒て頭をふり、「死すべき時に死せざれば、死に勝る恥ありとや。此所を引んとて名もなき者の手にかゝり、惡名を後世に殘さん事、武士の恥る所、是非討死と思ひ定めたれば、退くまじ」と爭ふ所に、橫筋違に一手の勢、眞一文字に光秀目がけ駈來れば、大將はじめ旗本の勇士、何れの敵ぞと是を見れば、柴田源左衞門父子筒井勢と合戰し、朱に成て馳來り、共に轡にすがつて泪を流し、「こは口惜き御形勢かな、亂軍の中に切死は、陪臣の成す業にて候。苟も將軍職に任ぜられ給ふ重き御身の、爰にて討死なんどとは、

忠左衛門、波々伯部權頭、酒井孫左衛門、村上和泉守、山本山入、伊勢安房守、上野筑後守、庄田權介、松本主膳等、神戸、池田、惟住、黑田、淺野、蜂須賀などが勢と切結び、惣懸りに成つて戰うたり。光秀は先手の三備崩れ立ち、味方敗軍と見えければ、今は旗本の勢を下知して戰はんと、自ら馬を乘出し、水色に桔梗の旗、四手しなひの馬印を押出し、大喝一聲「かゝれかゝれ」と下知を成せば、土岐兵太夫藝元、同半太夫藝次、（前の美濃の國主土岐大膳太夫藝頼傍女腹の子、藝頼滅亡の後、同族なれば光秀子のごとくして生育し勇士なり。）明智兵介光次、（光秀の片從弟妹の子なり。）中澤豐後守知綱、比田帶刀則家、村越三十郎景則、安田作兵衛國次、三宅孫十郎朝次、堀口三之丞滿之、同三太夫貞教、隱岐内膳恒之、開田太郎八武章、山本三左衛門時貞等をはじめとし、兵卒五千餘人、逃げ來る味方を踏立々々、曳々聲を出して突立れば、羽柴方にも千生瓢箪の大馬印、五色の吹貫ゆるぎ出て、舍弟美濃守秀長、猶子三好孫七郎秀次、旗本の勇士加藤虎之助淸正、福島市松正則、片桐助作且元、中村式部一氏、木村隼人定經、靑木勘兵衛秀以、杉原七郎右衛門家次、石田佐吉三成、增田仁右衛門長盛、小西彌九郎行長、脇坂甚内安治、糟谷助右衛門政次、長束大藏正家等、其勢一萬三千餘騎、分取高名此時なりと、勇みに勇で切立つるに、南北の軍勢都合五萬餘騎、入亂て相戰ふ。羽柴方には光秀を討取り、信長御父子の怨を報ぜんと、切をも突をも顧ず、惟任勢は秀吉を討て天下を掌握せんものと、

天正二十年壬辰臘月望

又或人の曰く、山崎の合戰の時、筒井順慶洞が峠に出張して敢て動ず、光秀敗し軍散じて後、家臣島左近友之をして、首二つを秀吉に獻じ、光秀に與せざる旨を申達す。秀吉其不忠を悪むといへども、大亂の時なるを以て、しばらく是を宥し、大和の國を安堵せしむと。

○光秀敗軍

去程に山崎表の合戰、惟任方始めは勇みきほひしも、今は中川が勇且天王山を敵に取られしより、左備藤田、伊勢が手先さん〴〵に崩れたち、剰へ旗大將御牧、伊勢も中川に討れぬれば、藤田兄弟、諏訪詫見、櫻井、逸見、香川が輩、勇を震うて備を立てんと、揉合せ〳〵踏止つて下知するといへども、中川が軍勢勇威盛んにして叶難く見えたる所に、神戸三七信孝の四千餘人、一同に鬨を作り、鐵炮を放ちかけ、三方を助け戰へば、池田惟住も爰に勝つ色を顯して、終に惟任勢切崩され、三隊の備忽ちに亂れ、入雜りてぞ戰ひける。惟任方の勇士奥田宮内、同市介、磯野彈正、鳥山主殿等、手勢を駈立て、羽柴方の中川、鹽川等と火水に成て戰ひ、七八度迄揉合しが、悉く討死し、士卒三百餘人討れたり。其外名を惜む輩、並河掃部、妻木

田畑とす、今云ふ古川條なり。下略

山州名勝志に云く、今大橋架木津川末、小橋架宇治川末。元和元年、淀の城令築給ふ時、木津川、宇治川合して架大橋云々。

又曰く、淀大橋東北に御牧八村あり、是美豆野里なるべし。豊臣秀吉公宇治川の堤を築き、北へ附替らるの故に、此邊土地混亂す。大橋の西南美豆町は新出在家なり。土人の云く、昔は美豆と淀との間を宇治川、木津川落合て流と云々。故に隔川戀の歌には、美豆野里を詠む。又淀川の向に見つる美豆の森とも詠り。古の道は、鳥羽より美豆の御牧を經て大和河内へ通ずと云々。

又曰く、橋本津在八幡山西淀川東南、大阪海道なり。いにしへは山崎橋在此所、故に橋本と稱す云々。下略

引惺窩文集曰、山州八幡橋本之橋銘 前博陸侯將有事乎大明。令諸國開道路作船梁、而欲得往還便。事絕古今慶傳遐邇矣。時哉。中略 山州八幡橋本之雛華東出入之咽喉也。中略 於是山口玄蕃頭、豊臣宗永、奉鈞命主其役、作長橋。中略 其長一百八十間、其廣五間、柱の數一百三十八、柱根入地丈餘云々。

の軍に本望を達しける品々、委細に申遣しければ、兩將ともに光秀が不義を惡みて同心せず、使者をかへしける。下略

天正軍記に云く、大和の國主筒井順慶に京都の趣注進せしめ、早々上洛有るべき由、再三使札を遣すといへども、惟任逆意の間相與せず。下略

○山崎の渉の事左に顯はす。

山州名跡志に云く、山崎橋斷絶す。山崎の方は今の觀音寺の前の川畔なり。其向所は淀の大橋の南、河内街道の内八幡山の坤に當つて、片方の人家茶店あり。此人家の町北の端より三十間計北の方、其橋の渡場なりと云ふ、其所の古老の說なり。因て此邊を橋本と號す。但し今云ふ橋本の宿は、後世に此所より移し建る所なり。此所今は船渡なり云々。

又曰く、淀の大橋下流木津川の末にして、西方は桂川、伏見川の末と合して難波江に入る。中頃此橋、今の所より一丁餘り北にあり。孫橋、大橋、小橋とも皆是秀吉公の時設る所なり。大橋別名長橋、和歌に詠ず。此名今はなし。按るに上古は此橋一つ有て、餘の二橋はなし。古大橋は是より北にあり、下流今に異なり。今の封戸の渡り（在大橋の東五丁計）の西より、御牧の東を經て淀川に入り、大橋の下に出しなり。其條今封戸の渡しの西堤より内は悉く

秀吉を始め信長恩顧の諸將等馳上らば、弔合戰有るべし。其時に內通し、逆徒の裏切有るべし」と强て諫めけり。中略同月五日申刻筒井出馬し、同亥刻洞が峠まで著て宿陣す。下略又筒井順慶は洞が峠より島左近友之を秀吉の陣へ遣して云ふ、「某年來光秀に好ありといへども、豈大惡の叛臣に與せんや。依て是まで出馬せしむる所に、貴客の上國を聞き大悅是に過ぎず候。近日光秀と交戰あらば、其粧を見合せ裏切致し申すべし」と云々。

又曰く、「筒井順慶は時こそよけれと、宇田切宮內、小泉四郎、森縫殿助三千餘人、島左近、飯田三郎兵衛、土井十郎三千餘人、松倉右近、猶原右衛門等を宗として本陣四千餘人、洞が峠を推下り、光秀が本陣さして討てかゝる。下略

又曰く、斯る所に大和勢一萬餘人、思ひもよらぬ後より、𠴃と突てかゝりしかば、惟任方驚き起て、悚へず一同に敗軍す。下略

又曰く、信長公の時の如く、大和國の大守たるべしと云々。麾下の勇士等にも太刀馬金銀を賜へり。中略世の人是より日和見の順慶と、異名を附けて呼びあへり。下略

明智軍記に云く、攝州尼ヶ崎の織田七兵衛信澄も光秀が聟なり。大和郡山の筒井順慶は、日向守の次男十次郎を養子に遣しける仁なれば、其好に附き光秀が方より使を以て、今度

ふ。然るに兩家和議に成て、六ヶ國を順慶に遣し、明智が子を養子とする約束にて陣を引く。此時明智が許より紹巴が方へ、大和既に和議に成り洞が峠まで引取りたりと云ふ狀來るとぞ。明智大和路より引取り下鳥羽に陣を取れり、其時の藥院は太閤にも明智にも別して懇なり。折節太閤へ見舞に往て西國に有けるが、上りて下鳥羽明智が陣所へ立寄り、筑前守は此事を聞て早上洛するに間は有るまじと云ければ、明智周章て、其夜雨の頻に降けるに、桂川を無理に越ける故、鐵炮の玉藥も濡れて用に立ざりき。然る所に早太閤の先陣池田、高山、中川三頭の大將山崎寶寺の邊まで押來れり。明智が兵をさん〴〵に打破る。明智こらへずして青龍寺の城に楯籠るを、取卷て攻ければ、其夜忍びぬけて落行けるが、山科越にて百姓に殺さる。當分は知れず、漸日を經て死たる事かくれなし。太閤は明智敗北の後に上り給ふ。筒井順慶日和見けれども、遂に太閤に歸服しけり云々。

和州諸將軍傳に云く、四日辰刻、日向守光秀より齋藤内藏介利三の弟大八郎利次を以て、筒井へ書翰竝に太刀二腰緞子三十端、繻子三十卷、金子千兩を持遣す。中略 松倉右近勝重進み出ていふ、「爰に一つの智計あり、先光秀へ同心の旨を返答し、大軍を率し城州八幡山まで出馬有るべし。彼地は究竟の要害なれば、暫く在陣し世の樣を見合せらるべきか。然らば

陰徳太平記に云く、秀吉備中の陣、和睦して上洛せらると聞ければ、誰をか路次迄使として遣し、一味の約をなすべきと僉議せられけるに、中西重ねて申すやうは、「唯某をや遣はされてよろしく候はんずらん。其仔細は、當家大身の族は人の存知たる事に候へば、若萬一にも光秀勝利を得候はんにおいては、御家危亡に及び候はんか。其時筒井殿よりは何某秀吉與力の使たりと申さば、後に陳じて遁語し給はんに、道理立難く候なんず。某事は其名なき者に候へば、諸人の思はん所も、かゝる安危の係る所を、あの中西ごときの小冠者には、爭か使令をさせらるべき。人の云ひなしたるべしなど申候はゞ、後日の陳語にたよりよろしく候べきか」といひければ、順慶是又發明の申様なりとて、則ち中西を秀吉一味の使に立てられける。其後光秀山崎にて秀吉と戰ひ、打負て引退きし時、順慶も八幡山より軍士を下し、淀川の邊にて敗軍の者五百人計討取にけり。順慶時の勝敗を窺はれし事、秀吉内心には快からず思はれけれども、かゝる騷亂の時節なれば、兎角の事に及ばず、順慶へは祝著のよし宜く申遣し、信長の舊例のごとく、いよ〳〵和州一國領知せらるべしとぞ許されける云々。

老人雜話に云く、大和の國主筒井順慶を心元なく思ひければ、近江より直に大和路へ馬を向

正二十年、舊きに依て作りかけられたるよし、惺窩文集にも橋の銘とて見え侍る。淀の大橋も秀吉の御治世の時作らせ給ふなれば、此頃淀にも渡るべき所見えず。然れども此時世の中騒しく事繁き時なれば、いづれ京より大和河内へ通ふ渡これなくば叶ふ可らず、後日考正して後篇に記すべし。順慶が山崎の合戰の事、群書の異同有る事左の如し。

古板太閤記に云く、筒井順慶方へ使札を以て前々の如く親んとすれ共、其需に應ぜざる品々それとはなしに見えしかば、旁以て先畿内を平治せんとて、下略 惟任は洞が峠にて筒井を待ども〱來ざれば、手持惡して淀の城へ引入れて、普請の繩張などし侍けり。

太閤軍記右同文也。

秀吉譜に云く、光秀自安土到洞峠、待筒井順慶之來不至。光秀使其二男古阿古往爲質。而不果。順慶遂不到。下略

惣見記に云く、和州の住人筒井伊賀入道順慶は、光秀一味の者なる故に、頻に使を馳て相憑むと雖も、猶豫して未出勢せず、光秀獨身の計議故、事々危を含む。下略 人數上下一萬六千洞が峠に到るの後、又順慶を招くといへども、順慶終に應ぜず。既にして光秀人質として古阿古を渡し遣すべき由、これを述るといへども、順慶是に同心せず。下略

ひたり。友之なかりせば、順慶が命危かるべきに、智勇の士は、誠に難有き家の寶なりけり。扨も大八郎討死したりければ、惟任方散々に敗北して、筒井勢淀川の傍迄追打ち、打取る首六百餘級、松倉右近秀吉の本陣へ持參して、實見にこそ備ける。後山崎の合戰終りて、秀吉公には順慶今度の戰に戰功有りと雖も、本陣の勝負を見合せ、旗色よき方へ味方せしは、無二の志とは思し給はざりけれども、大亂の砌なれば、諸事事なきにしかずとて、感狀竝に馬太刀金帛を下し賜ひ、舊のごとく和州一國を安堵すべき旨仰下さる。其外旗下の勇士等にも金銀太刀を賜ひ、殊に島左近が齋藤大八郎を討取しは、拔群の高名なりとて感狀を賜ふ。是より世人、日和見の順慶と異名して呼合へり。順慶が今度の裏切は、一代の瑕瑾なりと、世擧て誹けれども、武家の計略といひ、殊に亂世の習ひなれば、時によつての智謀、さのみ笑ふべき事にもあらず。況や逆臣の光秀に與力せざるも、又其身の節義なりと覺え侍る。

洞が峠は八幡山の南半里にあり。順慶此所の陣より山崎の光秀が陣へ裏切せしは、何處の渡より淀川を越けるや、諸書に載する所一ならずして分明しがたし。或は順慶の裏切を記さざるもあり。又光秀と合體の樣にて時宜を見合せたりとも、又山崎の合戰に一向筒井の事を記せざるもあり。往古は山崎の橋とて、此所に大橋有りしかども、此頃は斷たり。後天

れ、柴田が危かりしも知らず、彌進んで戰ひけるが、大和勢の勇士二十餘人を討取り、雜兵は數を知らず、其身も數ヶ所手を負ぬれど、退く心半點もなく、切り入て順慶と刺違んと、彌進んで戰ひける。順慶此體を見て、旗本に下知して、「かゝれ〳〵」と呼れば、猶原、松倉を始とし、宗徒の兵士三千餘人、齋藤勢を中に取込引裹で、一人も洩さじと揉立々々切り立つれば、元來小勢の齋藤なれば、從卒數多討死し、生殘る者は筒井勢に隔られ、今は大八郎只一人に成りけれ共、今日を限りと思ひ定めし事なれば、少しも驚かず、日頃の剛力、好む大太刀眞向にかざし、當るを幸に薙立しは、恐ろしかりし有樣なり。今は兜も打落され、草摺も切裂れ、大童に成つて戰ひけるが、あはれ順慶と刺違へて死たらんは此上の本望ならめと、亂髪を面にふりかけ、首一つ提て、大和勢に紛れて本陣へしのび入り、順慶と此間三段計に成りて、あはやと思ふ所に、島左近友之は、最前より敢て敵と戰はず、順慶不意の難もあらば救んと、傍に控へ居たりしが、齋藤が來るを見て聲をかけ、「爰に近附く者は齋藤大八郎と見えたり。斯いふは島左近友之なるぞ。迯さじ者」とて、去る九日、秀吉より賜はつたる薙刀を振擧て討て懸れば、「大八郎見顯されしを口惜と思ひ、持たる首を投捨て、「いざ、見參」と大太刀打振り、半時計も戰ひしが、大八郎は手負疲れ、遂に左近に討れける。生年廿五歳なり。此時左近も三所迄手をお

上十郎三千餘人、本陣は猶原右衞門、松倉右近、島左近等を宗として四千餘人、洞が峠を押下り、光秀が本陣さして一文字に押寄たり。兼て内藏介が謀計にて、齋藤大八郎、柴田源左衞門二千餘人、堤の藪蔭に埋伏し、今や〳〵と待居たりけるが、筒井勢の先手少しやり過し、一度に噇と發り立ち、弓鐵炮をひし〳〵と打懸け、火烟の中より鬨を作て切つて懸れば、思ひがけなき大和勢、宇田切、森、小泉等、右往左往に切崩され、手負死人二百餘人、微塵に成つて敗走す。二陣飯田井上備を固め、鬨の聲を合せ、自ら先懸して挑戰ふ。柴田、齋藤勇を震ひ、合うつ別れつ揉合せ、命を捨て攻附ける。されども敵は大軍味方は小勢、爾も二度目の戰なれば、討るゝ者數を知らず。飯田、井上の二人柴田を目がけ切つて懸れば、源左衞門兩人に鎗を合せさん〴〵に戰ひしが、深手二ヶ所負て既に危ふく見えける所に、齋藤大八郎一千餘人、どつと喚いて打てかゝり、切先より火炎を出して必死に成り惡戰すれば、飯田、井上の兩人、百餘人討れて敗走す。柴田源左衞門は手負ながらも猶退かず、鎗を取て敵七騎突て落し、鎗の穗先も突折ぬれば、太刀を拔て切て廻る。井上が家人眞壁與九郎、長刀を以て懸倒んと飛來るを、刎かけ刎かけ附け入て、眞壁が右手の腕を切落し、疊懸て首を取を、敵駈寄て兩方より柴田を突く。柴田が一子忠藏一參に馳來り、群る敵を切拂ひ、父を救て引取りける。齋藤は多くの敵に隔ら

兵を集め城をかまへて楯籠る。時に日數僅に七八日の内なりければ、城のかまへも未調はざるに、此事既に安祿山が軍將史思明、蔡希德兩人聞附て、軍兵數萬を催し押寄たり。顏杲卿、袁履謙力を盡し防ぎ戰ふといへども、兵糧乏しく矢種も盡て、遂に城を攻落され、三人共に敵の爲に生捕れたり。時に安祿山兩人を近く引据ゑ、大に怒て申すやう「我日來汝等を帝によろしく言て、常山の大守と成し、判官となしたるは、悉く我吹擧するが故なり。今其恩を忘れ、我に弓を引きけるや」と云ふ。顏杲卿答て「汝は舊營州の下民にて、羊を商ふ者なりしを、帝汝を召上て三道の節度使と成され、限りなき大恩を蒙りながら、何の故にか帝に背き、かゝる逆心を企て天下を奪んとするや。我は代々唐朝の臣下なり、何ぞ叛逆人に與すべき。只うらむらくは汝が肉を喰はざる事を。早く我首を刎よ」と罵りければ、祿山大きに怒つて、顏杲卿、袁履謙を柱に縛り附け、鉗を以て舌を拔くに、兩人猶息の絶ぬ限はのゝしりて死たりとぞ。されば大和の國主筒井順慶は、光秀が吹擧によつて一國の守と成りたれども、いかんぞや叛臣に與すべき。一萬餘人八幡洞が峠に出張し、今朝より遠見をつかはし山崎の合戰を伺はせけるに、今は時分よきぞと一萬餘騎を三手に備へ、藤原家重代の大旗をさし上げ、金の分銅の馬印、諸手梅八の四半を立て、先陣は宇田切宮內、小泉四郎、森縫殿介等三千餘人、二陣は飯田三郎次郎、井

合す。瀬兵衛大きに叫で、只一突に突伏たり。御牧三左衛門是を見て、馬を飛し突來るを、中川又迎へ戰ひ、一往一來、鋒切に火花を咲せ飛違うて打合しが、中川勇や勝りけん、繰出穂先に御牧が眉間を丁ど突ば、暫しもたまらず馬より落るを、中川が郎等高田喜平治走り寄て首を上げたり。中川小左衛門も敵の旗大將伊勢與三郎と鎗を合せ、雙方祕術を盡けるが、與三郎を突落し、首を取て引かへす。瀬兵衛是を見て大きに勇み、一隊の兵士聲を合せ、ゑい〳〵應と鬨を作り、切り立て〳〵進みけり。惟任方の右備かくの如く敗しぬれども、中備の齋藤内藏介少とも亂れず。惟住の軍勢を七八段も切まくり、猶も進んで血戰す。左備の村上、山本、津田が輩は、池田勝入といどみ合ひ、敵々對容の合戰にて、此手はいまだ勝敗しらず。

○筒井順慶裏㆓切光秀陣㆒

唐の玄宗皇帝の時、臣下安祿山亂を起し、兵を催し藁城に到る。常山の大守顏杲卿といふ者、是を防ぐ力なく、長史袁履謙と云ふ者と、倶に安祿山が來るを待て、迎の爲とて出でたりければ、祿山大に喜び、顏杲卿に金紫の衣を與へたり。杲卿家に歸る道にて彼衣を捨て、我何ぞ逆臣の與へたる衣を著せんやと。袁履謙頓て其心を悟りて、則ち諸共に安祿山を討べき謀を談じ、

喚て突入たり。されども齋藤少しもひるまず、追つ返しつ暫くいどみ戰ひて、互方の討死數を知らず。羽柴方の三陣勝入齋は、津田村上山本等と火を散して戰ひしが、惟任方勇氣烈しく、池田が勢八百餘人討死し、既に此手も崩れなんとす。扨も天王山堀、堀尾の兩人惟任方並河、溝尾とさん〴〵に戰ひ、岩石を踏み木の根を蹴立て、追上し追下し火水に成りて戰ふ所に、秀吉の下知を受け、淺野彈正、生駒善介、大谷慶松、蜂谷出羽守等一千七百餘人、南の方より馳上り、鬨を揚て戰を助く。堀、堀尾の軍兵大きに競ひ、實に龍の水を得し形勢にて、さん〴〵に追落せば、並河、溝尾心は猛しといへども、かさなる多勢敵し難く、爾も敵は地の理を得て、頭の上より切つてかゝるに、暫も溜ず麓をさして敗走す。此間に蜂谷、大谷の面々、山崎の右の手藤田傳五郎、伊勢與三郎等が中軍を目がけ、五百挺の鐵炮を一同にどつと打入れければ、何かは暫もたまるべき、雪上に熱湯を流すが如く、ひた崩れにくづれ立つを、中川先より倍々の敵を切靡け、勝色たつて見えける所に、天王山上より敵の軍中へ鐵炮を打しかば、いかんぞや是を勇まざらん、鎗を取つて味方を招き、「山崎の合戰は、此手より勝鬨を揚るぞや、かゝれ〳〵」と大音に呼り、眞先に馬を馳出し、敵を斬る事恰も枯野の草を刈に等し。中川が勢一同に鬨を作つて殺出し、終に芝居を追退け、十分勝利を顯しける。惟任方御牧勘兵衛と名乗り、中川と鎗を

なるは獅子の怒るよりも勝れり。高山が備しらみ渡り、早敗軍の體を顯したり。是光秀が備配の功者、兵術の委きが致す所なり。其故は、味方を三隊に備へ、勇將齋藤を以て敵の先陣に向ふ時、左右の備一同に進み、只一疊に切布んとす。依て二陣中川、三陣の池田、左右の備に向ひ戰ひ、先陣高山の後を詰ず。齋藤一度羽柴が先陣を切崩すものならば、味方兵士勇をまし惣懸りに勝利を得べき光秀が軍立、尤手垂の仕業なり。扨も羽柴筑前守は、諸手の合戰に心を配り、斥候を以て間なく勝敗の氣を窺ひ給ふに、中川小勢なりといへども軍威たゆまず、競ひかゝつて見えけるに、高山が手は備しらけ、戰ひ勞れし形勢なれば、惟住五郎左衛門を以て高山を助けしむ。惟住手勢三千餘人繰出し、高山が後に續けば、秀吉又下知して、神戸信孝が備中邊まで進め、自旗本の勢一萬三千人、是も北方へ移して地を縮めらる。此時齋藤利三、明智十郎左衛門嚴しく味方を下知し、「早此軍は勝たるぞ。進め〳〵」と自鎗追取て驅立れば、高山、鹽川爰を破られじと、是も自身に鎗を合せ、矢聲を出して戰へども、勢に乘じたる齋藤方、殊に大勢どつと一同に進み來れば、高山終に敗北し、三百餘人討死し、左右へばつと引いたりけり。此時惟住が備既に間近く押寄せ、しなへ竹に金の短冊附たる馬印を眞先にさし上げ、三千餘騎を鶴翼に備へ、齋藤、明智が勝誇たる正面へ鐵炮を打かけ、どつと

の後光秀に隨身して、此備の旗頭に選まれ、今日を限りと思ひければ、志水加兵衛、渡邊源右衛門を左右に立て、尼ヶ崎より具し來りし兵士七百人眞先に進み、采配打振り士卒を勵まし、「今日爰に遁れたりとも、明日誰に面を合すべき。死や者ども、生るとばし思ふな」と、聲枯るゝまで恥しむるに、すべて此手の一備、此下知に勵され、村上、山本はいふも更なり、伊勢、上野、杉原、伊藤、庄田、松本が輩、面々手勢を繰出し〳〵、切先より火を出し、喚き叫んで戰へば、池田勢押崩され、半町ばかり跡じさりす。勝入齋、子息壹岐守、家老片桐半左衛門、伊木清兵衛、社田嘉兵衛、梶浦兵七郎、武村小平治、片桐與三郎等の勇士是を見て、「きたなし者共、今日の合戰に出合ふ者の、生んと思ふぞ不覺なれ。死すべき命の何恐ろしくて後を見るや、右大臣の弔合戰、討死して信長公の御供せよ。進め〳〵」と烈しき下知に、池田勢又もり歸して戰ふにぞ、いづれ勝負は見えざりける。此時中備に向ひたる高山右近が手は、戰むつかしくぞ見え侍る。當の敵は名にしおふ齋藤内藏介を旗頭として、磯野、阿閉、後藤、多賀、鳥山、久德等が軍勢三千餘人、高山は鹽川と勢を合せ一千人、三分一の小勢なるに、二陣中川は高山が後を詰ず、右備に懸つて合戰す。三陣池田また左備に向ひ、是も高山が後を助けず。是に依て高山、鹽川小勢を以て大勢に當るが上、敵將は齋藤内藏介、尖き事電光のごとく、勇

時に惟任光秀、急に溝尾庄兵衛、並河掃部兩人を召て、「今日の合戰心に懸るは天王山なり。今羽柴の郎等堀尾茂助、味方の將松田を討て山上を奪取り、只今合戰の最中に、天王山より鐵炮をかけ味方の備を討崩さば、將敵に勢を增者ならん。汝兩人鐵炮の兵五百餘人を引具し、急ぎ天王山へ押寄せ、鐵炮を放ちかけ、山上の敵をして隙なからしめば、山下の合戰勝利なるべし。急げ急げ」と下知すれば、溝尾、並河畏り、軍兵を引率し、砂烟を立て天王山へ馳上る。其時卯上刻なり。去程に堀尾茂助、堀久太郎は、松田が勢を山の北へ追下し、討取る首二百餘級、今は山崎の合戰も始りつらん、鬨の聲も風に聞ゆれば、いざ大將の御下知の如く、天王山の嶺より敵の軍兵を討崩せやとて、迯る敵を追捨にして、又山上に勢を引上げ、遙山下を見下せば、三方の合戰すでに始り、戰隙なく見えにけり。堀、堀尾の兩人鐵炮の玉を込み、數百挺筒をならべ、鹽合を見合す所に、又も北の麓より鬨を作つて溝尾、並河兩人眞先に馬を飛し、鐵炮を打懸け、矢を放ち、叫喚で攻上れば、堀、堀尾も勢を分ち、此敵を上げさせじと、再び合戰を始めける。是によつて山上山下四ヶ所の戰ひ最中にして、矢さけびの音、鐵炮の響、上天に轟き、打合す太刀音、人馬の叫ぶ其聲は混軸に徹して、夥しとも云ん方こそなかりけり。北方左備の津田與三郎は、織田の門葉にて尼ヶ崎の城主七兵衛尉信澄の執權なりしが、主人横死

突落し、首を取て立上るを、弟倉橋治郎兵衛遁さじと鎗を上て突來る。甘利拔群の强兵なれば、犇々と叩き附け、只一鎗に突倒し、二つの首を取持て、高山が前に馳參じ、「迚も不忠を致す上はと、一番鑓、一番首、二番首も仕候」と申す。高山是を見て、手柄なりと賞美せり。夫士の直諫せるにも、漫に君の非を言ずと。甘利が詞は誠に不禮なり。然れども其不禮を咎て、我誤をかへり見ざるは暗君なり。高山が今日の始末、良將の位を得たり。扨も齋藤が備組頭の勇士磯野彈正、阿閉淡路守、後藤喜三郎、多賀新左衛門、鳥山主殿、久徳六左衛門等、眞先に進んで死を爭ふにぞ、高山、鹽川が組下の勇士も、我劣らじと勇み戰ひ、雙方の戰將强兵、手を碎きてぞ接戰す。南方の二陣中川瀨兵衛淸秀、勇敢の剛將なれば、高山が南門を開くを見て、手勢六百人急に下知して備を繰出し、自眞先に馬を馳出し、北方の右備藤田傳五郎、伊勢與三郎、御牧三左衛門、櫻井新五左衛門等が二千五百人の中へ、眞一文字に討て懸り、信長公の弔合戰、かくこそふるまふ物なれと、群る敵を突立々々、血の波を揚て戰ひしは、南北兩勢の目を驚かしぬ。第三陣池田勝入齋は、敵の左備村上和泉守、山本對馬守山入、津田與三郎、進士作左衛門等が二千五百人の備へを目がけ、手勢三千餘人、鬨を作り鐵炮を打懸け、鎗刃を交て相戰ふ。三方の合戰一時にして入交々々、叫喚で突合しは、いつ果べしとも見えざりける。

御目がねに違ひ、是不忠にて候べし。又蒐に遲れ、引くに先立ち、臆病をかまへ候時は、武士の名を失ひ、先祖を汚し候事、是不孝にて候なり。不忠と不孝との罪、二つの物いづれか重く候はんと案じ煩ひ候」と申す。高山つら〳〵尻目に見て、「憎き過言、許すまじ」と、掻込し薙刀少し動くと見えしが、大事の前の小事、味方の兵士を切捨んも不吉なりと、眠るごとくにして敢て應ぜず。時に早東雲陽氣發き、敵合漸近くなれば、右近時分よしと下知を傳へ、人數を操出し備をすゝむ。北方の先陣齋藤内藏介、明智十郎左衞門、奥田宮内等も同じく陣をすゝめ、兩勢一同にゑい〳〵おふと鬨の聲を上るとひとしく、鐵炮備の兵卒筒先を竝べ、雙方より一同に打放したり。音は山岳を動し、焔硝の烟は雲のごとく、互に多年の錬兵なれば、鎗しほやよかりけん、忽ちに招きあひ突からみ、戰の花の蕾綻びて、是ぞ山崎大合戰の手はじめなり。此時かの甘利八郎太夫、鎗提げて高山が馬の前に大音揚げ、「たとへ不忠の罪ありとも、拾ひ首にても仕り、手をふさぎ候においては、させる御惡みもあるまじきか、怯弱不孝の罪は重く補ひ難し。いで我手並を御覽ぜよ」と云捨て、鐵炮の後に附きて、組備の疊むや否や一番に飛出で、藥烟深く敵の色目も見えざる中へ鎗をからりと投入れ、「弔合戰の先陣高山家の一番鎗甘利八郎太夫といふは我事なり」と名乘も敢ず、齋藤が物頭倉橋茂太夫と鎗を合せ、馬より下へ

れども、先陣の大將高山、鹽川、山崎の南門を堅く閉堅め、味方の兵士といへども合戰をはじむる迄は一人も是を通さず。是は池田勝入齋と前に先陣の爭論有りしかば、拔懸などせられては口惜かるべしとて、扨こそ斯くは南門を閉たり。然るを高山、鹽川が門を閉堅めたるは、變心せしやと怪しむ者ありけるとぞ。池田入道も兼て拔懸を心がけ、一番に戰を始めんとせしかども、一人も兵士を通さゞれば施すべき手術もなし。高山が心得尤も稱すべき一事なり。時寅中刻、天色既に明なんとするに、高山右近長刀の鞘を脫し、牀几に腰を懸け、目を閉て勇氣を養ふ。從將堀川伯耆守、同苗吉太夫、阿部仁右衞門等、馬を引立てさせ鎗を突て、何れも同じく床几に懸り、兵刃いまだ接ざる所に、高山が從士甘利八郎太夫といふ者あり、常に右近が寵遇うすく、末座にのみ居たりけるが、此時高山が前に來り跪きて申けるは、「爰に兩義の決し難き事の候。恐れながら君の判斷を承り度候」と申す。高山「何事ぞ」といふ。甘利申すやうは、「君勇智の名有る者あれば、遠國他家を云はず、傳を求めて招きよせ、高知を賜りて、恩顧まことに薄からず。況や譜代相傳の家の子は、君の城壁とも相成申すべき者と御覽附られ候はゞ、人並の御詞をも懸られ候べし。某においては人數ならぬ體に捨置るゝは、させる御用にも立つまじきと思召によりてなり。然るに某今敵を斷り陣を破り、只今の合戰に御用に立候はゞ、兼ての

○山崎合戰

此時洛中洛外の町人百姓三百餘人、光秀が地子錢免許の恩を感じ、銘々思ひ〳〵の獻上物、酒肴菓子の類を持て山崎の陣へ參りければ、光秀床几に腰をかけ、彼町人百姓を近く召寄せ、笑を含み、「汝等遙々此所まで參りたる條、神妙の至なり。今日の一戰に羽柴が輩を悉く打破り、天下を泰平ならしめ、汝等に厚く恩賞を與ふべし」とて、彼町人どもが獻呈せし、角黍の臺に積たるを取て喰んとせしが、此時光秀心神忙しく、かの粽を皮ながらに喰ひければ、數多の町人百姓これを見て仰天し、あな怪からずのふるまひや、將軍に昇進すれば、角黍などは皮ともに喰ふ法なりやなど、樣々と囁きけるが、町人の中に年老たる浪士の兩三人有りけるが、此體を見て、「戰の始らざる以前に、大將かくのごとく胡亂るは、破軍の相なり。此軍心元なし」とつぶやく内、天王山の軍破れ、士卒さん〲に成て本陣へ迯來れば、三百餘人の町人百姓大に驚き、早惟任方敗北せりと思ひ、日向守に暇をも乞ず、押合ひ突合ひ、我先にと京都さして迯歸るを、羽柴方の旗本より「光秀が後陣の勢裏崩せしと見ゆるぞ。進め〲」といふ程こそあれ、黒田、中川、蜂須賀、加藤、福島、片桐、脇坂が輩、勇みにいさんで押かゝらんとす

恐れず「惟任將軍の命を受け、松田太郎左衛門が向うたり。敵の軍將に見參せん」と、山中響く大音に呼はつて攻上れば、堀尾も馬を驅出し、「羽柴の功臣堀尾茂介吉晴、疾くより爰に相待たり。來れやつ」と聲をかけ、兩陣互に鎗を合せ、突立て薙立て、命知らずに戰ひける。兩勢互に討るゝ者三百餘人、疵を蒙る者數を知らず。此時南の手の山下より、羽柴方の後詰堀久太郎秀政一千五百人、炬火を灯連れ一參に馳上れば、堀尾茂介是を見て、敵か味方か覺束なしと、鐙踏張り聲をかけ、「來る者は誰なるぞや」先に進みたる兵士聲々に、「堀久太郎秀政、秀吉殿の下知によつて、後詰の爲に向うたり」と、呼はり〳〵驅上れば、堀尾茂介大きに喜び、手勢皆皆勞れたれば、急に下知して左右へさつと引き上げ、政秀に戰を讓る。秀政心得、新手を以て松田が勢に向ふと見えしが、鐵炮の兵三百餘人、筒を竝べて打倒せば、敵の軍勢ひし〳〵と打挫れ、哀れむべし松田太郎左衛門、胸板に玉一つ當つて、馬より落て死たりける。堀が軍兵、炮烟の下より拔つれて切つてかゝれば、松田が勢大將を討れ、何ぞ暫もたまるべき、山下をさしてなだれ落るを、堀、堀尾大勢を駈つて、一同にどつと追討ほどに、討るゝ者數を知らず、光秀が本陣へと散々に成りて引き取りける。此時旣に寅中刻、夜も頓て明なんとす。

のこらず打消し、ひそみてぞ馳行ける。十二日の月半天に登りたれ共、今宵は村雲覆ひ、山路朧にて、行さきも明かならず。終に天王山の絶頂に登り、暫し息を繼んとする所に、北の方の道筋より、松明數百焚續け、松田が勢一千餘人、ゑい〳〵聲にて登り來る。堀尾是を見て、「扨は光秀方の兵士只今山上へ馳上るぞ。備を立てて追落せ」と、一千餘人を左右に分ち、弓鐵炮の矢先筒先を揃へ、矢頃の鹽合を見合せける。松田が軍勢はかくとも知らず、無二無三に馳上るを、待設たる堀尾が兵士、敵の軍兵の眞中へ、一度にどつと弓鐵炮を打かけければ、松田が勢忽ち百騎計打たふされ、崩れ立つて見えけるにぞ、大將松田太郎左衛門、軍扇を開き大音を上げ「光秀公の仰に違はず、羽柴方より當山を取りたると覺るぞ。爰を敵に取られては、此合戰味方の敗北、多くの中より選み出され、太郎左衛門が向ひたる大事の場所なるぞ。命を捨て山上の敵を追下し、味方の軍勝利ならしめ、光秀公の感賞を蒙れよや」とて、山の七分に備を立て、一足も引かじと下知しければ、此軍配に勇氣をまし、鐵炮の筒先を揃へ矢尻を竝べ、さん〴〵に戰ふほどに、飛ちがふ矢玉は、亂れたる薄の穗の、風に亂るゝより猶繁し。半時計もいどみけれど、更に勝負も見えざりければ、松田太郎左衛門大きに怒り、「云甲斐なき者共がふるまひかな。押登て只一息に敵勢を追落せよ」とて、自ら眞先に馬を進め、雨霰と飛來る鐵炮を少しも

飛がごとくに馳たりける。則ち是子上剋なり。秀吉今は心安しとて、暫く休息せられけるが、又思惟し給ふやうは、光秀軍配にぬかりなき老功の武士なれば、彼が方よりも天王山を取り締んも計難し、然る時は堀尾が一手心元なしとて、急ぎ堀久太郎秀政を召し、堀尾に命ぜし如く令せられ、「足下手勢を引て彼山に向ひ、堀尾に力を合せ候へ」と、委く下知し給ふ。秀政委細領承して、一千五百人を引率し、又天王山へと馳たりける、時に敵方の惣大將惟任光秀、山の手の旗大將松田太郎左衛門政近を召て申けるは、「汝武勇に於て誤る事なき者なり。故を以て一大事を命ずるなり。弓鐵炮の兵數百を引率し、早く山の手より天王山に上り山崎を見下し、敵味方戰始る時、山上より一時に弓鐵炮をつるべかけ、四五度嚴く打立なば、敵は敗北味方は勝利、明日の合戰は只天王山を取るにあり。筑前守武の道に拙からず、若此事に心附きて、天王山へ軍勢をさしむけんも計り難し。天王山は敵味方の爭地なれば、必誤る事なかれ。急げやつ」と下知をなせば、松田太郎左衛門畏つて、直に丹波七手組の内より鐵炮弓の精兵一千餘人撰み出し、揉にもんで天王山へと馳出す。是子中剋、秀吉の令と半時おくれたり。堀尾茂助は南の方より一文字に駈たりけるが、道にて士卒に下知しけるは、「光秀先に山上へ軍勢を登し取締めたるも知る可らず。人馬に枚を含ませ、音せぬやうに急げよ」とて、燈しつれたる炬火を

繪本太閤記　四篇卷之四

○秀吉光秀爭天王山

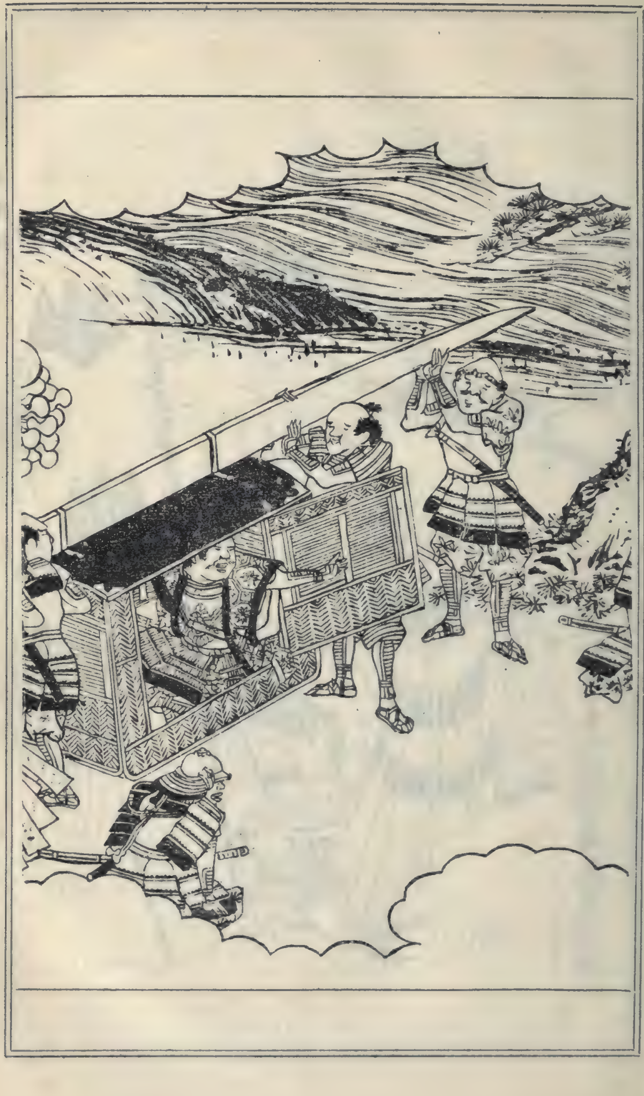
去程に山崎表に、羽柴、惟任の兩陣きびしく備を取り固め、雙方の軍勢凡五萬人、旌旗風にひるがへり、鎗刀雲を貫き、十二日の夜に入れば、兩陣篝を夥しく焚續け、曉をこそ待居たる。時に羽柴筑前守自ら陣所を忍び出でて、敵の陣取、地の廣狹を順見し給ひ、營に歸りて堀尾茂助吉晴を召れ仰けるは、「山崎の戰場、山上と山下と二筋の道あり。一千餘人の逞兵を引率し、弓鐵炮を數多持せ、只今より急ぎ彼山上の道を經て、天王山の嶺に馳上り、戰場を眼下に見下し、明朝兩陣合戰の時、敵兵の正中を一息二息嚴く打しらます物ならば、忽敵方備亂れ、只一時に切崩すべし。明日の勝敗は、只此天王山を取と取らざるとの間にあり。敵味方大事の爭地なれば、かまへて等閑に成す事なかれ。汝日頃事を誤らざる生質なるを以て、此大任を命ずるなり。早く天王山を取占めて、明日の軍に大勝をなせよ。急げ〳〵」と下知し給ふ。堀尾茂助畏り、直に弓鐵炮の兵五百餘人、騎馬の兵三百人、手勢二百餘人、都合一千餘人を引率し、

繪本太閤記 四篇第四之卷 目録

秀吉光秀爭二天王山一
山崎合戰
筒井順慶裏二切光秀陣一
光秀敗軍
惟任方勇士等討死

其二

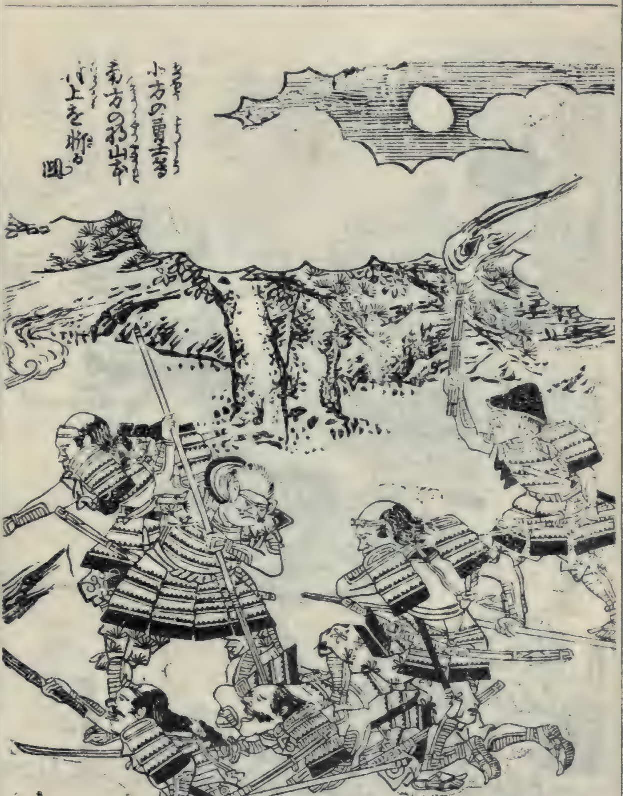




信忠中川瀬兵衛が大功を謝する圖

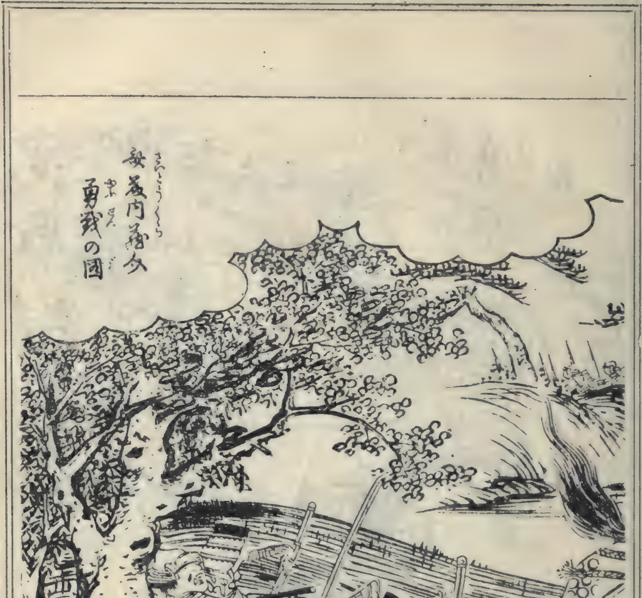





小方の勇士等
毛方の羽山守
上を断る図

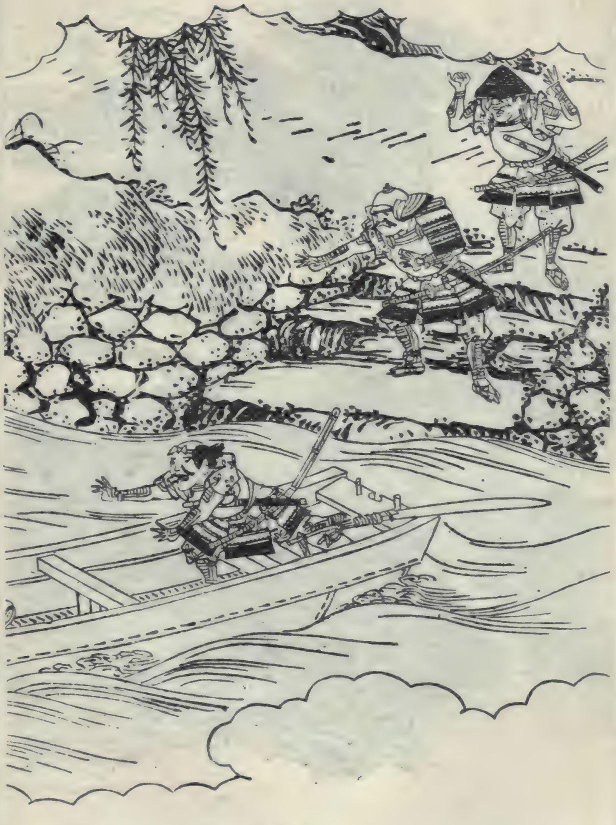


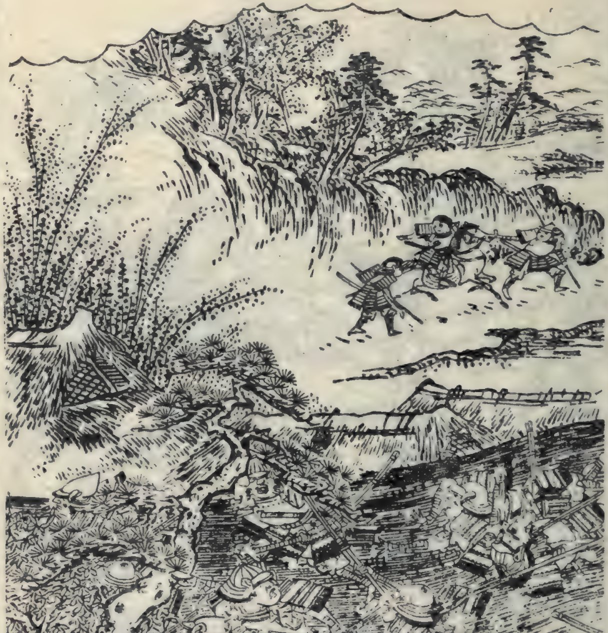







自殺の図





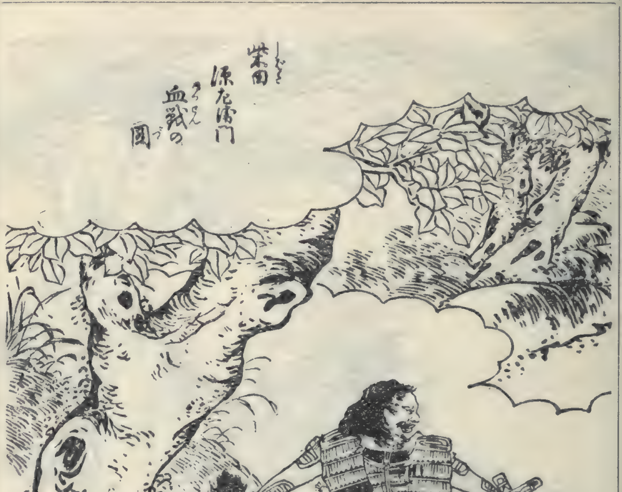

前田傳又郎
良等に
遮ら
れ
て
山崎
を




光秀山崎を敗走す圖


春日大明神
秋葉大八郎討死の図




柴田源左衛門
血戦の図



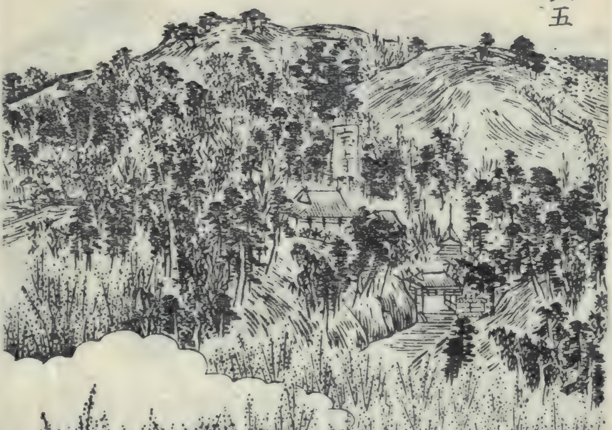

春日大明神


斎藤太八郎
柴田源左衛門等
討図

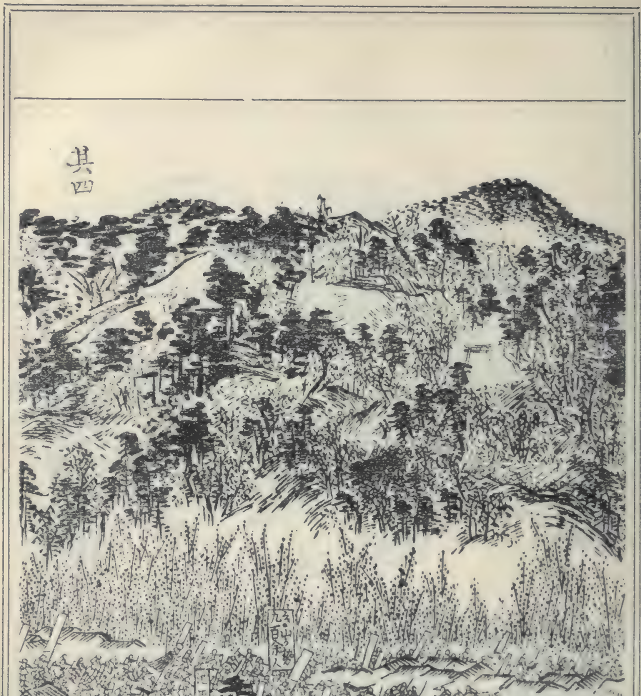

谷の観音


其六

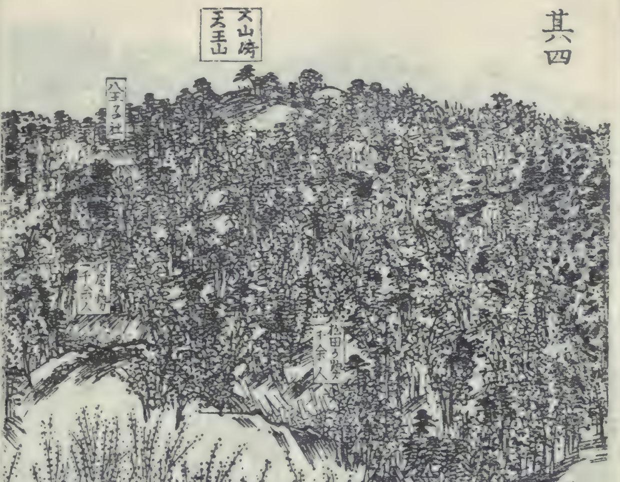

離宮八幡宮



其五

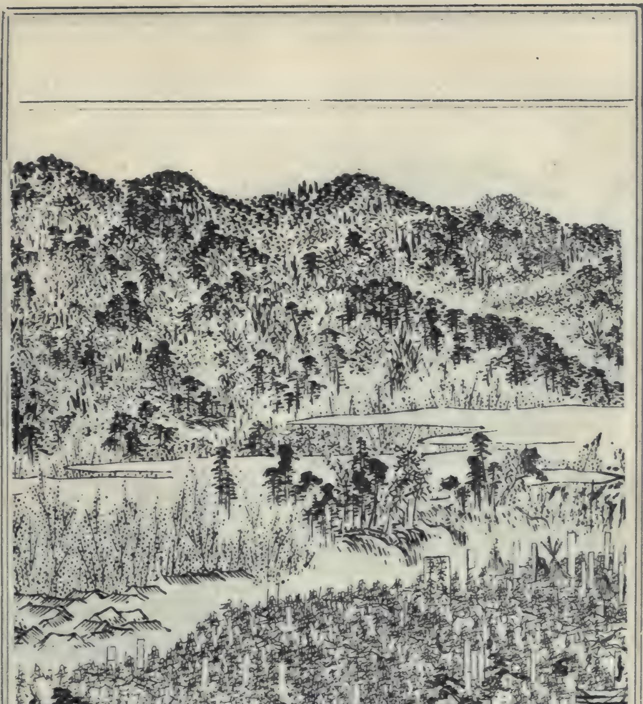

其四

其四



其三





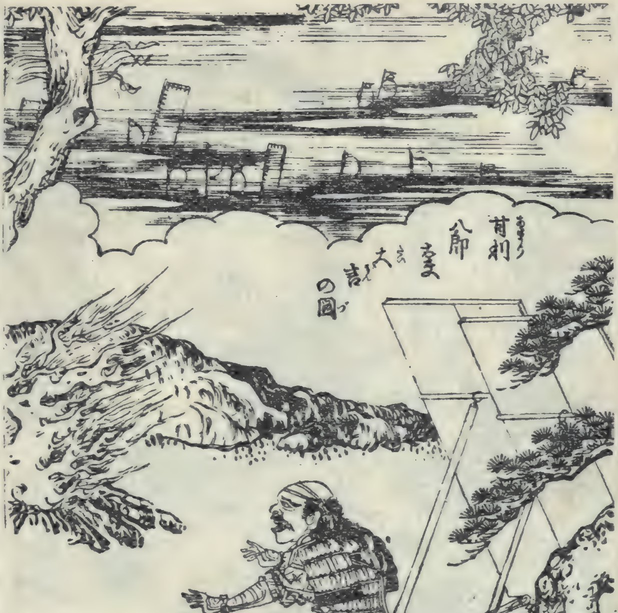

其二



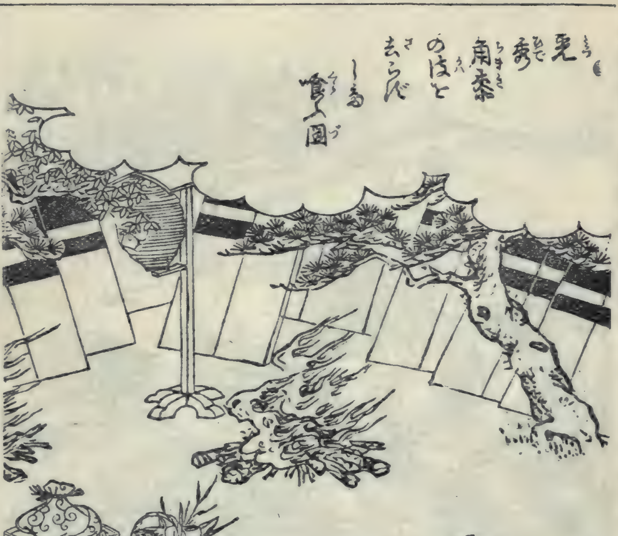

山崎大合戦の図
筒井勢
一万余騎



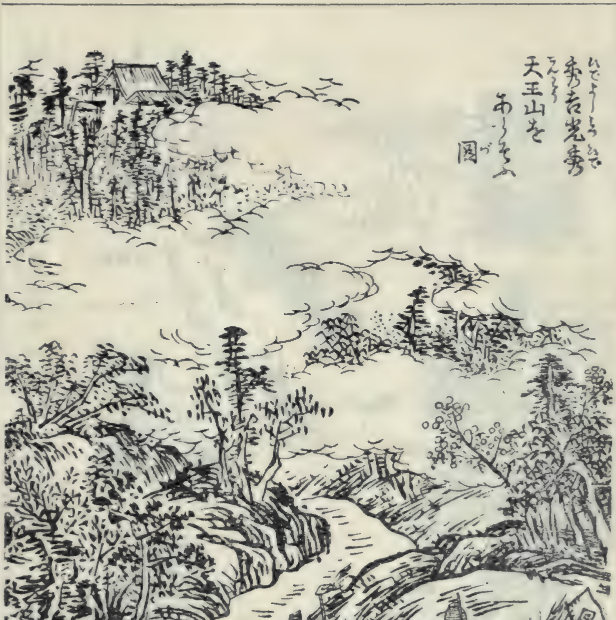



甘利八郎
大吉の図




光秀角觝のはをさらへしむる饗図




秀吉光秀天王山をあらそふ図


繪本太閤記七篇巻之三
秀吉堀尾吉晴に令じて天王山を執らしむ図

明智十郎左衛門討死の圖

北方の勇士南方の將山本村上を斬る圖

信孝中川瀬兵衛が大功を謝する圖

繪本太閤記 四篇第三之卷 目錄

秀吉堀尾吉晴に命じて天王山を執占むる圖

秀吉光秀天王山を爭ふ圖

京都の町人等光秀に酒菓を献ずる圖

甘利八郎大夫大言の圖

山崎大合戰の圖

齋藤大八郎柴田源左衛門等兵を伏て大和勢を討つ圖

柴田源左衛門血戰の圖

齋藤大八郎戰死の圖

光秀敗軍勝龍寺の城へ引取る圖

藤田傳五郎郎等に諫められて山崎を引取る圖

藤田傳五郎自害の圖

齋藤内藏介勇戰の圖

忽威勢海内に鳴り、諸國の大名大半戰はずして光秀が旗下に屬すべし。扨禮義を以て是を迎へ、仁惠を以て民を撫ば、終に天下を掌握すべし。若又味方討負け、秀吉勝に乗ば、快く討死すべしと兼て思ひ定めたり。内藏介が申す如く、山崎を退き龜山又は坂本に籠城せば、光秀が威名爰に衰へ、唯死せざるを樂しむのみ、豈覇業をなすの時あらんや。信長在世の時、光秀丹州、江州五十萬石の大名なり、然るを今龜山に退き、天下の諸侯を悉く敵に引受け、困窮して城を守らば、信長を殺さざる已前に劣るべし。光秀何ぞ命を惜みておめ〳〵領國へ退くべきや。山崎の合戰、天下別目の戰、雙方圖に當りたる大戰と云ふべし。内藏介が諫言、忠に似たれども小人なり、光秀が隨はざるは、戻るに似たれども豪傑なり。

汝兄弟左思はゞ、坂本へも龜山へも心任せに引取るべし。我自軍を引て羽柴が勢を切崩し見すべきなり。此上强て諫言せば、兄弟ともに勘當たるべし」と、以の外に憤りければ、大八郎も力なく「左樣思召し候はゞ、我々一番に敵に當り、切崩し御覽に入れ候べし」といひ捨て馳歸り、利三に斯くと傳ふれば、内藏介涙を流し「惟任氏の運命も今日に究りたり。三度諫めて聽ずば、則身退くは君子の道なり。仕へて其難を避ざるは、則ち士の道なり。今一計を廻し、一戰して快く討死せん」とて、柴田源左衛門勝定と計り、彼が勢一千人に、弟大八郎利次に我勢一千人を分ち、都合二千餘人遊軍となし、筒井勢が裏切せん時、不意を討て切崩すべしと申含め、備々を推出せしは、大山といへども打碎くべき勢ひなり。光秀此時内藏介が諫言に隨ひ、近江、丹波の内へ引退き、左馬介と一手に成て支へ戰ひなば、始終は知らず、急に滅亡する事は有るまじきに、極運のしからしむ所なるやと、口惜かりき次第なり。

按ずるに、光秀智勇兼備の將なり、内藏介が諫めに隨はざるは、深き思慮有ての事なるべし。其故は、信長公を本能寺にて弑逆し、其身天下の武將として四海を掌にせんと欲する大志あり、豈小人匹夫の如く、纔なる怨に堪ずして君を弑する事有らんや。既に天が下知る五月哉の句にて、天下を望む志は明なり。爰を以て山崎の合戰に、運を天に任せ、秀

も我勇武の程は知りつらん。神戸信孝は未錬の弱將、小兒も同前、其外高山、中川、堀川の輩は論ずるに足らず。鬼神の如き信長をさへ我是を討取り、京都の政道を手に握れり。我今汝等と心を一致にして羽柴、惟住、池田等を切破らば、殘兵粉のごとく亂れん事、踵をめぐらすべからず。且又筒井順慶は日頃我と兄弟の交あり、未だ羽柴、惟住、池田等と交深き事を聞ず。其上我と堅き契約あれば、何ぞ敵に與せんや。彼是危ぶむ事なく先陣に進み、手強く戰ふべし」と有りければ、大八郎大きに驚き、急ぎ我陣に歸り、爾々の由を内藏介に語りければ、内藏介も仰天し、「至利必勝の計策を獻るに、用ひ給はぬこそ悲しけれ。今一應本陣へ參り、强て諫言申し上げよ」といふ。大八郎畏まり、又光秀の前へ出でて、泪を流し申けるは、「恐入り候儀に候へ共、兄内藏介重て申候は、此度の合戰は天下別目の戰にて、勝利なるときは四海を掌にし、敗亡する時は味方の將士屍を葬すの地なからん事を、其前に譽あらんよりは、後に愁なからん事をこそ肝要とこそ存候へ。曲て愚見に隨せ給はゞ、然るべきの全勝ならん」と、言葉を盡して申ければ、光秀勃然として甚怒り、「汝兄弟日頃は勇武の譽有りと雖も、今大敵を引受け臆病神の詫たるならん。我將軍の重任を蒙り始ての合戰に、敵の旗をも見ずして退かば、誰か我下知に從ふ者あらん。左馬介を呼かへす事もすべからず、龜山へは猶以て引くべからず。

峠の筒井が陣をも克々透し見、我陣所に歸り、弟大八郎を光秀が本陣へ遣し申けるは「某今朝より敵陣及び地理の高低を遠見いたし候所に、敵軍は其勢三萬計と見えて、爾も高山、鹽川、中川、池田みな自國の戰なれば地の理を得て、駈引小荷駄まで悉く自由を得たり。味方の勢は二萬に足らず、他國の働地の理に暗し。其上一旦の威に服せし諸國の寄合勢にして、多く賴とするに足らず。又洞が峠の筒井が備を見るに、是全く味方の體にはあらで、却て裏切すべき模樣なり。斯くの如く未戰はざる先に、敵に三つの理ありて味方に三つの失あり。抑軍の詮とする所は、始終の勝こそ專用なれ、早く此場を退き京都をも捨給ひ、丹波へ引入り山本の谷徑を塞ぎ、木石を切て左右の切岸に積掛け、譜代の良士計を以て龜山に籠城有るべし。若左なくんば左馬介を呼返し、安土をも捨て、十郎左衛門光近と兩人の手勢計を引て坂本に籠城有るべし。某は此場所に殘り止り、寄合勢を一備となし、勝負を一命にかけて烈しき合戰仕るべきにて候。左あらば羽柴方勢くじけ、內變出來し、味方に組する將士多かるべし。早く右の兩條いづれなりともとり急で決定有るべし」と申ける。光秀つく〴〵是を聞て、嘲笑て申けるは、「利三が計策一理有といへ共、是又汝達の知らざる所なり。夫軍は勢の多少によらず、必大將の强臆にあり。羽柴、惟住、池田等が軍立は我兼て是を知れり、何の恐るゝ所か有らんや。彼等

次に蜂谷出羽守一千人、後陣は惣大將羽柴筑前守秀吉、令弟羽柴美濃守秀長、猶子三好孫七郎秀次、相從ふ勇士黑田官兵衞孝高、其子彌兵衞長政、蜂須賀小六郎政勝、淺野彌兵衞長政、同彌吉幸長、中村式部一氏、生駒善助近正、山內太九郎一豐、寺澤志摩守正業、有馬玄蕃豐氏、木村隼人定經、堀尾茂助吉晴、靑木勘兵衞秀以、杉原七郎右衞門家次、田中久兵衞吉政、石田左吉三成、增田仁右衞門長盛、大谷義松吉隆、加藤虎之助淸正、小西彌九郎行長、片桐助作且元、長束大藏正家、福島市松正則、脇坂甚內安治、糟谷助右衞門政次等の勇士百餘人、其勢都合一萬三千餘人、七軍合て二萬七千餘人なり。

○齋藤內藏介諫言光秀

丹州氷上郡春日井の庄黑井の北猪口山の城主齋藤內藏介利三は、先陣中備の旗頭にして、今度の合戰に光秀が第一と賴みし督將なり。光秀信長公を怨み參らせし其起りは、此內藏介、稻葉伊豫入道へ歸參せざる事より次第に恨重り、終に弑し奉るに至れり。されば今度の戰ひに打死して、光秀の恩を報ぜんと、一圖に思ひ定めければ、烈敷働をなし敵味方の目を驚かさんと、弟大八郎利次と只二人、十二日の曉、密に出でて、羽柴の陣々備々をとくと見廻り、又洞が

備は村上和泉守清國、山本對馬入道山入、津田與三郎信春、進士作左衛門貞連を旗頭とし、伊勢安房守、上野筑後守、杉原讃岐守、伊藤志摩守、庄田權之介、松本主膳等、二千五百餘人、右備は藤田傳五郎行政、同藤藏行久、同傳兵衛行秀、伊勢與三郎貞仲、諏訪飛彈守盛直、御牧三左衛門兼顯、同勘兵衛兼次を始めとし、詫美隱岐守、櫻井新五左衛門、逸美杢之允、香川刑部等、二千五百餘人、山手は並河掃部易家、同八介易武、松田太郎左衛門政近、妻木忠左衛門範武、荻野彦兵衛友興、波々伯部權頭員次、加次石見守綱房、酒井孫左衛門忠武、同與太夫忠以、和田杢介政長等、三千餘人。後陣は則ち光秀が旗本土岐兵太夫藝元、同半太夫藝次、明智兵助光次、中澤豐後守知綱、比田帶刀則家、村越三十郎景則、安田作兵衛國次、三宅孫十郎朝次、堀江三之丞滿之、同三太夫貞敎、隱岐内膳恒之、開田太郎八武章、山本三左衛門時貞等の勇士七十餘人、其勢五千餘人、五軍合せて一萬八千五百餘人、水色に桔梗の紋附たりし九本旗、四手しなへの馬印川風に吹靡せ、母衣かけたる使番二十餘人嚴重に馬を引立てさせ、整々とこそ備へける。羽柴方にも同日山崎表へ出張し、備配の次第、先陣高山右近長房五百餘人、中川瀨兵衛六百餘人、鹽川伯耆守四百餘人、合せて千五百餘人、其次は堀久太郎秀政一千五百餘人、其次は池田父子三人三千餘人、次に惟住五郎左衛門長秀三千餘人、其次は神戸侍従信孝四千餘人、

把を獻じ奉り、且奏して申けるは、「臣光秀信長父子を亡し、不慮に天下の政道を掌り、剰へ將軍宣下の勅を蒙るといへども、未天の許さゞる所あるか。羽柴筑前守秀吉中國より馳上り、軍勢を尼ケ崎に會し、來る十三日、洛外に於て山河震動すべき程相戰ひ、多勢討死仕るべくぞ思ひ設け候。哀今生の御暇に龍顏を拜し奉らば、生前の悅び何事か是に勝るべき」と、流涙して奏しければ、久我羽林頓て天意を承り、勅答有けるは、「龍體今に御異例にあらせられ、天顏を拜せん事叶はず。且軍の勝敗は、公廷のしろし召ざる所なり。地子錢免許の事は、洛中洛外永世の厚情なれば、必ず此積善後世子孫に及ぶべし。此事において御感少からず、凱陣の時天盃等を下し置るべし」との御事なり。光秀難有餘り、落涙して退出す。此時仙洞、女院、三公九卿、百司百官にいたる迄、悉く金帛を獻呈して退きけるこそ、死後迄の榮華なりき。されども終に天顏を拜み奉らざりしは、生涯の殘念憐べき事なり。翌ば六月十二日曉天に、光秀山崎表に至りて人數配をなす。先陣を三隊となし、其中備是第一の固めなればとて、選み出したる大將には、齋藤内藏介利三、同大八郎利次、明智十郎左衞門光近を旗頭とし、柴田源左衞門勝定、同忠藏勝之、奥田宮内一武、同市之丞勝冬、溝尾庄兵衞茂朝を組頭とし、磯野彈正員春、阿閉淡路守、後藤喜三郎基之、多賀新左衞門、高山主殿、久德六左衞門等六千餘人。左

つて隨順する者數を知らず。先其魁たる者には、伊勢安房守、同主水、同監物、上野筑後守、同大學、伊藤志摩守、杉原讃岐守、同伊織、後藤喜三郎、磯野彈正、河閉淡路守、同萬五郎、大津甚四郎、多賀新五右衛門、高山主殿介、久德六左衛門、逸見杢之丞、香川刑部、畑田主馬介、庄田權之助、松本主膳、岡八郎太夫、平田六郎次郎、詫美隱岐守、櫻井新五左衛門、高橋虎之介等を始めとし、或は五十騎三十騎打連々々、雲霞のごとく集りける。是によつて光秀力を得るといへども、軍事にさかしき勇士なれば、つら〳〵敵と味方の分際を見るに、秀吉方は信長の弔合戰なりと、譜代恩顧の者ども必死になりて向ひぬれば、三軍よく一致すべし、味方は諸方の寄合勢なれば、勝利を得ばともに勇むべし、敗を取らば忽散亂せん、爰を以て思ふに、此度の合戰こそ身の上の大事にこそと、樣々工夫を廻しけるが、いや〳〵勝敗は運にあり、運は是則ち天なり、さきに吉川、小早川と挾さんで秀吉を討んと、藤田傳八郎を遣せしも、いかが成りしや音信なし、再び尼ヶ崎にて仕留んと、又我勇士四王天、明石の兩雄を失ひつれ、我苟も將軍の任を蒙り、きたなき合戰をなさんも口惜し、所詮運を天に任せ、尋常の戰をなし、勝利を得ば天下を掌握せん、敗を取ば潔く討死すべしと、一心悟道究りければ、十一日未明參内を遂げ、久我宰相吉道卿、難波中納言宗豐卿を執達として、金子五百兩、白帛百疋、綿五百

是三軍の道開きをなすが爲なり。某が居城は攝津高槻にして山崎に隣れり、今度の合戰に先鋒たらん者、某より外に有る事なし。二陣は中川瀬兵衛なるべし、其故は中川が領地は同國茨木なれば、是則ち二陣たるべし。勝入齋は三陣に備へて然るべきか、是も子息壹岐守花隈の城主たるを以て其次第順なるべし。某所領の地にて合戰あるに、他人に先陣を奪れては、何面目に再び人に面を對すべきや。信長公の尊靈も照覽あれ、八幡先陣は人に渡すまじ」と面色を違爭ひける。秀吉此爭を聞て、「高山が申條先理に當りて覺え候。勝入齋は老功の武者、後に備へて進退を助けらるべし」とて、陣配是に定りければ、中川瀬兵衛も兼て先陣を心にかけ居たりしかども、高山が理有る詞に背き難く、二陣とこそは定めたり。

○羽柴惟任山崎備配

此時惟任光秀は、自ら帝都に旗を立て、家臣三宅藤兵衛を勝龍寺の城に籠らせ、淀の城には番頭大炊頭、伏見に池田織部、宇治に奧田庄太夫、坂本には叔父明智銅閑齋、長濱に妻木主計頭、佐和山に荒木山城守、安土に明智左馬介、皆悉く精兵を相添て籠らせ置き、其身は京都に在て專政事を正しける。當時將軍に任ぜられ、頗る仁慈の仕置ども多かりければ、縁を求め因によ

町人、神主、寺僧に至る迄、忽ち怒氣天を突き、假令光秀幾百萬騎の軍卒ありとも、粉の如くなさでやはとて、拳を握り歯を嚙しめ、早打立んず形勢なり。秀吉いよ〳〵喜色を増し、彼瓜を取て手づから切割り、諸將軍卒に分與へ、「今太郎助が申すを聞ずや、空地に植たる越瓜を殘らず切取り持參せしとや。明智の一黨悉く斬殺し、亡君へ手向奉らん前表なるぞ。銘々此瓜を賞味して、勇んで軍陣に向ふべし」と下知し給へば、諸軍一同に萬歳を唱へ、勇み悅ぶ事限りなし。元來秀吉古今未曾有の名將にて、闊達なる事類なし。事に就て軍卒の英氣を增益し、百萬の兵士といへども手足のごとく自由を成す、誠に希代の良將なり。同月十日、淺野彌兵衞長政を使として光秀が方へ申遣しけるは、「羽柴筑前守、亡君信長公御父子弔合戰の爲尼ヶ崎まで上り候。來る十三日雙方出合ひ、奇兵を用ひず、正兵を以て潔く一戰を遂べくに候。但し合戰の場所は何方に定むべきや、其方の差圖に依べく」旨申送る。光秀答へて、「元來願ふ所に候なり。戰場は攝州山崎古今軍場にて候間、彼地に於て十三日辰上刻、必ず手合いたすべき」條堅く約しぬ。是によつて尼ヶ崎秀吉の陣中、先豫其手配を成す。時に池田勝入齋進み出でて、「今度の合戰先陣を餘人に渡すべきにあらず。某眞先に馳出で、一番合戰をはじむべし」と。高山右近又進で曰く、「故右大臣御在世の時、先陣を定め給ふに、大概地理に委き者を以て是を任らる、

り、涙を含んで申けるは、「今度上樣不慮の御事にて御他界あらせられ、何ぼうか驚入り奉り候。御弔御合戰の爲遙々中國より御上りに附き、方々の大名方多勢當所に御著陣の旨承り、あまりの嬉しさ、心ばかりの捧物、空地に植し越瓜を殘らず切り取り、御陣見舞の印迄に」と、彼持せたる瓜籠うづ高く積上たり。秀吉甚だ喜び給ひ、左右の諸將をかへり見て仰けるは、「先年信長本願寺を攻させ給ひし時、鈴木が軍立に味方敗北し、君御危難の事ありしに、渠が宅へ入らせ給ひ、危き難を遁れ給ふ。其褒賞として彼に田地を賜ふ。其御恩を忘却せず、信長公の弔合戰を悅び、老人の身の暑中を凌ぎ、遠路を忘れ遙々の陣見舞、感賞せずんばある可らず。是を以て思ふに彼逆賊惟任光秀はいかなる者ぞや、はじめ信長公に仕へし時は僅に四千五百貫の身上なりしに、今丹波、近江の大守に取立てられ、五十餘萬石の大名と成りしは、皆信長公の下し賜ふ所ならずや。山海にもたとへ難き大恩を忘れ弑逆し奉るは、國賊とやいはん獸心とやいはん。譬を取るに者なし。我をはじめ一座の將卒、悉く信長公の恩惠を蒙らざる者ある可らず。あはれ今度の一戰に、粉骨碎身して逆賊光秀を討亡し、冥途黃泉にまします亡君を勇め奉らば、少しは君恩を報ずるの理にも叶べければ、相かまへて麁略の合戰ある可らず」と兩眼よりばら〳〵と泪を落し、聲を吞で教訓有れば、一座に在合ふ諸將軍卒、御陣見舞に參たる百姓、

○百姓太郎助奉ㇾ瓜

去程に尼ケ崎の陣中は、近國近在の武士等追々に馳參じけるほどに、不日に光秀と雌雄を決すべしと軍の評議有りけるが、惟任五郎左衛門進み出て申けるは、「夫三軍の令を司るは主將の大任なり。今あらたに信長公御父子薨御ならせたまひ、軍中將なくてはいかでか大敵を討亡さん。早く主將を定めて而して後軍議に及ぶべし。羽柴筑前守惣大將然るべし」と云ふ。秀吉固辭して、「神戸三七殿爰におはする上は、某いかでか惣大將の職にあたらんや」時に三七信孝申されけるは、「我信長の子たりといへども、年若く兵少し。秀吉兵多く年又長じ、諸卒よく其令を守れり。曲て秀吉主將たるべし」と、中川、高山一同に秀吉を將とせんといふ。爰において終に秀吉惣大將の任を蒙り、采配を取て諸軍を指揮す。時に秀吉の上國を賀ぶとて、近鄕近在の士農工商數を知らず參上し、思ひ〳〵の捧物、樽肴菓子扇子の類、夥敷持來れり。中にも天王寺秋之坊、今宮の神主吉左衛門、東成郡妙光寺日壽上人、矢田郡明要寺、同所栗花利左衛門、大阪の町人松屋與左衛門、高津屋吉右衛門、天王寺五兵衛、尼ケ崎又右衛門、河州若江郡高井田村百姓太郎助等は、呼出して秀吉直に對面ある。取譯高井田の太郎助は、越瓜を夥しく持せ參

ずば、御手術相違仕らんと、をしからぬ命を全うし遁歸り候は、なんぼうか恥かしき御事に候。秀吉が死生知れざる上は、兼て御手當の事必ず御由斷ある可らず候。此上は御暇賜り、切腹仕候はばや」と牙を嚙で申ける。光秀少も怒る色なく、「汝が忠節今にはじめず、誠に生は難く死は安し。さばかりの大勢を切ぬけ大事の注進、大感少からず。抑光秀不肖なりといへども、當時將軍職を下し賜り、天下の人民に令を下す身となりて、秀吉と尋常の勝負をなさず。謀計を以て討取しといはれんも口惜ければ、討もらしたるも又可なり。たとへ秀吉京都へ攻上たりとも、何程の事あらん。汝只今切腹せんとは不覺のいたり、言語道斷の事なるぞ。心を安んじ命を全くし、重ての合戰に忠勤を勵むべし」とて、手づから腰刀を取て儀太夫に與ふ。儀太夫有難く涙ながらに退きけるが、「されども今度の大事を誤りし事、此上の無念や有るべきとて、其夜腹かき切つて死たりけり。辭世の和歌一首、從者を以て光秀に呈す。

　弓とりの數にいるさの身となればをしまざりけり夏の夜の月

光秀これを見て涙を流し、あたら武士を失ひたりと、死骸を厚く葬らせ、跡ねんごろに弔ひける。

以て洞が峠に陣を布く事、我と光秀合戰の時色合を見合せ、勝利の方を助んとす。表裏の計とは早くも推察有りけれ共、此時人心未だ定らず、假にも筒井家多勢を以て與力せんといへば、味方の將卒英氣を益べしと思しければ、態と喜の色を顯し、「順慶の心配かへすぐ\も滿足なり。此砌の事なれば、益忠勤を抽でられなば厚恩たるべき間、此旨宜く申達すべし。汝は晉に聞し筒井家の智勇の者よ、引手物を得さすべし」と、手ずから白柄に銀の蛭巻したる小長刀を、石田三成をして下し賜り、「今度順慶が先を懸け、其長刀にて高名せよや」と仰ければ、左近謹で是を頂戴し、御暇申し洞が峠へ歸けり。扨も光秀が家臣明石儀太夫は、尼ケ崎より只一人赤裸に成て、光秀か淀の城に居けるを漸く遁れ來り、直に城中に入り光秀に對面しければ、光秀、「いかに仕損じたるや、汝が體氣遣し、何と致せしぞ」と尋ければ、儀太夫平伏して申す樣、「君の奇計的當して、秀吉只一騎尼ケ崎へ馳來り、我々七十餘人一同に四方より取巻き、既に討べかりしを、秀吉馬を飛して廣德寺といへる禪院へ迯込たり。四王天は續て彼寺へ追行き、某は追々馳來る秀吉が從兵等加藤、福島なんどを支へ戰ふ所に、黑田、中川、高山等大勢を以て取圍み、七十餘人の從兵不殘討死し、剩へ四王天但馬守も敵の爲に討れ、秀吉は討取しや、取迯せしや、多勢に隔られいづれとも分明ならず。某も其所にて討死すべかりしかども、此事君へ言上に及ば

るは「光秀追伐の爲秀吉此地へ上り、弔合戰の志ある人々は、今明日に尼ヶ崎へ會合有べし」と觸れければ、人々兼て此志ありしか共、中將信雄殿は病氣の由にて事ゆかず、柴田匠作は北陸を征し、瀧川一益は關東へ向ひ、其餘の大將等皆國々へ軍を出し、味方の寄合勢を以て、光秀が大敵に戰はん事、覺束なしと危ぶむ所に、此催を聞て勇み悦び馳集る人々には、信長公の三男神戸侍從信孝朝臣、江州宇佐山の城主惟住五郎左衞門長秀、濃州大垣の城主池田勝三郎入道勝入齋、同次男左新、攝州花隈の城主池田壹岐守信之、同茨木の城主中川瀬兵衞淸秀、同高槻の城主高山右近長房、同多田の城主鹽川伯耆守國滿を始として、堀久太郎秀政、蜂谷出羽守頼隆、其外近國の諸勇士雲のごとく集り、尼ヶ崎に充滿せり。此時洞が峠に出張せし筒井順慶家臣島左近を尼ヶ崎へ遣し、先秀吉の上著を賀す。秀吉則左近を召て對面あるに、左近謹で申けるは、「順慶年來光秀に斷金の好あるが故に、此度人質を送りて味方に招くといへ共、豈大逆の叛臣に與し、仁義の軍に弓を引んや。依之軍勢一萬騎洞が峠まで出張いたし、貴客の上國を相待候。然るにさばかりの大敵毛利家に和し、剩へ加勢を召連られ早速の御出馬、順慶において大悦是に過ず候。近日光秀と交戰の時は、其粧を見合せ敵軍の後より切崩し可申間、此旨兼て御聞に達し置ん爲、小臣左近友之參上仕候」と慇懃に述ければ、大智の秀吉順慶が多勢を

年迄も此寺の功、なんぼう恭き」よし言上に及びければ、秀吉も歡喜斜ならず、則亡君追福の爲とて、和庭師を乞て受誡し給ふ。是に依て秀吉公天下一統の後、寺領五十石を以て栖賢寺に附屬し給ふ。今も猶寺領舊のごとし。此朝崇山栖賢寺は、攝津の守護赤松氏の建る所にして、開山は竺堂和尚、七堂伽監の大地なりしが、兵亂に悉く焚蕩せしを、荒木攝津守村重等產を還附し、笑嶺和尙を請て中興の祖とす。其後此所に城郭を築くの時、諸宗の寺院悉く西郊に移し、聚て一所となす、今の寺街是なり。又廣德寺の監主慶首座は、千の利休が弟子にて茶人なり。廣德寺敗退、打飯さへも無」之旨利休を以て訴訟しければ、則廣德寺へ三十石を附し賜る。是も寺領今に減ぜず。慶首座難」有拜領し、自茶杓一片を削て是を獻上し、其恩を謝す。秀吉其風流を殊に賞讃し給ひ、利休と倶に度々御召に預り、御茶など下されける。此廣德寺に秀吉公の畫像を安置す。世人知る所なり。

○島左近赴二尼ヶ崎之陣一

秀吉六月五日に備中を出立し、六日の夜姬路に宿し、七日申下刻尼ヶ崎に著陣有り、明る八日未明、石田佐吉三成、增田仁右衛門長盛、大谷慶松吉隆等を以て信長公恩顧の諸大將へ申されけ

らぬ御姿に、人々再び仰天し、こはいかにとて、暫時言葉はなかりけり。秀吉莞爾と笑ひ給ひ、「我一刻も早く弔合戰を營み、亡君の御憤りを散じ奉らんと寢食を忘れ、道を行く事雲夢の中を歩行に似て、只一人馳たりしに、不慮も光秀が伏兵に取こめられ、既に危かりけるに、上天某が誠忠を守護し給ひ、惟任が祕藏の勇士四王天但馬守を欺き、生命を全くせしは、光秀を亡し、信長公の追福に備ふべき前表なれば、人々心を一致になし、此度の戰に身命を抛ち、大功をなして信長公の尊靈を慰め奉れや」と、大音にて御下知あれば、腹心の臣下はいふも更なり、外樣の勇士雜兵まで、今度の合戰光秀一家を討亡し、逆賊の根を斷べき事、何の難き事か候はん、一番に馳向ひ、微塵になして棄べしとて、勇み進で見えけるにぞ、秀吉大きに喜び給ひ、「我此寺にて危難を遁れしも、一方ならぬ因緣ならめ。今宵は當寺に一宿し、先君恩顧の大小名を招くべし」とて、則ち栖賢寺を本陣と定め給ひ、於次丸秀勝を廣徳寺に陣せしめ給ふ。是によつて中川、高山をはじめとし、黑田、蜂須賀其外の勇士等、栖賢、廣徳の兩寺を守護し、思ひ思ひに陣を構へ、旌旗鎗刀は卒に深林の湧出たるかと疑はれ、篝火の照り赫きて雲に映じたるは、秋の夜の電光に似たり。其夜栖賢寺の住持和庭、廣徳寺の住持慶首座兩僧を召れ、數々御悅びの芳詞を賜り、砂金一袋づつ下し給ふ。兩僧謹で拜領し、「思はざりき今宵の御投宿、後

繪本太閤記　四篇卷之二

○栖賢寺廣德寺賜ニ寺領一

諸葛武侯の曰く、謀レ事在レ人、成レ事在レ天。惟任光秀謀計を以て右大臣御父子を弑し、今又秀吉を討取んと、兼ての手配圖に當り、既に秀吉を討つべかりしを、却て四王天は清正が爲に殺され、明石儀太夫は赤裸にて迯去り、獨秀吉のみ恙なし。是光秀が謀拙きにあらず、四王天明石が勇なきにも非ず、所謂事を計は人にありて、事を成すは天に有る者なり。此時虎之助は寺内に走入り高聲に、「虎之助御迎に參り候。清正こそ參上いたしつれ、我君はいづくにましますや」と、呼り廻れども音もせず。寺僧どもは最前よりの騷動に恐れ、皆方丈に集りて、聲をもなさずかゞみ居ける。時に追々馳來る人々は、黑田官兵衞をはじめとし、福島、片桐等旗本の銘々、中川、高山諸共に此寺中に込入りて、皆秀吉の安否を問ふ。羽柴入道栖賢寺の方丈より動ぎ出で、「人々太儀、秀吉是にあり」と宣へば、上下の兵士一統に頭をさげ、皆萬歲を唱ける。さて秀吉の御形勢を見れば、思ひがけなき入道と成り、垢附たる浴衣を身に纏ひ、有るべくもあ

繪本太閤記 四篇第二之卷 目錄

棲賢寺廣德寺賜寺領

島左近赴尼ケ崎陣

百姓太郎助奉瓜

羽柴惟任山崎備配

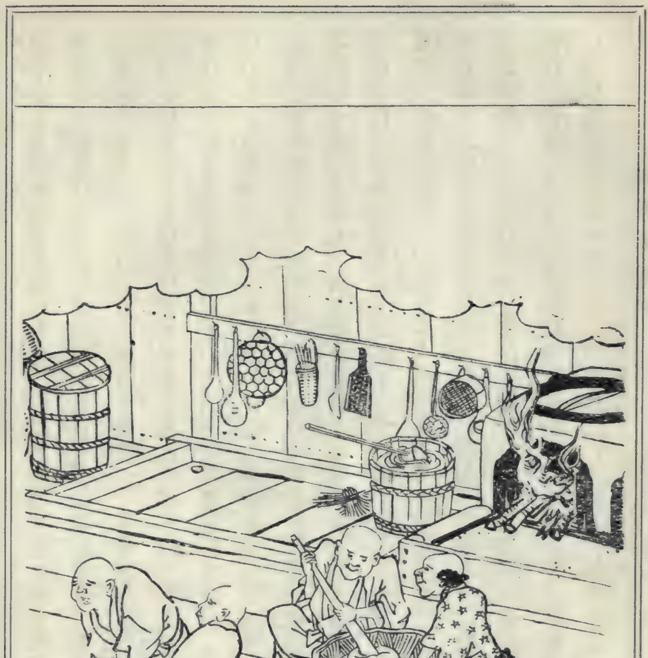
齋藤内藏介諫言光秀

もおそき事有るべからずと、衣類を脱捨て裸に成り、田の中を潜り、泥にまみれて遁れにけり。

知して控へし所に、黒田官兵衛孝高、騎馬の武者五十餘騎、後藤又兵衛、毛利太兵衛、秦桐若、眞先に砂烟を立て馳來り、扨こそ羽柴殿の急難ござんなれと、當るを幸切て廻る程に、黒田が勢は皆馬武者にて、歩行立の惟任勢さん〲に驅立てられ、四途路に成て見えける所に、追追馳來る羽柴の同勢、福島、片桐、脇坂、糟谷をはじめとし、抜連て切てかゝれば、明石儀太夫勇を震うて戰ふといへども、今は敵對叶難く、かいふつて迯行くを、追討々々黒田が手に討取首二十三、實に後藤が先言違ずして、秀吉の危急を救ひ、黒田家立身の基となれり。此時神戸信孝、惟住五郎左衛門等、秀吉と計議をなし、信長公の弔合戰を營まんとて、皆々尼ケ崎迄出張し、今日七日秀吉當地に著陣の旨、昨日注進有りければ、中川瀬兵衛、烏山右近兩人三百餘騎、秀吉を迎の爲此所まで來りしに、明石儀太夫が迯來るに行合ひ、道を塞いで取巻きければ、討殘されたる惟任勢、今は是までとや思ひけん、踏込々々おもふ計戰うて、皆討死をしたりけり。明石儀太夫は辛じて敵を切抜け、四王天が秀吉を討取しか心元なしと、廣徳寺へ馳行見れば、門前に四王天が屍朱に染て倒れたり。南無三寶、今は我も此寺中にて切腹すべしと、本堂へ馳入しが、いや〲味方の兵一人も活る者なく、光秀公へ注進すべき者なければ、秀吉に不意を討れ給はん事も計がたし、先爰を迯れ去り、此事を主君の聞に達し、其後に生害すと

冥途にて對面せよ」と、電光の如く切つて懸れば、虎之助も血刀を振て、左右前後、上段下段、切込々々、虎亂飛鳥の手を盡し、暫く時を移しけるが、かくては果じ、いざ組んと、兩人一度に太刀投捨て、引寄せて無手と組んだり。聞ゆる大力、踏ならす足音大地を動し、上になり下になり、死力を出し揉合しが、加藤が力や勝りけん、終に但馬守を下に組敷き、腕を折て繩を懸んとす。此時四王天下より聲かけ、「こは情なし虎之助、繩を宥して速に首を刎よ」虎之助あざ笑ひて、「おのれ我君をうちとりしと某を欺くといへども、其方ごとき匹夫の手に、安々と討れ給ふ大將ならず。汝を生捕拷問して、君の行衛を尋るぞ」と、是非を云せずふみ附て繩を懸たり。爰において四王天再び詫て申けるば、「往昔源頼朝石橋山の戰破れ、節木の中に隱れ、危急の難を遁れしとや。某只今此寺へ秀吉を追込み、寺中をいかに搜せども、更に秀吉の行衛知れず。我實に討おほせなば、首を取らで置べきや。高運の秀吉、寺中に隱れ居給ふに相違なしといへども、愚なる凡人の目には曾て見えず。我主人光秀の名謀圖に當るといへども、かくのごとく討もらしぬる上は、光秀公の運命も覺束なし。武士の情はあひ互ぞ、繩目の恥辱を免し、早く首を切候へ」と、勇者の一言清正も哀を催し、腰刀引拔き、なんなく首を討落し、寺内をさして馳入ける。此時明石儀太夫は本道にありて、跡より來る羽柴が勢を防んと、士卒を下


秀吉
栖賢寺
にて剃髪
し恵瓊を
免し給ふ図



僧下男などの味噌すり居たる傍に居寄り、「我等も替り摺り申さん」とて、板敷の上にて味噌をすりてぞ御座ける。四王天は隅々殘なく尋ね求れども、秀吉のおはさねば、浴室及び臺所へも三度來り走り廻りけれども、秀吉の剃髮し、味噌を摺居給はんとは神ならぬ身のいかでか知らん。此時加藤清正は遙に君の急難を見たりければ、宙を飛で馳來り、大太刀引拔、當る物を薙伏切伏せ、屹と傍を見廻せども、主人秀吉は見え給はず。こは口惜し、いかゞならせ給ひけん、火の中たり共求め得で止べきやと、日頃の勇氣百倍して、猛虎の如くたけり懸て、またゝく内に十餘人、算を亂して切倒せり。是に恐れて數多の强卒、前後へどつと迯たりしが、廣德寺の細道へ迯行く者一人あり。清正追かけ後より袈裟にかけて切倒せば、左手の深田へどうど落る。其田の中にうごめく者あり。よく〳〵見れば、正しく主君の召れし馬、朱に染て息も絶なん有樣なり。清正是を見て、扨は主人の御身心もとなし、こはいかにせん淺ましと、四方を白眼で立ちたる所に、四王天は秀吉を求かね、又門前へ出來るを、虎之助早く見留め、此寺こそ心得ねと、飛鳥の如くかけ來り、「夫なるは光秀が臣四王天但馬守よ。我主人の御座所存じたるや」と聲かくれば、但馬守も日頃加藤が武勇は知れり、此奴討ずんば秀吉は探し難しと、大音にて欺きけるは、「惟任將軍の命を受け、某等此所に埋伏し、筑前守は某が討取たり。汝も早く刀をうけ、

ふ所に、浴室の内に僧等三人入湯して有りければ、急ぎ庫裏の方へ走行き、衣裝を脱て縁の下へ投込み、丸裸になりて彼風呂へ飛入り、僧と俱に湯沐しておはすれど、里に離し禪院なれば、物にかゝはらぬ雲水の僧共、何にと咎る者もなし。四王天は籠中の鳥、今は秀吉何やうの智計有とも遁るゝ事叶ふまじと、笑を含んで廣德寺へ馳來り、四を見廻せ共秀吉の御座ねば、心苛て厨に至り、寺僧に向て申けるは、「今此寺へ羽柴筑前守を附込たり。何方に隱し置しや。有の儘に申すべし。惟任將軍の仰を受け、四王天但馬守が向たり。陳うて後難を蒙るな」と眼に角立呼るにぞ、寺僧等大に恐れ、「左樣の人曾て此寺へ來る事なし。疑くば寺中不殘探し給へ」と申す。四王天、「云にや及ぶ、我自此寺へ追込しなり。探出して見すべし」とて、本堂客殿殘なく求れ共、不思議なるかな秀吉は御座さず、隣の寺へや迯たらんと、心あわたゞしく彼栖賢寺へ馳入て、爰かしこ隈々探求むれ共、更に有所の知れざれば、こは心得ず、外に迯べき道もなく、翅なければ飛で去べき樣もなしと、夜叉の如くに尋廻る。秀吉は風呂に隱れ居給ふ內、僧共も皆湯より揚り、只獨先より見附け置し棚に有りける砥石剃刀を取おろし、湯の中にて濡たる髮を撫廻し、是則ち信長公の追福なりと、自髮を剃落して入道し給ひけるを、知る者更になかりけり。扨脫捨てたりし白きゆかたを身に纏ひ、臺所へ出て他國の僧の來りし體にもてなし、下

遙に引下つて跡にあり。向うを見れば南へ別し徑路あり。秀吉運や强かりけん、此所少し人あひまばらなれば、おつと一聲喚くと見えしが、一鞭くれて群りける兵士等が頭の上を一刎に飛越え、小道をさして三段計も乘拔けたり。取迯したりと士卒ども、一同に追懸くるに、道細くして左右は深田、押合ひ踏合ひ、二三人沼田の中へ轉落るを、四王天大音にて、「急ぐな者共、此道は外へ行くべき別所なし。行留は廣德寺、左右は深田、後は川、袋に入りし鼠に同じ。我追懸けて生捕來らん。旁は後より續く敵兵を此所にて防ぐべし」と云捨て馳出す。秀吉一散に彼廣德寺へ駈入り、門内より後をみれば、四王天但馬守のがすまじと追來る。卽智の大將馬より飛下り、轡を取て來りし道へ押廻し、太刀を拔て尻がいの傍を二所切りたりければ、此馬驚き忽飛上つて、彼徑路を一文字と驅行たり。向よりは四王天追來る一筋道、荒馬に隔られ、右へすかし左へかはせど、奔馬の勢、道幅迫くて詮方なし。四王天大に怒り、身を沈め前足に兩手をかけ、引被て深田の中へどふど打込み、廣德寺へと驅行けり。秀吉は何方へか隱れんと見廻給ふに、元來此寺貧寺にして寺内迫く、身を忍べき隈も有らざれば、如何はせんと裏より出て見てあれば、此寺と門を對せし栖賢寺と云ふ禪寺あり。其内へ駈入給ふに、廣德寺とは事かはり、年經たれ共本堂、方丈、客殿と、甍を並て建たりけり。扨隱べき所やあると、傍を吃と見給

合戰し、光秀を討亡し、頓て又畿内を穏ならしめ、汝等にも褒賞を與ふべし。我軍勢追々跡より來る間、道の修理を急ぐべし」といひ捨て、猶馬を早め向うを遙に見給ふに、幾群となく同じ體なる百姓ばら、悉く鋤鍬を持ち、等しく道を作る有樣、是は敵方の間者ならんと、馬を止めて控へ給ふに、何くよりか螺貝の音一聲響く程こそあれ、件の百姓ばら一面に馳寄り秀吉を追取卷き、農具に仕込し手鎗を取り、高聲に呼りけるは、「羽柴秀吉、西國の和睦調ひ一騎懸に上るべきと、惟任將軍疾く是を察し給ひ、四王天但馬守、明石儀太夫兩人、命を受て此所に相待つ事既に久し。すみやかに頭を賜るべし」と、鎗の穂先をさし並べ、四方より詰寄しは、危かりける次第なり。

○加藤清正討二四王天一

名將謀士といへども、事怱忙なる時は必ず危難を生ずるとかや。光秀が計略圖に當つて、四王天但馬守、明石儀太夫の勇士、七十餘人の强兵を下知して四方を取圍み、鎗ぶすまを作り、聲々に「只一人の敵なるぞ。近寄て馬を突倒し、生捕にせよや」とて、一同に噇と馳寄たり。此時秀吉鐙踏ばり後を見れば、三町計後より加藤虎之助只一人、韋駄天のごとく駈來る。續く勢は

秀吉此時半刻も早く都へ上り、亡君の御憤をはらし參らせんと、宿々にて馬を乘替へ、息をもつがず馳られければ、諸卒我遲れじと、ゑい〳〵聲を出し御馬に附きぬれど、旗本の面々は皆馬を乘倒し、歩行立になりて走る程に、五町七町跡に下り、西の宮の驛より只一人に成りて馳られたり。爰に羽柴の旗下黑田官兵衞に育はれし後藤將監基國が子又兵衞基次、此時年長じて二十一歲、生得聰明怜悧にして武術兵術群を秀て、世に希なる奇才なれば、官兵衞も深く愛し、よになき者と召仕ひける。此時又兵衞主人に向ひ申けるは、「兵庫より上は攝津の地にて敵地に近し。今羽柴殿諸卒を引立て、一刻も早く弔合戰を營まんと、只一人先に離て進み給ふは、諺にいふ鹿追ふ獵師は山を見ずと、名將といへども、大要を思ふ時は、餘事を省みざるの誤りなきに非ず。若光秀兵を伏て是を待ば、大將羽柴殿の御身の上甚だ危し。君馬武者を以て秀吉殿に馳附き、事あらん時助け給はゞ、拔群の大功此上や有るべき」と勸ければ、黑田實もと心附き、騎馬の兵五十餘騎、中にも後藤又兵衞、毛利太兵衞、秦桐若眞先に馬を飛し、馳立々々いそぎける。扨も秀吉はいよ〳〵馬を馳せ、尼ケ崎へ急がれける其道端に、百姓ども七八人或は三五人、鋤鍬を取て土を運び草を引退け、道の造作する體なれば、秀吉馬上より大音にて「汝等百姓ども、奇特にも道を作るもの哉。我は羽柴筑前守秀吉なり。今都へ馳上り、亡君の弔

菅笠簑なんどを被り鋤鍬を持て、尼ヶ崎、西宮の間を爰彼所に三人五人引別れ、上下の往來飛脚の類に、餘所ながら中國の容體を聞合すに、秀吉毛利家と和睦濟ひ、急に上洛せる由申す者多かりければ、四王天も明石も、扨こそ主君の先見違はざりけり、おのれ秀吉、手捕になして都へ引くべしと、片唾をのんで待居たり。去程に羽柴筑前守秀吉、六月五日未の下刻、中國の陣所より走馬に鞭打て馳上り給へば、旗本の勇士加藤虎之助、福島市松、片桐助作、加藤孫一郎、平野權平、糟谷助右衛門、脇坂甚內、おくれじと御供に隨へば、淺野彌兵衛、蜂須賀小六郎、黑田官兵衛、大谷慶松、神子田半左衛門、仙石權兵衛等、軍勢を引立て〳〵、揉にもんで登ける。

或說に曰く、天正十年六月二日、惟任日向守光秀信長を弑す。秀吉備中高松に於て是を聞き、毛利家と和を調へ、播州姬路に歸り、一日馬を休めて京都へ攻上るに、川を渡る時、川上より木佛流れ來る。馬副是を取上ぐるを、秀吉見て「何佛ぞ」と問るに、「大黑天なり」と答ふ。秀吉其大黑を取て鞍の前輪に押當て、短刀を拔て二つに切割り、「大黑は只千人を育む佛なりと聞ば、門出あしゝ」と云ひて捨られける。此時既に天下を望む大志ありしと云ふ。又先に著す太閤記初篇に、秀吉未だ松下加兵衛が家來たりし時、三面の大黑天を打碎きたると、いづれか是なるや。秀吉一生の中大黑天を打破る事兩度なりしや。猶後人の議論を俟つ。

百挺、鎗五百筋、馬百疋、精兵三千人を送られければ、秀吉大感斜ならず、芳情永く忘べからずとて、深く是を謝せられける。されば毛利家の勇士強卒、敢て一言も申す者なく、腕を撫て止りけるが、心ある武士は、誠に元春、隆景は仁義の大將に御座けると、感ずる者多かりけり。扨吉川、小早川の兩將、庿山、岩崎の陣を引拂ひ、猿掛の本陣に來り、輝元にしか〴〵の由を申し、打連て藝州へこそ歸陣有りける。

○秀吉尼ヶ崎危難

惟任日向守光秀は、羽柴筑前守を討取んと、吉川、小早川の兩將へ密使を通じ、手配をなし置ぬれど、元來秀吉等閑の者にあらねば、猶心を安んぜず、翌三日の朝、四王天但馬守、明石儀太夫兩人を招きて申けるは、「秀吉を毛利の手に討せん其手術をなし置ぬれども、彼猿冠者はいかなる計をめぐらし毛利と和睦し、不日に登り來らんもはかり難し。汝等逞卒數十人を引率し、秀吉が來るべき道に埋伏し、不意に起つて討取べし。秀吉元來先を心に掛る者なれば、大軍を後に殘し、旗本の勢僅にて登るべし。必ずあやまる事なかれ」と下知しければ、四王天、明石の兩人畏り、手勢勝つて七十餘人、いづれも百姓の體に出立せ、手拭にて頭を包み、或は

中騷動せるを不思議なりと思ふ所に、播州阿賀の一向宗の坊主休巴が許より、信長切腹の由告來れば、紀州雜賀鈴木孫市、東福寺に有りし中國の僧快然などより、追々信長大變にかゝりし旨注進櫛の齒を引くが如し。時に岡越前守進み出で申けるは、「信長惟任が爲に弑せられ、秀吉都へ逃上り候。幾程も行きのび候まじ、追討にせられ候へ。某等御先を仕り、秀吉を道にて討留め、直に京都に攻上り光秀を亡し、天下に旗を擧られ候へ。是毛利家へ天より賜ふ福、時節到來に候」と勸め申せば、諸將皆是に同じ、今此時を失ひ給ふものならば、却て禍を取り給ふべしと、衆口等く諫めけれど、隆景、元春頭をふつて隨はず、いとしづかに申されけるは、「我我秀吉と一旦和睦せんと起請文を以て約盟し、いまだ血墨も乾ざるに、敵の災に乘て約を變ぜん事、大將の恥る所、且は上天の冥鑑も恐るべし。司馬法に曰く、喪に加へず、凶に因らずと。されば楚の共王陳を伐し時、陳の照公卒す。其子哀公若かりしかば、楚王兵を罷て去りぬ。又春秋にも、晉の士匃齊を侵す、齊侯卒ししかば士匃伐ずして還りぬ。君子は其喪を伐ざる事を大なりとす、とこそ見えたれ。仁義を辨へたらん者は皆かくのごとし、我々何ぞ其災を幸として盟約を破んや。再び是をいふ事なかれ」とて、猶毛利忠右衛門を使者と成し、同月八日、尼ケ崎秀吉の營中へ赴かしめ、信長他界の悼を述べ、今度弔合戰加力として弓五百張、鐵炮五

國に向ひ、上杉喜平治景勝と對戰し、瀧川一益は北條氏政を征伐の爲發向すれば、容易に上洛せん事叶ふべからず、中將信雄は柔弱にして計るに足らず、只愁とするものは羽柴筑前守秀吉なり、然りといへども之も又毛利の大敵前にあれば、いかんぞ打捨て上洛すべきや、さはいへ心利たる秀吉なれば、いかなる手術を以て中國の埒を明け、登り來らんも計りがたし、まづ此者を討て近き禍を退くべしとて、即時に前田傳八郎を飛脚とし、吉川駿河守元春、小早川隆景へ委細注進し、秀吉を中に取籠討果すべしと申送りけるに、秀吉元來尾州中村の住人筑阿彌が子たりしかども、終に天下の權を指麾するのみか、三韓をさへ切隨へし程の前因目出度大將なれば、光秀いかに謀計をめぐらすとも、豈此人を計討んや。忽ち天の加護ありて彼飛脚を搦め捕り、信長公の大變を早く知り、安國寺惠瓊を以て和睦を取結ばせ、兩家の誓書調ふや否、只一騎都をさして登給へば、數萬の軍兵只あきれにあきれ果て、何と取定めたる事もなく、上を下へと騷動し、思ひ〳〵心々に上方さして馳上る程こそあれ、雜兵の宿りし小屋に火附て燃上れば、すはや失火よとひしめきて、なんなく火を打消ぬれども、周章敗亡以前に倍し、取圍めたる陣々も打捨て、太刀刀馬武具幟旗幕の類は捨たる儘にて取集る人もなく、押合ひ踏合ひ馳けるにぞ、近郷の土民等拾取りて、卒に德附ぬとて悦びあへり。此時元春、隆景は、秀吉の陣

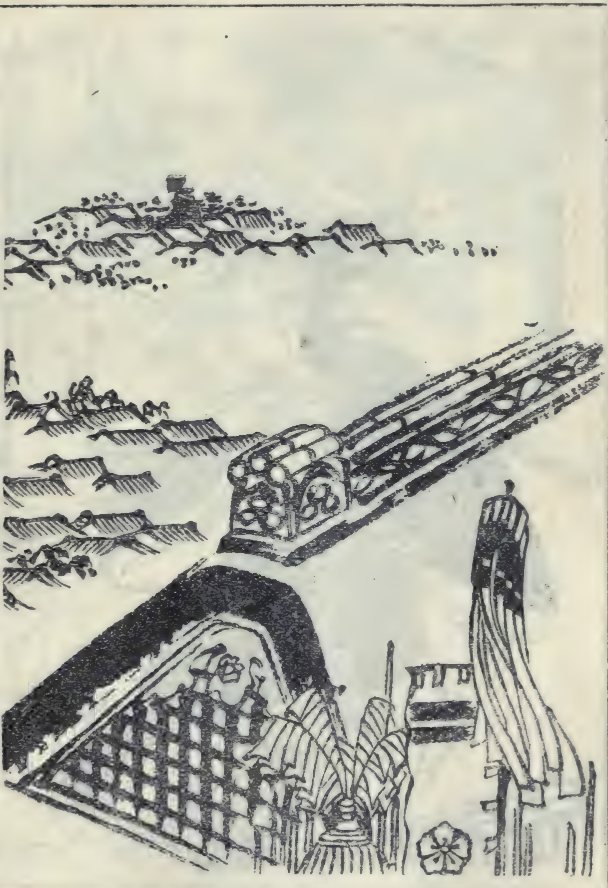
繪本太閤記　四篇卷之一

○毛利家之兩川仁義秀吉與加勢

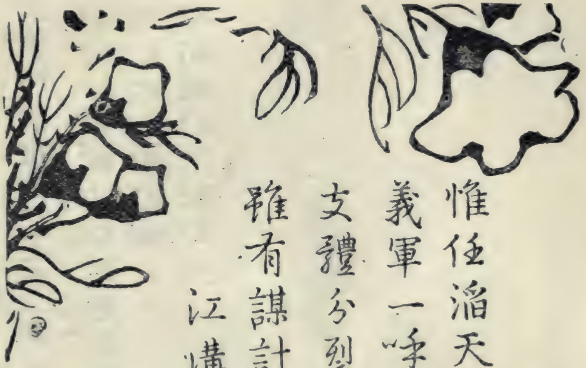
惟天監人、善惡必應、善莫大於作忠、惡莫大於不忠、忠則福祿至焉、不忠則刑罰加焉。故に君子の忠道を守るは、需めずして福祿を得、小人の不忠を行ふは、自刑罰を受る、所謂禍福は門なし、唯人の自招く者なりと。宜なる哉。天正十年六月二日、惟任日向守光秀、京都本能寺二條室町の城に於て、右大臣御父子を安々と討奉り、年來の積鬱を一時に散じ、妙心寺まで引取りけるが、倩心に思ひけるやうは、此時神戸三七信孝、惟住五郎左衞門は、四國誅伐のため難波三津浦に兵船を催し、風の手を待て發せんとす、其上織田七兵衞尉信澄は光秀が聟にして、爾も信長公を父の仇なりと怨みまゐらせ、惟任無二の味方なれば、神戸、惟住を押へ討ん事難からず、丹後の國主細川與八郎忠興も同く光秀が聟なれば、是も又一臂の助けと成るべし、大和の大守筒井順慶は兼て斷金の交り深く、其上光秀が吹擧を以て一國一城の主と成したる者なれば、味方に賴みなば仔細有るまじ、其外柴田勝家、前田利家、佐々成政等は北



惟任光秀京都に旗をひるがへす図




三位中納言信忠卿之嫡男三法師君之像
羽柴四位少将筑前守平朝臣秀吉之像



惟任滔天窮極猖悖
義軍一呼熊羆俱發
支體分裂城池峸没
雖有謀計安免神罰
江溝逸人贊



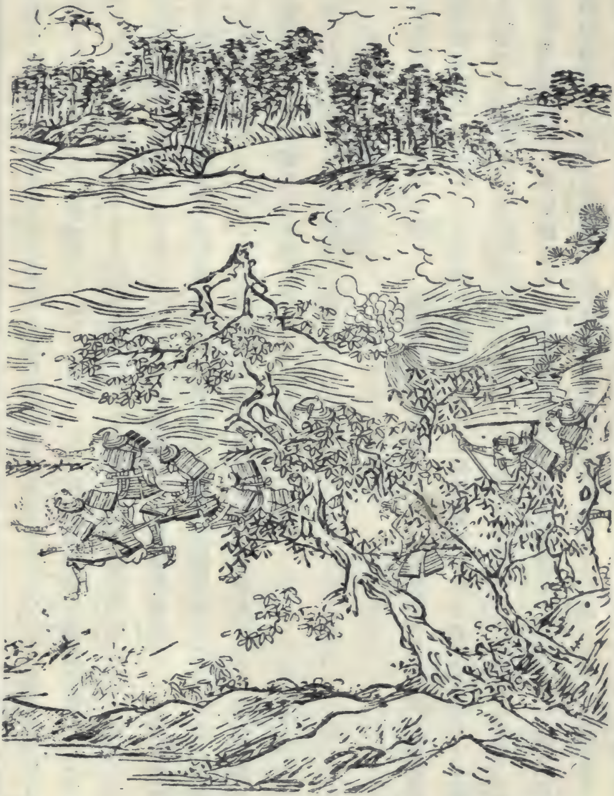
繪本太閤記　四篇第一之卷　目錄

毛利家之兩川仁義秀吉與加勢
秀吉尼ケ崎危難
加藤淸正討四王天

合戰を營まんと欲す。旁は當陣を取調め、續て跡より馳上るべし。構て遲參有る可らず」といひ捨て、ずんど座を立ち、馬引寄て打騰り、一鞭くれて驅出し給へば、淺野、蜂須賀、堀尾、中村、加藤、片桐、福島、糟谷、脇坂、平野を首とし、近習扈從馬廻り、我おくれじと馳行にぞ、陣中上を下へと騷動し、鎭めんやうはなかりけり。

ひ成がたし。且は安國寺の往來も太儀なるべければ、我先起請文を認むべし」とて、牛王の裡に大小の神祇を載せ盟文を書き、小指を裂て血を淋ぎ、安國寺に是を渡し、「秀吉が心底斯の如し。此上猶疑心あらば力なし。若又別條これなきに於ては、和僧元春、隆景が誓書を取り、早早我陣へ來るべし。早疾〳〵」と急ぎ給へば、安國寺毛利の陣へ馳歸り、秀吉の盟書を差出し、事の樣を物語る。兩將爰に於て盟文を書き、各血判を押し、安國寺に與ぬれば、安國寺又急ぎ秀吉の陣所に來り、和睦相齊ふのよし祝し參らせ、件の起請文を秀吉に呈す。秀吉大きに喜び、當座の褒賞として砂金三袋安國寺に賜ひ、「猶追て恩賞の沙汰有べし」と申給へば、安國寺悦ぶ事限りなし。扨森勘八、同兵吉を使とし、兩陣和平の悅とて、酒一荷、菓子一鉢を持せ、「長陣の故により物皆竭果候程に、有に任せて送り申す」とて、安國寺諸共毛利の陣へ遣し給ふ。然して軍中の諸將を悉く招き寄られ、秀吉雙眼より涙流る事雨のごとし。諸將是を見て色を失ひ、「いかに候仔細、仰聞られ候へ」と、口々に呼るにぞ、良涙を押へ給ひ、「主君右大臣信長公、當六月二日、京都にて惟任日向守光秀が逆心により、御父子ともに御生害まし〳〵けるぞや」と言終て、落涙更に止まらず。惣軍是を聞て仰天する事たとへんに物なし。周章敗亡、實に手足の置く所を失ふ。秀吉重て申給ふは、「毛利和平調ふ上は、半時も早く都へ馳行き、亡君の弔


秀吉
單騎
又
北の
圖



振上ると見えければ、卽ち首は落たりける。月清入道是を見て、「道のべの淸水流るゝ柳かげ、しばしが程のよの中に、心止るぞ愚なる」と、聲をかしく打諷ひ、續て切腹したりける。時に近松左衞門尉、船ばたの板敷を丁々と踏鳴し、「敵と見えしは群居る鷗、鬨の聲と聞えしは浦風なりけり。高松の朝の露とぞ消にけり」と、末を少し諷替へ、難波傳兵衞諸共に、腹搔切て伏たりける。與十郎は四人の死骸を取り收め、首に姓名の札を附け、檢使堀尾に相渡し、其後己も腹搔き切り、自ら咽押切て、終に空しく成りければ、數萬の軍兵是を見て、あはれ大剛の兵かなと感ずる聲、しばらく鳴りも止ざりけり。

○秀吉單騎馳二京都一

斯て安國寺惠瓊は毛利の陣へ立歸り、淸水兄弟以下切腹の次第詳に申ければ、兩將甚驚き、扨は當家の爲に命を捨たりしか、忠功誰か是に勝らんと、感涙おさへかねてぞおはしければ、其座に有合ふ兵卒ども、鎧の袖をぞ絞ける。元春の曰く、「かく宗治生害の上は詮方なし。和睦の儀申談ずべし」と。爰に於て又安國寺を秀吉の陣へ遣し、其旨委細申達せらる。秀吉申給ふは、「兩川和平承引の上は、互に起請文を取交すべし。我今事急なる仔細ありて、のびくなる計

れば、秀吉が陣所より檢使として堀尾茂助吉晴小船に取乘り、しづかにこなたに漕寄すれば、淸水兄弟、難波、近松、秀吉より送りたる小船を淸げにかざり、與十郞といふ郞等一人、介錯の役とて、ともに此船に打乘り、城門を開漕出たり。是やこの弘誓の船に慈悲の風を受け、生死の此岸を出て閻羅の廳に赴くらんも、かくこそあらめと哀れなり。增て妻子眷屬は、此世の別れ今暫しと、舷にすがり纜を控へ、泣悲しむ形勢は、理過て餘所の袂を濡しけり。秀吉の本陣よりも、宗治已下の自害を見んとて、竝び居て見物す。兩方の船近くなれば、宗治聲かけ禮をなし、「是は毛利家において厚恩に浴せられし淸水長左衞門、同入道月淸、彼は輝元の旗下鐵炮の將難波傳兵衞、近松左衞門尉、四人只今切腹仕るべくにて候。我々生害の後、筑前守殿と右馬頭和睦の儀、宜く執なし偏に願ひ候」と、慇懃に相述れば、堀尾も近く船さしよせ、「是は筑前守が近習堀尾茂助吉晴にて候。何事においてをも御望の事あらば、仰聞られ候べし。筑前守各御存分の結構深く感じ申され、約諾の旨一事も相違有るまじく候。心靜に生害遂らるべくに候」と云ふ。四人の者欣々然として悅びの色を顯し、長左衞門尉宗治立上り、いで最期の一曲奏でんとて、腰刀引拔き頭にかざし、淸き聲し、「河舟を止めて逢瀨の浪枕、浮世の夢を見習はしの、驚かぬ身ぞはかなけれ」と、謠ふ聲と諸共に、腹十文字に搔切れば、郞等與十郞太刀

六月五日未明、淸水長左衞門宗治切腹の用意をなすに、宗治が兄月淸入道も、ともに最期の裝す。宗治是を見て止て申けるは、「きのふ敵陣へ申せしは、某一人自害して、城中の總軍悉く助置るゝ約束なり。生害の事有る可らず」と制するにぞ、月淸笑うて申すやう、「否左に非ず、元來我は汝が兄なれば、家名相續すべかりしを、多病にして其任にあたらず、故に入道して家督を以て汝に讓りぬ。是故に汝今此難に遇り。我若家督を繼たらば、秀吉が大軍を引受け、今日生害せん者、某ならで有る可らず。元より我汝より先に生れたれば、死するをも先に死すべし。御邊吾切腹の樣を見終りて、心しづかに自害有るべし」とて、いかに制すれども更にきかず。時に輝元より加勢の大將難波傳兵衞、近松左衞門尉兩人も、ともに切腹すべしと云ふ。長左衞門又是を止め、「御邊達の切腹とは何事ぞや。爰を遁れて歸國すとも、人の嘲るべきに非ず。願はくは命恙なく、我生害の有樣を元春、隆景兩公へ傳へて給候へ」と云ふ。難波、近松等しく申すやう、「こは心得ぬ事を承る者かな。某等不肖に候へ共、隆景の命を蒙り、當城へ籠るの日より、貴殿と死生を倶にせん事は、云はずしても知るべき儀なり。若足下逆心を生じ敵に一味せる事あらば、我等必ず刺違へて死すべし。堅固に城を守らるゝにおいては、我々又倶に死を致すべし。是我輩が今日の職分、當然の理にて候はずや」と、是等も生る心更になし。時に剋限既に至

へは、某自害仕るの條、沙汰御無用に候べし。聞に達し候者ならば、よも許容は有るまじく覺候」と云ふ。安國寺感涙を流し、「實に忠勇義心の臣とは、貴殿の御事なるべし。英名當今に普く、永世に殘るべし。此旨秀吉へ申達し、和平成就ならしむべし」と、急ぎ秀吉の陣に歸り、宗治の書翰を呈し、事の次第を演けるに、秀吉、あはれ武士哉と感じ給ひ、「此上はいよ／＼織田、毛利和順して、天下泰平の基たるべし。和僧が忠功抜群なれば、一廉の恩賞是有るべし」と申給へば、安國寺此時、信長公の弑逆せられ給ひたるを夢にも知らで有りければ、此扱ひ仕濟ぬる上は、所領數多賜るべしと、獨笑して居たりける。秀吉より直に城中へ返翰あり。其文に曰く、

御狀之趣筑前守令二相達一處、代二衆命一籠城之諸人可レ有二御助成一之結構、一人被二相感一、卽可レ被レ應二御望一之旨候。然者小船一艘、酒肴十荷進レ之候。明日其刻限檢使可二差遣一候間、靜用意可レ有レ之候。恐惶謹言。

天正十年六月四日　　蜂須賀小六郎

杉原七郎左衛門

淸水長左衛門殿

大敗、毛利家の存亡只此時とこそと覺候。然るに適敵方より和睦せんと云送なば、此清水如き者五人十人捨給ひても、喜んで平和有るべき事なるに、却て我等をかばひ給ひ、和睦領掌し給はぬこそ、かへすぐ\も難有事に候はずや。我假令詮なき命を暫くながらへ有之とも、迚も助るべき命に非ず。只今自害し此和平調ひなば、死期の面目何事か是にしかんや。いまだ武運に盡ずして、惜からぬ命一つ捨るが故に、中國の危亡をすくひ、諸民の苦みを助くる事、此上の悦びや是有るべき」とて、筆を執て秀吉の陣へ送る書翰を認む。其文に曰く、

謹而奉述愚意。當地永々御在滯、楚辛勞力、乍恐奉察候。然者當城極運之儀、彌近覺候。小臣清水宗治、代衆命可致切腹之條、被垂憐愍、籠城之輩、被施於寛仁之君德、悉於御助命者、忝可奉存候。依囘章明日五日辰剋、可及切腹候。然者小船一艘幷美酒佳肴、聊預恩賜候者、且可散老兵之疲勞候。恐々謹言。

天正十年六月四日　清水長左衛門宗治

蜂須賀小六殿

杉原七郎右衛門殿

右の書翰認め終り、安國寺に授け、「貴僧秀吉の御前宜く取繕ひ希候なり。次に元春隆景の兩將

衞門宗治は、高義忠臣竝なき武士なり。汝小船に取乘り城中に到り、我言と兩川の言とを併せ說て、宗治に切腹なさしむべし。然る時は兩家の和議忽ち調ひ、中國一時に平均すべし。これ又汝が功なるべし。構て辭する事ある可らず」と申給ふ。安國寺委細承り、直に小船に打乘て城中へ赴けり。此時城將淸水長左衞門、難波傳兵衞、近松左衞門尉等甚だ不審し、安國寺の爰に來るは究て故こそ有りつらん、先召出して聞べしとて、城門を押開くに、城中とても水深く、船の儘にて本丸に漕附けり。時に淸水長左衞門安國寺を近く招き、其來れる趣意を問ふ。惠瓊謹んで申けるは、「此度秀吉某を以て和議の事を取扱しめ給ふに、吉川、小早川の兩將、足下の生命を助け候はゞ和平すべし、左なきに於ては戰うて倶に死んと宣ふ。秀吉又足下を殺さずんば武門の恥辱たるべき條申し給ふにより、此扱ひ事行くべうも見えず候。我は只此合戰和睦調ひなば、中國忽ち平均し、萬民其苦を免れん事を希ふが故に、あはれ成就せよかしと、一向兩家に往來して事を計れ共、此一事に至て和平の議破れんとす。故に來りて足下の計議を借んとす。願くは我に示し敎へ給へ」と云ふ。宗治熟是を聞て、先淚をはら〳〵と流して申けるは、「元春、隆景の如き義將、又世に有るべしとも覺えず。今兩陣の勝敗を計るに、敵は多勢、しかも信長近日に出張と聞れば、其勢甚だ大なるべし。中國は小勢にして見繼べき勢もなく、味方

事を取扱ひ、然も味方の英氣を失はざるは、實に天下の人傑只此人一人のみ。

○清水長左衛門尉自害

扨も安國寺の惠瓊は、再び秀吉の陣に到り、兩川の返答しか〴〵の通り申上げければ、秀吉是を聞給ひ、「清水を助けば和平すべし、渠を殺さば和平なる可らずとの申條、義將の致す所尤に覺え候。然れども秀吉が身に於ては、攻懸りたる城を落さずして和平を爲ん事、永き弓箭の恥辱なるべし。先年播州上月に於て、尼子勝久、山中鹿之介を捨て軍を引上げ、毛利家に對し我が面目を失ふに似たり。然れば今清水宗治自害したりとて、元春、隆景の恥なりとも云ふ可らず」とて、再三理義を分て申給へども、兩川更に承引なし。秀吉とかく此事延引せば、京都の變敵陣へ聞え、味方勇々敷大事なりと思ひ給へば、先安國寺に種々の引出物を賜り、「汝此扱宜敷取繕ふものならば、信長公に能々申上げ、拔群の所領を申下し得さすべし。勞を厭はず我が計を行ふべきや」と問れけるに、安國寺元來、秀吉の天下を掌握し給ふべき器ある事は、藤吉郎の昔より知りたる事なれば、「何ぞ仰を背き後の患を需むべき。いかなる御下知候とも、身に替て相勤め申すべし」と領承しければ、秀吉近く居寄りて申されけるは、「高松の城主清水長左

夜に馳來り、毛利の陣へ到んとせしに、秀吉が斥候に捕へられ、嚴敷縛戒めたればすべき樣なく、かく密書をも奪れたり。秀吉此裏書を見ると等しく馳寄て、拔討に彼曲者を斬給へば、首より胸へかけ一刀に切倒され、即時に息は絕たりけり。秀吉氣色快然として「汝等軍令を怠らず、晝夜嚴しく相守るにより、敵方の間者を捕へ、味方勝利の端を引出せり。猶此後も怠りなく守べし」とて、鳥目一貫文づつ褒賞し給ひ、皆々暇賜りたり。扨彼書狀を披き見給ふに、

　今月二日、京都本能寺と二條の城に於て、信長父子を討亡し畢ぬ。其地に於て羽柴秀吉を討果るべく候。兩三日の中には渠が陣中騷動し、手足の置所を失ふべし。其虛に乘て討給んに、いかに秀吉勇なり共忽に亡ぶべし。是御手の一助たるべし。仍て速に書を呈す。

とぞ書たりける。秀吉是を見て大きに仰天し、怨恨悲泣胸に充ち、紅涙落つる事瀧の如し。一度は歎き一度は憤り、又一度は此書翰を敵の手に入れず、我に天の賜ひけるを喜び、扨こそ安國寺を以て和平の事を計らはしむ。此時秀吉前に毛利三家の大敵ありて、高松の城いまだ落ず、七八日を待ものならば、此城水裡に陷り、悉く亡ぶべけれども、忽ち後に光秀が大變ありて、敵方此事悟り知らば、實に進退道を失ひ、一身存亡の危急に至れり。尋常の將なりせば、かゝる大事出來の上は、諸將を集め評議にも及ぶべきを、只一人心に懷し、自若泰然として和平の


京都の密使を捕る図



所爲の有りけるなり。其委細を尋ぬるに、凡て秀吉の軍中令法嚴重にして、諸卒曾て怠る事なし。今度高松の長陣にも、片時半夜も怠慢なく、夜毎に惣構の外所々に篝を多く焚せ、芝土手の蔭に足輕をひしと並べ、鐵炮を構へ控へたり。又忍びの者數十人所々に散じ、或は三丁又は五丁、乃至七丁十丁が間に隱れ居て、敵の間者忍び來るを見れば、相圖をなして知らせ合ふ程に、鳥だにも通ひがたし。さればこそ吉川、小早川の兩將高松の堤を切んと、さま〴〵術を巡しけれども、敢て近寄る事叶はず。秀吉が軍令嚴なりといふべし。時に六月三日の夜半計に、破れ笠を被り腰刀を帶し、蛙が鼻の本陣を左へ向ひ、忍びやかに通る者あり。件の斥候疾くより見附け、爰彼所より寄集り、相圖の太鼓を打鳴せば、十方より數百人の足輕ひた〳〵と馳寄つて、彼男をおつ取卷き、有無を云せず手取り足取り、高手小手に縛めて、斥候頭大谷慶松が陣へ連行き、斯くと申す。慶松件の男を近く引出し是を見るに、面に泥を塗りたれば、仔細あるべき曲者なりとて、大將の本陣へ引いたりける。秀吉是を聞給ひ、追取刀にて立出で、下知して懷を探らしむ。士卒立寄り是を捜に、首に一つの狀箱をかけたり。忽是を引取て秀吉の前に呈す。秀吉封押切り、中なる書翰の表書を見れば、吉川駿河守殿、小早川左衛門尉殿、惟任日向守と記たり。是則ち光秀の密使藤田傳八郎、昨二日の夜京妙心寺を立出て、行程七十里を一晝

るが、良有て元春申されけるは「約無して和を乞ふは謀也と、孫子が金言なり。今敵と味方の形勢を考ふるに、彼が兵は多く我勢は少し。其上信長近日出張といへば、又幾萬の勢を重ぬべし。味方は外に見繼べき援兵なく、眼前高松の落城日を算へて待べし。敵は大軍心一致に軍令を守り、味方は反心を抱き、惣軍一に和する事なし。敵に十分の勝利有て、味方又十分の敗體あり。爰を以て思ふに、いまだ戰はざる以前に、勝敗損利歴然たり。秀吉又智勇の將なり、何ぞ此理を知らざらんや。然るに今故無うして和を請ふ事、是不審の第一なり。努々此扱を聞べからず」と。時に隆景申されけるは「元春の異見、一々我心に合へり。併ながら我々軍馬を發し爰に出張せるは、高松城の難儀を救ひ、城主清水を助んがためなり。秀吉堤を切て洪水を落し、宗治をはじめ城中の軍民を助け置るゝにおいては、望に任せ和平すべし。是後巻として爰に向ひし詮用なり。宗治切腹と候はゞ、和睦の儀思ひもよらず、戰うて死を倶にすべし」と。爰において評議これに一定し、再び安國寺を以て此旨秀吉に答へしむ。

○秀吉京都之捕密使

羽柴筑前守秀吉、勝べき軍を止め、安國寺の惠瓊を以て和平を爲んと取扱ひ給ひけるは、深き

は信長公輝元と水魚の盟約をなし、天下泰平ならしめんと思しける所に、前將軍義昭公備後へ御下向有てより、兩家忽ち兄弟の盟を破り、横レ槊矢を飛し、呉越に等しき間と成れり。某信長公の代官として、輝元、元春、隆景等と鉾先を爭ひ、萬死を顧みず身骨を粉碎す。是に依て關東、四國、九州、北國の將士等、此潰に乘じ邪威を恣にして、攻戰更に止む時なし。爰に萬民困窮し、塗炭の中に苦しむ事久し。されば信長公の本心は、私の讐を以て天下泰平の功を妨んや。早く和睦して信長は陸奥、出羽の東夷を退治し、輝元は大友、島津を討て西戎を靜謐ならしめば、忽天下平定し、四民太平を謳ふべし、是信長が常に願ふ所なりと、某にも兼て仰含められ候ひつれ。されば悉く秀吉が私の意を以て申す所に非ず。此旨和僧元春、隆景に申達し、和平の儀相調ふに於ては、北は伯耆半國を境とし、南は當國兒部川を切て引分け申すべし。其故は伯州の南條小鴨近年味方に忠勤を抽ず、渠が本領を宛行ふべきの爲なり。又兒部川を境とするは、我爰に出陣して高松の城を攻ながら、清水長左衛門が首を見ずして和睦せんは、信長公の思し給はん所も如何なり、爰を以て清水宗治には切腹致させ申すべし。此旨元春、隆景へよきに披露せらるべし」と仰せける。安國寺委細領承し、退きて毛利の陣へ歸り、元春、隆景兩將に對面し、しか〳〵の由申ければ、元春、隆景案外の事なれば、暫く言はず思惟して有りけ

さて扇山の四方には、俄に下知して柵を結廻し、芝土手を築き、弓鐵炮を構へ、陣の備へ堅固に成就しければ、今ははや味方の中に少く叛心の者ありとも、輙く攻崩さるべきとは見えざりけり。是によつて諸卒鳴りをしづめ、陣中良平和に成りしかば、さらば以前の計議のごとく、羽柴七郎左衛門が陣へ切り懸るべし、日限は明後六月五日の夜たるべしと相定め、銘々其用意を成したりける。然るに其翌日六月四日早天、秀吉より使者を以て、小早川が陣に居ける安國寺恵瓊といへる僧を「只今急に來るべし。申入度心事の候」とて招れける。此安國寺といへるは、毛利輝元歸依の僧にて、藝州廣島の城下において大地の住僧なり。先年秀吉いまだ松下加兵衛之綱に仕へし時、矢剝の橋の茶店にて秀吉を見て、天下を知るべき奇相なりと云ひけるが、今織田家柱石の大臣として、數萬の軍勢を令し、毛利家と對陣に及ぶ事、既に此人大業をなすの時ならんと、私に思ひ居たりければ、輝元竝に吉川、小早川長陣の弔ひとて五日以前に爰に來り、秀吉には舊好あれば弔ひ度旨、隆景に告て秀吉の陣へ來り、互にいにしへを語り、頗る舊情を催しけり。是に依て安國寺毛利の陣中に在る事を知て、使を以て召れしなり。惠瓊何事やらんと急ぎ隆景に此事を申し、從者引具し秀吉の陣へ到りける。秀吉惠瓊を陣中に請じ入れ、席を前て申されけるは、「近年秀吉、元春、隆景と所々において對陣せし事、全く本意にあらず。其故





吉川元長三澤爲虎を誅す圖

き間、此廂山に柵を結ひ逆茂木を引き、手勢計を引わけ、丈夫に敵を引受て一戰すべし。三澤をはじめ其外の者共、秀吉に心を通ずる事實ならば、秀吉必ず當陣へ切懸るべし。其時秀吉の旗本へ一文字に切て入り、快死するより外の計議有る可らず」と、評定是に一決し、皆本陣に歸られける。然るに治郎少輔元長血氣の若將なれば、途より直に三澤爲虎が陣所に至り、只一人陣内へずんと通り、爲虎が膝の脇に無手と居り、「いかに爲虎、秀吉に一味して味方の陣をおびやかさんと計る由承る。其實否を糺し聞んため、態と是迄參りて候。汝實にかくのごとくならば、今我頭を斬て秀吉に送べし」爲虎是を聞て大きに驚き、色を失ひ頭を地に附け、「こは思ひもよらざる仰にてこそ候へ。不肖の某に候へ共、先祖より毛利家の臣として、君恩山海に等しければ、何ぞ猥に逆心をさし挾み申すべきや。是は讒者の我を失はん爲に、あられぬ事を申上候と覺候。かく思し候上は、起請文を書て呈し申すべし。夫にても御心解難く候はゞ如何せん、只今御前にて切腹致し、赤心を顯し申すべし」と云ふ。元長、「實に野心之なくば、誓紙を認め候へ」とて、頓て熊野の牛王を飜し、天地神祇を驚かし、盟書を認め捧げける。元長此上は强て疑ふべきにあらずとて、盟文を懐中し、陣所へこそは歸りける。又久代修理介も逆心の企あると云はやしけるにぞ、先是が押へとして元長が令弟元氏、渠が陣の上なる山に打出て陣を取りたり。

ば、卒然に答をなさず、目を閉ぢ手をこまぬきて思惟しておはしけるを、元春苛て席を進寄り、「いかに隆景、今元長が申す所一理ありと存ずるなり。元長に前を討せ、某後陣に續て戰ひなば、敵を切崩さん事掌の中にあり。用なき對陣に日數を過さんより、唯一戰と決定せらるゝの外更に他事ある可らず候」時に隆景點頭て、「仰の趣實に理に當て覺え候。敵の後陣續ざる先に、興亡の合戰宜く候べし」と同心せられけるにぞ、さらば明日烈しき一戰をなし、敵味方の目を驚さんと、内評定一決したりける所に、三澤爲虎といふ毛利の家臣、秀吉へ志を通し、裏切すべき謀計有りと告る者ある程に、味方の諸士互に疑心を生じ、誰某こそ敵に一味し寄手を引て、味方の陣を討しむるといふ、何某は秀吉に頼まれ、兩將を斬て敵に降るなど云騷ぎ、心を置合ける程に、先一戰も行ひ難く、暫く延引したりける。かゝりしかば國々の兵共、「敵には信長後陣に續き、近日二十餘萬の大軍にて押來るよし、味方は輝元の旗本の外は援兵に來るべき勢もなく、却て逆心の者多く、所詮對陣叶まじく、元春、隆景も陣を拂て歸國せらるべし」など私言あひ、何とやらん惣軍浮足になりて、始終こらへがたくぞ見えける。是によつて元春父子、隆景、家人久村久左衛門只一人を召具し、廂山の頂に登り評定しけるは、「三澤其外の數輩敵に一味すと聞ゆる上は、無二の一戰をなし難し。慭に物の用にも立たぬ假武者は、味方の足纏なるべ

一重だに破り得ず。されども水は次第に倍り來て、今十日を經るものならば、戰はずして城中の兵皆水屑と成りぬべく、哀なりし次第なり。是に依て後詰の大將吉川元春、小早川隆景、いかにもして塘を切て落さばやと、さま〴〵計議評定有りけれ共、寄手大軍にして、然も軍令甚だ嚴しく、陣の構堅固なれば、切落すべき手術もなく、只用もなき長詮議のみにして、はかゆくべくもあらざりけり。時に吉川元春の嫡子治部少輔元長進み出て宣ひけるは、「斯徒に評議のみして敵陣を隔て守居たらんには、後詰したる詮もなく、殊更信長大軍を率し下向せるよし風聞すれば、敵の勢は彌增り、信長爰に到なば二十萬騎には減ずべからず。渠が軍は益機に乘じ、味方の兵士は心屈し、高松の城おつるのみか、終には毛利家惣敗軍に及ぶべし。されば信長いまだ出張せざる前に、烈き一戰仕るべく存候へ。隆景は御勢も多く候へば、秀吉の旗本へ切て懸り給ふべし。某は雲州、伯州、石州の勢を以て羽柴七郎左衞門を切崩し、透なく押詰て秀吉が勢に突入り、隆景の御勢と挾んで攻討なば、勝利一時に是有るべし。備前の浮田勢は從來表裏第一の弱兵なれば、味方合戰に利を得なば、强き方に屬せんと、時の勝負を見合せ、一圖に討て懸る事は候まじ。家の浮沈身の安危、唯此一擧の中に定め、十死一生の合戰せられ候べし」と席を打て申されける。小早川隆景は智慮ふかく、謀を先にし戰を後にする大將なれ

繪本太閤記　三篇巻之十二

○吉川小早川軍議評定

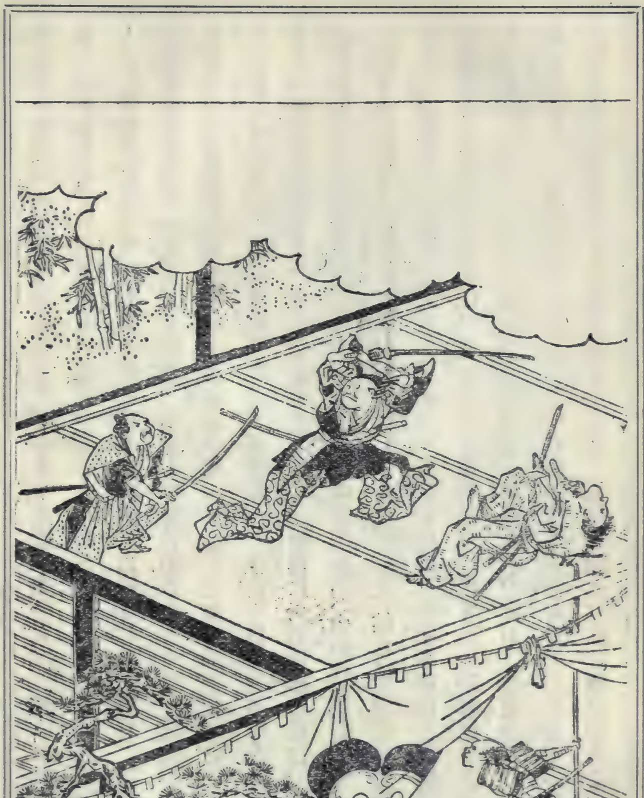
此時西國には羽柴筑前守秀吉、毛利の三家と對陣し、去る五月の始より備中高松の城を圍れけり。此高松の城は、鄕中に有て小き平山の上に築き、四面に池沼を湛へたりしを、さしも名を得し兄部川に、血水川、大幄川の流を合せ、此鄕中へ堰入たれば、今五月の末に至りては水彌高く淼上り、山を浸し丘を越し、浩々として一大湖水を作し、今五尺計も水増らば、高松の城水底に沈み、城中の男女老少生べき者一人もなく、死を旦夕に待のみなり。秀吉城の行勢既に難儀に及びぬと見給ひ、大船數十艘に櫓をあげ、城中を眼下に見下し、大筒小筒の鐵炮を夥しく放懸け、熊手を以て塀を破り、乘入んと下知しけれど、城中の士卒十分死地に陷たれば、活る心は露程もなく、攻口を固く守り、防戰する事更に疼たる氣色なし。中にも中島大炊介、荒木が一黨は秀吉の攻口を防ぎ、林與三郎、片山勘兵衞、鳥越又兵衞等は浮田勢に當て、爰を破られしと鐵炮を打出し、火箭を放ち、汗は漿を流して戰ふ程に、寄手多勢なりといへども、塀

繪本太閤記 三篇第十二之卷 目錄

吉川小早川軍議評定
秀吉京都之捕二密使一
清水長左衛門尉自害
秀吉單騎馳二京都一

闕に控たる三十餘人の壯士共、すは御主人の御身の上ぞ、踏込で討死せよと、腰刀拔連て一同にどつと切て入れば、間毎〳〵に伏置たる數多の力者、得物〳〵を携て、立合ひてぞ揉たりけり。此時信澄は峯、山路の兩人と火を散して切合ひけるが、信澄元來大勇力の兵なれば、竹右衛門が左手の臂をしたゝかに切割り、大に一聲叫と見しが、段右衛門が目の上より頰がまちへ切先強く切附くれば、眼に血入て働き得ず。惟住が家臣上田主水、大太刀拔て信澄に切て掛る。信澄怒て只一討と、をつと喚て拜討ち、微塵になれと切込む太刀を主水受流し、一足踏込み、信澄が頭眞二つに切割たり。さしも强勇の信澄なれ共、一刀に死たりける。時に主水大音にて、「織田七兵衛信澄の首、上田主水が賜たるぞ」と、呼はり〳〵馳廻れば、信澄が郎等是に力を失ひ、太刀先弱く見えけるを、引包んで切りける程に、悉く討取りたり。其日午剋尼ヶ崎の城へ此事追々聞ければ、家老津田與三郎、志水加兵衛、渡邊源右衛門等大に驚き、如何はすべきと議しけれど、所詮主人を失ひ此城に籠ん事、敗を取るの道なりとて、同志の輩八百餘人引具して、一手にならんと京都指て急ける。此時惟任光秀下鳥羽に本陣を居ゑ、諸方の勢を招けるが、津田、志水、渡邊が輩光秀に對面し、主人信澄大阪の城中に赴き、三七信孝に謀討れ候由申ければ、光秀大に驚き且悲み、津田、志水、渡邊等を厚く扶持し、一方の手當にぞ備へける。


織田信澄寃死の圖



ひ定めて候へ。是非々々今度の出會御止り然るべし」と樣々諫め奉れど、信澄一向是を用ひず、「汝等が分別甚だ柔弱なり。我三七等を見る事小兒のごとく思ふなり。假令謀計を構たりとも、何程の事か是有らん。且又先刻の使者に我自ら出會すべしと返答し、今汝を名代として大阪に到らしめん事、頗る勇なき行跡、當家の恥辱にあらずや。其上我返心をさとりたるや、未心附ざるや、其程も計らずして、虛病など構へ出會せずんば、却て敵に疑心を生じ、毛を吹て疵を需る類なるべし。汝等心を用ふる事なかれ。我自ら計略有り」とて、強勇の兵三十餘人召具して、翌五日の曉天に、大阪さして登りける。去程に大阪の城中には、七兵衞尉信澄出會の由聞ければ、さらば其用意をなすべしとて、峰竹右衞門、山路段右衞門兩人の勇士を斬人と定め、一間々々に三十人の力者を伏せ、今や〳〵と待居たり。然るに織田七兵衞尉信澄、天命爰に極りけん、忠臣津田が諫言を聞ず、又朽木、匂坂が逆心にて密事露顯せし事も知らずして、自ら勇を頼みとし大阪へ來りしは、危かりける次第なり。頓て三七殿御座ける二の丸に至りければ、峯、山路の兩人謹んで出向ひ、應對の間に請じ入れ、左右より聲をかけ、「光秀一味の織田七兵衞、遁すまじ」と拔討に切りかけたり。信澄心得太刀拔合せ、二人を相手に戰ひて、且大音に呼りけるは、「信澄こそ身の大事に及たるぞ。家來の面々、駈出働けや」と、殿中に響く大聲、玄

んずれども、何と見定たる事もなきに討果したらんは、却て不覺を取るべし、とやせんかくや計はんと評議最中へ、信澄の家來朽木六左衛門、匂坂左内兩人、主人信澄を恨る仔細有て、密使を以て今宵信澄が光秀一味の始終、委細詳に出札に認め、三七信孝殿へ注進したりけるにぞ、惟住を首め一座の將士、さればこそ此人其儘にて捨置がたしとて、又改めて誅伐の計議さま〴〵なり。時に三七信孝進み出て申されけるは、「七兵衛信澄、かく叛心の露顯せしとは夢にも知るまじ。光秀が逆心亡君の弔合戰を營むにより、申談ずる仔細あれば、早々大阪へ來らるべしと申遣さんに、彼逆意を刺挾めば、其疑れん事を恐れて必爰に來るべし。其時力者を以て討捨んに、何の難き事候はん」と申けるにぞ、此儀然るべしとて、直に尼ヶ崎へ使者を遣し、右の次第を云入たり。果して信孝が計略に違はず、信澄大阪に赴くべしと返答し、其用意をなしたりける。時に津田與三郎、信澄の前に出て諫て申けるは、「千金の子は市に立たずとこそ承る。今單騎にして敵中へ赴き給ふ事、薪を負て火を救はんとするに等し。殊更君は日向守が聟君にてましませば、惟住、中川等才智勝れし者なれば、疑なくんば叶べからず。此集會こそ必定敵の計略なるべし。必ず赴き給ふ事有る可らず。不肖に候へども、某君の名代として大阪に赴き、事の體を窺ひて、三七信孝殿、惟住五郎左衛門兩人の内と刺違へて、倶に死せんとこそ思

度光秀京都において信長御父子を弑逆せしを喜び、光秀に一味せしは、恩人といひ女縁と云ひ、旁故ある事なりけり。信澄兼て叛心の企有ければ、荒木村重が牢人、石山本願寺の浪人など三千餘人扶持し置き、大阪池田尻ヶ崎の邊に宿らしめたりければ、此者共を集め、當城に籠るべきや、都に上り日向守と一所になるべきやと、家老臣下を集め僉議しけるに、家老津田與三郎、志水加兵衛、渡邊源右衛門等進み出て申けるは、「此たび日向守殿信長公父子を弑し奉る上は、信雄殿、信孝殿を首とし、柴田、羽柴、瀧川、惟住が輩、弔合戰の催無んば叶ふべからず。然る上は時の宜しきに隨ひ、城を開いて光秀と力を合すか、爰に籠城して指挾で敵を討か、臨氣應變の計議有るべし。今見定たる事もなきに、京都に上り給はんも、勇なきに似たるべきか。先諸方の軍勢を催促し、當城に固く立籠り、世間の形勢を伺ひ給へ」と勸むるにぞ、衆議是に一決し、暫く籠城にこそ定りける。

○同四日の夜、大阪城中において神戸信孝、惟住長秀、堀川、中川、高山等集會し、光秀を討て信長公の弔合戰の評議取々なり。時に惟住五郎左衛門申けるは、「尼ヶ崎の城主織田七兵衛尉信澄は、日向守が聟にして、爾も父信行を信長公に殺されたり。旁以て今度の騷動、光秀一味と覺えたり。事の重疊せぬ内に、押寄て誅すべし」と云ふ。信孝其外の將士、實にさる事も有ら

ひてこそ、朱印をも出しつれ。大阪に歸て事の仔細を糺し、朱印を改め候はん」と宣ひければ、後室喜び泪を流して、都へこそは歸り給ふ。其後此事御僉議有りて、前の朱印を召かへされ、準如上人に本願寺安堵住職すべき御判を下されければ、教如上人今は力なく、本寺を退き令弟準如上人に讓り給ふ。されども教如上人の廣德を慕ふ門徒等夥敷く、晝夜詣で仕へ參らせ、衆僧門俗渴仰せる事いにしへに減ぜず、終に再び門跡の號を賜り、準如上人を表と稱して西に在し、教如上人は裏と唱へて東に榮え、江西湖南の榮昌、誠に難兄難弟の盛德鴻業、萬代不易の招提なり。

○織田信澄滅亡

攝州尼ヶ崎の城主織田七兵衛尉信澄は、故織田備後守信秀の三男勘十郎武藏守信行が長子にして、則信長公の甥なり。父信行叛心に依て、往日弘治三年正月二十日、家兄信長公の爲に池田勝三郎信輝に討れたり。信澄いまだ幼稚にして於菊丸と呼り。明智光秀が介抱にて、淺井備前守長政が麾下の將、佐和山の城主磯野丹波守員正が養子と成り、後光秀請うて婿とす。尼ヶ崎にて十萬石を領す。されば信長公は伯父ながらも、父の仇なりと多年怨恨を含居たり。然るに此




鈴木孫六
踏皷踊の圖

人いかゞ思し給ひけん、嫡男敎如、二男顯尊を閣き、三男準如に嗣法して、開山傳來の聖經什物悉く附屬せられ、文祿元年十一月廿四日、入寂し給ひける。二男顯尊は一寺を建立して、是を興正寺と稱しける。是によつて三男準如、遺命に任せ相續せらるべき所に、嫡男敎如内々思惟やおはしけん、秀吉公肥前國名護屋の陣營に至り給ひ、「某宗領に候へば、顯如が本寺相續仕度、此旨許容を賜り候はゞや」と願ひ給ひ、秀吉公の御朱印を申受け、京に歸りて又聚洛の關白秀次公へも此趣旨を訟へ給ひ、是も本寺相續すべきの朱印を賜はり、終に本山の法燈を嗣せ給ひけり。翌年文祿二年、太閤秀吉公名護屋より御歸城あり、攝州有馬の溫泉に入浴し給ふ。此時顯如上人の後室準如の母公、御旅館に參り給ひ、太閤對面有て御茶を賜ふ。後室折よしと思召して言上あるは、「今本願寺の門跡敎如は、宗旨の相續致すべき器量に非ず候ふやらん、子を知る事父にしかずと、故顯如も彼をさし置準如にこそ讓狀を與へて侍れ。されども上の御威光、高麗唐土の果迄も更に洩る事候はぬ御事なれば、御朱印の背き難う候て、兎角の綺なく、敎如を以て本寺には居申候なり。併故顯如が心にては無レ之候」と涙を浮め申給へば、太閤、「實にさる事も有べきにこそ。我は受法の次第を知らず、兼て敎如上人と入魂せしが故に、早く安堵させ、諸人彌歸依せしめんと思

き。然るに今朝よりの防戰に、左の足を鐵炮にて打貫かれ、痛手なれば持口を退き、休息して居たりしが、信長生害し、當の敵悉く引取りたりと聞ければ、餘の嬉さ、重疵の痛苦を打忘れ、上人の御前へ片足を引ずりて驅來り、日の丸を畫し軍扇をさつと開き、「あらめでたやな法敵亡び、宗門の末廣りに御繁昌」と、おしかへし／＼高聲に謳ひ、片足にて舞ければ、上人を始めまゐらせ、御家老門下の人々も、一同に聲を發し、よいや／＼と響る聲は、夕の歎に引かへて、勇しくこそ聞ける。されば今に於て紀州の鷺の森には、毎年趁跛踊と號し、紙にて鎧を作り是を著し、片足を引ちゞめ、ちんばの眞似して踊る事、此吉例より起るとかや。其後天正十二年八月、顯如上人鷺の森の御坊を出て和泉の貝塚に住せ給ひ、同十四年、攝州天滿に遷座ありて、今も天滿の御坊といへるは是なりとや。同十九年、京六條堀川に一宇の御堂を建立し給ひ、諸國の門徒末寺の僧衆、身力を惜まず金銀を顧ず、悅んで經營する程に、重樓天に倚り、層臺星を摘み、七重の欄楯、九重の羅網、更に盛に迭に貴し。七寶八德の池の上に、大如車輪の蓮花、金色微妙の光明を發ち、日夜天樂念佛の聲和鳴して、去此不遠の極樂國土に、裳を踏膝を重る三心四趣老若男女の佛恩報謝の信心、膽に銘じ骨に刻み、手を額にし涙を流す。其聲雷動して百步の外に聞えり。然るに顯如上

ざれば、伏して地中を行くに道なく、さしも生如來にてましく／＼ける開山上人の遺力にも及せ給はぬ事なるかと、人々同音に噇と一聲泣たるは、心なき雜兵士卒迄も、共に袂を濡しける。時に大阪に宿陣せられし神戸侍從信孝より、急使到來して、「昨二日、右大臣御父子、惟任光秀が叛逆により、京都にて生害まし／＼、畿内の騷亂大方ならず。鷺の森の敵を打捨置き、半剋も早く歸阪せしむべし。何角申談ずべき仔細有る」の由、追々三度まで飛脚重りければ、五郎左衞門甚驚き、陣々も其儘に打捨置き、一騎驅に大阪さして上りける。されば寄手の陣々俄に騷ぎ色を失ひ、積みかけたる燒草も再びかへり見る者もなく、思ひ思ひにあわてふためき、散々になりて引取りければ、門跡を始めまゐらせ、家老下輩に至る迄、夢の覺たる心地にて、何故寄手の敗亡ぞやと、更に仔細も分ざりしに、當地住居の門徒の道俗、追々來り悅を述べ、信長父子、光秀が爲に討れたるよし申すにより、「是は偏に御開山親鸞上人且は阿彌陀如來の御加護により、佛敵信長、臣下の手に命を落し、今は當宗門に恐るゝ者さらになし。いよ／＼宗旨繁昌せん事、疑ひ曾て有る可らず」と、踊上り飛上り、悅び勇むも理なり。爰に鈴木孫六といへる剛兵あり、上人無二の御味方にて、信長が大軍に當り、高名手柄を顯し、織田家の兵卒も、孫六が名を聞いては恐れざる者なかり

の者にして、去々年一類ども其地退城の時、渠一人大阪の城に止り事延引に及ぶ條、勅命を蔑にし、信長を欺く事、言語に絶たる行跡なり。其後鷺の森に籠居し、今一類悉く爰に集り、かゝる惡逆、犯罪の儕其儘に捨置なば、いよ〳〵邪法盛んに成り、諸人を魔魅し、天下泰平の功を妨ぐべし。然れども明白に征せば、又諸國の門徒等蜂起して、騒亂の端と成るべし。今幸四國へ勢を渡べき時節なれば、汝手勢を引具し、不意に鷺の森へ押寄せ、一人も洩さず燒殺し、彼宗門永く斷絶せしむべき」旨命渡さる。是によつて惟住五郎左衛門、手勢三千餘騎を引具し、六月二日の曉に大阪を出立し、翌三日鷺の森へ押寄せ、四方を圍て鬨の聲を上げたりける。顯如上人父子、家老の面々大に驚き、動轉する事限なし。されども老臣家老の面々を始め有り合ふ門徒等、皆一同に念佛を唱へ「祖師の御恩報謝には、骨を碎かれ身を裂るゝとも、惜むべきにあらず、恐るべきに非ず。今日の最期は猶未來に頼みあり。力の及ぶ程は防げよや」と、門戸を堅め弓鐵炮を打出し、喚き叫んで防ぎける。寄手元來大勢なれば、人夫數多築地の四方へ柴薪を運び積み、火を附燒崩さんとす。顯如上人御父子は御堂の佛前に竝居給ひ、最期の讀經いと靜に、時剋の至るを待ち給ふは、痛はしくも又哀なり。此時に至つて、阿羅漢に非ざれば、飛で空中に走る事能はず、神仙にあら

門の棟梁として王城守護の大臣なるを、本願寺門跡僧の身として敵對申す條理なきに似たり。已後信長に屬し、石山の城を開退べき旨勅諚あり。是に依て本願寺顯如上人、家老の面々を集め評議有けるに、下間刑部卿法印、同少進法橋等進み出て申けるは、「今度禁廷より和平の儀勅し給ふ、尤違背仕るまじき事にて候。其上信長が生得殘忍にして、荒木、波多野、別所が輩悉く根葉を斷ち、殘りなく打果さる。當宗旨に至りても、加賀、越前を始め諸國の門徒、或は燒殺され又磔にかゝり、首を刎られ、信長が爲に命を失ふ者幾千人といふ數をしらず。數年の間籠城辛苦を積し上下の士卒に、賞祿をこそ宛行はずとも、一命を助け給はゞ、開山上人の御本意にも御叶ひ、且は當宗旨相續の御爲にて候べし」と、時宜の理を演たりければ、上人を始め上下の評諚是に一決し、同年七月、石山の城を開き給ひ、紀州最賀へ引取り給ふ。されども嫡男新門跡敎如上人を石山に殘され給ひ、事全く穩ならず。然るに今年天正十年夏五月、神戸侍從信孝を大將として、惟住五郎左衛門、蜂谷兵庫頭、中川瀬兵衛、高山右近以下の兵士一萬五千餘人、四國へ發向し、長曾我部宮內少輔元親を誅伐せしめんとて、攝津難波御津浦に兵船を揃へ、渡海の順風を待れける。此時信長公より惟住五郎左衛門に密に命じ給ふは、「一向宗門の新門跡敎如上人、不忠不孝

秀頂戴し、頓て退出したりける。されば光秀將軍に任ぜられ、鳳闕を守護し、諸國の武士を征伐せるよし聞ければ、近國より馳集り、光秀に與力する輩には、伊勢安房守貞德、同主水貞永、上野筑後守淸之、伊藤志摩守祐里、杉原讃岐守春次、後藤喜三郎次之、磯野彈正員春、阿閉淡路守、同萬五郎友近、大津甚四郎、多賀新左衛門、烏山主殿介、久德六左衛門、逸見杢亮、香川刑部、畑田主馬介、庄田權之介、松本主膳、岡八郎太夫、平田六郎次郎、詫見隱岐守、櫻井新五左衛門、高橋虎之介、福岡十太夫、五十嵐源八郎等、我も〳〵と來り集り、光秀に同心しければ、其威光朝暉のごとく、光秀主從大きに勇み、いつしか弑逆の惡を忘れ、聖賢の禮義を學で政道を執行ひしは、誠に邯鄲の一夢に髣髴り。

○同月四日、勝龍寺の城に三宅藤兵衛綱朝を籠め、（前に猪子兵介城代なり）淀の城には番頭大炊介義元、伏見の城には池田織部輝秀、宇治の城に奥田庄太夫一房を在番なさしむ。

○同月四日、紀州鷺之森へ向ひし惟住五郎左衛門長秀、右大臣御父子御生害を聞き、周章して播州大阪に來り、神戸三七信孝と事を計議す。

故右大臣信長公、大阪石山本願寺を惡み給ひ、十餘ヶ年合戰止む時なしと雖も、信長公敗有て勝つ事なし。時に天正八年六月、兩家へ勅命有て和睦の儀仰含らる。是信長公當時武



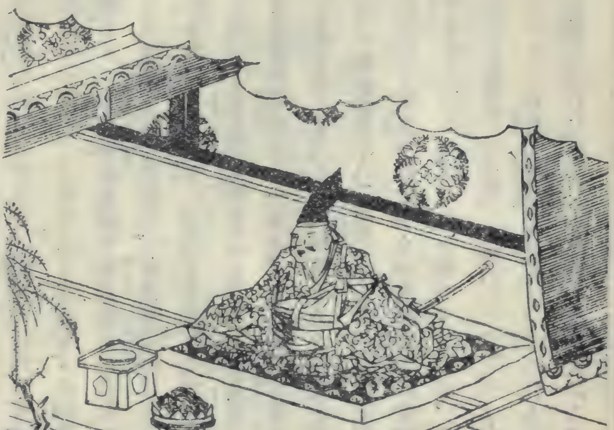

光秀ね軍宣下の圖

藤大八郎利次を召出し、先當座の賞祿を與へ、「我光秀と舊交深く、一向隔心之なき上は、一味は勿論人質にも及ばず、且又贈物も功を立てたる後に是を受べし。我に於ては直さま都へ出馬し、倶に力を合すべし」とて、乙壽丸並に種々送物を利次に戻し、都へ返上せけり。偖筒井の城には嫡子藤四郎定次を殘し置き、島左近友之、松倉右近勝重、飯田三郎直宗、小田切宮内春次、小泉四郎秀元、井出十郎國秋、猶原右衛門光之、森縫之介好高等を首とし、其勢一萬餘騎、翌五日筒井を出馬し、同夜亥の刻城州八幡の洞ヶ峠迄著陣し、小屋をかけ陣を張り、光秀方へ案内として森好高を遣しければ、光秀はかゝる内謀有るとは知らず、大きによろこび、直に使者を以て洞ヶ峠の筒井が陣へ兵粮酒肴をおびたゞしく送り、其勞を謝したりける。

○此前日四日午の剋、禁裏勅使として久我宰相吉道卿、難波中納言宗豐卿、土御門少將通重卿、光秀が館に入御まし〳〵、此度光秀地子錢免許せしむる條叡感なし下され、依て將軍宣下有べき旨、勅定の趣述給へば、光秀謹んで忝きよし拜受なし奉り、勅使歸還の後、直に參內して恩を謝す。此時一條前關白光基公、御階近く出させ給ひ、「惟任日向守將軍宣下成し下さるゝ條、即日昇殿をも許され、天顏を拜し奉るべきの所、主上此ごろ御異例にあらせられ、爰にて天盃を下し賜る間、難有頂戴せしむべき」とて、五位の殿上人を以て御盃の土器を下し給ふ。光

比べきや、是論ずるに及ばざる事なり。臣いまだ君に仕ふる忠を棄て、朋友に交る信を建る事を聞ず。今遙に合戰の勝敗を算するに、信長の恩に死せんとする者、柴田、羽柴、瀧川、蒲生等を首として、其餘碌々たる者は舉て算ふ可らず。是等の人々志を併せ、一人の光秀を討ば、光秀普天の下において何れの地にか足を入るべき。其上天下の人民皆光秀が惡を惡み、天地の神祇其八逆罪を罰せんとす。かく勝敗得失分明なる上は、何ぞ迷を取て其惡を助けんと計り給ふや。是小臣が未解せざる所なり」と、憚る色なく述ければ、順慶掌を拍て大きに悦び、「汝が申す所悉く理に當れり。我年將に知命に及で、一人の童子に劣りたるは、生涯の耻辱にこそ。併らこれ春日大明神の汝が口を假給ひ、我に教を成し給ふ成るべし。織田方に一味して、光秀に交を斷べし」とて、評議是に一決せり。時に松倉右近すゝみ出でて申けるは、「先光秀へ一味同心の返答有て使者を返し、大軍を引率し、城州八幡山へ出馬有るべし。彼地は究竟の要害なれば、暫在陣して世の形勢を見合さるべく候。しからば羽柴筑前守をはじめ、信長恩顧の諸將等馳上りて、弔合戰を始めん時、內應して逆徒の裏切あらば、一時に當家の大功を立つべし」と云ふ。一座の將士、「此儀尤に覺え候。今明かに光秀に好を斷ち給はゞ、彼も用心して成功速なるべからず。早く是に隨ひ給へ」と一同に申けるにぞ、順慶も實にもと思ひ、光秀が使者齎





悉く光秀が吹擧のいたす所なり。渠が恩を受る事深きを以て、光秀に一味せざらんも又恩を忘るゝ禽獸の心ならずや。左ありとて君を弑する賊臣に黨せば、八逆の罪のがるべき方なし。我爰を以て迷倒す。面々趣意を隱さず申候へ」といひけるに、此時一門親族譜代の老臣等、はつと答し計にて、兩議各一理あり、是非を判斷するに途なく、口を鉗て他の說を俟つ。時に此席に出でて酌を取りける扈從に、中西小治郎と云ふ者十七歲に成りけるが、銚子を傍に差置き跪坐して申けるは、「凡評議相談と申す事は、是非得失のわかれ難きをこそ評じ談ずるに候はずや。かくのごとく理非歴然たる一事を、さしも門葉家老の旁、判斷に迷ひ口を噤みて控へ給ふは何事に候や」と憚りなく申ければ、一座の人々氣色を損じ、「いはれざる小冠者が申條かな、聞捨難し」と罵れば、順慶制して、「愚者も千慮に一得有るとや。汝が所存殘す事なく一々申すべし」と。中西爰に於て近く居直り申すやう、「先に君の仰せ候大和一國を領する事、信長の賜ふとは雖も、是光秀が吹擧する所なれば、之を報ずべきため、主君を殺したる不當の惡人に與すべきとの上意、第一心得ざる御事にて候。光秀いかに申上ぐるとも、信長公の御志これなくば、爭か恩賞を與へ給ふべき。其恩の淺深を論ぜば、與へたるや深き、吹擧せし者や深き。吹擧する者は其塞ぎたるを通じたるなり。是を知て勸賞を與ふる者は君なり。然れば君の恩を以て執達の者と

繪本太閤記　三篇卷之十一

○日記之下

○四日辰の刻、大和の大守筒井順慶が許へ、光秀が使者として齋藤內藏介が弟同大八郎利次に、書翰並に太刀二腰、段子三十端、繻子三十卷、金子千兩を持て參著す。順慶に見て申けるは、「光秀累年信長公を怨奉る條々尤少からず。是によつて是非に及ばず御父子を生害せしめ、鬱懷を散じ畢ぬ。日來斷金の好あるを以て、此時に至りて味方に與し、一臂を助候はゞ、舊領大和に和泉、紀伊を合せ領せらるべきなり。猶疑なからん爲」とて、光秀が末子乙壽丸といふ小童を、人質として差越たり。順慶先使者大八郎を專念寺といふ寺院に宿らしめ、さま〴〵饗應し、家の子島左近、松倉右近、中坊飛驒守等を始め、其餘の諸臣を集めて申けるは、「今度光秀、信長を弑逆し天下を奪取んとす。誠に是大逆無道、言語に絕たる行跡なり。我信長公の幕下に屬して、未君臣の約をなさず。然りと雖も光秀が不忠不義を誅罰せずんば有るべからず。されども且愚案を以て是を思ふに、吾信長の顧眄に依て和州一國の主と成り、榮富の時を得たる事、

繪本太閤記 三篇第十一之卷 目錄

日記之下
織田信澄滅亡

歌に達し、絲竹に妙なり。容色殊に勝たり。されば鴛鴦の契淺からず、夫婦の情又濃なり。與八郎妻を呼て申すやう、「汝今は叛逆人の娘なれば、武士の婦と成すべからず」とて、光秀よりの附人池田六兵衛、一色宗右衛門、窪田治左衛門等を相加へ、丹波國三戸野と云ふ山里まで送り歸せり。細川父子が義勇、聞く人感稱したりける。後天正十二年の春、秀吉公の命によつて舊のごとく迎へ入れ夫婦と成れり。

○同月三日、光秀近士柴田忠藏勝之に封書並に太刀金銀を持せ、攝州大阪の城代織田七兵衛尉信澄方へ通じ、「兼て計議のごとく、昨二日信長父子を討課せぬ。益我に力を合せば、大阪、安土の兩城主として、近江攝津河内の三ヶ國に大守たるべし」と云ひ送りける。信澄是を聞て大によろこび、父の怨を報じたりとて、勇むこと限りなし。信澄が一件委しくは後に記す。




其二


細川刑部ノ太輔光秀に与せざる圖



駿馬金銀衣服の類、山のごとくに與へければ、上下おしなべ悦びける。

○同月三日の朝、日向守光秀、近士明智兵介光次をして太刀、刀、卷物、金銀等の贈物を持せ、丹後國主細川刑部太輔藤高、同與八郎忠興が方へ云遣しけるは、「我多年、信長公に對し怨懐の儀少からず。然れども臣の道を守り敢て怒らず、益々忠を盡す所に、信長却て誅戮せんとおほす故に、先じて是を制し、昨二日京都に於て、御父子ともに生害を遂させ畢ぬ。然れば緣家の好を以て、我に力を合せ給はらば、大感限り有るべからず。其上は舊領丹後に但馬、若狹、播磨を添て領せらるべき」由、委細光秀が口上を演舌す。細川父子是を聞て大に驚き、且は歎き且は怒り、使者明智兵介に向ひ、聲を勵し罵つて申けるは、「我々父子信長公の大恩を蒙り、今丹後一國を領し、妻子從類安堵に住する事、是皆君の惠ならずや。光秀も又是に同じ。然るを不義の謀計を以て、君を弑し奉る、叛逆人に與する事努々有る可らず。汝緣家の從士ならずんば、忽ちに討て捨べきなれども、宥恕を加へ助る間、早く歸り此旨光秀に語り聞すべし」とて、彼樣々の贈り物を廣庭へはたと蹴落し、座を立ちて入りければ、兵介大に赤面し、這々京へ迯歸りぬ。與八郎忠興の妻は日向守が女にて、去る天正七年の春、十六歳にて細川に嫁し、今既に四年を經たり。此女武き心は父の光秀に似て、優きさまは舅藤高に習へるにや、武藝に志深く、詩

木主計頭、阿閉萬五郎友近（淡路守が弟なり）兩人を以て守らせける。

○同月三日、阿彌陀寺の面譽上人、日來信長公御父子の御懇情に預り參らせ、且又日向守にも入魂なりければ、右大臣御父子竝に近士の死骸を葬り申度旨、光秀へ希ひ給へり。光秀も流石主從の好とて、痛しくや思ひけん、「都て昨二日討死の輩、後世の弔ひ宜く致すべし」とて、砂金二袋面譽上人に呈しければ、上人甚悅び、右大臣御父子の遺骨を拾ひ、先に明智左馬介光春、竝川金右衞門等より預りし信長公の御首と諸共に、土中に葬め奉り、其餘討死の輩、悉く法號を授け過去帳に記し、法事供養懇に修せられければ、洛中の僧俗男女誘ひ集り、泪諸共佛名を唱へけるは、哀なりし次第なり。扨光秀京中の容體を伺ふに、何となく靜ならず、爰彼所に集り、議論更に止ざりければ、斯ては大志遂難からんとて、諸民の心を保ずべき計略を設け、御靈、祇園、北野等の諸社毎に、燈籠料として黃金百兩宛捧げ、南禪寺、天龍寺、相國寺、東福寺、建仁寺、萬壽寺、大德寺、妙心寺等へ黃金二百兩宛、其外洛中洛外の諸寺諸院へ、盡く祠堂金を夥しく寄附し、三宅式部秀朝を所司代として、京中の地下人に金銀を散じ與へ、且永代地子錢免除せしむるの旨沙汰しければ、洛中洛外の商賈は更なり、近鄉近村の農民まで、有難きおもひをなし、皆萬々歲を唱へ、悅ぶ事限なし。又幕下の郎等將士には、感狀及び太刀薙刀

是より先に膳所の城主山岡美濃守景隆、同對馬守等へ使者を遣し、味方に頼むよしを申送りけり。是は山岡對馬守が女を、光秀が嫡男十兵衛光慶に娶すべきの由兼約あるが故に、其因を以て語らひけるに、山岡兄弟先君の御恩を忝うし、光秀が叛逆を深く悪み、眞實の忠義を守り、合て以て同心せず、却て其使者の首を刎ね、勢田の橋を二十間計焼落し往還を塞ぎ、防戰の用意をなすと雖も、纔に三百人に足らざる小勢なれば、光秀が大軍を支へ戰はん事叶難く、三井寺迄引きたりけるが、爰にもたまり得ずして、甲賀の山中へ隠れ入りぬ。是に因て左馬介光春は膳所に陣を取り、先手の勢は山田矢橋を船にて渡し、其間に浮橋を營み勢田を渡り、安土を差て急ける。左馬介も諸軍の跡に引添て、揉みにもんで驅たりけり。頓て安土に近き傍より、番兵どもの出て防ぐ事もやと、弓鐵炮段々に備へ、列を亂さず押行に、番兵とては一人もなく、農民工商の輩番所々々に守居て、敢て支る者もなく、安々と城下に至れば、代官木村治郎左衛門、とても敵對叶ふまじと、城を捨て落行きぬ。是に於て左馬介、兵刃を用ずして安土の城に入り、金銀名器を坂本の城へ送り、猶調度米穀の類まで、諸士及び安土城下の人民等に悉く分與へ、諸人を懐け、其身は安土に在城し江州を治んと、専ら商議をなしにける。依て諸方へ軍勢を分ち敵を防ぎ、且政事を司しむ。先佐和山の城に荒木山城守父子を籠せ、長濱の城に妻

ごとく諸士の心離散しては、防戰せん事思ひもよらじ、此上は御臺所、公達其外の女房達も、皆々日野の城へ退去なさしめ、堅固に籠城成すべしと、俄に日野の城へ此趣申遣しぬれば、翌日三日、子息忠三郎氏鄕御迎の將とて、乘輿五十挺、乘馬百疋、傳馬二百疋を引せ、安土迄參上しければ、秀賢大に悅び、下知を傳へ、終に日野の城へぞ具し奉る。此時御臺所を始め女房達、「御城を開參する上は、金銀寶物を悉く運び取て、城に火をかけ燒捨候へ」と仰せけるを、右兵衞太夫泪を流し申けるは、「信長公年來御心を盡させられ、天守を始め詰々、天下無雙の結構を、秀賢一人の料簡を以て燒失はん事、勿體なき事に候。光秀は人非人に候へば、燒候事もこれ有らんか。假令燒ずして己が幸に爲すとても、天命何ぞ久しからんや。又財寶金銀も取持せ申すまじきぞ。某慾心に耽り、御臺所を退去なさしめ、金銀寶物を掠取しと云れんも此上の無念に候へば、唯此儘に打捨候べし」とて、御代官木村次郎左衞門に城を渡し、日野を差てぞ急ぎける。扨手勢を悉く招き集め、專ら防戰の備を堅くす。人數凡そ千五百餘人と聞えし。

○三日の早天、光秀下知して、江州安土の城は信長公の居城なれば、早く取ずんば叶ふ可らずとて、明智左馬介光春を大將として、荒木山城守行重、同友之丞重仲、妻木主計頭範賢、四王天又兵衞政實、但馬守の長子今峯新助泰正、賴母長子三宅周防守業朝、式部長子等五千餘人、江州さして發向す。

座候やと、落人毎に尋れども、定かに是と聞定めたる事もなく、上を下へとかへしける。爰において安土の城の御留主代蒲生右兵衛太夫秀賢より、家人外池甚五左衛門を以て城下の町々へ觸聞せける樣は、「兩御所の御儀、惟任日向守が逆心によつて、今朝京都において御生害ましましたり。然りといへども當御城に於ては堅固成るべき間、城下の者ども騷動する事有る可らず」と、馬を乘廻て制しければ、此時町中一同に噇と聲を上げ、是は如何なる御事ぞや、父母の恩より猶深き大君を惟任が討奉り、早此世にはおはさぬとや、夢にあらずや現かと、老少男女聲々に泣悲む音巷に滿て、哀れ類はなかりけり。心なき下ざまだに斯く計思ひ參らする事なれば、右大臣家の御臺所は申すも中々愚なり、近習、小扈、家老、用人、末々の足輕、小者、奥の女中、女房達、御茶の間婢女に至る迄、暗夜に燈火を失ひしごとく、追泣する事限りなし。中にも御臺所は當城の安危無覺束思召し、蒲生秀賢が居城日野へ御退去あるべき由度々仰出されけれど、秀賢、「何條其儀に及び申すべき。只當城を枕とし防戰仕るべきに候」とて、樣々申止る所に、美濃尾張の諸士此騷動を聞と否や、取定たる事もなく、銘々妻子從類を引連て、思ひ〳〵に落行程に、剩へ今日二日の夜に入て山崎源太左衛門といふ侍、此騷動に心亂れしや、又は光秀に心を寄けらし、己が屋敷を自燒して、居城山崎へ引取ぬ。爰において秀賢又思慮を廻らし、かくの

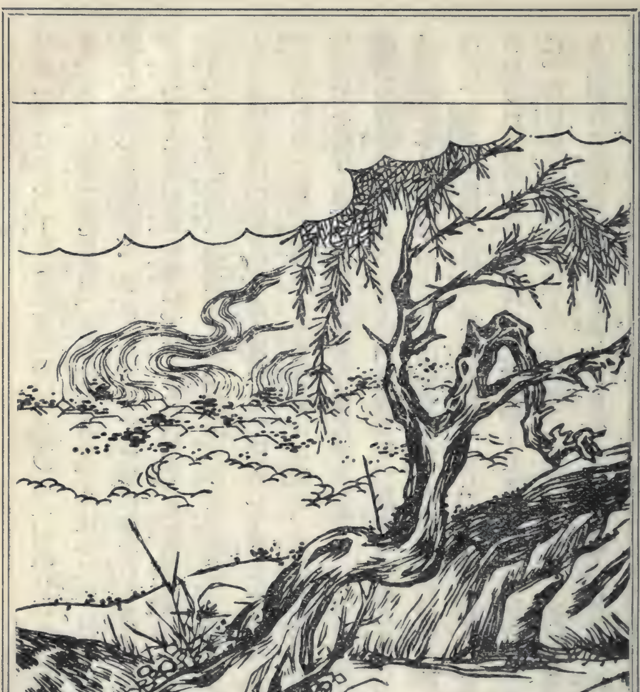
○六月二日後之日記

○二日の夜亥の刻過る頃、光秀藤田傳吾を近く召寄せ「我事繁くて大事の要を失念せり。汝早道の譽あるを以て、今度の使を申付るの間、かまへて仕損ずる事ある可らず。羽柴筑前守今西國に有て、毛利家の勇將吉川、小早川と對陣す。我毛利家と內應し、軍兵を指向け秀吉を挾み討んと思ふ。汝此內應の書翰を持て高松の陣所に至り、吉川、小早川の兩將に相達し、我心底を演舌すべし。必ず秀吉が兵に見咎められ、此計略を空しくする事有る可らず。是實に等閑の役儀に非ず。心を責て勤むべし」と彼書翰を渡しければ、藤田傳吾畏り、「某元來西國の街道よく覺え候へば、何條秀吉が兵士の見咎る事候はん。心易く思召候へ。頓て毛利家の吉左右申上げ奉るべし」と、右の書翰を懷にし、直に打立ち、飛ぶがごとくに驅行ける。

○同二日巳の刻に、安土の城下何となく風聞しけるは、惟任日向守叛逆を企て、大臣家御父子とも御生害ましますの由、取々に云ひはやらし、市中物騷しき事限なし。されども一大事の御事なれば恐れ愼み、何とも言葉には申出ざれども、そゞろに騷ぎ周章す。然るに未下剋に至て、落人追々馳來り、あわたゞしく城に入れば、市中彌敗亡し、こは何事の候てかやうに御

評じける。されば今日の爲體、禁廷近く刀刃を振りし事、其恐れなきにあらず、使者を奉りて天氣を伺ふべしとて、妙心寺の使僧に命じ、委細の口上を申含め、參內をこそ致させけれ。此時の傳奏難波中納言宗豊卿、光秀が口上を聞せ給ふに、彼使僧謹で言上しけるは、「今日惟任日向守光秀、本能寺及び二條の城に於て信長父子を討取り、軍勢殘ず妙心寺へ引退候旨、光秀參內仕り、天慮を窺ひ奉るべくの所、今日の合戰血をあやし、穢衣を恐れ、則妙心寺の役僧我々を以て奏聞奉る光秀が趣意は、信長武威に誇り民を憐まず、神明をさみし佛意に違ひ、神社佛閣を燒亡せしむる事、臣が詞を待ずして四海の內悉く是を知れり。光秀暫く信長が旗下に屬し有ると雖も、三代相恩の主と申すにてもなく、光秀は先祖清和の流裔にして、源賴光が後胤土佐美濃守光衡が末葉にて、數代朝廷の臣下なり。信長は平氏にして相國清盛の流れ、三位中將資盛の子孫、斯波武衞家の臣下なりしに、當時權勢を諸侯の上に震ひ、惡逆日々に盛んなれば、武門の風俗、天下の爲に光秀今日信長父子を誅し畢ぬ。伏て望らくは臣が赤心を鑒み給ひ、四方の征伐を許し給はゞ、不日して天下泰平を奏すべし」と謹んで奏聞すれば、難波中納言殿此旨委細執奏あり。「諸卿の詮議更に一決せず、先使僧は罷歸り、妙心寺に控ゆべし。跡より勅定の趣申達すべし」と仰渡されければ、兩人の使僧拜謝して退きける。

兵を一所に圍め、下立賣大宮の西の方妙心寺へ引取りけり。此時光秀は信長御父子を最易く討奉り、多念の怨一時に發き、大感斜ならず、今は心に懸る事もなく、自殺せばやと思ひ、佛殿に參じ良久しく禮拜し、辭世と思しくて一聯の句を自ら書す。此時側に居たる小僧、私に光秀が氣色をさとり、辭世の頌にや有んと思ひ、急ぎ比田帶刀、三宅式部兩人に此事を告ぐ。兩人大に驚き、明智左馬介、藤田傳五郎、竝川掃部之助等に相談し、是等五人の士光秀の前に來り、等しく申けるは、「往昔殷の湯王は、夏の臣として桀王を放ち、周の武王、殷の臣たれども紂王を征せられき。我朝蘇我馬子大臣崇峻帝を弑し、北條義時は後鳥羽院を流し奉り、和漢ともに無道の君を弑する事、是民の產業を保んずる英傑の志なり。然るに今御所存の樣を察し候に、御覺悟の程覺束なく候。就中武門のならひ、怨あるを殺し恩あるを惠む事、至剛智謀の勇士好で是を行ふ事に候はずや。此上は御身を全うして、あはれ都に旗を上げられ、諸國を征し天下をしづめ、萬民安全の御計策こそ肝要に候」と、樣々諫言なしける所へ、老臣等追々參じ、共に諫め申ければ、日向守も今はなすべきやうもなく、「其儀ならば一先政務を取行ふべし」と諾しけるに、諸臣安堵の思ひを成し、皆一統に悅びけり。光秀此時自殺せば、責ても事成るべきを、なまなかなる諫言にて死を止り、土民の手に命を落しけるは、淺ましかりき宿業かなと、外人は




土方次郎兵衛溺死の圖

て千貫の領地を賜ひ勤仕しけり。此折しも信長公の仰を蒙り、八幡に參籠し京に居合さず、日來の御厚恩忘れがたく、此度の御大事に洩たる事の本意なく、神明にも見離されけんと悲しみけるが、所詮叛賊光秀を一太刀恨み、刺違へて死する者ならば、此上の本望あらじと、其夜直に京都へはせ登り、齋藤内藏介に寄て仕官せん事を願ひ、日々光秀の見參に入らんと願ひけれども、松野が心底心得がたく、曾て以て對面せず。剰へ斬罪にも及ぶべきの沙汰有りければ、斯て敵の手に殺されなば此上の無念なりとて、腹十文字に掻切て、義の爲に命を落しぬ。今日の合戰に遁れ出て命を全うせし者は、織田源五郎長益、（信長公の令弟從四位下號正傳院有樂）山内修理之亮康豊のみなり。

去程に日向守光秀、今朝未明より本能寺及び二條の城を取圍み、信長公御父子を討奉るとて、鬨の聲鐵炮の音冷じく、禁廷は云ふに及ばず、洛中洛外の騒動大方ならず、男女老少東西に走り南北に吟ひ、こはいかにせん淺ましやと啼惑ふを、所司代を始めとし多くの役人下司、悉く二條に籠り、制し保ずる者もなく、上を下へとかへしける。中にも本能寺の末寺々々、宗派組合の寺々より、傳奏迄注進する事櫛の齒を引くが如し。されば何樣なる凶事の出來んも計がたしとて、内裏守護の官人、衞府の侍門々を固め、殿上には時の關白左右の大臣を始め參らせ、攝家淸華、月卿雲客、主上を守てぞおはしける。六月二日黃昏頃、光秀が軍勢一同に勝鬨を上げ、軍

六歳なり。此君未若年にましく〳〵けれども、武將の器備り給ひ、天命全く御座さば、あはれよき大將軍なるべきを、逆臣の爲に世を早うし給ふを、悼み歎かぬはなかりけり。信長公といひ信忠卿御父子、一時に滅亡なさしめつる光秀は、これ何者ぞや。倩是より後の形勢を考ふるに、天此天下を以て秀吉に賜ふなりけり。されば英雄豪傑蟻のごとくに集り、智に闘ひ勇に戰ふといへども、悉く志を得ず、中道にして亡びたり。理なるかな、秀吉匹夫より發り、終に天下を掌中に握る事、豈人間力を以て爲べき業ならんや。皆以て天の助に有らざるはなし。故に亡るも秀吉のために亡び、得るも又秀吉の爲に得るなり。是を以て宇宙の中に敢て敵なし。

○光秀軍勢宿二於妙心寺一

信忠卿の近士に土方治郎兵衛といふ者あり、白川の邊に宿り居たりけるが、遙に時移りて此騷動を聞大きに驚き、諸鐙を合せ一散に馳著けれども、此時日も黃昏に及び、二條の城既に落て敵一人もなかりければ、天を仰で長歎し、本丸の燒跡に至り、腹切て死たりける。又信長公の馬廻の士に松野平助と云ふ者あり、是は西美濃の住人安藤伊賀守が家來なりしに、伊賀守を追放の後、牢人して居たりしを、文武に達し淸白の士なる由信長兼て聞召ければ、改召出され




信忠卿生害の圖

法師丸を始め、女どもを早く退城せしめ、弟信雄、三七信孝及び柴田勝家、惟住長秀、羽柴秀吉、瀧川一益等を集め會し、光秀を追伐し、亡父並に我怨を報じ、死ての恨をはらすべし」と宣ふにぞ、玄以涙を流し謹んで命を領し、辛じて圍を出で、安土をさして急ぎける。信忠卿今は心易しと、鎌田五郎兵衛尉正次を召し、「我自害せば介錯して、我首を火中へ投入れ、かまへて敵に渡す事勿れ」といひすてゝ、鎧脱捨て大膚に成り、腹十文字に掻切て、「鎌田々々」と呼給へば、正次御後に太刀持側め、終に御首打落し、御遺言に任せ奉り、御首を火の中へ投入れ、其儘門前へ立出でて、敵一人なりとも討取て供養に備へ奉り、我も討死すべしと思ひけるが、いや〳〵よしなき罪作りて何かせん、只此儘に腹切て殉死すべしと、諸肌脱て自殺せんとせしが、また思ひ違て、敵と組で刺違て死すべきや、とやせまじかくや有らまじと身悶して有りける内、敵の軍勢追々本丸へ馳入て、殘る兵士を切廻れば、正次命や惜かりけん、井の中へ身を隱し、草を頂上に掩ひかけ、身を戰慄て居たりけるが、敵退いて後そこを這出で、何處ともなく遁行きしを、見る人聞く者、爪はじきして惡みけり。扨も城中の殘兵、村井父子を始とし、一人も生る者なく、或は敵と刺違へ、又は討れ死するもあり、上下の兵卒都合五百三十餘人、皆討死をしたりける。光秀方は手負死人千八百餘人に及び、其日の未の下剋、終に落城したりける。時に信忠卿御年二十

方の勇士等是に氣を得て、「すはや落城此時なり、進め〳〵」と乘込む程に、二の丸迄押詰たり。爰に大和國高取の城主越智玄蕃頭利之が弟に、小十郎利高といへる若者有り、信忠卿の御前へ進み出で、「味方の兵士過半討死し、殘兵皆勞れ候て賴なく見え候ふ。今は御運もかうとこそ覺候。某最期の一軍し、敵を防ぎ討死仕るべくにて候間、此隙に疾く〳〵御腹召れ候へ」と申けるに、信忠卿莞爾と笑ひ給ひ、「吾も左こそ思ひつれ」とて、持給へる薙刀血の附たるを推拭ひて、「汝若生を全うせば、永き世の筐とすべし」とて賜ければ、利高雙眼に涙をはら〳〵と流し押戴き、「扨しも御運の末こそ勞しく御座ましけれ。只今三途の川の瀬踏仕り、冥途の御供魁致し候はん」と云捨て、本丸の城戸押開き、大音にて申けるは、「我は是越智小十郎利高なり。命を此軍前に落し、君が恩に報ずるなり。光秀が弑逆、見よや十日の命は保まじ」と言終て大勢の中へ、面もふらず切て入り、蜻蛉がへし、水車手を碎き術を盡し、向ふ敵十七八騎薙落し、長刀の柄も折ければ、大太刀引きぬき當るを幸に切廻れば、利高一人に切立てられ、左右へぱつと退たりける。利高猶も進で切入りけるが、齋藤內藏介利三が侍野口又藏といへる强兵に出合ひ、終に討れて死たりける。生年二十一歲なり。あはれ大剛の武士と、諸卒擧て譽にける。信忠卿も今は角と思ひ給ひ、前田德善院玄以法印を召れ、「汝は命を全うし、いかにもして此圍を出で安土に至り、三

が力勝りけん、終に猪子が首を取り、味方の陣へ驅入たり。團平八郎は、光秀が軍兵の村雲立たる其中へ、おつと一聲叫で切り入り、西へ馳ぬけ東へ追ひ、七顚八倒して戰ふ有樣、天神の如く見えて、敢て近寄る兵なし。比田帶刀は光秀が身内にて、世に聞えたる强兵、打物取ては竝なき手利なれば、團が勇戰心にくしと、長刀掻込走寄り、聲を掛て渡り合ふ。團がたけつて突込鎗を、ひらり〳〵と二三度四五度匕ひ上げ、附入て腰の番を切放し、終に團を討止たり。かくのごとく名を得し兵、數多討取ると雖も、城中猶三百人の逞兵有りて、爾も義を金石よりも重くなし、命は塵芥より猶かろしと、思ひ固めし必死の勇士、今日を限りと防ぎ戰ふにぞ、惟任勢大軍なりといへども、尖き鋒先あしらひがたく、手負討死數を知らず、さしもの光秀、攻倦でぞ見えにける。時に明智左馬介光春下知して申けるは、「今日の戰、敵は小勢味方は大軍、一時に攻干す戰なるに、動れば味方の勢色を失ふ、是全く公威に恐れて、從兵近附得ずと覺えたり。爰に究竟の事こそあれ」とて、城より上一條の北に高貴の別業有り、此所は地形高く殿造大なれば、此城よりは高くありけり。左馬介、軍勢を此御殿の棟に上せ、本丸を目當に石弩火鉄を放ちければ、彼金城を打崩し、一同に噇と燃たりけり。其中へ弓鐵炮を夥敷く射込ければ、城兵等大に騒ぎ、防ぎ兼てぞ見えにける。按ずるに、此石火矢といへるは、所謂火箭を誤り記すなるべし。石弩火鉄の器たるや、物を燒く具に非ず。火箭は陣屋を燒の器なり。惟任

繪本太閤記　三篇巻之十

○中將信忠卿生害

世間何物最堪憎。蚤虱蚊蠅鼠賊僧。船脚車夫幷晩母。濕柴爆炭水油燈。是元の僧栢子庭、憎むべき物を題して作れる詩なり。惟任日向守光秀、其君信長公を本能寺に弑逆し、信忠卿を迫て同く害し奉らんとす。是や憎べき物の最上と云ふべし。二條の城の東手へ向し寄手は、村上和泉守清國、溝尾庄兵衛茂朝、山本入道山入、村越三十郎景則、波々加部權頭員次、同小太夫員之等一千餘人、ひた〳〵と攻寄り、外曲輪一重乘破り、勇み進んで揉たりける。此手を防ぐ勇士には、織田方に聞えたる猪子兵介、團平八郎、村井春長軒等、百餘人切て出で、必死に成て戰ひける。猪子兵介黒革にて威たる具足を著し、三尺四寸の太刀を打振り、敵を選ばず切立てしが、餘に強く戰ひて、鍔元より打折り、大手をひろげて驅廻り、鎧武者を引捕へ、人礫にぞ成したりける。光秀方村上和泉守が郎等神谷太兵衛房武と名乘り、手覺の者にや有りけん、是も刀を持ずして聲をかけ、兵助に無手と組附たり。扨上に成り下に成り、組づ轉づ捻合しが、神谷

繪本太閤記 三篇第十之卷 目錄

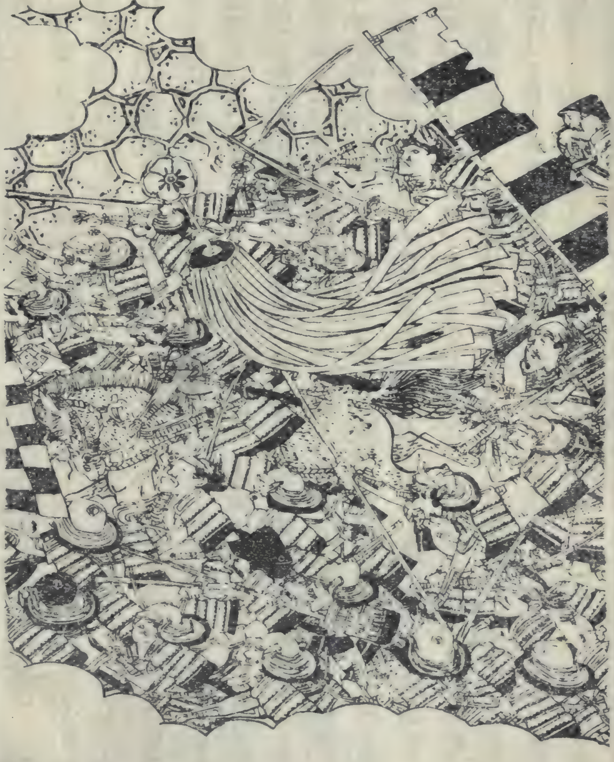
中將信忠卿生害
光秀軍勢宿於妙心寺
六月二日後之日記

を躍せて大音にて罵けるは、「勇々敷く候長龍殿、斯申すは光秀が股肱と頼れたる齋藤内藏介利之なり。軍に親疎の隔なし。一族ながら一太刀參らせん」とて切つてかゝるを、新五郎長龍大に怒り、「君を弑する叛賊に與する不當の惡人、一族とは穢はし。手並を見よや」と呼はつて、鎗を上げて突來る。雙方手垂の勇者、打ば流し突ば透し、暫く勝負も見えざりける。されども齋藤新五郎、今は戰力勞れ、內藏介が討込む太刀を受損じ、吹返際四寸計眼をかけて切附けられ、大事の手なれば、馬にもたまらず落る所を、內藏介が郎等、おさへて首を取りたりける。

ば、心は矢竹にはやれども、新手の大勢凌ぎ難く、城兵討るゝ者數を知らず、織田源三郎勝長、明智十郎右衛門光近と鎗を合せ、雙方祕術を盡し戰ひしが、勝長苛て眞一文字に突入る鎗を、光近透してかづき上げ、馬の首を横樣に薙けるに、馬驚きて主を大地へ刎落すを、光近手早く一突に突通し、首を取て差上たり。其外一族又十郎信次も、齋藤内藏介に討れ、宗徒の輩四十八人、上下百廿餘人討死し、光秀方にも手負死人三百餘人に及で、互に息を繼居たり。此時中將信忠卿、敵兵三十餘人薙刀にて切落し、淺手二ヶ所負給ひ、殿上へ引退き、暫休息し給ひける。此時信忠卿の近習の士に、齋藤新五郎長龍と云ふ者有り、前の美濃の大守齋藤龍興が弟なりしが、先年齋藤家滅亡の時、いまだ幼稚なれば、行末齋藤の家名をも相續させんとて、信長公能痛はり養育し給ひける。長人て忠義勇壯、衆に越たる武士なりければ、中將殿へ進ぜられ、彌君恩を重じ勤仕しける。今日天命を改るの期に臨んで、眞先に馬を驅出し、敵を討つ事數をしらず、退く心露計もなく、只切死ぞと覺悟して、惡戰する事數刻なり。されば中將信忠卿も城中へ引入れ給へ共、猶も進んで戰ふにぞ、惟任方比田七藏氏敎と名乘り、新五郎を討取んと、馬を駈寄せ鎗を合せ、飛違ひ馳ちがひ、死憤の勇を挑けるに、比田七藏終に叶はず、新五郎に討れける。是を見て惟任方の勇士、我討留んと進み來る其中に、白絲にて威たる鎧を著、十文字の鎗提げ、馬

明智治右衛門最期の圖





ぞ、討るゝ者數を知らず。惟任方小島三郎右衞門と渡し合ひ、祕術を盡て打合しが、數刻の合戰力勞れ、終に小島に討れける。菅谷九右衞門行淸も、同くいたく戰ひ、敵の侍大將藤田藤八郎を馬より下に切て落し、猶も進んで、四王天が組下の勇士相左吉と名乘り合ひて力戰せしが、是も左吉に討れける。毛利新助は惟任勢杉生三右衞門と戰ひ、相討に成て討死し、其外勇士强卒八十六人戰死すれば、惟任方にも今峯賴母、中澤造酒之助、加成淸治郎等百餘人討死す。大將信忠卿も最期の思ひ出、花々しき軍せんとて、緋威の鎧に龍頭の甲の緒をしめ、薙刀追取り、眞先に馬を躍らせ驅出給へば、城兵誰か猶豫すべき、織田源三郎勝長、又十郎信次、九郎次郎、勘七郎、小藤治を始とし、侍大將越智十郎利高二百餘人、我劣じと走出で、縱横に切廻れば、光秀方是を見て、「中將殿の討出給ふぞ。我討止て高名に備へん」とて、明智十郎右衞門光近、柴田源左衞門勝定、齋藤内藏介利之等、不當の勇兵五百餘人、切先を竝べ追取卷て戰ふ程に、兩軍互に今日を限と思ひ定めし軍なれば、斬ども突ども痿ばこそ、千騎が百騎、百騎が十騎に成る迄も引退かじと、追出し追返し、討つ討れつ戰ひしは、烈しかりける次第なり。されども城兵必死と覺期の鋒先に、さしも勇みし惟任勢、四途路に成て見えければ、三宅藤兵衞、松田太郎左衞門、加治岩見守、三牧勘兵衞等、六百餘人の新手を以て、城兵の横合より無二無三に突崩せ

出鐵炮一つ、大將治右衞門が胸板を打拔き、大事の手なればしばしもたまらず、馬より逆しまにどうど落る。是を見て城中より一同に鯨波を作り、福富平左衞門、萱谷九右衞門、毛利新助、平野勘右衞門、小澤六三郎、逆川甚五郎、同甚六郎等二百餘人、鉾先を竝べ眞一文字に切て出で、電光のごとく斬立れば、惟任方大將を討れぬる上は、何かは暫しもたまるべき、四角八方に切崩され、大將治右衞門を肩に引きかけ、散々に成りて迯たりける。城兵勝に乘て切廻れば、討る者二百餘人、手負の者數を知らず。惣大將光秀、治右衞門が打れたるを見て大きに驚き、急に四王天但馬守に命じて先手の將を代らしむ。爰において四王天但馬守政孝、手勢三百餘人、其外惟任方の侍大將今峯賴母光之、尾石忠武、藤田藤八郎武政、中澤造酒之助知元、是等の手勢八百餘人、大波の寄るごとく、噇と喚て討てかゝる。大將四王天鞍笠に立上り、「黑心味方の有樣かな。敵を味方に合すれば九牛が一毛、何恐しとて進ざるぞ。先我手並を手本にせよ」と、鎗を上げて突入ければ、總軍おくれまじと勇進み、勝誇りたる城兵と、討つ討れつ、鎬を削り鍔を破り、火を散してぞ戰ひける。雙方知たる敵なれば、迯て恥を殘さじと、踏込々々喚き叫ぶ其聲は山川に響き、大地も裂る計なり。福富平左衞門は、けふを一世の大事ぞと、大刀眞向にさしかざし、向ふ敵を嫌なく、竪に切居ゑ横に薙伏せ、刃も柄も折る迄と嚴しく當て戰ふに

そ叛臣光秀が爲に弑逆せられ給ふとも、御一族數多所々におはします事なれば、日あらずして逆臣退治有るべき事治定せり。今病を凌ぎ城中にて死給んより、病疾平愈の時を待て、叛逆人光秀誅伐の忠勤を勵み給はんは、いか計兩君の嬉しく思し給ふらん」とてさま〴〵に賺しとゞめ、「御名代には、不肖に候へ共小臣城中へ罷越し、防戰して中將殿の御供仕らん」と云ひすてて、鎧を取て肩に打かけ、一參に二條の城へ馳入り、しか〴〵の由を言上しければ、信忠卿大に感悦まし〳〵、手自御長刀を賜り、「忠戰を期せよ」と仰せ給ふ。又右衛門は、陪臣の身の面目此上の有るべきやと、押戴き〳〵、敵寄來よと待かけたり。去程に惟任日向守光秀が三手の惣勢、都合一萬五千餘人、同日午の剋二條の城に押寄せ、三方より引裹み、鯨波を擧たりけり。城中兼て必死と期したれば、鬨を合すに及ばよこそ、懸並べたる弓鐵炮、雨のごとく釣瓶放ち、嚴敷防戰したりければ、寄手の大軍矢玉に打れ、死傷の者數をしらず、進みかねて見えたりける。大手の大將明智治右衛門光忠大に怒り、「言甲斐なき者どもが行跡哉。左計の信長公も唯一時に討取しぞ。中將殿の分際何程の事か有らん。元來此城は光秀の繩張にて築れし物なれば、つまりつまりの要害我是を能知たり。乘落すにたよりあり。進めや者ども、續けや續け」と呼て、自眞先に馬を駈出せば、此下知に勵まされ、惣軍色を直して我劣じと進し所に、城中より雨霰と打

形勢にて、京中に充滿しければ、是に勇氣や呑れけん、洛中にて鬪んといふ者なく、安土か岐阜か兩城へ御引有て、諸方の謀臣勇士を召れ、重て義旗を擧らるべしと申す者計なり。信忠卿仰けるは「光秀かく迄根深き大逆を企る程の者が、知行所坂本及び宇治、瀬田其外の村々里々に、兵を分て固めざる事や有るべき。慭に安土へ引んとて路上に漂流し、雜兵賤子の手にかゝらば、未來永々の恥辱なり。唯此地に有りて戰死せんこそ本意ならめ」と宣ひけるは、誠に武門の棟梁と成り給ふべき器量なりと、諸軍感稱し奉り、斯より引かへし、三條の城へ入らせ給ふ。

諸方より馳集りし軍兵ども、此儀然るべからずとや思ひけん、又は光秀にや與したりけん、心心に落行て、名を惜み義を重んずる勇士等纔に八百餘人籠城し、各持口々々を固め、門々を押開き、弓鐵砲を備へ、討死と覺悟を定め、光秀遲しと待かけたり。爰に尾州の住人信忠卿の御家人に、梶原左衛門尉が嫡子松千代十三歲、御供に參じて在京せしに、きのふより暑邪に侵され、大熱燒が如く、町宿に有て消息せり。然るに今朝本能寺竝に二條の城の有樣を聞き、家子梶原又右衛門を招き申けるは、「我此頃病に臥して立つ事不叶、徒に此所にて詠居らんも口惜き次第ならずや。汝我を背に負て二條の御前に連行べし。合戰こそならずとも、敵の刃に死して君の御供申さん」といふ。又右衛門雙眼に涙を浮め、「仰さる事に候へども、右大臣御父子こ

に仕へ、祿八百石を領しけるに、程なく面に腫物を發し、漸々腫滿て痛み凌ぎがたく、源右衛門是を怒て、自裁して死たりける。

○惟任光秀圍二條城

三位中將信忠卿は、二條の城に宿り給ひしが、光秀叛逆を企て本能寺を取圍み、攻討つ事急なりと聞せ給ひ、甚驚き、後詰して父を救ひ奉らんと、有合ふ軍兵五百餘人を引率し、馬に鞭を打馳給ふに、落武者三騎馳來り、御馬の前に蹲居り涙を流して、「本能寺早落居し、右大臣既に薨去ならせたまひぬ」と言上す。信忠卿彌驚き、遙に本能寺の方を見給へば、實にも左ありと知られて、猛煙空中に迸散せり。中將心忙しく、いかゞはせんと思慮を廻らし給ふ所に、所司代村井長門守、同父春長軒、同作右衛門尉等馳せ來りて申けるは、「右府既に生害まし〳〵、今は彼所に向ひ給ふとも其甲斐なかるべし。途中にて不慮の交戰利有る可らず。一先要害に引籠り、おくれ馳の軍勢をも待揃へて一戰有るべし」と申す所に、妙覺寺に宿り給ふ織田源三郎勝長、同又十郎長利、一族九郎次郎、同勘七郎、同小藤治、猪子兵介、村井が從兵別宿の諸士等追々に聚り、上下七千餘人に成りにける。然れ共此時信長公も生害まし〳〵、光秀が軍勢利刀の竹を破

の仇を報じたるも猶かくのごとし。況やこれは叛逆なり。足下光秀に忠あらば、唯此首は深く隠し、需れどもなしと言はんこそ、せめて光秀殿の罪を輕くする者ならんか。足下よく〳〵思慮を加へて誤る事なかれ」と云ふ。竝河金右衛門是を聞大に感じ、是に隨ひ、御首は深くかくし、後阿彌陀寺の面譽上人に計て御首を密に葬り、追福作善懇に執行ひける。左馬介が深慮、有難しとぞ云ひはやしける。扨も惟任が軍兵面々「右大臣の御首を需攫せども曾て見えず」と申すにより、光秀大に苦しみ、齋藤内藏介利三を以て再御首を攫さしむ。左馬介密に齋藤を招き、御首を隠せし次第詳に物語り、「只いつ迄も需得ずとて止べし」と云ふ。内藏介も此儀に同じ、相計て彼燒殘りたる白綾の片袖を持て光秀に捧げ、「御首は需め得ずといへども、右大臣の常衣の片袖血に染て火中に有りしは、御生害疑ひなく覺え候。さしも武將の御首なれば、近士小姓の輩、いかに失ひ侍りつらん、骸骨をさへ見當らず候」と申す。爰において光秀始めて心を安んじ、且かの御衣を取りさま〴〵に悪言し、終に短刀を以て段々に斬裂たり。内藏介是を見て、左馬介が遠慮のたがはざるを密に感じぬ。此合戰に信長公を突留奉りし安田作兵衛は、蘭丸が爲に重疵を負ひ、久しく引籠居たりしが、秀吉天下の主と成り給ひて、安田が信長公を仕留たりしを悪み給ふにより、名を天野源右衛門と改め、潜み隠れて居たりけるが、遙後、九州の諸侯

去程に本能寺の御座の御殿は、黒烟空に靉靆き、火炎天を突て燃上りければ、織田の從卒一人も殘らず討死し、惟任方の勇士、我も〳〵と烟の内へ馳入て、信長公の御首を取らんとす。其中に並河金右衛門一番に進み入り、炎を踏で御座所へ飛込み、終に信長公の御首を、白綾の御衣の片袖燒殘りたるに押包み、左馬介光春が前に差出す。光春手に取て是を見るに、まがふべくもあらぬ右大臣の御首にて有ければ、並河を密に招き申すやう、「足下信長公の御首を得たりしは、今日の高名隨一なり。我私に思ふ仔細あれば、貴殿の高名と倶に、此御首を隱し申さばやとこそ思ひ侍れ。其譯は、主人光秀深く信長公を恨みまゐらせ、謀叛を企て、終に今日の合戰、鬼神と呼れ給ひし大將をかくの如く討ち奉る事、久しき恨を報ずるに足れり。此御首を光秀の見參に入れなば、憤怒に堪かね、首に向うて惡言し、或は鞭打或は足を以て踏に至らん。天豈是を惡まざらんや。昔唐土戰國の時、楚の臣伍奢といふ者楚王に殺さる。其子伍子胥逃去て吳に仕へ、終に吳の兵を起し、楚を伐て勝利を得、古主君平王の墓を掘て、其屍を鞭打つ事三百。伍子胥が友申包胥といふ者、伍子胥を諫めて、子が讎を報ふ事甚しき哉、人衆き時は天に勝つ、天定つて又能人を破る、子舊平王の臣下なりしが、今其屍を鞭打つ事かくの如し、豈其天道極なからんや、と云ひけるが、後果して伍子胥、讒言の爲に吳王より劍を賜ひ、終に自頸て死す。父

七千萬歲、慈尊出世の曉を期す。今此時に至て斷絕せん事、悲しむべき事ならずや。信長が強惡、人力を以て動すべからず。所詮眞言祕密の大法を修し信長が命を斷ん」と、山上の老若一味同心して、肝膽を碎き祈けるに、護摩のけぶりのうちに信長が姿血にそみてあらはれ出で、修法中さま〴〵の靈驗有て、三七日の滿ずる日、是則天正十年六月二日に當りて、惟任が爲に弑逆せられ給ひけるこそ、身の毛も彌立て恐しき。又日蓮宗の不傳坊、誅に及んで信長公を恨みまゐらせ、百日の内に思ひしらせんと云ひし詞にも違はで、斯る大變にかゝり給ひしも不測なりとて、此ごろの人民、佛罰のしからしむる所ならんと私言けらし。さる事の有きあらぬは知らざれども、信長公の生得、剛勇にして狐疑深く、敵國の兵とさへ云へば、悉く皆切盡さでは叶はざるやうに御座ける。夫國家を治るは民を本とし、士を撫て孝弟を重んじ、忠臣烈婦を賞し給ひてこそ、萬民慕ひ集り國治り、天下泰平を謠ふべし。されば孟子も、人を殺すを嗜ざる者、能天下を一にせんと宣ひぬるに、信長公は荒々しく情なき事のみ多く御座せし故、叛逆人の爲に討れ給ふらんとぞおぼえ侍る。

○明智左馬介遠慮


信長公土鼠木馬を愛給ふ圖



夢させ給ふに、唯々深き御愼の由を申上ぐる。今において此御夢のさまを考ふるに、將に惟任が叛逆に相應ぜり。信長公は天文三年甲午の御誕生、光秀が生れ年は享祿元年戊子にして、今年五十五歳なり。土の鼠木の馬を喰ひし事、又現に的當せり。昔三國の時、魏の曹操が夢に、三疋の馬等しく喰ふと見て、馬超父子が叛心を知り、終に是を誅戮す。其後に三馬同く喰ふ夢を見る。是司馬中達が叛心に應ぜり。然れども曹操是を悟らず、終に司馬氏のために天下を失へり。君子の身における吉凶禍福、悉く前象あり。愼まずんば有るべからず。爰に又不測の事有りけるは、此頃高野山に事の仔細有りて、泉州堺の代官松井友閑法印より、武士三十餘人登山し、戸障子を蹴破り、器物を踏碎き、古老碩學を打擲し、さま〴〵狼藉に及びければ、一山會合して僉議しけるは、「抑當山開闢有りて以來、斯る例はいまだ聞ず。暴惡無道のふるまひ、一々誅せずんば叶まじ」と評定して、彼二十餘人の武士どもを欺きて、方々の寺へ分ち招き、酒食をもて厚く饗應す。武士等何の心得もなく、思ふ儘に飲食す。此時一山の衆徒一同に押寄せ、一人も殘さず討殺せり。信長公此旨聞召され、大に怒り憤り給ひ、高野山を攻亡すべしとて、彼山の四方に向城を築き、兵粮を數多籠させ、追々軍勢罷向ひ、不日に攻討ち、比叡山の如く一時に燒盡すべしと、其手配最中なり。依之滿山の衆徒大きに驚き、「大師の慈法は五十六億

衞走寄て首を取りたり。信長公は奥深く入らせ給ひ、殿中に火を放ち、其中にて御生害まし〳〵ける。御年四十九歳なり。嗚呼悲き哉、今日はいかなる日ぞや。去時天文年中より今天正十年迄、四海の内に横行し、武威をもて天下の兵亂を切鎮め、民を塗炭の中に救ひ、四方の敵國其英名を鬼神のごとく恐振ひ、正二位右大臣に昇進し、大業既に成就せしを、逆臣惟任が爲に弑せられ給ひしこそ、口惜かりし次第なり。御側に在合ふ近士、小姓、御尊骸に燒草を蔽ひ火をかけて、皆腹十文字に搔切て、倶に火中に亡びけり。此時猶討殘されたる御所方の侍九十餘人、挑み戰ひ居たりしに、奥殿より火燃出で、炎天に貫きければ、今は信長公の御生害を察し、誰が爲に罪を作らんとて、敵と組では刺違へ、討合ひては命を落し、一人も殘りなく皆討死を遂たりける。

○信長公凶夢

人道下に悖れば、效驗天に見る。陰謀有るといへども、神その情を照し、象を垂れ、戒を見して以て人君に告といへり。今年正月朔日の夜、安土において信長公の御夢に、土の鼠と木の馬と戰ひ、終に鼠馬の腹を喰破りしかば、其馬忽に死けりと見給へり。信長公陰陽頭を召し、圖

て、信長公の御蔭ありく〳〵と映りたり。安田蔭を目當とし、鐵壁も通れと障子越に突とほせば、何かは知らず手答し鎗先動くに、中りたりと思ひ、障子蹴破りかけ入る所を、後より雷の落懸る如く「森蘭丸を見知りたるか」と、鎗を上げて突く所を、安田作兵衛足踏直し、心得たりと鎗打合せ戰うたり。安田は明智が股肱の勇士、蘭丸は織田の逸物、龍と踊り虎と駈り、上中下段、透間なく飛違うて戰ひしは、烈かりける形勢なり。蘭丸其日の出立には、緇梅に鶴の丸を白く染め殘したる素袍を著、太刀計を帶したり。時に生年二十二歲。安田は思ひ設けし戰なれば、黑皮の具足に、肩草摺を白絲にて威たるを著たりける。安田作兵衛も聞ゆる剛勇の若者なれど、蘭丸が必死の戰に、始終叶べくも覺えざれば、心中に是を感じ、右へ流し左へ拂ひ、少し進んで大に退き、軍になれたる場數の功者、次第々々に緣側迄引行くを、蘭丸苛て只一突と、大喝一聲喚て突を、作兵衛心得、後飛に大庭に飛だりしが、誤つて切石を疊み上げたる雨垂落の溝の中、鎗持ながら眞仰向にぞ倒れたり。蘭丸得たり賢しと、緣端に走出で、下突に突通す。安田溝の中に身屈まり、草摺の間より陽根を半突切り、兩股を骨へかけ鎗先ぬけて、敷石にかつしと當る。安田其柄をしつかと取り、上より引く勢に引起され、其儘佩刀を引拔て、片手なぐりに拂ひければ、素肌の蘭丸兩足を切落され、哀むべし大剛の勇士、枯木を倒す如くどうど轉ぶを、四王天又兵

とく」と下知し給ひ、かの女房が持來りし十文字の鎗おつ取り、自寄來る敵に向ひ、十六歳の昔より鍛練有し鉾先に、またゝく內に十五六騎ばた〳〵と突貫れ、敢て近寄る者もなし。時に最前御鎗を捧し女房は、於能の方とて女に稀なる勇婦なりしが、倶に冥途の御供せんと、二重の鉢卷綾にて結び流し、花田色の玉だすきをりゝしく引しめ、白柄の長刀搔込で廣庭に走出で、當る敵をきらひなく匕ひ倒し薙落し、暫く挑み戰ひしが、山本三右衞門に渡合ひ、腰の番を突通され、終に討死したりける。右大臣信長公は、御勢盛に喚き叫んで戰ひ給ふに、餘り強く當り給ひ、左の臂をしたゝかに突せ、御働自由ならず、既に危く見えさせ給ふ。蘭丸は惟任方の勇士四王天、箕浦等と戰ひながら大音にて、「千金の弩は鼷鼠の爲に發せず、手づからの御戰は勿體なくこそ候へ。はや〳〵御入あるべし」と呼はり捨て、向ふ敵を追ひまくり、御生害の妨を防んと惡戰する事、諸人の耳目を驚かせり。信長公は蘭丸が諫に隨ひ、御自害をや期せられけん、奧の間さして引給ふを、最前より透を見合せ伺ひ居たる安田作兵衞、「信長公かへさせ給へ」と聲をかけ、鎗を上げて追奉る。蘭丸是を聞て、こは口惜き事哉、御生害の際心元なしと、當の敵を打捨て、苦しげに乙と喚で走寄り、「安田作兵衞止れ」とこそは聲かけたり。此時信長公は戰を好み給はず、聞捨にして一間に入らせ給ひ、早く障子を引立て給ふに、此時猶殘燈消ずし


信長公
自ら



ば、知らぬ振にて進み行く。山本三右衛門は安田、箕浦等と一所に門へ入らんとせしが、味方の勢に隔られ、容易も進み得ず。斯ては人に功を奪るべしと、大門を七八間南の方へ退き、溝際に立寄り、其所に立ちたる足輕の肩に手をかけ、「其儘にて能立堪へよ」と、鎗を右にて力杖につき、ゑいと一はね高塀に飛上る。著たる具足は小櫻縅、大袖小袖草摺のひらり〳〵ときらめくは、蝶鳥なんどの戯れ遊ぶ如くにて、實に一興の見物やと、賞讃の聲暫しは鳴も止ざりける。されば寄手三千人、安田、山本が功名に、雙ぶ者こそなかりける。扨塀よりも早く飛下り、是も信長公に馳合せんと進入るに、彼信長公の近臣高橋虎松、大太刀を眞向にかざし、人なき所を行く如く、切立て薙立て來る所に、山本三右衛門と端なく行合ひ、互に名乘て切結ぶ。虎松剛勇の壯者なれど、數刻の戰手疵數多負ぬれば、働く事心に任せず、終に山本に討れける。此時信長公は、廣縁の際迄進み出給ひ、猶も弓射給ひしに、武運も既に盡給ふらん、弦段々に切て飛散ければ、弓矢投捨て、大音にて鎗を召す。はつと唯へて奥殿より、辻が花の衣著たる三十計の女房、鎌十文字の鎗を取て信長公に奉る。信長公是を御覽じ、「長谷川宗仁や在る」と召るに、頓て御前に參じ命を待つ。信長公仰せけるは、「汝は武士に非ざれば、敵も又是を殺さじ。女原を悉く召連れ、今の間に早く落行くべし。信長が最期に、女を連たりと云はれんも此上の無念なり。早疾

繪本太閤記　三篇卷之九

○織田右大臣御生害

其食を喰む者は、其器を毀はず、其樹に蔭するものは、其枝を折らず。其器をそこなひ、其枝を折るは、自ら禍を需るなり。此時光秀、本能寺に迫つて信長公を苦しめ奉り、早く御首を見んと、將士に令し攻討し、是將に己が身を攻討に異ならず。安田作兵衞、眞先に進で門内に馳入り、仕黑む味方を横樣に押通り、信長公の御首を賜らんと馳行くに、此時寺中合戰眞最中と見えて、一進一退離散聚合し、或は討或は討れ、寄手は大軍入替へ〳〵戰へ共、御所方には續く新手もあらばこそ、御勢大半討死し、今は僅に百四五十騎に討なされ、重手薄手負ざる者なく、剩へ素肌なれば、袖を切捨て裸に成り、堅甲利兵の大軍を防ぎ戰ひ、流るゝ汗と涌出る血汐は、から紅に水くゞる、龍田川の楓葉の、ひぢて流るゝごとくなり。此時御所方の勇士高橋虎松と名乘り、三尺九寸の大太刀を打振て臺所口より踊出で、群る寄手を五段三段に切開き、勇をふるうて血戰す。安田作兵衞、此體を見るといへ共、信長公に近附寄り一鎗まゐらせんと思ひけれ

繪本太閤記 三篇第九之卷 目錄

織田右大臣御生害
信長公凶夢
明智左馬介遠慮
惟任光秀圍宝町城

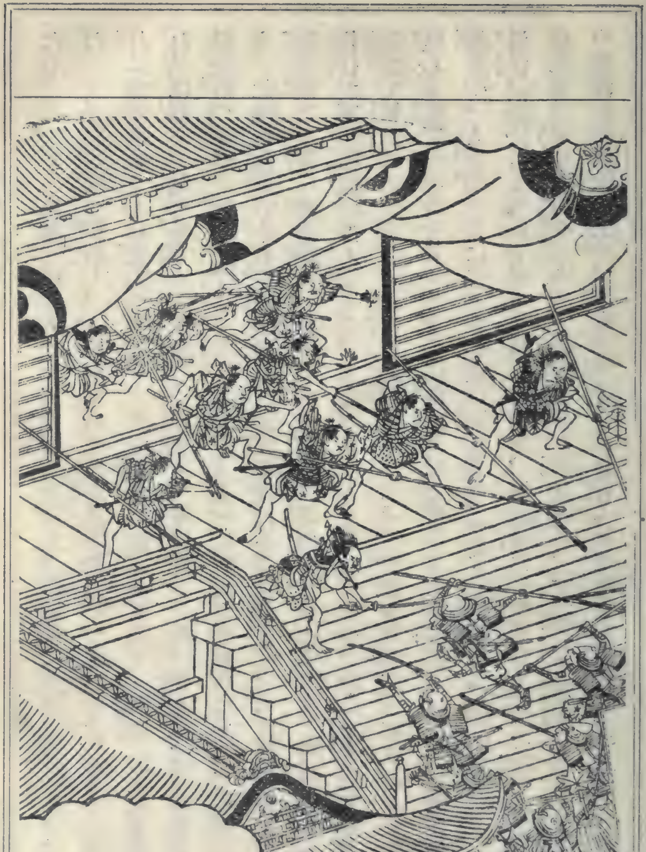
とて、母衣の武者稲次萬五郎を以て明智左馬介へ云せけるは、「今日の合戰、尤遲々す可らざる大事の軍にて候。時刻は早巳の剋に候へば、早く信長の御印を見たく候。今日の動功只此一事に候間、速に御印を揚げ、日向守が心を快くなさしむべし」と云ふ。左馬介承り、「只今勝鬨を以て見參に入れ申すべし」と答ふ。稲次萬五郎、「潔く候」と、聲を殘して馬を引かへし、光秀にかくと訴ふ。光秀顔色快然として、長息つぎて居たりける。明智左馬介あたりを屹と見て、「惣大將光秀の御下知あり、誰か早く信長公の御首を申し賜るべきや」安田作兵衛、箕浦大内藏、古川九兵衛、山本三右衛門等しく進んで、「我々御印を擧申すべし」と云捨て、門内へこそ進みける。

人の弟が討死を見るといへども、信長公の御前を去らずして、寄來る敵を薙倒し、漸時を移しける。此間に信長公の小扈、近習、馬廻、殘少なく討死し、御前に敵を支ふる輩には、小川愛平、金森義入、狩野又九郎、伊藤彥六、久々利龜松、柏原鍋三郎、針阿彌、森蘭丸等、雜兵僅に三十餘人、皆總身は朱に染み、血をすゝつて咽をうるほし、刃をふるうて向ふ有樣、是や修羅道の苦みならんと、見るもいぶせき次第なり。其外討殘されし雜兵、爰に群れ彼所に群れ、死を爭うて戰ひける。光秀が旗本の家臣木村治郎左衞門、村井又兵衞と名乘り、信長公を討奉らんと、一文字に進み來る。此時信長公、猶矢を放ち防ぎ給ひけるが、是を御覽じ、村井を目當に射かけ給ふ手練の大矢、胸板にはつしと的り、緣側より眞逆にどうと落て生死を知らず。木村治郎左衞門是にも恐れず、鎗を上げて突來るを、信長公大眼にて活と白眼み、「無禮なり。すざれやつ」と御聲烈しく、弓にてはたと打給へば、威勢にや恐れけん、同じく緣より落たりけり。此木村治郎左衞門は、丹州桑田郡山本村の者なりしが、軍散じて後、山本村へ歸り保養すれども、弓にて打れし跡方のごとく腫痛み、終に空しく成りけるとぞ。かくのごとく挑み戰ふ程に、本能寺の軍兵思ひの外に強くして、早時も巳の上刻に成りければ、光秀は三條堀川の本陣に在て大に苛ち、此戰午の剋を過ぎなば、諸方の後詰覺束なし、夜に入りては猶々味方の大事なり

去程に寺内へ入込し寄手の兵等、此騒動に戰ひゆるみ、跡すざりして見えけるを、最前より信長公の御側にて息繼居たりし森蘭丸、十文字の鎗打振り、おつと喚て突出れば、坊丸、力丸、同く鑓を追取て蘭丸が左右にならび、鎗脇をたすけ戰ふに、金森義入、薄田與五郎、大塚彌三郎、同又市、平尾平介、魚住勝七、小川愛平、落合小八郎、山田彌太郎、今川孫治郎等、數剋戰ひ手疵數多負ぬれど、蘭丸が勇氣に勵され、のつたる太刀を踏直し、再び敵を追ひまくれば、惟任方の勇士四王天但馬守、同又兵衞、船木八之丞、村上和泉守、妻木主計頭、三宅式部、進士六郎太夫を始とし、陪臣輕卒に至るまで、喚き叫で攻けるは、磯打つ波の寄るごとく、夥しくも中々にいはん方こそなかりける。蘭丸八方に眼を配り、弱き味方は是を助け、進退出沒所を定めず、一向信長公の前面を突甘げんと戰へば、四王天又兵衞、蘭丸が勇戰心にくしと、鎗取のべて投突に飛入らんとする所を、「森力丸是にあり」と、「三尺餘の太刀打振り、四王天に討てかゝる。又兵衞は蘭丸を討取んと進みしに、力丸に支へられ心怒り、雷の落かゝるごとく喚きて力丸に渡合ひしが、力丸此勇勢に叶ひがたく、刀法亂れて見えけるにぞ、弟坊丸是を見て、當の敵を討捨て横鎗に突かゝれば、又兵衞猶々勇をふるひ、二人を相手に戰ひしが、力丸を一鎗に突伏たり。坊丸叫つて突入るを、惟任方の兵士數多かけ附け、中に取込切取たり。蘭丸は二

六十餘人、驚きながら三人を中に取圍め、四方より討て懸るを、右にあたり左に支へ、目たゝく内に十七八騎、算を亂して切倒せば、惟任勢大に驚き騒ぎ、「織田の軍卒、味方の勢に紛れ居るぞ。由斷して不覺を取るな」と、上を下へと周章す。左馬介大に怒り、「安田作兵衛はなきか。箕浦大内藏は有合さぬか。古川九兵衞、山本三左衞門、各出合ひ彼等を討止め、味方の騒動を鎭めよ」と、頻て下知を成したりける。此四人は光秀が旗本の勇士にて、二王四天と呼れ、いつも戰場にて目ざましき高名し、人の批判を蒙らざる一人當千の若者にて、光秀が手覺ある股肱なれば、左馬介に差添へ、信長公を討漏すまじき兼の軍配なり。左ある手強き兵共なれば、左馬介が下知を受け、爭か暫しも猶豫すべき。安田作兵衞一番に進出で、向を屹と見て有れば、湯淺甚助、小倉松壽丸、中尾源太郎三人、群る敵を事ともせず、東西へ切散し南北へ追まくり、一道の血路を開き、左馬介が旗本へ一文字に切入つたり。安田作兵衞、「惡き敵の行跡かな。いで物見せん」と、大身の鎗を打振て中尾源太郎に渡り合ひ、暫戰ふと見えたりしが、安田が勇威ますます盛んに、源太郎が綿噛を只一突に突通し、走り寄て首を取る。此間に箕浦、古川、山本等の勇士、湯淺甚助、小倉松壽丸と渡り合ひ、猛虎飛熊の戰ふ如く、飛違へ馳違ひ、暫が程討合しが、甚助、松壽丸勇なりといへども、最前より數多の戰に力勞れ、終に爰にて討れけり。

たり。藁地甚九郎續て馳寄り、太郎左衞門が肩先より袈裟にかけて討放すを、矢代勝介、手負たる孫十郎を向へ蹴倒し、太刀を引ぬき藁地甚九郎に切つて懸り、火をちらして戰ひけるが、相打に成て兩人ともに死したりけり。是を討死のはじめとして、刺違へて死するもあり、或は討れ又は討ち、敵も味方も勵みあひ、生死を一擧に爭ひける。伴正林、村田吉吾さん〴〵に戰ひ、敵を討つ事數を知らず、太刀も刀も打折て、正林は四王天又兵衞に討れ、吉吾は亂軍の中に切死す。此時信長公の小姓小倉松壽丸、湯淺甚助、中尾源太郎三人は、町屋に宿しありけるが、此騷動を聞て甲冑に身を固め、打連てかけ來り、君の安否も心元なく、寺内へ入らんと思へども、惟任が軍勢雲霞の如く集りて、入るべきやうもなかりける。時に寄手の大將左馬介光春、采配振立て鞍笠にのび上り、大音に下知しけるは、「言甲斐なき者共の有樣哉。信長に矢を射させな。嚴しく寄て刃を合せよ。此寺中に滿餘りたる勢なりとも、素肌の兵士、何程の事有らん。進めや進めや」と下知するにぞ、寄手是に勵まされ、一同に鬨を作り、潮のごとく寄たりける。小倉、湯淺、中尾の三人、此下知を門外にて聞き、扨は未だ主君恙なく、矢を放ち給ふと覺えたり、當手の大將は明智左馬介なるぞ、近寄て切り殺さんと、三人等しく走寄り、「小倉松壽丸、湯淺甚助、中尾源太郎冥途の土產、討死の供せよ」と呼り、拔連れて左馬介に切てかゝるを、左馬介が從兵



本能寺合戰の圖



川愛平、金森義入、魚住庄七、今川孫治郎、狩野又九郎、薄田與五郎、落合小八郎、伊藤彦六、久々利龜松、山田彌太郎、飯川宮松、柏原鍋丸、祖父江孫丸、大塚彌惣、馬廻りには大塚又一郎、平尾平介、針阿彌等五十餘人、切先をつらね鉾先を竝べ、君恥かしめらるゝ時にすら臣は死するの道なるに、是は譜代重恩の主君御討死の御供なれば、誰か恩義に勇ざらん、切ども突ども厭ばこそ、命は塵芥の如く、義の重き事盤石に等しく、群る敵を入立てじと、鍔を破り鎬を削り、流るゝ汗瀧津瀬をなし、血は飛で衣を浸し、喚叫んで戰ひしは、冷まじかりき形勢なり。中にも矢代勝助興之、惟任方三宅孫十郎と鎗を合せ、稻妻のごとく突合ける。此矢代勝助は奥州の住人にて、竝びなき馬術の上手なりければ、頃日信長公の召に應じ御供に加り、譜代の者にもあらざりけり。されども義にいさめる勇夫のならひ、一足も引かずして必死に成て戰ふにぞ、伴太郎左衞門、同正林、村田吉吾等聲をかけ「勝助は他人に異なり、討死するに及ぶまじ。落よ〳〵」と呼はれども、耳にも更に聞入ず、踏込み〳〵戰ひしが、三宅孫十郎が鎗の穗先三尺計打折たり。いざ組んと大手を廣け立向へば、勝介も鑓投捨て、引組で撚合しが、此時伴太郎左衞門は、藁地甚九郎と切先より火を出して戰ひけるが、勝介を助んと、甚九郎が切込む太刀を右手へ透し、かい潛つて走寄り、勝介と組合し孫十郎が頭より肩へかけ、八九寸切割

散たり。是を見て惟任勢、一同にどつと駈入れば、兼て斯ぞと心得たる三百餘人の兵ども、必死に成りて戰うたり。されども大勢なれば信長公を討奉らんと、爰の透間彼所の畾地より、馳ぬけ駈ぬけ、廣縁近く寄來る兵百四五十騎、信長公箙矢屛風の矢束解き、白き綾の單衣に一重帶引締め給ひ、白木の大弓大矢をはげ、蔀の陰に立ち給ふ。此時天未だ明離れず、殿上朧にして見えわかず。寄手の軍兵、信長公の爰に御座とは知らずして、どつと一同に馳上れば、信長公大の眼を活と見開き、「叛賊光秀は何所にある。主に叛く天罰、思ひ知らせんず」と、天にも響く大音に罵り給へば、日頃勇氣の覺ある武士共、主位にや恐れけん、又勢に碎かれけらし、引とはなしに七八間、一度にどつと退たりける。此手の大將明智左馬介光春、此形勢を遙に見て、「きたなき者ども、信長公と見奉らば、引組で討奉れ、進めや〳〵兵ども」と、采配打振り下知するにぞ、三宅孫十郎、藁地甚九郎、木村治郎右衛門、並河金右衛門、中村治郎兵衛、四王天又兵衛等三百餘人、噇と喚て討てかゝる。信長公弓矢打番ひ、三人張に十三束、指詰め引詰め射給ふに、先に進みし武者十騎計はたく〳〵と射倒され、空矢は更になかりける。此鹽合を見て本堂に有ける直宿の侍矢代勝介、伴太郎右衛門尉、同正林、村田吉吾、御中間には藤九郎、藤八、岩新六、彥市、彌六、熊駒若、〔岩、熊の下何れも若の字脫漏か〕虎若、小扈には森蘭丸、同力丸、同坊丸、小

御殿へかけ入れば、信長公長刀提げ御次の間迄出給ひ、「叛する者は誰なるぞや」蘭丸申す、「惟任光秀にて候」「偖は力なき次第なり。一矢射て腹切べし。防げよや若者共」と、寺中へ響く大音にて御下知あり。長刀打捨て、弓と矢つがひ待給ふ。蘭丸は夜叉のあれたるごとく、戸障子唐紙踏開き、板敷を力足にて踏鳴し、「直宿のめん〳〵起合候へ。逆臣惟任日向守、御前近く討入たるぞ。防げや〳〵」と呼はつて、十文字の鎗おつ取り縁側に踊出で、寄來る敵を支へしは、事急なりし戰なり。此時寺中の軍勢三百餘人、すはや惟任が叛心にて、大軍爰に押寄せたるぞ、一世の大事此時なりと、口附小者に至るまで、日頃の恩義を報ぜんと、我おくれじと得物〳〵を追取て、目に餘る大勢を少しも恐るゝ氣色なく、鬨を作つて待かけしは、勇ましくこそ見えにける。されども味方不意の事なれば、銘〳〵素肌に太刀脇ばさみ、其働は自在なれども、覺悟の寄手三千餘人、甲冑に身をかためたる十倍の大軍に向ふ形勢、これや蟷螂の隆車に敵する心地にて、危き事限なし。此時惟任が大軍塀重門の際に押寄せ、一同に鬨を發し、塀に取附き乘入らんとす。寺中の兵卒、入れさせじと鎗長刀にて薙拂へば、寄手も左右なく進み得ず、案に違うて見えたりける。四王天但馬守が嫡男同又兵衞、生年十九歳、大力無雙の若者なれば、側に有りける一丈計の大石を引起し兩手に捧げ、門の扉へ打附ければ、此門忽ち微塵と成て飛

歸らせたまふ。是なん御父子の永き別にしありけりと、後に袂を濡しける。信長公は猶も興に入らせられ、輕體細腰の美女を集め今様を謳はせ、子の剋過る迄酒宴を催し給ひけるが、何の用心もおはしまさず、金瓊帳の裡に入らせ給ひ、鴛鴦の衾の下に、珊瑚の枕推遣て、美婦の玉臂により添ひ臥給ひければ、近士小扈の面々は、次の間にぞ寢たりけり。早東雲に近き頃、信長公目覺め、枕を上て聞給ふに、怪しや遙に人馬の足音大地を震動し、數萬の軍勢寄來ると思しければ、「誰かある」と高聲に召れけるに、森蘭丸、飯川宮松、小川愛平候」と申す。信長公仰せけるは、「小扈共あれを聞け。軍兵數多押寄する音、始め遠く今は近し。必定此所へ寄來ると覺ゆるなり。何者なるぞ、見屆け來れ」と仰ある。森蘭丸、宮松、愛平等畏つて刀手挾み、手燭を取て縁側に走出で、四方を急度伺へど、まだ明やらぬしのゝめに、あやめも見え分ず。仰に違はず人馬の足並、草摺の音、次第々々に近附ば、蘭丸大音上げて申けるは、「武將の是におはしますに、何者なるぞ、緩怠なり」と呼れど、軍馬の音彌近く、今は門外にや至りぬらんと覺えければ、宮松、愛平傍に有りける観に馳上り、四方を遙に見てあれば、早東の空しら〳〵と、數千の軍兵本能寺を目がけ、潮のごとく押寄たり。蘭丸観の下より、「旗の紋は見えざるか。何者の寄來るや」宮松疾くと透し見て「旗は水色に桔梗の紋、叛逆人は惟任光秀なり」蘭丸驚き奥





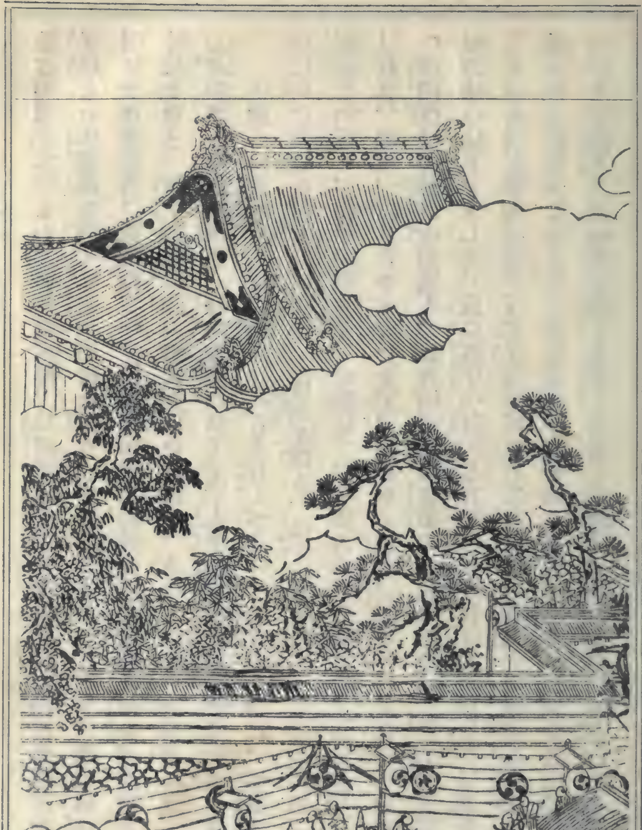
信長公婦女を召して今様を諷はせ給ふ圖

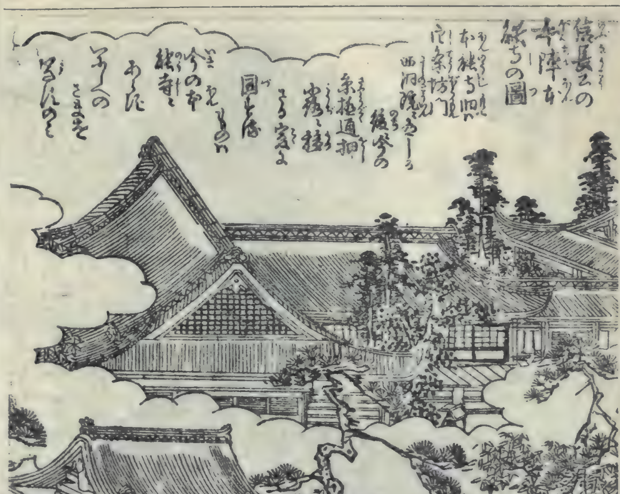
ひして耳にだにもかけざりしこそ、信長公の運の極と轉けれ。時に光秀諸軍に下知して、「兵粮をつかひ武具を固めよ。敵は四條本能寺と二條の城にこそあれ。急ぎ攻討べし」と觸ければ、此時初めて、偖は野心なるぞと心得て、何れも小荷駄を招き、支度の體喧しといへども、曾て驚く者なかりける。翌れば六月二日の曙、明智左馬介三千七百餘人、本能寺を千重百重に取圍み、同治右衛門四千餘騎、二條の城及び妙覺寺諸司代村井が堀川の館等を遠巻す。大將光秀三千餘人、諸軍の命を司つて、三條堀川に本陣を居控へたり。其外大津、山科、宇治、伏見、淀、唐橋、八瀨、鞍馬、鷹が峯等へ、二百人三百人の伏勢を分ち差置たり。

○惟任光秀圍二本能寺一

孟子曰く、君の臣を視る事手足の如くする時は、臣君を見る事腹心の如くす。君の臣を視る事犬馬のごとくする時は、臣の君を視る事國人のごとくす。君の臣をみる事土芥のごとくなる刻は、臣の君を視る事寇讎のごとしとかや。織田右大臣平信長公、京都四條西洞院本能寺に御陣を居らる。時是天正十年六月朔日。嫡子三位中將信忠卿竝に源三郎勝長卿御兩人、式日の御禮として本能寺に入らせ給ひ、御父子いと睦じく御酒宴數剋に及び、夜に入りて信忠卿暇を告て

治右衛門を大將とし、藤田傳五郎、竝河掃部介、伊勢與三郎、松田太郎左衛門等四千餘人、王子村より唐櫃越を經て松尾山田村を通り、本陣近く寄合せんとす。惣大將惟任日向守光秀は、明智十郎左衛門、荒木山城守、同友之丞、諏訪飛彈守、齋藤内藏介、奥田宮内、三牧三左衛門等三千餘人、酉下刻に保津の宿より山中に懸り、水の尾の陵を餘所に見なし、内々作らせ置し尾の傳への道を凌ぎ、嵯峨の邊に出でて、衣笠山の麓地藏院迄著陣せり。諸軍勢此形勢を見て、中國への出陣ならば、播磨路へこそ赴くべきに、只今の上洛は、不審多き事なりとて、物頭に向ひ其樣を尋しかば、侍大將是を聞き、僞て申けるは、「信長公仰出さるゝは、路次の程廻りなれども、當手の武者押、京都にて御見物あるべき旨に附、一度京都へ押入るなり」と答へければ、諸軍、實さる事もこそとて、何心なく終夜、駒を早めて都近くぞ上りける。爰に京都の諸司代村井長門守が家人、大井川の邊に公田の有りけるを、其畔頭してありけるが、光秀が軍勢西國へは下らずして、直に洛中へ打入る有樣なりければ、大きに怪み、急ぎ村井長門守へ使を立て、「光秀が軍勢、西國へは向ず、京都さして押寄候。何樣光秀叛逆を企て候者と相見え候。御用心有て然るべし」と告たりける。村井是を聞て、「當時何者か我君信長公に向て弓を引き矢を放つべき。殊更光秀は世に類なき厚恩を蒙り侍れば、いかでかさる逆心を企て候べきぞ」と、空笑




信長公の本陣本能寺の圖





參向を待れける。扨も信長公、此時天下の武將として、千斤の重き御身を、纔に三百人の小勢を引具し、寺院に旅宿し給ふ事、泰平の世といへども、危ぶむべき事なるに、況や亂世の時においてをや。これ禍を招き給ふといふべし。信長公名將にておはしければ、武田、上杉、朝倉、淺井なんど、敵國威勢盛んなりし時は、其身を愼み給ひ、かゝる麁忽の御行跡はなかりけるが、武威日々に强大にして、朝倉、淺井、武田を亡し、上杉喜平次景勝、勢微弱にして恐るゝに足ず、北條氏政は先に御幕下に隨ひ、毛利輝元今既に亡びなんとす。爰において天下の武將頸を揚て望むものもなく、信長公又是を見る事嬰兒のごとし。天下の諸士を輕じ、自威を恣にして、禍蕭墻の内に起るを知しめさゞるこそ、うたてかりき次第なり。扨も光秀は同月晦日、丹州一國、西近江の軍勢龜山の城下に馳集る事、都合一萬七百餘人、村々里々に充滿し、夥敷ぞ見えにける。明れば天正十年六月朔日、嫡子十兵衞光慶病惱甚しければ、後見隱岐五郎兵衞尉惟恒を相添へ、兵卒五百餘人龜山の城に殘し置き、中國發向の勢揃と號し、申の剋に城下能條畑に打出でて、水色に桔梗の紋の大旗を立擧げ、白紙の紙手撓の馬印を押立て、軍兵を三手にこそは分ちけり。一手は明智左馬介光春を大將とし、四王天但馬守、村上和泉守、妻木主計頭、三宅式部等三千七百餘人、本道を經て大江の坂を過ぎ、桂の里を越行ける。又一手は明智

出しけるが、扨しも光秀常の才智もくらみけらし、近くは陶尾張守、大内義隆を弑せしも、毛利の爲に滅亡し、毛利爰に於て名正しく、今正に安藝、備後、備中、周防、長門、豐前、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐十二ヶ國の大守と成り、天下の頸を鬪ふは、其名正しきによつてなり。光秀爰に叛心を發し、信長を討奉らば、忽ち英雄憤起して、一時に其家を討亡し、天下爰に至て初て一に歸し、萬民泰平を謠ふべし、嗚呼天の命ぜる所、人力の及ぶ所にあらずと思ひ續けて歸る道筋、我身の上は見えぬ闇の夜、後より比田帶刀豐後守が側に寄ぞと見えしが、拔討に右の肩より左の脇へ袈裟に懸て斬割たり。豐後守年既に六十に餘りぬれば、只一刀に命を落す。下僕四人「すは狼藉者のがすまじ」と、刀引拔向うたり。帶刀主從拔つれ討て懸り、終に殘さず切おほせ、とゞめをさして歸りけるは、是非なかりける次第なり。同月廿九日、右大臣信長公、森蘭丸、同坊丸、同力丸、湯淺甚助、金森義入齋等、近習五十騎、上下三百餘人にて上洛し給ひ、四條西洞院本能寺に旅宿ありて、中國羽柴筑前守へ加力出勢を諸國の武士に下知し給ふ。三位中將信忠卿は、齋藤新五郎、毛利新介、菅谷九右衛門、福富平左衛門、團平八郎等の近士五十騎、上下五百餘人、同日上京二條の城に入らせ給ふ。信長公の御末子源三郎勝長は、津田又十郎、同勘七、織田九郎次郎等三千餘人、是も同日京著あり。妙覺寺に寄宿せられ、諸將の

露も恨とばし思ひ給ひそ。大守自ら勇威を以て、此國を斬取たりと思ひ給ふべけれども、臣の道は身を殺して君に仕ふ。君又是を賞するに、國郡を賜ひて功を顯し給ふなり。されば故人も、力を竭し勞を盡して、其報を望まず、功を程し事を積で、其賞を求めず、國に益あらん事を務て、人を濟ふ事あらん事を務むといへり。又大節に臨で奪可らざるは君子人なりと、論語にも説給へり。忘れても不忠の御心を發し、永世惡名を殘し給ふ事あるべからず」と、肝膽を吐て諫言す。光秀點頭て返答なし。頓て豐後守暇を告て退出す。光秀急に比田帶刀を召て申けるは、「宇野豐後守我叛心を察して諫言す。彼者元來正直にして、人に諂ふ事なし。今我に諫を入るゝといへども、又他人に此大事を語べき者にも非ず。然りといへども氣は針穴より洩れ、大堤蟻穴より崩るとかや。豐後守我に一味せず、生置てはいかなる災出來んも知るべからず。汝暗夜に紛れ追附て討果すべし。務て誤る事なかれ」と下知しければ、比田帶刀畏り、小者三人引具して、飛ぶがごとくに追うたりけり。

○宇野豐後守最期竝光秀陣押

扨も宇野豐後守は、光秀に逢てさまぐ\諫言なしけれども、光秀改むる色もなく、不興にて退

豐後守知綱、尾石與三忠武等の勇士を呼で、謀叛の次第を物語れば、各最もと甘心し、彌叛心に黨しける。爰に丹州桑田郡外川といふ處に、宇野豐後守といふ士あり、其生得廉直にして諂ふ事なく、是を以て人に許されたり。光秀丹波を領する時幕下に屬し、三百石の領地を安堵せり。今度光秀が饗應司の役を召上られ、剩へ舊領丹波近江をも改易せられ、出雲、石見の二國を賜ふと聞き大に驚き、是なん光秀が存亡の期ならんと思ひけるが、倩光秀が常の心を考ふるに、舊國を召上られ、君命なりとておめ〳〵新知の國に行くべき者に非ず、智勇謀略兼たる武士なれど、只うらむらくは聖人の道に疎く、仁義の行ひ暗ければ、謀叛せんも計がたし、左あるに於ては、假令信長公を首尾克く討奉るとも、天何ぞ是を赦し給ふべき、忽滅亡し、千歳の末までも惡名を流さん事、口惜き事ならずやと、獨思ひ續けるに、我光秀の幕下に有て、若謀叛の心あるを諫めざるは本意に非ずと、直に龜山の城に至り光秀に對面し、其容體を伺ふに、何やらん物思はしき顏色にて、家人等殊更取騷ぎ、一方ならぬ氣色なれば、大抵謀叛の色を推察し、光秀に向ひ申けるは、「大守頃日安土に於て饗應司の任を召上げられ、信長公のけしき惡しく、今又舊領を召離され、出雲、石見を賜ふよし、定めて恨にも思すべし。されども元來御身に一物もなし、領地從僕、悉く皆君の賜ひたる者なれば、いかに召上げらるゝ共、





易う諾ひて出行きけるが、程もなく酒肴を調へ歸り、心よく客をもてなし、光秀が志を安じぬ。客去て後光秀、「何にして酒肴を調じ來りしや。露計の方便なかりしを」と云ふに、妻答て、「自もすべき力のなかりし故、髮を斷て鬘とし、代を取て調へ候ひつる」とて、頭に被し帽子を取れば、さし櫛のさしもに黑く麗しかりき髮を、根より切てぞ居たりける。光秀殆ど泪を流し、「汝が恩は母の恩にも勝りぬべし。我世に零落して、一人の妻にさへ斯る憂目を見する事、何ほう悲しき事ならずや。かくては終に飢餓の死を致すべし。諸共に斯く云甲斐なくてあらんも口惜ければ、我は暫く此を去て、何なる國主縣令にも仕へ參らせ、出身の榮耀をなし、汝が今の恩を報うべし。汝は猶爰にあつて、紡績の勞を勤め、二歲三歲がほどを、かゝる蓬が蔭に我音信を待ち候へ。迎の人をまゐらすべし。努心弱くな思しそ」とて、涙ながらに出行きしが、朝倉に仕へ、後信長公に仕官して、丹波近江の守とは成りぬ。されば糟糠の妻は堂よりも下さずとて、いとほしみ深かりける。光秀斯る乏しき昔日を思はゞ、今の叛逆は企てまじきに、貴して賤きを忘るゝ者は久しからず、舊を思うて新なる功を棄る者は凶しとかや。是語信長公と光秀の行狀に能相中れり。扨も光秀、比田帶刀則家、松田太郎左衞門政近、三牧三左衞門兼顯、同勘兵衞兼次、柴田源左衞門勝定、同忠藏勝之、天野源左衞門國次、池田織部輝秀、中澤

繪本太閤記　三篇卷之八

○照子斷レ髮沽レ酒

家貧しければ良妻を思ひ、國亂れては良相をおもふとかや。惟任日向守光秀は、其日丹洲龜山の城に著しけるが、子息十兵衛光慶、此頃瘧疾を煩ひ、大熱燒くが如く、譫言して人事を知らず。光秀殊におどろき、隱岐五郎兵衛惟恒に命じて醫療を加へ、看病する事一方ならず。日向守三女四男あり、長子は信長公の弟織田武藏守信行が一子、大坂の城代尼崎の城主織田七兵衛尉信澄が室なり。其次の女は丹後の國主細川刑部太夫藤高が長子、彌市郎忠興が室と成れり。其次男子則ち十兵衛光慶、今年十四歳なり。次は十次郎と呼で、十二歳、その次自然十一歳、女子九歳、末子乙壽丸は八歳なり。光秀が妻は妻木主計頭範賢が姉なりけるが、光秀始め濃州を出て國々を經廻り、越前の長崎といふ所に僅なる所縁有て、爰に暫く住みけるに、妻あり名を照子といふ。或夜光秀を訪ひ來る客あり。光秀何がな饗應たくは思へ共、朝夕の煙さへ立てかねたる浪々の身なりければ、又是を如何ともする事なし。密に妻と此事を計る。妻いと

繪本太閤記 三篇第八之卷 目錄

照子斷レ髮沽レ酒
宇野豐後守最期竝光秀陣押
惟任光秀圍ニ本能寺一

よころぶ事限りなし。さて人々に暇を告げ、丹州の龜山へぞ赴きける。

色も香も醉をすゝむる花のもと　心前
國々はなほのどかなる時　光慶

執筆は光秀が臣東六郎兵衛行澄とて、東野州常緣が後胤にして、倭歌連歌の達人なり。光慶とは、光秀が子明智十兵衛が事なり。擧句光秀が句なれども、態と光慶と記せり。發句に、ときは今と置き、擧句に、のどかなる時と留しは、光秀舊土岐の正流なれば、苗字を時季に准へ、今度の本意をのべて、天下を治め、四海四つの時長閑なるの心を祝し、斯くはつらね作りたり。紹巴法橋、才智明敏の者なりければ、是等の句體にて光秀が叛心をさとり、天下の大奇事出來ぬらんと、獨心に思ひ居りける。其夜連歌終りて後、紹巴等皆光秀が次の間に席を設け、竝び臥たりけるが、光秀は更に眠もやらで、終夜思惟の餘りにや、嗟歎する事三五聲、障子の次に臥たりし紹巴法橋甚訝り、「何事に候ぞ」と問しかば、光秀大に驚きけるが、態と叱て、「汝等小輩爭か大人の心を知るべき。默して睡べし」と云ふ。紹巴再び言語ず。程なく東の空もしらみて、夜はほの〴〵と明にける。二十八日の曉に、光秀再び大權現に詣で、良久しく禮拜し、やがて黃金五十枚、鳥目五百貫を奉獻す。かつ又西之坊に金五十兩、亭坊に同拾兩、其外連歌司紹巴、昌叱、心前、兼如、大善院等に又金拾兩宛を與へ、愛宕山中へとして鳥目一百貫を寄附しければ、

爲とて、西之坊威徳院行祐房が許に其夜は宿し、日頃嗜める道なれば、百韻の連歌を興行す。行祐房元來連歌の達人なれば、此道の堪能なる紹巴法橋、昌叱法橋、心前法師、兼如法師、上之坊大善院宥源等斯に候す。發句は、

時はいまあめがしたしる五月哉　光秀、
みなかみまさる庭の夏山　行祐
花落つるいけの流を堰き留めて　紹巴
風はかすみを吹き送る暮　宥源
春も猶鐘のひゞきや冷えぬらん　昌叱
片敷く袖はありあけの霜　心前
うらがれに成りぬる草の枕して　兼如
聞なれにたる野邊の松蟲　行澄
秋はたゞすゞしき方にゆき返り　行祐
尾上の朝氣夕ぐれのそら　光秀

右面十句末の句は是を略す。此會光秀の句十六句あり、名殘のはなは、

安土にての次第を物語り「當家存亡の時に及びぬれば、居ながら自滅せんより、先じて人を制せんにはしかじと、既に叛逆の計略に及べり。旁の心體何んにや」と云ふ。此時皆一同に信長を怨み憤り、彌逆心を勸めしかば、光秀雪上に霜を積むが如く、益叛心を堅めけるは、悲しかりける次第なり。光秀が臣下、悉く一人當千の勇士にて、戰場へ出て武功をなす事、天下の人目を驚しむといへども、仁義を辨る者一人もあらざりけん、一言も諫言する者なく、先に進んで弑逆の罪に陷りけるは、無慚成ける次第なり。時に光秀下知しけるは、「明智左馬介、同治右衛門、四王天但馬守、並河掃部已下、丹州の輩とともに急ぎ歸國し、龜山の城に至り、荒木山城守、隱岐五郎兵衛等に此旨潛に云聞せ、外様の者には出雲、石見の拜領地へ向ふべき支度の由披露し、來る晦日悉く龜山へ集るべし」と。是によつて其面々、五月廿四日、夜をこめて丹波國へぞ歸りける。同月廿七日、光秀三千餘騎を引率し、坂本を立ちて白河越に懸り、都へは入らずして西京を過て、嵯峨の釋迦堂の前に至り、爰にて兵士に向ひ申けるは、「我聊祈願の事有て、愛宕山に詣で通夜せんと欲す。明日丹州へ赴向べき間、汝等は是より唐櫃越又は大江山を經て龜山に參著すべし」と。奥田宮內、村上和泉守等委細承り、士卒を引具し兩道より、龜山さして馳たりける。夫より光秀愛宕山に登り、大權現に詣で、心願を凝し三度鬮を取り、中國出勢祈の


光秀和歌を詠ずる圖



と打詠じ、道を急ぎ坂本の城に入りにける。

○光秀於二愛宕山一連歌

此時森蘭丸、信長公の御前へ出で、密に言上しけるは、「惟任光秀は大なる工を仕る體にて候。臣に仰附けられ候へ、斬て捨候はん」と申す。信長公「何の故ぞ」と尋給ふ。蘭丸申けるは、「今朝光秀飯を喫し候所に、口に入たる飯を嚙ず、何やらん案じ入て候ひしが、又手に持たりし箸を取落たれども、是を覺えず、忙然として有りしが、頃くありて驚き候。是程に何事をか案じ入候べき。天下の一大事を思ひ立つ者ならん。其思ひ立つべき事を察するに、必ず逆心を企る者ならん。此頃光秀が君を恨み奉る條々、數多おはしまし候程に、御由斷ある可らず候」と申ける、蘭丸が眼力、賢かりし事どもなり。斯と申上げけれ共、信長公心ともなし給はず、「假令光秀叛心を企とも何程の事か有らん。光秀が一身、皆我恩を蒙らざる所なし。左様の事有べき樣もなし」とて、心寛て御座けるが、御運の末ぞと覺えける。去ほどに、惟任日向守光秀、坂本の城に歸著し、城代光秀が叔父明智十平次光廉入道長閑齋竝に三宅式部秀朝、奥田宮内一武、山本對馬守和之、入道山入、諏訪飛驒守盛直、齋藤内藏介利三、伊勢與三郎貞仲、村越三十郎景則等を集め、密に

なれども、源家累代の嫡流土岐伯耆守頼清が後胤にして、數代濃州明智に住居せしに、去ぬる弘治の頃より永祿九年に至るまで、國々經囘し、終に越前の朝倉に身をよせ居たりしに、信長の招きによつて、岐阜に來りて織田に仕へ、日々月々に武功を勵み、次第に立身して、元龜二年、西近江を切隨へ、天正三年丹波を討つて、數年の間力を盡し、終に丹波を領する事、皆汝達が忠勇による所なり。織田に仕へて十七年、信長が譜代恩顧といふにもあらず、君恩とは云ひながら、汝等と諸共に我武勇の鉾先を以て切取りたるなり。先月甲州にて非道の儀、信長自身拳を以て某が頭を打ち給ひしより、幾度か恥辱を忍び、臣下の道を思ひてこそ憤を發さざりしが、斯る難題を仰懸けらるゝ上は、當家の滅亡時節到來、是非に及ばざる次第なり。當月下旬、信長、信忠上洛あるべきと聞くなれば、その時是が報を思ひしらせ參らすべし。しかれば急ぎ坂本龜山に立越え、相殘る股肱の輩へも申談じ、計を廻すべし。かまへて隱密たるべし」とて、堅く申し合せ置き、西國出陣の用意をなすべしとて、信長公へ暇を乞ひ、安土を立ちて坂本さして歸りける、心の內こそ思ひやられて、いはん方こそなかりける。日來數寄の道とて、

　心しらぬ人は何ともいはゞ云へ身をも惜まじ名をも惜まじ

含むこと多しといへども、古語にも、君君たらずといへども、臣以て臣たらずんば有るべからずといへり。たとへ命を召るゝ共、強て恨むべきことにあらず」とて、觸狀に判をするゝ、先々へぞ送りける。其翌日信長公、青山與三を上使として申給ふ其趣は、惟任日向守に出雲、石見の二ケ國を賜るべきとの御ことなり。光秀謹で上意の趣承る。時に青山重て申けるは、「兩國御拜領、誠に以て目出度存候。去ながら舊領丹波、近江の二國は召上らるゝのよし、其旨御覺悟有レ之べし」と、申捨てぞ歸りける。爰において光秀竝に家子郎等まで、闇夜に燈火を失ひたる如く、十方を失ひ周章す。明智左馬介進み出でて申けるは、「出雲、石見の兩國は未平均せず、相向ひ合戰を取結ぶ其中に、舊領丹波、近江を召上られなば、妻子眷屬しばらくも身を保ずべき所なく、沖へも寄らず磯へも附ず、所々にて尸を曝ん事口惜き次第なり。きのふの觸書、今日の趣を以て考ふるに、佐久間信盛、林佐渡守、荒木村重等がごとく、當家も滅却せしむべき信長公の御所存の程、鏡に懸て見るがごとし。前車の覆るを見て、後車の誡とこそ申候へ。彼方より其色の顯れざる先に、謀叛の儀是非々々思し立ち給へかし」怒れる眼に涙を沃ぎ、言を盡し申ければ、妻木、藤田、四王天、進士、溝尾の輩も、皆一同に詞を揃へ、此一義をぞ勸めける。光秀は最前より默然として居たりしが、此時諸臣下に向ひ申しけるは、「抑我等身は賤しき者

信　長　判

天正十年五月十九日

とぞ記されける。光秀が臣下明智左馬介、同治右衞門、同十郎左衞門、妻木主計頭、藤田傳五郎、四王天但馬守、並河掃部介、村上和泉守、奥田左衞門尉、三宅藤兵衞、今岸頼母、溝尾庄兵衞、進士作左衞門等、此廻狀を見て大に怒り申けるは、「當家は今一方の大將にして、幕下に隨ふ輩京極、朽木を始め、江州、丹州兩國に數多ありて、當家の上に出づべき者織田の幕下に一兩輩のみ。然るに無官小身の池田、堀が下に書載せらるゝ條、無法の儀に非ざるや。剩へ秀吉が指圖にまかすべき旨、旁以て無念の次第なり。其上故なくして饗應司の役目召上られ、森蘭丸をして打擲せしめ給ふこと、悉く當家の恥辱、死すとも忘るまじき儀に候はずや」と、涙を浮め申けるにぞ、光秀も倶に泪をおさへ「實々汝等申さるゝごとく、信長公の御下知、是のみに限らず、思ひ設けぬことども多くましますなり。先年信長公、日本の追捕使定られたる時、東海、東山の二道は瀧川左近、北陸道は柴田修理亮、南海道佐久間右衞門尉、山陽道は羽柴筑前守、山陰、西海の二道を某に命ぜられしが故に、丹波平均の後、但馬國征伐のことを訴訟に及ぶといへども、終に許容し給はず、却て山陰、山陽の兩道ともに羽柴筑前守征せられぬ。是光秀が天下の人民に對し、面目を失ふ最初なり。其上先月已來打擲せらるゝ事三度。恨を

的候迄もなく候」と申す。信長公其直なるを感じ給ひ、此差添を蘭丸に賜ひ、是より寵愛並ぶ者なく、日々に立身したりける。

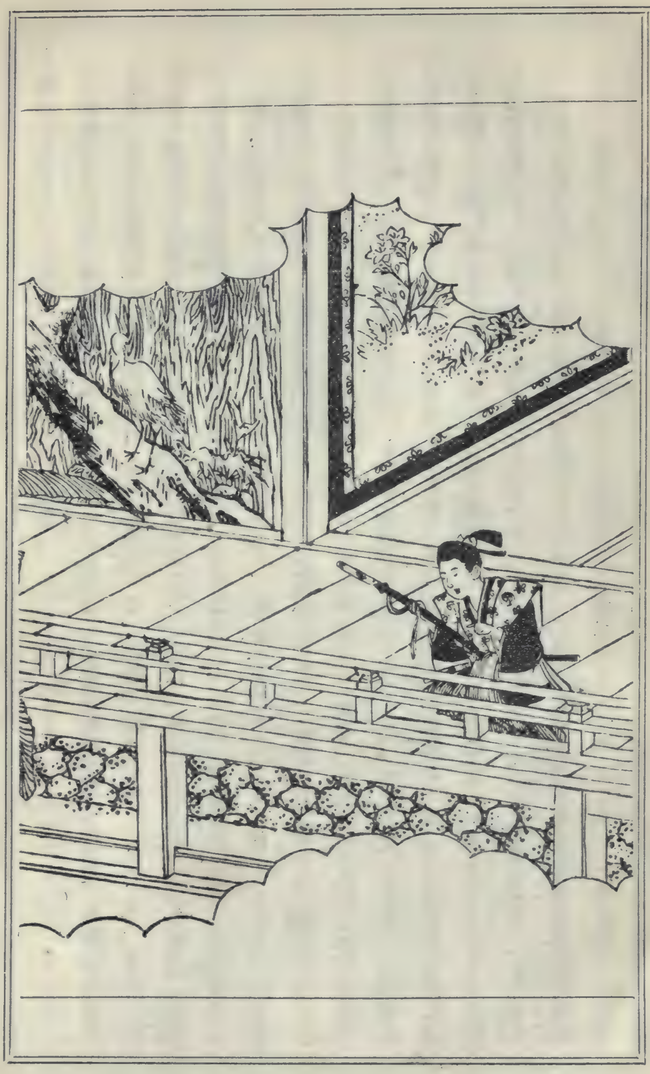
○惟任光秀三恨ニ信長公一

同月十七日、羽柴筑前守秀吉飛札到來して、「備中高松の城、川々の水を堰入れ水攻に成し、落城既に旦夕にあり。然るに毛利右馬頭照元、吉川、小早川等、大軍を以て後詰のため出張に及び候畢。此時を外さず、御出馬あるに於ては、中國、西國忽ち粉のごとくなし、一擧に征伐なすべき者なり」と訴へければ、信長公是を聞召し、「照元已下の出陣こそねがふ所の幸なり。さらば此時を失はず出馬して、一時に雌雄を極むべし」とて、卒に出陣の用意さま〴〵なり。先手の面々其用意を成し、當月中に自國を立ちて、備中へ下向すべしとの御事にて、其人々へ觸狀を廻されける。其書に曰く、

此度備中國爲ニ後詰一、近日彼國可レ爲ニ出馬一者也。依レ之先手之銘々、自レ我于レ先至ニ彼地一、羽柴筑前守可レ任ニ指圖一者也。爲計多惣三郎殿、同紀伊守殿、同三左衛門殿、堀休太郎殿、惟任日向守殿、細河刑部太輔殿、中河瀨平殿、高山右近殿、安部仁左衛門殿、鹽川伯耆守殿。

所領なるよし申立て、御寵愛に長じ我所領を望む事こそ安からね。其上信長公の仰に、三年を待べし、汝が望に任せんとの御諚、我身の上の大事にこそ、終には我家滅亡すべし」と申けるが、是なん逆心の根ざしなりける。然るに信長公、蘭丸が所望もさる事なれども、光秀に與へし領地、今更召上られん故もなく、屹度思惟まし〳〵て、光秀に蘭丸を聟にせよと宣ひける。光秀も意地強きをのこにて有りければ、堅く辭して是に從ひ奉らず。蘭丸是より光秀を深く惡み、折もあらば渠を亡さばやと思ひ居りける。さる恨有りければ、今日光秀が頭を打べしと信長公の命じ給ふに、數多の小姓立ちかねけるを、蘭丸獨進み出でて、元來生れ得たりし剛力に任せいたく打擲なしけるは、所謂ある事なりけり。扨此蘭丸、いかにして斯くまで信長公の寵愛なし給ふと尋るに、生質直にして僞る事なし。蘭丸未十三歳の時、信長公厠に行き給ふ。蘭丸、信長公の御指添を執て傍に侍す。信長公厠の窓より、何の心もなく蘭丸を見給ふに、蘭丸彼御指添の刻さやのきざみ際の數を、幾度も算へ居たり。信長公其後小姓等を集め、「此指添の鞘の刻目いか程か有らん、察し的たらん者に賜ふべきぞ」と宣ひけるに、小姓等或は三十と云ひ、又五十と申す。蘭丸は更に言はず。信長公、「蘭丸はいかに」と尋給ふに、御答に申けるは、「小臣は先より其數を算て覺え居申す間、察し


信長公蘭丸を試ミ給ふ図



らずといへども、是を忍で退出す。

此蘭丸といへる者は、先に宇佐山の城にて討死せし森三左衛門善成が次男、森勝藏が弟なり。父三左衛門江州志賀郡を領せしに、戰死の後、勝藏、蘭丸幼稚なるにより、光秀に賜ひて領せしめ給ふ。蘭丸元來聰明英智の美童なりければ、信長公是を深く愛し給ひ、長人ば拔群の所領宛行はるべき思召なりしに、今年蘭丸二十二歳、此頃濃州岩村五萬石を下し賜ひ、追々大身に取立てらるべき者なりとて、諸人是を羨めり。是より先、信長公蘭丸を寵愛の餘り、種々の珍器奇寶の數々を取出で給ひ、「此中にて汝が望む物あらば選取るべし」と仰せけるに、蘭丸答て、「小臣更に望ましき物候はず」と申す。信長公笑ひ給ひ、「汝是等の珍器重寶の外に、望む物ありや」と。此時蘭丸謹んで申けるは、「臣が父三左衛門、江州志賀郡を賜り、臣も彼地にて出生いたし候。父の舊領、某が古郷にて候ふ。今惟任光秀に下し賜ふ。哀れ君恩を以て、父が領地を相續いたし度の外、更に望これなし」と申す。信長公是を聞召し、「我も疾くよりさこそ思へり。今二三年相待べし、汝が所望に任すべし」と宣へば、蘭丸泪を流し恩を謝す。此時御次の間障子のあなたに、連歌師紹巴法橋參じ、座睡して居たりけるが、此情話を聞て、事の序に光秀に告ぐ。光秀大に驚き、「扨は蘭丸、父の

めらる。光秀爰にて初て心を保じ、此度饗應司を命ぜらるゝ事、面目あるに似たりとて、彼大寶院に假の御殿を補理ひ、壁に畫き柱に彫彩し、奇樹怪石、珍花芳草を庭に植ゑ、麟の脯、鳳の炰なしといへども、山海の魚鳥數を盡して蓄設け、式正の飾、杯盤の美、金銀を以て鏤なし、其外四方の番所、路次の警固、見る人の目を驚しむ。信長公人をして此結構を見分せしめ、其善美法に過ぎたるを慍り、光秀を召て仰せけるは、「汝今度の饗應いかに心得しや、上もなき華美を盡し、世に希なる珍器を集め、七寶を芥の如く飾り鏤め、法外の奔走、思慮なき僻事といふべし。禁裏、仙洞の勅使下向あらば、此上何を以て饗應に備ふべきや。今度の結構、我心にかなはず。是角五郎左衛門を以て汝に代しめて、饗應司と成さん間、汝は坂本に歸り休息すべし」と仰渡さる。光秀是を承り、本意なき事に思ひ、頃日幾度か罪なきに恥しめを蒙り、我を惡み給ふ事、何によつてか斯くのごとく甚しきやと、更に怨恨以前に勝り、怒氣顏色に顯はれけるを、氣早き大將はやく見咎め給ひ、「己身の誤を看みず、面色を違へ憤怒の色を露すは、主を何とも思はぬにや。以來の爲ぞ、彼が頭を打つべし」と下知し給ふ。近士小姓の面々、顏見合せて立兼たるに、森蘭丸つと立ちて光秀が側に立寄り、「御上意なるぞ」と聲をかけ、鐵要打たる扇にて健に打ちければ、烏帽子破れて髮亂れ、項裂て血流るゝ。光秀數度の打擲、其恨少か




光秀再び信長公を恨むる図

ずや。又稻葉伊豫守が郞等齋藤內藏介、名和和泉守兩人、武勇の者なるを知り、汝計略を以て呼寄せ、高知を與へ抱へ置く由を聞り。左樣にては稻葉ごとき小身の者、能家來を扶持する事成り難く、諸士の風俗を損ひ、己が用に備る條、重々不屆の至りなり。內藏介、和泉守兩人に、切腹申附くべし」と怒り給ふ。光秀、とかう申す言葉もなく、畏つて退出しけるに、猪子兵助此事を氣毒に思ひ、さま〴〵信長公を宥めまゐらせ、名和和泉守を稻葉へ歸參せしめ、齋藤內藏介も俱に稻葉家へ歸るべしと勸むれども、齋藤敢て是に隨はず、其儘に光秀に仕へけり。信長公猶も御怒解け給はず、又光秀を召て、責て宣ふやうは、「法に背き禮に違ひ、內藏介を元のごとく召仕ふ事、我を侮り蔑如にする條奇怪なり」とて、近士に命じ、竹刀を以て光秀をうち出させ給ふ。光秀恥辱かぎりなく、一向信長公を恨みまゐらせける。され共光秀始四千二百貫の所領より、今三十七萬石の大名に取上げられ、報じ盡し難き君恩を思ひ、泪を含んで退出せり。

○惟任光秀再恨ニ信長公ー

天正十年五月のはじめ、本國より上客の入來あるに附て、信長公安土の大寶院を旅館と定められ、惟任日向守を以て是が饗應司に命ぜらる。勿論疎略のもてなしある可らずと、別に仰含

曾てこれなし。是によつて朋輩の士偏執し、此兩人を讒言す。一徹怒りて二人の勇士を追放す。内藏介又光秀を賴み仕へて、專忠誠を盡し功を立て、光秀が恩を報んとす。名和和泉守も内藏介を賴み、光秀が臣下と成れり。光秀兩人を甚だ愛し、扶助する事一徹に倍せり。一徹齋是を聞き甚怒り、光秀に理告て兩人を召返さんとす。時天正十年四月上旬、信長公甲斐の武田勝賴を亡し給ひ、其恩賞を沙汰し給ふに、伊豫守一徹齋を召れ「汝今度の合戰、伊奈郡の働に於て、忠節もなく、功名もなきは何にや」と尋ね給ふ。一徹齋甚赤面して答申けるは、「某が羽翼の臣齋藤内藏介、名和和泉守兩人、少しの儀に附缺落致し、惟任日向守が許に仕へ罷在り候。某此兩人の勇士を以て軍中の標となし候へば、甚だ迷惑仕り、光秀に乞て兩人を歸參せしめんと計候へ共、何なる事にや、光秀敢て兩人を出さず。此度の合戰、右體の混亂に依て、家中の心一致ならず、至剛の志も出ず候やらん。尤面目無之次第に候」と申上ぐる。信長公是を聞し召れ、甚だ光秀を怒り給ひ、「光秀元來己が勇に誇り、朋輩を蔑如にするのみならず、我に對して非禮失言尤も甚し。惡き奴哉」とて光秀を召れ、嘖て宣ひけるは、「今度汝が軍用を見るに、半役にして丹波勢五千餘騎召連れ、人馬の裝束一際綺麗を盡せり。尤忠勤はさる事なれ共、大和、河内、丹後其外遠國の輩、人數三分一引具したり。左あれば汝諸士に抽づる條、謂なき事に非

是を忘れ給はず、臣下非を悔み過を改め、公も罪を免して一旦寛宥ありながら、腹ぐろに内に籠させ給ひ、露も舊悪を忘れ給はず。是によつて多くの年を經て、罪に行はるゝ者數を知らず。佐久間信盛、林佐渡守、安藤伊賀守、荒木攝津守等を見て知るべし。一善を賞する時は衆善進み、一悪を罰する時は衆悪恐る、況や其類善類悪においてをや。惟任光秀、自己が非義を知れり。是をいかに陳じ申す共、信長公の宥し給はん事覺束なし。假令暫く宥し置るゝとも、終には御怒解がたく、患必ず身に及ばん事を計り、叛逆を企てしものなり。人の君たらん者、愼まずんばある可らず。己忠を盡して、人の己に忠なきを恨みずとこそ、古語にも見えたり。伯夷叔齊は舊悪を思はず、怨是を用て希なり。義と倶に比はば、永き恨なんぞ存んや。稲葉伊豫入道一徹齋が羽翼と頼みし家臣に、齋藤内藏介利三、名和和泉守長持といふ者あり。此齋藤内藏介は、美濃の國主齋藤山城守秀龍入道道三が姪なり。去る永祿七年、道三が嫡孫齋藤右兵衛太輔龍興、信長公の爲に滅亡し、其跡を失へり。爰において内藏介、牢々と成りてさまよひしを、日向守光秀、同國舊地の好あれば、己が方に客居させ、扶助する事兄弟のごとし。内藏介光秀が恩を深く感ず。稲葉入道一徹齋、内藏介が勇武絶論なるを兼々知りたりければ、光秀に請て重臣とす。されば一徹齋が家臣の中に、齋藤内藏介、名利和泉守兩人の右に出づべき者

んとす。吉川元春、小早川隆景是を見て、後詰せずんば有るべからずとて、元長、經言を大將とし、二萬餘人、寄手の横合より突崩さんと、もみに揉で進みける。若秀吉の加勢せらるゝ事もあらば、元春、隆景馬を出し、有無存亡を一戰に究むべしと、廂山の惣軍敵の有樣を窺ひ、切て出でんとひしめきける。浮田勢も後詰の勢來るを見て、備を立替へ、向ひ戰はんとす。爰に於て敵味方も、すはや只今大合戰こそ始りなんと、息を詰て見る所に、蛙が鼻秀吉の本陣より、武者二騎一參に馳來り、小旗を以て味方を制し、悉く軍士を引上げ、陣所々々へ引入れければ、中國勢も秀吉かくのごとく戰を愼めば、敢て戰ふ事も叶ひ難く、是も軍勢を引き上げて、元の備を守りける。

○惟任光秀恨二信長公一

爰に不思議の事の出來にけり。右大臣信長公の家臣惟任日向守光秀叛逆を企て、天正十年六月二日、京都本能寺において、主君信長公を弑逆し奉る。其由て發る所を尋るに、信長公智謀勇略絶論にして、人欲の私なく、人を知るの明才秀給ひ、其身信義をまもり給ふ事、金石の如く堅くおはしませしに依てや、人の非を憎み給ふ事も又甚し。若臣下其職分に違ふ事あらば、殊に

木を植ゑ、城戸を固て噤きける。民部少輔廣重是を見て肝を潰し、「こは心得ぬ事かな。寄手の方をこそ幾重にも慥ひ用心すべきに、本城へ向ひかゝる形勢、何様是は逆心を企つる者成らん。用意無からんも不覺なり」とて、本丸にも塀の内に米の俵をひしと積重ね、所々に搔楯をかき、用心堅固に待かけたり。中務は浮田が勢へ使を走らせ、「某が反心民部少輔悟りしと覺候へば、少々人數を城に入れ給ふべし」と云せければ、備前勢三百餘人を中務の加勢とす。中務大に悦び、夜の明方に鐵炮を打かけ、鬨を作つて攻入らんとす。廣重も兼て期したる事なれば、矢間を開き、同く鐵炮を打出し、爰を專途と戰うたり。城外には備前勢數をしらず打群々々、賀茂の城へ押寄せ、秀吉の本陣より、軍勢絡繹として引も切らず。此時廣重東の丸の假屋を目當に、凄じく火矢を射出したりけるに、藁葺の假小屋なれば、火鬩と燃附たり。是を見て士卒二人さらさらと屋の上に上り、打消んとする所を、廣重が次男孫太郞、鐵炮を以て二人ながら打殺せり。是に恐れて重て火を鎭んとする者なく、火炎空中に迸り、餘烟寄手の方へ掩ひかゝれば、民部少輔、「すはや討て出て突崩せよ」と、五百餘人城戸を開き、鬨を作て、群りたる猛勢の中へ驀直に切つてかゝれば、寄手烟にむせび、戰ふ事自由を得ず、さんぐ\に駈立られ、東の丸にも堪得ず、麓をさして引きたりける。され共寄手大勢なれば、入替々々攻ける程に、當城既に陷ら

繪本太閤記　三篇巻之七

○岡崎城合戦

岩崎の東、賀茂といふ地に、岡崎の城といふあり。此城本丸には桂民部少輔廣重、東の丸に生石中務、西の丸には上山兵庫元忠等を將として、其勢都合千七百餘人、毛利家より籠置けり。是より前、東の丸の主將生石中務秀吉に歸服し、浮田が勢を城中へ引入んと約束す。此密事を本丸の將桂民部少輔廣重、才智勝れし將なれば、悟りたりや心附ざるや、伺ひ試んとて、夜中中務只一人本丸へ行き、「廣重に申合すべき軍事有て中務參りたり。門を開かれ候へ」と云ふ。時に門内に廣重が夜廻の役人參り合せ、門を守る役人を責て、「汝等門を守る役を蒙りながら、怱諸に勤を怠る條、奇怪なり」と罵る聲す。中務是を聞き、扨は我隱謀を早く知て斯用心するものならんと、自ら獨疑心を生じ、走りて我持口へ迯かへりぬ。門番の役人は、夜廻の者に一應の理を述べ、「扨門外に中務の來り給へば、先門を開くべし」とて、あわたゞしく開きたれど、更に人蔭も見えず、「怪しや正しく爰に來り給ひし」と、訝る事甚し。中務は夜中俄に本丸へ向ひ搔楯搔せ、逆茂

繪本太閤記 三篇第七之卷 目錄

岡崎城合戰
惟任光秀恨信長公
惟任光秀再恨信長公
惟任光秀三恨信長公
光秀於愛宕山連歌

あり。昔木曾義仲は、一時に平家を西海に追落し、頼朝が爲に身を亡せり。韓信は戰へば勝ち攻れば取る、功成て呂氏の爲に滅亡す。所謂狡兎死して良狗烹られ、高鳥盡て良弓藏るとは是が歎なり。竹中半兵衛重治が死後の遺言、我爲の金言なり。爰を以て假令百戰百勝の利ありとも、我一力を以て合戰をなさば、信長公を待て其先陣に進み、公の命令を守て毛利家を退治せん我深き慮なり」と語られければ、諸將皆頭を席につけ、「君の高見、我々が計るべき所にあらず」と、感服して見えにける。爰において秀吉、急使を以て信長公へ加勢を乞ふ。其言に曰く、

態捧飛檄奉伸愚意畢。今度備中高松之城地之利、全武勇智謀之士數多籠居。因茲致水攻、既落城可爲旬日之内外。然處毛利右馬頭輝元、爲後巻率數萬騎令對陣、可相救高松城行候。兩陣之間、不可過于十町候。御勢聊於合力者、以其勢爲高松圍、指向某勢、以遂合戰、追崩卽時、西國悉當年中可屬幕下事、在手裏。此旨宜預御披露候。恐惶謹言。

天正十年五月十五日　羽柴筑前守秀吉判

菅谷九右衛門殿

川、小早川も此時に討取んと、勇みに勇んで秀吉へ此由を告けるに、秀吉莞爾と笑うて申されけるは、「此軍、後詰を成して能圖に當る物ならば、汝等が意見を待べき秀吉ならず。思ふ所ある故に戰はずして見物せり。此陣の兵卒、一人も出て戰ふ者あらば、軍法を以て罪を正すべき旨、陣々に觸しむべし」と、泰然として控へける。秀長を始浮田勢、秀吉の免しなければ腕を撫でて見物す。日幡の城中、秀吉の大軍極めて後詰に來るべしと、夫を頼みにこらへけれども、敢て其事なかりければ、今は當城保ち難しとて、上原右衞門太夫元祐、木村隼人、城を遁れて秀吉の本陣へ迯來れば、諸卒或は討れ又は落行き、暫時に城は落たりけり。其夜秀吉、諸將を集て申されけるは、「今日毛利勢日幡の城を攻し時、我駈出て一戰なさば、勝利を得ん事掌の中にあり。されども中國勢、志を一致にして十死一生の合戰を遂げ、狸よく豹を伏するの功を成すべし。危き合戰をなし、味方の士卒一人にても失ひて、何の益か是有らん。今高松の城をだに攻落さば、敵自然退散せん。吉川、小早川が軍立、我疾くより是を知れり。今味方十全勝利の圖を見定め合戰して、吉川、小早川を討取とも、是も又我爲ざる所なり。其故いかんとならば、今毛利家において吉川、小早川の兩將を討取らば、敵方一月を待ずしてばら〳〵と崩れ、長州、藝州悉く秀吉が手に屬せん。かくの如く衆に勝れ顯れたる功を立つる時は、果して我身に禍

心を發し、羽柴方より當城押への將に向ひたる木村隼人を城中へ引入れ、城主日幡六郎兵衛を鐵炮にて打殺せり。爰に於て毛利家より、猶崎彈正忠正忠を大將とし、備後、備中の勢四千餘人、日幡の城へさし向らる。此時士卒等皆申けるは、「此小勢にて日幡の城を攻られなば秀吉の大軍其後を討て、味方敗北せん事必定せり」といふ。元春、隆景等しく笑うて申されけるは、「我々皆秀吉が討て出て、味方の小勢を攻ん事をねがふのみ。味方遙々此所に後詰すれ共、秀吉堅く守て敢て戰ひをなさず。此故に味方に行ふ術なく、城を救ふ計なし。あはれ希くは、秀吉味方の小勢を侮り、討つて出よかし、一擧に存亡を決すべし」とて、豫め備をなし、當方の手當の勢、羽柴美濃守秀長、浮田の軍勢二萬餘騎なり。此勢日幡の後詰に向はゞ、小早川隆景馳向うて戰ふべし。若秀吉自ら勢を引て後を詰るものならば、元春、元長、經言等一同に切つて出て、雌雄を一時に決すべし。早く向うて日幡の城を鐵炮にて討すくめよ」と、勇敷下知せられけるに、猶崎をはじめとし、將士兵卒一同に、何様今日こそ羽柴、毛利勝敗の決すべき時ならめと思ひければ、我先に分捕して、武名を後世に殘さんものをと、勇み進んで押寄たり。扨日幡の城近くなれば、同音に鯨波を作り、鐵炮一千餘挺を先に備へ、入替々々打かゝれば、城兵是に色めき立ちて、既に落城せんとするを、羽柴秀長、浮田勢、敵は小勢なり、後詰して打破り、吉

掛山迄出陣ある。秀吉は吉川、小早川の兩將大軍を以て後詰する由聞えければ、二萬餘騎を引分て、後詰の勢に向ひ、備を立て、向城を構へ是を守せ、殘六萬餘騎の軍兵は城を取圍み、防堤を漸々に高く築上げけるほどに、水も彌增に高くなりて、高松の城中水深き事七尺餘、兵卒甚困窮して、櫓に登り或は樹の枝に簀の子を編附け、其上に座し日を重るに、昨日よりは今日は水增し、今日よりは翌日なん高く成る水なれば、終には此城水底に沈み、老少男女盡く魚の餌と成らんとて、悲しむ者こそ多かりけり。大將淸水長左衞門、水練の者を選び出し、洪水の下を潛り、吉川元春の陣へ城中の形勢を告たりければ、元春、隆景いかにもして此堤を切落し、城中の苦難を救ふべしと、さま〴〵評議せられけれども、秀吉、いかんぞや此堤を切すべき。陣の構堅固なれば、更に行ふべき術なく、徒に日を重ねければ、水は次第に增益せり。

○日幡城合戰

斯る折に、毛利の陣所廂山の東南に當つて日幡の城あり。城將日幡六郎兵衞尉、剛勇無雙の壯士なりしが、毛利家より當城加勢として、上原右衞門太夫元祐を以て共に籠城せしめたり。此上原は元春、隆景等が妹聟にして、毛利家に用ひ重く、倚賴の大將なりしが、いかなる事にや、反




高松の城
水攻の圖

より城の形勢を伺ひ見るに、三方は深き沼渺茫として、平安の時だにも人馬の通ひ成がたく、一騎打の細路のみにて、一方は廣き水堀幾重共なく掘並べ、必死と定めし上下勇士五千餘人、死地に有て生を思はず、所詮人力を以て攻撃すとも勞して功なかるべし、只水攻にしく事ある可らずと工夫有て、城中より弓を放ち鐵炮を打かけ、戰を催せどもかたく制して矢石を交へず、本陣を城の東の方蛙が鼻へ移し、西の方赤濱山より南へ遶り、東蛙が鼻の近邊迄、長さ一里有餘、廣さ三十間の堤を築せ、水扣の方には大竹を破てこれをあて、盤石といふものを製し、是を疊上げて兄部河の大流を堰止め、其餘の川々谷々の流悉く水道をつけ落し入れたりければ、洪水溶々として斯に流れ集り、四月下旬に堤を築かけ、今五月中旬なれば、梅雨瀧津瀬なして降來る程に、漸々に水嵩増り、高松の民家悉く水庭に沈み、庭の松杉浪越て、是なん樹に依て魚を求るとも得安かるらんとぞ覺えて、見る目も中々冷じし。秀吉下知して、此湖水の中へ大船數艘舁入させ、小西彌九郎、淺野彌兵衞兩人を大將として、臺なし已下の大筒を透間なく放懸け、喚き叫で攻たりければ、山川是が爲に震動し、聲江河を裂き、勢雷電を崩せり。去ほどに高松城防戰難儀のよし、追々藝州へ聞えければ、吉川元春、小早川隆景兩大將、因幡、伯耆、周防、長門の軍兵を駈催し、都合其勢四萬餘騎、備中國岩が崎の廟山に出張し、大守右馬頭輝元も、猿

利家の足輕を預り、武士の數に入りたる者の、恨ある相手を討果すべき筈なるを、己が恨の爲に主人の城に火を放ち、門を開き敵を打入る條、不忠とや云ん、獸心とや云はん、言語道斷、憎き奴かな。已後の見凝しの爲、引出して首を切れ」と下知有れば、士卒ども陣外へ引立てゝ、終に首をぞ刎にける。此園右衛門が弟與治兵衛といふ船頭、此事を傳へ聞き、兄園右衛門、毛利には不忠なれども、秀吉の爲に忠と成し降參せしを、情なくも殺せし事、恨猶餘りあり。己秀吉、此怨を報うべきぞと憤りけるが、文祿の時に至つて、秀吉朝鮮征伐の折柄、九州にて其恨をはらさんとせし、水主與次兵衛が所謂は斯に發れり。九州與次兵衛が難の事、後の篇に委しく記す。

○高松城水攻

去程に羽柴筑前守秀吉、惣軍八萬餘騎、高松の上なる龍王山へ押上げ、鬨を作る事三ヶ度、山鳴り谷應へ、天柱も崩れ地維も碎る計り、夥しともいはん方こそなかりけり。此城を守る大將は、淸水長左衛門尉とて、中國に雙なき智勇兼備の剛將なるに、毛利輝元加勢として、鐵炮大將難波傳兵衛尉、近松左衛門尉一千餘騎、城兵合て五千餘騎にて籠城せり。此中目に餘る寄手の多勢を少も恐れず、鐵炮を引かけ矢束解き、敵寄せば打挫んと、勢こんで待懸けたり。秀吉龍王山上

居たりしが、松田左衛門、日ごろ彼が功なくして足輕頭に取立てられしを憎みおもひ、此とき銘酊にまかせ團右衛門に申けるは、「人々酒宴の興を添んとて、或は謳ひ又は舞ひ、思ひ〳〵の肴をなすに、汝一人たゞ酒を呑むのみにして、つや〳〵言をさへ云はず、餘に興なき次第なり。元來汝は藝州にて、青海原を往來する船頭の子なりと聞り。船歌は覺えつらん、肴に一聲謳ふべし」と恥しめけるに、此團右衛門大に怒り、「某が素姓、御存じのごとく、親も弟も船頭なり。御好に候へば、船歌一番謳うて聞せ申すべし。されども船の上にて謳ふ事なれば、其眞似して謳ふべし」とて、傍に有りける大身の鎗提げてつと立上り、「此鎗を櫓と成し候ほどに、貴殿望れ候へば、船と成りて仰向に臥候へ。其腹の上に乘て船歌を謳ふべし」とて、松田に向ひ突懸るを、松田も怒て「此奴推參なり。我腹の上にて歌を謳はんとは一興かな」と、刀押取立上れば、鳥越、林を始とし、一座の將卒押隔て是を宥め、終に團右衛門を別の部屋へぞ連行ける。是より團右衛門は松田に甚だ恨を含み、何がな怨をなさんと巧けるが、不智不能の下郎なれば、邪智惡計も出でばこそ。所詮此城を敵の爲に攻落されなば、彼當城の大將にて、主君へ對し申譯はあるまじと心を定め、扨こそ假家に火を放ち、門を開いて降參に出でたる者なり。此趣、清正委細つぶさに言上しければ、秀吉、團右衛門を礑と白眼み、「己以前は下郎土民にもせよ、今は毛

降參」と呼つて、畏り禮をなす。城中より是を見て、「反賊は黑崎團右衞門なるぞ。討取や」とて五六十騎、切先を竝べ討て出づれば、淸正下知して、「降參の者を討すな」と先手に命じて鐵炮打かけ、無二無三に打て懸り、此敵を附入にして、難なく城中へ亂れ入れば、備前勢も搦手を打破り、前後より揉合せ、城將鳥越左兵衞、松田左衞門尉は加藤が手に討死し、林三郞左衞門は遁れ出て、高松の城へ落行ける。爰において冠山忽ち落城し、士卒に命じ火を鎭めさせ、秀吉へ委細注進に及びければ、秀吉大に喜び、褒美恩賞、其手柄に應じ皆悉く行はれぬ。加藤虎之助、降參の武士黑崎團右衞門を召連れ秀吉の本陣へ參り、此者の始終を言上に及ぶ。抑此黑崎團右衞門といふ者は、藝州吉田の土民なりしが、兄弟三人あり、兄は團右衞門にて、次は女子、弟を與治兵衞といふ。此妹毛利家に宮仕しけるが、土民に稀なる容色有りて、此時輝元の寵を受け、是が因にて兄團右衞門毛利に仕へ、足輕頭に命ぜられ、此城に籠りけるが、籠城のはじめ、大將林、鳥越、松田が輩、本丸にて上下打交ぜ酒宴を催しけるが、先籠城の始なれば、大將より士卒まで、あはれ此籠城首尾よく抱へ課せ、よき手柄を成してんと、心祝の酒宴なれば、何がな興に備へんとて、謠を謳ひ舞をまひ、思ひ〳〵に奏けるに、此團右衞門は、足輕の頭なれど、舊土民にて、謳舞ふ事は云ふも更なり、手拍子さへも間に中らず、迷惑して

忠家、二萬餘騎を引きて先陣に進み、都合其勢八萬餘騎、天正十年四月上旬姫路を發し、備中國宮地山を經て、澁櫛山より打入りけるに、宮地山に城あり、守る大將は乃美少夫七郎元信、數百人を以て籠城しけるを、備前勢浮田七郎兵衛に羽柴の近臣片桐祐作が勢を合せ押寄せ、暫時に城兵を降參させ、手始よしと勇み進んで、冠山の城へ押寄せたり。當城には林三郎左衛門、鳥越左兵衛、松田左衛門尉等二千餘騎、籠城して是を守る。備前勢又しきりに望んで是を攻んと乞ふ。依之加藤虎之助を相添へ、冠山の城を圍しむ。備前勢只一息に攻崩さんと、鬨を作て攻登る。城中小勢なりと雖も、大敵を些とも疼まず、弓鐵炮を透間なく射出し、嚴しく防ぎ戰ふにぞ、備前勢案に相違し、攻倦んで見えたりける。加藤虎之助此體を見て、「此城一時に落敗すべき模様にあらず。多勢を頼み、無謀に攻落さんとせば、味方の士卒多く死すべし」とて、備前勢と示し合せ、颯と一度に引取りければ、城兵其計あらん事を恐れ、敢て又是を追ず。其夜城中に出火あつて、猛煙頻に雲中へ立上り、折節南風強く吹て、城中是を防んとて、騒動せる事甚し。寄手是を見て、「すは城中に異心の者ありて、火をかけて味方を呼ぞ。進め〳〵」といふ程こそあれ、一時に鬨を作り、勇み進んで攻上る。加藤虎之助清正、一番に馬を駈出し、逆茂木引除け、隍際へ駈行く所に、忽ち城門を内より開き、歩立の武者一騎寄手の軍前へ走來り、「降參

皆謹んで恩を謝す。扨日蓮宗は今度の宗論發起不傳坊、建部紹智、大脇傳介、此三人强て法論を望み、天下の政道を輕しめ、騷動の基を起す曲者なれば、日蓮宗負けずとも罪に行ふべき者なれば、諸人の見こらしの爲、先の口書の望に任せ、卽時に首を刎られける。此三人、此ときに至り無念限りなく、己が我慢心より起りし事を、信長公を深く恨みまゐらせ、「百日の間には、此恨を思ひ知らすべき」と、罵て斬れける。又日銑等四人の僧達は、貞安が望に任せ、沙彌と成して貞安に下されけるが、後秀吉天下の武將と成り給ひし時、貞安和尙台命により、京寺町に一寺を建立し大雲院と號し、爰に轉住せられけるに、彼四人の僧達を召連れ入院有ければ、日蓮宗の本寺よりさまゞゝ詫して、是等の僧達の暇を乞ふ。貞安和尙もさのみ人を恥かしめじと、早速暇を出されければ、日蓮宗大に悅び、其報にとて、大雲院の本堂の緣板を、日蓮宗の本寺より送り、是を張せけるとぞ聞えし。

○冠山落城

扨も播州には羽柴筑前守秀吉、備中、備後を征伐せんと、播磨、但馬、因幡の軍勢を招きけるに、馳集る兵士雲霞のごとく、其上岡山の城主浮田八郎秀家幼稚なれば、軍代として七郎兵衛

も法華の妙も、異なる事なきと云はれたれば、第四の妙も、第三の妙も、第五の妙も貫通し、諸宗の妙も、法華の妙も同じ一理なるゆゑに、汝知らずや法華の妙よ、と答しものなり。又四十餘年未顯眞實の一句に泥み、爾前四十年の妙は捨るといへば、即ち法華の妙も捨つるなり。法華の妙は捨ぬといへば、諸宗の妙も捨てぬなり。是に至て日蓮義衆僧閉口す。

廣庭に群集せる道俗等、いまだ勝負を知らざりければ、因果居士大錫杖を振て大音揚げ、「日蓮宗負たり」とありけるに、數千百の聽衆の男女、一同にどつと鬨の聲をあげたりける。此時三人の判者目附の役人、森、矢部兩人立會て、日蓮宗の僧四人の三衣を剝取り、卓に錺りし法華經を貞安に賜りければ、日蓮宗の本末寺、所化、能化に至る迄面目を失ひ、ぬけ〴〵に立去ける。右法論の大概を記す。委しくは安土問答經抄、全部五冊、つまびらかに記して既に板行す。

○淨土宗日蓮宗賞罰

既に宗論の勝負分り、信長公淨嚴寺に入らせ給ひ、貞安を近く召れ、「汝は天下無雙の高僧なり」と讃美し給ひ、持給ふ軍配團を貞安に賜り、猶法論勝利の賞として、玉念和尚に銀二百兩、貞安に同五百兩、景秀長老に同三百兩、瓦坊法印に同二百兩、因果居士に同二百兩を下し賜へば、

第四の妙と云ふが合點がゆかぬぞ、夫はどの說法の事ぢや、と尋ぬるなり。

○貞安答て曰く、「法華の妙よ、汝知らずや」貞安又曰く、「捨るか捨ざるか」と、しきりに責れども、日蓮義の四僧、一句も出でず閉口す。

貞安の答に、方座第四の妙といへる名目は、諸の經敎の中に曾てこれなき事なり。貞安自方座第四の妙といふ名目を返答し、捨つるか捨てざるかといひしは、法華玄義に曰く、方等、般若に論ずる所の妙といふは、今の法華の妙と異ならずと、天台大師も判釋し給ふ。又曰く、心を名づけて妙とす、有無を以て思度すべからずと云々。又同く大師の觀經の疏に曰く、經の第一義諦は、諸法實相の妙なりと釋し給ふ。是の文を以て證とし、方座第四の妙とは名付けたるならん。方座第四といふ時は、前に云ふ五時說法の中、第四の般若時の妙の事なり。般若の二字を飜譯して智惠と名づくる、一切諸法、智惠を離れて妙の理に至る事あらんや。淨土宗に尊み用ふる三部經の中、無量壽經は正しく方等部の經なり。方座第四般若の妙を捨ざれば、方座第三方等の妙も捨てられず、旣に云ふ、天台大師も方等般若の妙と法華の妙と少しも違はぬとの玄義、判釋の證文も明白なれば、貞安是を含て、方座第四の妙の一字は、捨るか捨ざるかとの難問なり。是貞安古今に秀し發明なり。然るを日銑をはじめ、日蓮義の僧達、方座第四と云ふ名目を合點せずして、四十餘年の說法、華嚴、阿含、方等、般若の四妙の中には、何の妙ぞやと尋たるなり。時に貞安汝知らずや、法華の妙よと答へしは、彼天台大師の方等般若の妙

道し、五十年の間法を説き、七十九歳にして涅槃に入り給ふ。此五十年の説法を五時の説法といふ。其次第は、第一華嚴時、三七日の間の説法華嚴宗、此説法より建立せり。第二阿含時、十二年の間の説法なり倶舍、成實、戒律、法相、眞言等の宗旨、此説法より建立せり。第三方等時、十四年の間の説法なり禪宗、淨土宗。第四般若時、十六年の間の説法なり三論宗。第五法華時、八年の間の説法なり天台宗。此五時説法の中、第一華嚴時、第二阿含時、第三方等時、第四般若時の四時の説法、皆いろ〳〵に法を説くといへども、方便の力を以て、四十餘年の間はいまだ眞實を顯はさず、眞の説法といふは、第五法華時、八ヶ年の間なりと説給ふ、經文の意なり。日蓮宗は天台宗の分派にして、第五法華時の宗なり。淨土宗は第三方等時の宗旨なり。其四十餘年以前、いまだ眞實にあらざる方便の説の大經の文を以つて、實大乘の法華宗に法問の返答するはあたらずと云ふなり。

○貞安答て曰く、「未顯眞實の文を以て、爾前を捨るといふは、方座第四の妙の一字は、捨るか捨ざるか」

此註、終に釋し明す。

○日銑曰く、「四十餘年の四妙の中には、何れの妙ぞや」

釋尊四十餘年の説法の中に、方座第四の妙といふは、何れの妙ぢやぞと問かへしたるなり。畢竟方座

じき物ぢやがと問ふなり。

○貞安答て曰く、「淨土經に曰く、善く方便を立て、三乘を顯し示す」

三乘は前にいへる小乘、權大乘、實大乘の事なり。此經文の意は、三乘ともに衆生濟度の佛の方便の說なれば、いづれなりとも、其機に應じ合たる法を修せよとの心なり。されば取所あつて是を取らば、其の餘の諸經、いづれを捨たり共成佛すべきとなり。

○玉念又答て曰く、「大經に曰く、一向專念、無量壽佛」

大經とは無量壽經なり、小經とは阿彌陀經なり。觀經と合して是を淨土の三部經と號す。貞安の善立方便顯示三乘の答にては少し行屆かぬ故に、玉念うしろより此答をせられしなり。一向專念とは、ひたすら餘の事をまじへず、專無量壽佛を念ぜよとの文なり。天竺にては阿彌陀佛と云ふ、漢土に是を飜譯して無量壽佛と云ふ。さればひたすらに阿彌陀佛を念ぜば、餘の經は皆捨るなり。捨ざれば一向專念の意にそむくなり。

○大藏坊の曰く、「無量義經に曰く、種々說法以方便力、四十餘年未顯眞實」

日銑の問かけ遲滯すべき體なれば、大藏坊出て、此文を以て淨土宗の無量壽經を以て返答するを難じたり。經文の意は、釋尊淨飯王宮にて、摩耶夫人の胎より出生し給ひ、十九歲にて出家し、三十歲にて成

の外の餘の法を、捨閉閣拋といふ」

法然上人の撰擇集幷大原問答にも宣ひしごとく、念佛の外の修行は、聖道門とて事むづかしく行ひがたき法なり。念佛門は至て行ひ安き道なり。故は信解品に曰く、漸々に修し學びて、悉く當に佛道を成すべしと說き、又寂莫として人の聲なき所にして、此經を讀誦すと說き、譬喩品には、智なき人の中にて此經を說く事勿れ、若利根にして、智惠明了に、多く聞強く識て佛道を求る者有ば、此の如き人の爲に說べしと云々。かやうに事むづかしき修行にして、智惠なくしては法を聞く事もならず、修行し難き法なれば、心易き法を行はせよ、念佛は行住座臥をきらはず、佛道修行に是より心易きは餘宗に曾て之なし。されば法然上人の一枚起請にも、釋迦一代の法を覺えたりとも無智の輩に同じく、智者も愚者になり、觀念も、修行も、座禪も、戒行も、何もかも閣き捨て、經卷陀羅尼をも閉置き、念佛の一法に拋ち、愚智無智の尼入道に同うして念佛を申さば、彌陀釋迦二尊の御心にかなひ、極樂往生遂げんとの文言なり。他宗の經卷、陀羅尼、座禪、觀念、修行をあしきとて、捨よ、閉よと云ふには非ず、脇ひら見ずに、一向念佛を唱へよとの事を、捨閉閣拋とは云ふとなり。機は發なりとて、弓を放つの意にて、すは今ぞ念佛を唱ふるといふ期を、念佛を修する機とは云ふ。

○日銑の曰く、「念佛を修する機には、法華經を捨る經文ありや」

念佛を唱ふる機には、法華經をも捨て、成佛すべき證據有りや、我法華經を捨て、極樂往生はなるま

是先の念佛無間の意趣を明し、其答をなさんとす。此捨閉閣抛とは、法然上人のあらはし給ふ撰擇集に、一切諸經を捨閉閣抛と云ふ。是念佛の外より一切所有經文を捨よ、閉よ、閣よ、抛よ、となしふるなり。此語卽ち日蓮宗の念佛無間に墮落するといふ謂れなり。其故は大智度論に曰く、大乘を以て小乘を誹は、諸佛の慈悲なり、小乘を以て大乘を誹は、佛の怨敵なりと說り。經に三乘あり、曰く小乘、曰く權大乘、曰く實大乘是なり。法華宗は、此三乘の內の實大乘より建立したる宗旨なる故に、他の小乘より立てたる宗旨を謗は、罪にはならずして、是菩薩の慈悲なり。他宗より法華を謗は、諸佛の怨敵なれば、念佛門の行者は、諸佛の怨敵なるが故に、無間地獄に落ると云ふなり。淨土宗より法華宗を是とさしては謗れども、前に曰ふ法然の撰擇集に、一切の諸經を捨よ、閉よ、閣よ、抛よ、といへば、彼大乘の法華宗を小乘の淨土宗より捨誹るにあらずや。又法華經譬喩品に曰く、若人此經を信ぜずして誹ば、一切世間の佛の種を斷ち、乃至其人の命終りて、阿鼻獄に入らんと說給ふ。是又法然の捨閉閣抛のをしへにては、此法華經も捨閉るなり。法華經を捨て餘の法を信ずれば、おのづから誹謗の罪にしづむなり。扨此時の問は、此方の宗旨は淨土宗を念佛無間と誹る譯は此通りぢやが、其方今の答に、法華の彌陀も淨土の彌陀も一體なりといふからは、法華經にかぎらず、一切諸經を捨閉閣抛して、念佛のみにて往生するとは、何の經を據として說出したる言葉ぞやと、打かへして問うたるなり。

○貞安答て曰く、「捨閉閣抛とは、法華に說所の彌陀を捨るに非ず。念佛を修する機には、念佛

す。かくのごとく所々に有るが故に、念佛の義有りといふなり。

○貞安曰く、「法華にある念佛を、何ぞ無間の業と云ふや」

そのごとく法華經の中に、念佛の事を所々に説置給ふ尊き念佛なるを、念佛無間に墮るとは、何を以て云ひけるぞと問ふなり。

○日銑曰く、「法華の彌陀と淨土の彌陀とは、一體歟別體歟」

日銑念佛無間の返答をせずして、此問を設けておのづから念佛無間の趣意を説んとて、別に問ひかけたるなり。釋尊法華經の中に説給ふ所の阿彌陀佛と、淨土の三部經に説給ふ所の阿彌陀佛とは、一體なるか又別の彌陀なるかと問ふなり。

○貞安答て曰く、「彼も是も彌陀は一體よ」

法華經藥王品に曰く、若女人ありて此經典を聞き、説の如く修行せば、即安樂世界阿彌陀佛の國に往生して、大菩薩衆に圍繞渇仰せられ、蓮華の中の寶座の上に生れんと説給ふ。是法華經の要文なり。華嚴經に曰く、一切諸佛の身は是一佛の身なり、一心一智惠力も亦々然なり。此のごとく經文の意を以て、法華の彌陀も淨土の彌陀も、彼是一體なりとの答なり。

○日銑曰く、「彌陀は彼是一體ならば、何ぞ法華の彌陀を捨閉閣抛といふや」

右之外福西儀兵衛、津田八右衛門兩人、足輕二百人、小者百人を副られ、非常を誡め火事を防がせ給ふ。扨も此宗論を聞んとて、近國遠境の諸宗道俗、安土に馳集る事引もきらず、門外に居餘り、田畑野邊に充滿し、錐を立つべき畾地もなし。日蓮宗の小童、金銀を鏤めたる卓に、法華經一部八巻螺鈿の筥に入れ、幷に天台大師の三大部（玄義 止觀 文句六十巻）を置竝べ正面に直す。引添ひて四人の法問僧席に著ば、京都本寺の住僧千三人、近國本末寺の日蓮義百餘人、鷹峯、松ケ崎、山科、深草、鷄冠井、善聖寺、六ケ所の檀林の能化所化四百餘人、南の局より縁側に居餘りて列座す。淨土宗には小僧二人、經机に三部經を置き、是も正面の右に直す。正福寺玉念和尚、西光寺貞安和尚只二人、右の方の縁側を傳ひ、右座に席を定む。跡より遍照寺洞庫和尚、一心院助念和尚、後詰として後に座す。信澄下知を傳へて法論をはじむ。

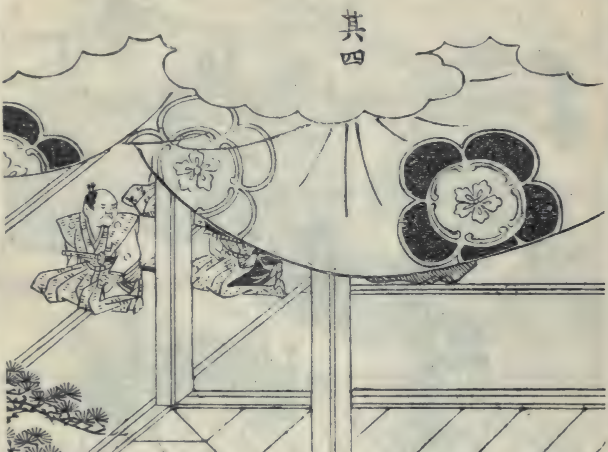
○貞安先問て曰く、「法華八軸の中に念佛の義ありや」

法華經一部八巻の中に、念佛の事ありやなしやと問ひかけたるなり。

○日銖答へて曰く、「念佛の義あり」

法華經の中に、なるほど念佛の義有との答なり。方便品に曰く、深き心を以て念佛す。又曰く、念佛の行者は皆佛道を成す。又曰く、一度南無佛と稱すれば、皆已に成佛す。安樂行品に曰く、一心に念佛




其四




其三




其二




安土宗論の圖

法隆寺瓦坊　法印專覺
金華山　十界因果居士

聽衆

延暦寺　三井寺　學匠二人宛
東大寺　興福寺　碩德二人宛

御名代

織田七兵衛尉平信澄

御奉行

菅谷九右衛門
堀　休太郎
長谷川　竹

御目附役

淨土宗方　矢部善七郎
日蓮宗方　森　蘭　丸

繪本太閤記　三篇卷之六

○安土宗論

去程に淨土宗、日蓮宗法論の當日に至りければ、安土の城下淨嚴院の方丈に集り、既に宗論におよびける。列座の次第左のごとし。

北方右座　　淨土宗　正福寺靈譽玉念
　　　　　　　　　　西光寺聖譽貞安

南方左座　　日蓮宗　妙覺寺華光院日諦
　　　　　　　　　　妙滿寺久遠院日雄
　　　　　　　　　　頂妙寺前住日銖
　　　　　　　　　　妙顯寺大藏坊

判者三人
南禪寺楞嚴院　鐵叟景秀長老

繪本太閤記 三篇第六之卷 目錄

安土宗論
淨土宗日蓮宗賞罰
冠山落城
高松之城水攻
日幡城合戰

建部紹智
大脇傳助

矢部善七郎殿

浄土宗の書に曰く、

此度日蓮宗と法問の儀、被為仰附奉畏候。拙僧等得勝利候はゞ、相手の僧共我々致弟子、為念佛之行者、為致極樂往生度候。若拙僧共於負申者、如何樣とも御沙汰に可被任候。依而一書如件。

月　日

正福寺靈譽玉念
西光寺聖譽貞安

矢部善七郎殿

斯くのごとく認め差上ける。信長公、日蓮宗の願書我慢にして、政道を亂すべき者どもなれば、法論の時も嚴しく警固せしむべき旨、兼て仰附けられける。

四人討死す。末子太郎左衛門と伯父貞安和尚は、死をのがれて江州安土に落来る。信長公貞安が積學廣才を尊み、安土の田中に一宇を建て西光寺と號け、是に住しめらる。此貞安、玉念和尚と安土同宗の住職なれば、玉念此度の始終を貞安に物語り、いかゞあらんと議せられけるに、「何れ宗論の事は私に非ざれば、先々京都本寺へ申上げ、其下知に任べし」と、玉念に代り京惣本寺知恩院に參上し、右の仔細を言上に及ぶ。是によつて當職活譽上人、宗論の事玉念貞安に免許あり。且泉州堺徧照寺洞庫和尚と、京都東山一心院の助念和尚兩人を安土に參向せしめ、宗論免許の事を信長公へ言上ある。日蓮宗の本寺中よりも、同時に惣代として本國寺日佐上人安土に參じ、是も宗論の儀を訴へける。依之信長公、雙方とも論後の仕置望もあらば、書附を以て申出ずべき旨、矢部善七郎に仰出さる。畏つて差上ぐる日蓮宗の書に曰く、

今般淨土宗玉念、貞安の兩人と、當宗妙覺寺日諦、妙滿寺日雄、頂妙寺前住日銖、妙顯寺大藏坊と宗論免許之段承知仕候。當宗論に勝候はゞ、玉念、貞安が首を刎られ、日本の念佛宗停止之儀、御威光を以て被仰附可被下候。萬一當宗負候はゞ、我々共一命を可被召取候。右之段宜御披露希上候。誓狀如件。

月　日　　不傳坊日忍

「いざさせ給へ、我々も共に京都へ罷上り本寺へ訴へ、是非々々此宗論の落著を見るべし」と、宿所へも歸らずして、直に不傳坊を引連て、京都さして急ぎける。其翌日、當宗の本寺妙顯寺に至り、貫主上人に對面し、右の次第を物語り、宗論に及ぶべきや否やを伺へば、貫主申給ふやうは、「彼正福寺の玉念、尋常の者にあらず、不傳ごときの論じ勝べきやうなし。先十七箇の本寺中と談じ、博識の僧を選び、問答に及ぶべし」とて、本寺中へ使僧を遣り、俄に十七ヶ寺の上人達妙顯寺に會合し、兎や角やせんと詮議區々なりけるに、妙覺寺の日諦進み出でて申けるは、「抑安土の地は、當時武將信長公在城の地なるにより、繁昌京都に十倍せり。諸國の人民爰に集る。今其地に於て宗論し、淨土宗に論じ勝つ者ならば、殘る宗旨にも勝たる同前なり。是當宗旨の榮んとする時の至りしなり。されば京都の本寺は云ふに及ばず、近國近在、檀林の能化所化を嫌はず、學力辯才ある僧を選み出し、是等皆一同に相手と成り、助合て問答せんに、論じ負る事ある可らず」爰において衆議是に一決し、選み出せる人々には、先妙覺寺の日諦、妙滿寺の日雄、頂妙寺の前住日銖、妙顯寺の大藏坊、是等四人は、其智舍利弗を欺き、辯舌は富樓那に勝り、論議は迦旃延にも劣ぬ智識達なれば、建部大脇大に悦び、この宗論當宗の勝利疑ひなしと、小踊して勇みける。爰に越後國上杉謙信、能登國穴水の城を攻落し、城主長氏父子

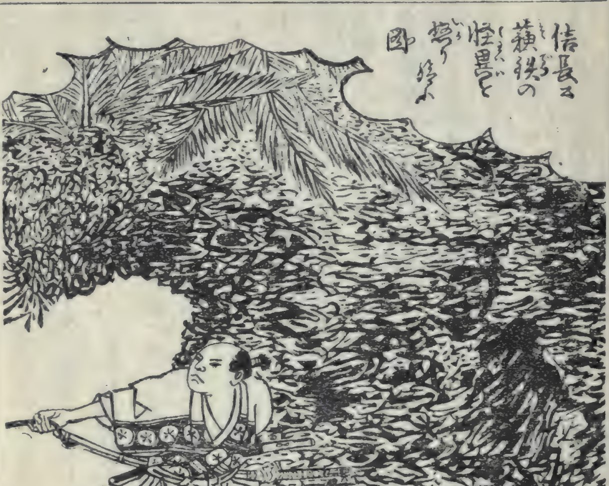
○建部大脇發宗論

去程に大脇傳助、建部紹智の兩人は、正福寺より直に妙山寺へ馳きたり、不傳に向ひ大息つぎて申けるは「我々兩人、正福寺の玉念に問答せんと彼寺へ參じ、四十餘年未顯眞實の經文を以て難問せしに、玉念我々を大俗なりと罵り法問に及ばず、法華宗門の沙門を召連來れよ、問答せんと申候。是必ず貴僧をさして相手にせんと云ふなるべし。只今我々と同道して、正福寺へ至り給ひ、玉念を只一問に閉口させ、我々が趣意を晴し給へかし」と、顏色を變へ申けるに、不傳つら〳〵是を聞き「玉念たとへ無智文盲の僧なり共、傍を相手に何ぞ法議を論ずべき。彼と法問せんとならば、疾くにも我に知らせ給はゞ、論ずべきやうもあんなれ。無益の事を引出し候て、今は此儘に捨置がたし。其故は當時我が談議に歸依し、改宗する者數を知らず。然りといへども當宗門の深き要道をしらず、只假初に受法せし俗等なれば、此法問を其儘に捨置ては、他宗は勿論、當宗旨の者までも、思ひ〳〵に改宗せん。祖師日蓮大菩薩へ對しまゐらせ法敵と相成候。我彼玉念坊主と今にも問答に及ぶべけれども、我は所化の僧なり、玉念は一寺の住僧なれば、一應京都へ馳上り、本寺の下知を受て後問答にも及ぶべし」と申ければ、兩人進んで、

ふ日蓮宗の信心者有り、朝夕不傳上人を尊み、坊主まさりに法論をなす、我慢不類のをのこ成しが、此兩人、正福寺にて玉念和尙の說法日々群參なすを憤り、「彼玉念に一句の不審を言かけ、返答なくば高座より引おろし、此安土の市中にて淨土宗の說法を禁ずべし。若云負なば玉念坊主一刀にさし殺し、潔く切腹すべし」と申合せ、正福寺の說法最中へ進み入り、大勢の聽衆を押のけ、玉念和尙の高座の下にどうど居り、大音にて、「いかに玉念和尙、一つの不審を問申さん。經に種々說法以方便力、四十餘年未顯眞實、と說給ふを、汝爾前の宗旨を勸めて、無智の俗を迷すは、大外道に非ざるや。此返答はいかに」と問ふ。玉念和尙是を聞て、「旁は俗人の身として法問をせらるゝ條、佛道歸依の餘とは云ながら、我は不肖なれども一寺の住職、大俗と佛法の問答せんは愚僧が不覺なり。旁の宗門の沙門たる人を同道せられよ。其時相應の返答せん」とありければ、紹智、傳助大口開てから〳〵と笑ひ、「汝爾前無得の經文を以て宗旨を立て、無智の尼入道をたらし欺くとも、實大乘の法華の聖人達と、いかにや問答がなるべきぞ。片腹痛き申條哉」と嘲り笑ふを、正福寺の旦那講中立寄て、「說法の妨する曲者、それ引出せ」といふ程こそあれ、大勢一同にかけ集り、手取り足取り門前へ突出し、また說法をぞ初められける。

勤し、晝夜を分ぬ安土の繁昌、京鎌倉に十倍し、寺社なんども夥しく建まじり、萬民爰に時を得て、御代長久を祈ける。されば日蓮宗の僧徒、妙國寺蘇鐵の不思議より、國々の人民法華に信服の色あれば、先此安土の城下に參り、諸人を集め談議を始けるも、宜なりと言つべし。又安土西の郷といふ所に、正福寺といへる淨土宗の寺有り、此住僧は上州小島哀愍寺の開基にて、靈譽上人玉念和尙と申せしが、江州安土繁昌なるにより、此正福寺へ轉住せられける。此時當寺に於て淨土の說法をはじめられけるに、淨土宗不退の輩、わづかに爰に詣で來て、說法を聽聞す。玉念、參詣人の少きをも厭はず、「法然上人淨土專念の宗を建給ひ、阿彌陀の本願、釋尊の金言六字の中に歸命して、南無阿彌陀佛と念ずれば、八十億劫生死の罪障一時に消滅し、其念速に光明の中に納め給ひて捨給はず、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、五逆十惡具諸不善、一念稱名卽得往生の心を說さとし、五障三從の女人も、惡業煩惱一文不知の輩も、扶け救はんとの御誓願なれば、賴もしく有難く、深く信じて念佛すれば、善人も惡人も、男も女も、皆往生を遂るなり」と、辯舌淸明、流水のごとく演られけるに、參詣の男女一同に、南無阿彌陀佛と唱へける。始の程は聽聞する者も少なかりしに、次第々々に群參し、彼日蓮宗の妙山寺と、何れが聽衆の多からんと、安土の市中此沙汰のみなり。爰に建部紹智、大脇傳助とい




信長公蘇鉄の怪異を斬り給ふ圖

の曹操、濯龍潭の梨樹を切つて死せしと云ふ。古木の靈又犯す可らず。此蘇鐵も頗る靈あり、此儘にて堺の津妙國寺に返し遣すべし」と仰渡されければ、菅谷九右衛門畏り、多くの人夫を以て掘起させ、其日安土の城を出し、終に妙國寺へ返しける。然るに遠近の日蓮宗の貴賤男女、妙國寺の蘇鐵こそふたゝび奇瑞を顯して、鬼神も恐れ震ふ信長公も、法力にや感じ給ひぬらん、妙國寺へ返し給ひたるは、有難き宗旨の功かなと、手を引き肩を押て、妙國寺の群集以前に倍し、夥しき事云はんかたなし。されば近國遠國の淨土宗、親鸞宗、禪宗、眞言の僧俗ども、此奇瑞にや服しけん、改宗する者數を知らず。爰に安土の町の東中の鄕といふ所に、妙山寺といへる日蓮宗の寺院あり。此寺へ京鷹が峯の檀林の所化不傳と云ふ僧來り、三七日が間說法あり。元來學力辯才ある僧なりければ、安土中の男女群集して其說法を聽聞し、信心を發ける上、兼て妙國寺の蘇鐵の不思議、彼是おもひ廻らすに、何さま餘の宗旨には遙に勝り、祖師日蓮大聖人の功德今に著明し、誠の成佛得達は、此宗旨にこそあんなれと、代々傳る宗旨を捨て、日蓮宗に心を傾け改宗する者、安土の市中にて凡八千人に及べり。元來此蒲生郡安土と云へる所は、物さびたる在鄕なりしに、此頃信長公爰に城を築き住せ給へば、桃李物いはねども、人自然道をなすとかや、商賈僧俗寄集り、所せきまで家居をつらね、諸國の大名郡縣まで皆々此城へ參

と宣ふにぞ、氣早き蘭丸、手燭を取て先に立ち、遣戸を開て緣側に出れば、信長公も追取刀にて立出給ひ、傍をきつと見給ふに、月ははや西山に落入て、あやめも分ぬ暗き夜に、松吹く風颯々と物凄く、何に聲の有りけるぞと猶豫ふ内に、以前の如く怪しき聲にて、「妙國寺へ歸らふ〳〵」といふより早く、森蘭丸つか〳〵と廣庭に下り立ち、聲をしるべに立寄りて伺へば、まがふべくも非ず、蘇鐵の聲を出すなりけり。立歸りて御前に手を突き、「今の聲は蘇鐵の樹より發り候」と申す。信長公大に笑はせ給ひ、「彼蘇鐵、先に枯たりしを、再び青々と榮たるも怪しからずや。此樹數百年を經りたれば、妖怪をなす物ならん。夜明なば、士卒に命じ、悉く切りすてさせん。よしなき事に勞せしよ」と、もとの寢所に入らせ給へば、蘭丸は御次の間に直宿して、程なく東方しらしらと東雲にこそ成りにけり。信長公最早く起出給ひ、菅谷九右衛門を召れ、「人夫三百人を以て、一時に蘇鐵を切棄べし」と命ぜらる。九右衛門畏り、頓て三百人の士卒に斧を持せ、御廣庭に罷出で、信長公の再命を待つ。時に信長公小姓近習數多召連れ、緣側に褥を敷せ、爰に出て御覽あり。菅谷下知を傳れば、三百餘人の士卒一同に蘇鐵の下に立寄り、斧を上げて切らんとするに、忽然として大地に倒れ、血を吐て悶絕す。菅谷大に仰天し、信長公の御前に畏り、「是はいかに候や」と伺ひ奉る。信長公暫く物をも宣ず、默して御座たりけるが、左右に向ひ、「魏

に青ばみて、終に舊の如く榮ければ、堺の津は云ふも更なり、畿内南海の國々迄、此噂甚しく、法華經の功力にて、枯れたる木の再び榮え侍る事、末世の今に至りても斯る奇特のあるぞかしと、此蘇鐵を拜まんとて、男女老少市をなし、晝夜絶間もなかりける。信長公は、此蘇鐵の不思議を忌しく思召しけるに、京都の洛中洛外、江州安土の邊迄、甚しく是を沙汰し、日蓮宗の者共は、僧俗の嫌ひなく、打連れ〳〵妙國寺へと參詣し、只彼蘇鐵を拜しければ、今は此蘇鐵の爲に世の中一際騷々しく、信長公心に是を怒り給ひ、且は政道の妨なりとて、猪子兵助を使者と成し、妙國寺へ遣り給ひ、彼蘇鐵を所望せらる。妙國寺の住僧、さま〴〵是をわびけれども、少も用捨し給はず、人夫をかけて彼樹を掘出し、終に安土の城へ引れける。扨も妙國寺の蘇鐵こそ、信長公の御懇望にて、安土の城へ移さるゝよと云ふ程こそあれ、其道筋へ出て見る貴賤老若、恰も蟻の群るが如し。安土の御城近く引入れけるに、信長公天守に上り給ひ、遙に此樹を御覽じ、「實も希代の大木かな。愛すべき物なり」とて、城の廣庭に植させられ、一時の詠に備へ給ふ。然るに又もや怪しき事の出來にけり。信長公或夜更がてに目覺め、獨座しておはしけるに、廣庭の方にしわがれたる聲して叫ぶ音す。怪み耳をすまして聞給ふに、正しく「妙國寺へ歸らふ歸らふ」と云ふ。こは奇怪なりとて、「誰かある」と召に、蘭丸「候」と答ふ。頓て召され、しか〴〵

絕入層霄富士巖　蟠根直厭三州間
六月雪花飜素毳　何處深林覓白鵰

又いやしきことぐさにも、富士低しされども續く山もなし、など申すたはれ歌も候ひて、實に希有の名山なるべく候」と申上ぐる。信長公興に入らせ給ひ、引出物數多賜り、夫より道を急がせ給ひ、四月十日、安土の居城に歸らせ給ふ。

○蘇鐵樹之怪異

此頃不思議の事の有りけるは、泉州堺の津に妙國寺といへる日蓮宗の本院有り。本堂の庭に、年經りたる大蘇鐵あり、根は一株にして、枝數五百餘、徑二十八間餘にして、枝葉繁茂し、日蔭をも洩さず、堺の地を往來する者、必ず爰に詣來て、此蘇鐵を稱する事夥し。然るに近年枝葉ともに黃ばみ、當に枯れなんとす。寺僧等水を洒ぎ鐵を木に指し、さまぐ\に手を盡して生活せん事を計れども、日を經て終に枯れはてたり。今は詮方なく掘捨んとしけれども、類希なる大樹にて、容易穿つ事なり難し。爰に於て住僧、京都の十五本寺より、學力勝たる高僧を五六輩招き、蘇鐵樹の下にて法華經を轉讀する事一千部、不思議なる哉、枯果たりし大樹、次第々々

の人および牛馬の通ひを停め、實に信長公の御威勢、盛なりと云つべし。駿河國に至り給へば、名も高かりき富士の根の、時知らぬてふ白雪の頂に降積て、朝日影に映じ、風色いはん方なく、信長公頓て此所に馬を止められ、細川刑部太輔藤高を召れ、「此景色を只に止んや。歌よめ」と仰けるに、藤高謹んで畏り、「和國に並びなきも理、異邦の人すら此芙蓉峯の名にめでて詩を作り侍るものを、此國のふるき歌人、玉の詞、金の句ども詠じ盡せり。卑臣如きの此山をよみほぐせんも罪深く候」と、恐入つて固辭するに、信長公笑はせ給ひ、「扨何として此山を富士と申し號しやらん」と又仰ありければ、藤高答て申しけるは、「此山なん、人王七代孝靈天皇の御宇、一夜の内に涌出たるよし申し傳ふ。此山の神なん、女神にまし〳〵、士を富さんと誓ひ給ひ、富士とは號け候由。又の說に、春夏秋冬雪の盡ざるをもて、不盡と申すとかや。萬葉集にも不盡の文字見えて候。又古歌は定家卿の歌に、

なか〳〵に雲より上はいさ知らず見えぬる程も高き山哉

家隆の歌に、

餘の山の高根々々をつたひ來て富士の裾野にかゝる白雲

もろこし人の此山を詩に作りて、

て制し給へば、光秀猶も進み寄り、重て詞を出さんとする所を、短氣の信長こらへかね、つゝと立ちて、光秀が髻を左の御手に取て引伏せ、右手の拳を握り、頭も碎けよと六つ七つ叩給ひ突倒し、座を立ちて入給ふ。並居る諸士手に汗握り、息を詰てぞ控へ居る。光秀は諸士の見る前小兒の如く面を打れ、立ちも立たれず齒を喰しめ、頭上の汗は煙の如く、さながら無念の氣色なれば、細川刑部太輔藤高、光秀の前に居寄り、さま〴〵に申し宥め、「君御心易く思す餘り、當座の御怒のみにて、深き御咎め有るべうも覺えず。殊更御酒きこし召しおはしませば、足下必ず心に掛る事なかれ」と言ふ。光秀面の色を改め、「我命は疾くより君に捧げ奉る上は、何ぞ是式の御嘖を心に止め申すべきや。構へて心安かるべし」と答へける。一座の諸將とり〴〵に其席を取なして、皆々退出したりける。翌日信長公先の四人に仰附けられ、軍兵二百餘人彼惠林寺に押寄せ、風上より燒草を積み、火を放て燒立れば、折節風の手強して、山門、本堂、金堂、方丈、鐘樓に火移り、住持快川大通智勝國師を始めとし、諸寺の長老六人、單寮十二人、平僧、兒、小僧四十三人悉く燒殺され、黒煙炎々と只一時の灰燼と成りけるは、哀なりし事共なり。其翌日此所を御立有りて、上方路に赴き給ふ。駿河、遠江、三河の本道は、街を造り石を除き、斷たる橋は是を繼ぎ、渡りの船驛の警固、國々郡々の守護人より巖重に營み、往來




信長怒て光秀を打擲
図

業の道理にあらずとて、密に彼浪人どもを落さしむ。是によつて信長公の討手、寺中を普く捜ども、一人も捕へ得ず、かくと言上に及びければ、信長公大に怒り給ひ「悪き坊主原がふるまひかな。寺も人も一同に燒盡し捨よ」とて、津田九郎次郎、長谷川與次郎、關小十郎右衛門、赤座七郎右衛門等に命じ給ふ。時に惟任日向守すゝみ出て諫めて申しけるは「御諚さる事には候へども、當寺は年久しき伽藍にして、殊更快川和尚大德の聞え高し。然るを一時の御怒りに燒盡し給はん事、宜しき事とは覺侍らず。尤御諚に違ひ候は罪すべきに當れりといへども、さる重刑に行ひ給ふ罪にもあらず。もと人の命を助けんとて、命に背き候事は、僧の業にて候はずや。御怒りを宥められ、寺僧皆々追放せしめ給ふべし。前にも比叡山を燒はらひ給ひ、ちかくは本願寺を開かせ、其門徒等數も知れず誅戮し給ひ、世の佛法歸依の輩は、君をさして佛敵法敵と恨み候。元來御心荒々しくましまする故、かゝる情なき御仕置共數多く候」と、憚なく言上す。信長公は、此數年餘り佛法世に蔓り、政道にも背きし事多かりければ、國々の寺院を燒て田畠とし、僧どもを百姓に成し、國の益に備へんと思しければ、光秀が諫言甚だ御心に染せ給はず。元來短慮の大將なれば、大の眼を見開き、光秀を礑と白眼み「主を誹謗せる大賊、天下を知る信長が深き心を、己如き愚人の分際にて、何わきまへての諫言なるぞ。そこ立去れ」と大音に

れば、瀧川謹んで拜領し、恩を謝して退く。河尻肥前守今度の忠戰を感ぜられ、甲斐一國を賜ふ。森勝藏に信州更科、高井、水内、埴科、川中島の四郡を下され、毛利河内守に信州伊奈郡を賜ふ。其外降參の將木曾左馬頭義昌、穴山入道梅雪等、本領安堵の御教書を賜り、馬太刀等數々を下され、別に森蘭丸を河尻肥前守が舊領岩村の城主と成し、信忠殿の御小姓團平八郎に岩村の内金山、よなた島の二郡を賜ひ、諸方の仕置定りければ、卯月の始御上國有るべしとて、甲府に至り勝頼が城跡を御覽ぜらる。中將殿兼て此所に御陣を設け、假の御殿を美々しく補理給ひ、請じて是に迎へ奉る。信長公御機嫌殊に麗しく、一日滯留まし〳〵ける。爰に甲府の禪院惠林寺といふ大寺有り。是は故武田信玄歸依の僧快川和尚在住して、其大德普く諸國に聞え、先年朝廷より號を賜り、大通智勝國師と申ける。此寺に武田の浪人數多隱れ有るよし、信長公御父子聞し召し、此序に使者を以て彼浪人どもを出すべき旨台命有りといへども、國師をはじめ寺僧ども、我々命に應じ浪人共を追出さば、盡く刑せらるべし、いかにもして命乞せばやとて、此旨信長公へさま〴〵訴へ願けれども、「一旦寺中を追出し、我刑罪の定りし時、命乞をも成すべきに、一向一人も浪人原を渡さゞる條奇怪の至りなり。其儀ならば押寄て、探出せよ」と下知し給へば、寺僧等も意地強く、たとへ寺破滅に及ぶとも、今更多くの人々を殺さん事、僧

繪本太閤記

三篇　卷之五

○光秀強ニ諫信長公ニ

織田右大臣信長公、軍威四海に溢れ、諸國の敵黨大半亡び、招かざるに來る、召さゞれども集る。されば武田の强敵を、一月の間に悉く滅亡せしめ、四方恐ずといふ者なし。今は天下掌の中にありと、思しけんも宜なりけり。今度甲信にて勳功の將士に、顯賞を宛行ふべしと、其御沙汰に及び給ふ。先中將信忠卿、拔群の御働、早速數ヶ國平均の儀、御感悅少からず。武將の器備はりましませば、近くに天下の支配、總て御讓り有るべきなりとて、先考備後守殿より御讓りの太刀を進ぜらる。瀧川左近將監一益に上野一國幷に信州佐久、小縣二郡を添て下し賜り、關東の管領に命ぜらる。其上海老鹿毛の馬を下され、「此馬に乘て入國すべし」と仰せけ

繪本太閤記 三篇第五之卷 目錄

光秀強諫信長公
蘇鐵樹怪異
淨土宗日蓮宗捧願書

秀吉公の五人の本室……………………六三八
閨中の二將軍淀殿と政所………………六三八
閨門の爭…………………………………六三九
佐々成政榮達の由來……………………六三九

繪本太閤記 中 內容細目 終

紀伊國平均す……五九一
大田村の城の水攻……五九二
秀吉和歌浦を遊覽す……五九五
土佐の長曾我部元親の經歷……五九五
秀吉の四國征伐……五九五
蜂須賀政勝木津城の水の手を斷ちて城兵を苦む……五九八
桑名左衞門尉風雨の夜城を棄てて落ち行く……五九八
長曾我部元親秀吉の幕下に屬す……六〇〇
秀吉關白に任ぜらる……六〇二
秀吉晴季職事を談ず……六〇三
長曾我部元親黃金の間にて秀吉に目見え利休茶を點じ曾呂利狂歌を詠ず……六〇四
曾呂利新左衞門狂歌を詠みて松の枯れたるを祝す……六〇五
曾呂利秀吉の耳を嗅いで福を得……六〇八
曾呂利が寓言……六〇九
奧村助右衞門が妻士卒を勵す……六一二
前田利家末森の城の後詰す……六一二
前田利家卜者に軍の吉凶を占はしむ……六一三
佐々成政の更々越逆落し……六一六
佐々成政濁酒を沽うて寒氣を凌ぐ……六一七
秀吉越中へ發向す……六一七
間者京都の秀吉の軍略を聞いて成政に告ぐ……六一八
神通川の合戰……六二〇
神通川の合戰に於ける妖怪……六二一
ぶらり火の說……六二四
佐々成政神通川にて愛妾を殺す……六二五
佐々成政秀吉に降參す……六二八
秀吉親しらずの難所を淩ぎ越後に赴く……六三〇
秀吉羽柴の姓を豐臣と改む……六三三
京都大佛殿の經始……六三三
大佛殿造營の材木手配り……六三三
大佛殿造營の大石を國々より京都に引入る……六三五
大佛殿の成就……六三六
佐々成政肥後國を賜はる……六三七
千利休が妻の秀才……六三八

加藤虎之助の高名……五四二
加藤虎之助の生笹の指物北兵を恐れしむ……五四二
石川兵助の戰死……五四三
福島市松の高名……五四五
糟屋助左衞門の高名……五四六
平野權平の高名……五四六
脇坂甚内の高名……五四八
加藤孫市郎の高名……五四九
片桐助作の高名……五五〇
賤ヶ嶽の七本槍及び三振太刀……五五一
佐久間盛政一騎秀吉の本陣を襲ふ……五五二
柴田勝家毛受勝助に馬印を賜り茶臼山に隊を立てて敵を待つ……五五七
秀吉公百姓に笠を乞ひて手負等を蔽ひ給ふ……五五七
毛受勝助の勇戰討死……五五八
勝家府中に到りて前田利家に別を告ぐ……五五九
柴田勝家前田利家に湯漬を乞ふ……五六〇
柴田勝家北の庄の城に籠る……五六二
秀吉の伏兵佐久間盛政を生捕る……五六二
秀吉北の庄の城を圍む……五六三
文荷齋勝家の賜ひし蕪梨子の花入を割る……五六四
柴田勝家三人の女子を秀吉へ贈る……五六五
柴田勝家の自害……五六六
勝家夫婦辭世の和歌を詠ず……五六七
北の庄の落城を見て末森母子自害す……五七〇
上村六左衞門の自害……五七一
秀吉賤ヶ嶽の勳功の將士に賞を行ふ……五七一
細川幽齋の柴田滅亡の狂歌……五七一
侍從信孝の自害……五七三
佐久間盛政柴田勝久誅せらる……五七八
秀吉大阪城を築く……五八〇
浪華の繁昌……五八〇
北畠信雄秀吉を亡さんと計る……五八一
瀧川一益蟹江に北畠信雄が勢と戰ふ……五八一
秀吉の官位昇進……五八四
秀吉の根來寺征伐……五八五
根來寺の燒亡……五八八
根來の皈一房筒井家の諸士と戰ふ……五八九
千石堀の落城……五九〇

桑名落城……四八七
秀吉使番をして中川が手へ下知を傳ふ……四八八
前田父子勝敗を算る……四九二
信孝卿早馬を以て勝家へ救を乞ふ……四九三
羽柴柴田賤ヶ嶽に陣を張る……四九六
佐久間盛政長濱街道に放火す……四九七
筒井順慶堀久太郎行市山に佐久間盛政と戰ふ……五〇〇
秀吉足輕の體に出立ちて斥候す……五〇一
秀吉賤ヶ嶽の要害に數多の砦を築く……五〇二
鵜野忠三郎山路を說く……五〇四
山路將監の返忠……五〇七
山路將監が妻子親族生捕らる……五〇九
佐久間盛政大岩山の砦を攻む……五一〇
桑山が斥候北國勢の大山岩へ押寄するを見分す……五一四
賤ヶ嶽の主將羽田桑山軍使を以て中川を招く……五一五
佐久間盛政大岩山の砦を拔く……五一五
中川瀬兵衛九たび敵兵を追ひ退く……五一六
中川瀬兵衛の討死……五一八
中川の家臣賤ヶ嶽に討死す……五一八
高山長房砦を捨てて敗走す……五二〇
佐久間盛政柴田勝家が下知を戻る……五二〇
北近江の郷民等僞つて佐久間盛政に降參し旗指物を乞ひ去る……五二二
賤ヶ嶽の諸壘騷動す……五二三
黑田吉兵衛幼年の勇氣……五二四
秀吉の江北進發……五二六
農民等食物を持出でて羽柴秀吉が軍を助く……五二六
惟住五郎左衛門の軍配……五二七
江州木の本の宿より同國長濱美濃大垣街道の地理……五二八
秀吉農民を驅つて賤ヶ嶽へ押寄す……五三四
原彦治郎拜郷五左衛門殿して賤ヶ嶽を引取る……五三九
秀吉猿馬場に陣を据ゑ給ふ……五三九
瓢箪の馬印敵の英氣を挫く……五四一
賤ヶ嶽の七本鎗及び三振太刀の職……五四二

柴田勝家秀吉を恥しめんと計る……四二三
秀吉の忠言諸老臣を感ぜしむ……四二三
光明皇后の故事……四二三
柴田勝家佐久間盛政に命じて秀吉を討たんと欲す……四二七
佐久間盛政秀吉を害せんとす……四二七
秀吉の智計勝家盛政が軍略を挫く……四二八
本能寺追福の連歌……四三〇
秀吉本能寺へ米錢を寄附す……四三一
秀吉紫野大徳寺に於て信長公の葬禮を營まんとす……四三四
秀吉葬送の儀に就て諸方へ使者を遣す……四三四
柴田勝家再び上洛す……四三四
上杉景勝の評議……四三五
織田家の舊臣諸國より入洛す……四三六
蜂須賀淺野大谷神子田仙石等四方に兵を伏せて相圖を待つ……四三七
秀吉紫野大徳寺に信長公の葬禮を營む……四三八
織田家の舊臣燒香の順列を爭ふ……四三九
秀吉の伏兵四方に起つて大徳寺を圍む……四四三
秀吉燒香の順列を定む……四四三
瀧川一益織田の舊臣を會して柴田羽柴兩家の和談を計らんとす……四五二
瀧川一益の計策柴田羽柴の兩家を和す……四五六
前田不破金森等雪中秀吉に使す……四五九
柴田羽柴互に僞つて和睦す……四五九
秀吉長濱の城を攻め落す……四六二
柴田勝豐秀吉に降る……四六四
秀吉民屋に放火して岐阜の城を圍む……四六八
秀吉安土に於て幼君に謁す……四六八
姫路に於ける天正十一年の元旦……四六九
諸國の武士姫路の城へ新年の壽を賀す……四七一
賤ヶ嶽の軍の趣意……四七四
秀吉の大軍一益を討つ……四七八
秀吉勢州白子邊に放火す……四八〇
中川淵之助山路九郎太夫を斬る……四八〇
秀吉の奇計一益を破る……四八二
瀧川一益桑名の城へ引取る……四八四
秀吉桑名を圍みて一益を苦む……四八四
峯の城陷り瀧川詮益桑名へ敗走す……四八五

堀尾茂助齋藤利三を生捕る……………………三六四
石田三成齋藤內藏介を服す……………………三六五
織田家の公達功臣清洲に會す…………………三六七
六齋念佛の由來…………………………………三六七
秀吉光福寺に干栄山の號を賜ふ………………三七〇
秀吉の參內………………………………………三七〇
紹巴法橋智を以て縲絏を免る…………………三七一
柴田勝家の北國亂入……………………………三七六
羽柴秀吉三法師君に譲す………………………三七六
柴田勝家魚津の城を攻む………………………三七七
長島宮內柴田右近を討つ………………………三七八
河田豐前守勇戰して魚津の城に入る…………三八〇
上杉景勝自ら斥候となる………………………三八一
上杉景勝柴田が陣中へ矢文を送る……………三八二
倉田左吾允松本外記等并筒隼人同刑部
丞と力戰す………………………………………三八四
瀧川森三國峠大田切より亂入す………………三八五
三國峠の合戰……………………………………三八五
喜陀川の合戰……………………………………三八六
森勝藏大田切に上杉勢を破る…………………三八八
長九郎左衞門連龍の先祖………………………三九二
魚津落城…………………………………………三九六
魚津の城兵柴田が人質を殺して生害す………三九七
上杉勢柴田勝家を追ひ討つ……………………三九八
一揆勝家が上洛を支ふ…………………………三九九
森長一人質を殺して上洛す……………………四〇二
鬼頭內藏介本能寺の變を安仲に聞いて
勢州に歸る………………………………………四〇三
北畠信雄梅心を遣りて鬼頭內藏介を伺
はしむ……………………………………………四〇四
織田家舊臣等の御遺跡評定……………………四〇六
佐久間盛政秀吉を拒む…………………………四〇八
筒井順慶の說に因りて三法師君織田家
の相續と決す……………………………………四一二
瀧川一益神奈川に北條と戰ふ…………………四一四
瀧川一益軍中に猿樂をなす……………………四一五
柴田勝家追つて秀吉に酒を飲ましむ…………四一九
織田家功臣の闕國配分…………………………四二〇
三法師秀信より筒井順慶に駿馬金帛を
賜ふ………………………………………………四二一

光秀の參內……二三八
齋藤內藏介洞ヶ峠筒井が陣を遠見す……二四一
齋藤內藏介光秀に諫言す……二四三
秀吉光秀天王山を爭ふ……二九〇
山崎の合戰……二九四
筒井順慶光秀が陣を裏切す……三〇二
筒井順慶の山崎合戰に關する群書の異同……三〇六
光秀の敗軍……三一三
光秀方勇士等の討死……三一六
藤田傳五郎の自殺……三一七
明智秀近死骸に紛れて討死す……三二〇
三宅藤兵衞光秀が生害を止む……三二五
一揆光秀方の落人を討取らんと戰ふ……三二六
中村長兵衞闇に光秀を突く……三二六
明智光秀小栗栖野に於て落命す……三二七
溝尾庄兵衞の自殺……三二九
中村長兵衞光秀主從の首を秀吉に獻ず……三二九
明智光慶の病死……三三〇
明智治右衞門光忠の自害……三三一
明智左馬介の打出濱合戰……三三二
林半四郎の勇戰討死……三三四
左馬介馬にて琵琶湖を涉す……三三五
左馬介唐崎より坂本の城に入る……三三七
光秀が妻室令して家人を去らしむ……三四二
光秀が家人坂本を出でて離散す……三四二
明智左馬介入江長兵衞に黃金を與ふ……三四三
明智左馬介狩して白狐を獲ふ……三四四
入江小七郎狐妖に誑されて足利の御家人と成る……三四五
明智左馬介入江長兵衞を誑かせし狐を捕ふ……三五三
明智左馬介光春寶器を秀吉に呈す……三五八
明智左馬介光春の生害……三五八
坂本落城……三五九
妻木範賢難風に逢ふ……三五九
荒木行重剃髮す……三六〇
齋藤內藏介利三馬士の馬を奪うて堅田に走る……三六一
齋藤利三堅田の浦に乳母が家を訪ふ……三六一
齋藤利三誅せらる……三六三

細川與八郎妻女を離縁す……一五一
筒井順慶評議す……一五八
順慶八幡洞ヶ峠へ出張す……一六二
光秀將軍宣下……一六三
顯如上人石山の御堂を開き紀州鷺の森へ遷座す……一六七
鷺の森の合戰……一六九
顯如上人以下最後の讀經す……一六八
鈴木孫六の趁跛踊……一七〇
本願寺建立……一七〇
顯如上人の後室秀吉に訴訟す……一七一
織田信澄の滅亡……一七四
志水加兵衛渡邊源右衛門光秀が陣へ來る……一七五
高松の城合戰……一八二
小早川隆景吉川元春等の軍評定……一八三
吉川元春三澤爲虎を試む……一八五
吉川小早川の兩將庾山に柵を作る……一八八
安國寺惠瓊秀吉の陣に參る……一八八
秀吉京都の密使を捕ふ……一九〇
安國寺惠瓊高松の城に來る……一九五
清水長左衛門以下高松の大將等切腹……一九九
秀吉諸將を集めて大變を物語る……二〇一
秀吉一騎京都に馳す……二〇一
毛利家の兩川仁義秀吉加勢を與ふ……二一三
秀吉大黑天の像を割り捨つ……二一六
秀吉の尼ヶ崎危難……二一七
秀吉栖賢寺にて剃髮し急難を免る……二一九
加藤虎之助の武勇……二二一
加藤清正四王天但馬守を討つ……二二四
後藤又兵衛の智光秀が勢を殺す……二二五
明石儀大夫遁れて京都に歸る……二二五
秀吉剃髮して諸將に見ゆ……二二八
和庭慶首座秀吉に謁す……二二九
秀吉栖賢寺廣德寺に寺領を賜ふ……二三〇
島左近尼ヶ崎の陣に赴く……二三〇
島左近の長刀拜領……二三三
明石儀大夫赤裸にて淀の城へ歸る……二三三
百姓太郎介秀吉に越瓜を獻ず……二三四
池田勝入齋高山右近先鋒を爭ふ……二三六
光秀の山崎備配り……二三八

光秀龜山にて勢揃す……九四
村井長門守が家人光秀が陣押を見て京
都へ急を告ぐ……九四
信長婦女を召して今様を謳はせ給ふ……九八
光秀本能寺を圍む……九八
四王天又兵衞本能寺の塀重門を打碎く……九九
本能寺の合戰……一〇〇
信長矢を射給ふ……一〇〇
矢代勝助伴太郎左衞門の討死……一〇一
小倉松壽丸湯淺甚助中尾源太郎等の討
死……一〇四
山本三左衞門本能寺の築地を越ゆ……一一一
信長自ら敵に當る……一一一
安田作兵衞信長を驚す……一一四
森蘭丸討死す……一一五
織田信長公の御生害……一一六
信長の凶夢の事……一一六
高野山の衆徒信長を調服す……一一七
明智光春信長の首を遠慮す……一二〇
伍子胥楚王の墓をあばく故事……一二一
光秀二條の城を圍む……一二三
信忠卿半途より二條の城に入る……一二四
梶原松千代病を凌んで二條の城に赴か
んとす……一二四
明智光忠の最期……一二五
齋藤新五郎長龍の討死……一三〇
明智左馬介二條の城の天守を石弩火鉄
にて打崩す……一三五
越智小十郎の勇戰……一三六
信忠卿の生害……一三七
鎌田正次忠を鬪きて命を全うす……一三七
土方治郎兵衞殉死す……一四〇
光秀軍勢を妙心寺に宿す……一四四
光秀妙心寺にて自害せんとす……一四四
六月二日後の日記……一四六
安土の城下騒動す……一四六
明智左馬介浮橋を造りて勢田を渡す……一四九
面譽上人信長父子の遺骸を葬り法事を
修行す……一五〇
細川刑部太夫光秀と絶交す……一五一

繪本太閤記　中　內容細目

織田信長武田氏討伐の勳功の將士を賞す……三
織田信長瀧川一益に名馬を賜ふ……三
光秀信長公を强諫す……五
織田信長怒つて光秀を打擲す……八
織田信長甲府の惠林寺を燒く……八
信長富士山を眺望す……九
細川藤高富士山の由來を說く……九
泉州妙國寺の蘇鐵樹の怪異……一〇
信長蘇鐵の怪異を怒りて安土の城へ移す……一一
大脇傳介建部昭智靈譽上人に法問す……一六
大脇建部日蓮宗淨土宗の法論を發す……一八
日蓮宗の法論評議……一九
淨土宗日蓮宗宗論の願書を捧ぐ……二〇
安土の城下淨嚴院に於ける宗論……二四
淨土宗日蓮宗の賞罰……四一
冠山落城す……四二
松田左衛門尉黑崎團右衛門と口論す……四三
秀吉兒部川を堰きて高松城を浸す……四七
高松城の水攻……四九
日幡の城の合戰……五〇
上原右衛門太夫日幡六郎兵衛を鐵炮にて打殺す……五一
岡崎の城合戰……五六
光秀信長公を恨む……五八
光秀饗應使を命ぜられ旅館を造營す……六一
光秀再び信長公を恨む……六四
信長公と蘭丸との情話……六五
信長蘭丸を試む……六八
光秀三たび信長公を恨む……六九
光秀和歌を詠ず……七三
光秀愛宕山に登る……七六
光秀愛宕山に於て連歌を試みて叛心を諷す……七七
光秀の妻照子髮を斷つて酒を沽ふ……八三
宇野豐後守光秀の叛心を諫言す……八六
宇野豐後守の最期……八八
信長本能寺に陣す……八八

卷之三……五一三
卷之四……五三七
卷之五……五五五
卷之六……五七七
卷之七……五九九
卷之八……六二三

繪本太閤記 中 目錄

三篇

卷之五…………一
卷之六…………二三
卷之七…………五五
卷之八…………八一
卷之九…………一〇九
卷之十…………一三三
卷之十一…………一五七
卷之十二…………一八一

四篇

卷之一…………二〇七
卷之二…………二二七
卷之三…………二四七
卷之四…………二六九
卷之五…………三一三
卷之六…………三三九
卷之七…………三五七
卷之八…………三七五
卷之九…………三九五
卷之十…………四一三
卷之十一…………四三三
卷之十二…………四五一

五篇

卷之一…………四七三
卷之二…………四九一

繪本太閤記

中卷

